

ポケットモンスター 虹
～交差する歪み～

ザパンギ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

英雄譚が息づくラフェル地方。

トレーナーとポケモンの数だけ物語が存在し、時にそれらは糸となって交差する。

私からはただひとつ。

『迷え。そして見失うな』

目次

怒れる拳	1	ステーキホルダー	242
仕事の奥義	25	似て非なる	265
レッド&ブルー	44	表裏一体？	285
在る箱亡い箱	66	砂嵐を呼ぶ女	299
不可能のバラッド	85	インファイターズ・メソッド	324
魔の峡谷を往け	105	饗応の牙	356
天使の休息	125	あらし	375
退屈を満たすもの	139	凍てつく熱気、燃える凍気	394
挑戦者は語る	148	ラフェルリーグ準々決勝最終試合	ヤシ
竜乙女の純心	166	オ対クロック	409
その視線の先に	192	ラフェルリーグ準々決勝最終試合	ク
『ネイヴュの大晦日』	225	ロック対ヤシオ	443
		自由の翼、その羽ばたき	469

怒れる拳

ラフェル地方、テルス山の一带は有数の険しさを誇る山岳地帯として知られている。シロガネ山やテンガン山といった他地方の最高峰と違い標高こそさほどではないものの、山裾の長さや地形の複雑さによつて探検するにはかなりの度胸と覚悟が必要なエリアだ。

この過酷な環境はここを訪れるトレーナーたちにとってはむしろよい鍛練の場として機能し、修行目的でここを訪れる者も多くあつた。

しかし中には例外も存在する。

「おぉー！ やっぱりあつた！」

この少女、アルナはまさにその一人。迷路のような洞窟を抜けて山の東側を移動中だ。

サンバイザーにタンクトップ、膝丈のズボンと動きやすさを重視したまさに探検に特化したファッション。

それもそのはず。辺りは見渡す限り砂また砂。アルナにとっては夢のような光景だった。

ラフェル地方の者であればテルス山東側の一部が砂地の乾燥帯となっていることを知っている。しかし他地方から来ているアルナはそれを自分の目で確かめたかったのだ。

「ラジエスシティ方面からの風がフェーン現象の引き金となつてテルス山のこつち側は高温かつ乾燥した気候になる、と。山の標高はそんなでもないから別の理由もあるかもしれないけど。うんうん、どえらい砂漠だ」

帳面にメモをとり、砂を一掴み手に取った。

指の隙間からサラサラと砂がこぼれ落ちる。構成する粒子がかなりきめ細かいようだ。

次にアルナはモンスターボールを手に取り、ワルビルを呼び出した。

ワルビルの首に小型のカメラを取り付ける。これは地中でも撮影が可能な特別製の調査のために外国から取り寄せた逸品だ。

「ワルビル、おねがいね」

こくりと頷いてワルビルは砂の中に潜っていった。

アルナは砂漠が好きだ。もつと正確にいうならば砂が好きなのだが、その理由はつまるところ本能的なもので幼少の頃はサンドの生まれ変わりだのメグロコの親戚だのと渾名されていたほど。

ワルビルが戻るまでの間に別の調査をしようとししばらく歩いてきたアルナだったが、何かに躓いて転んでしまった。

「もう！　なんだよ！」

苛立ちとともに足元を確認すると砂から手が生えていた。重要なことなので繰り返すが、砂から手が生えていた。

それはパニツクになるには十分すぎる材料。

「ぎゃあああああああ！　ワルビル、掘り起こして！」

地中のワルビルもただならぬ事態を察して再び地上に顔を出し、そして指示に従った。

「いんやあ、助かったよお。あんがとますあんがとます」

10秒も待たずに手の主である砂まみれの青年が発掘された。赤い帽子にリュックサックとよくある旅人の出で立ちである。

「それにしてもよく生きてたね……」

砂漠で生き埋めとなれば最悪のケースもあり得る。アルナが通りかからなければこの青年は砂漠に転がる白骨と化していたかもしれない。

「だいじだいじ。体は頑丈にできてっからねえ」

カタカタと屈託なく笑う青年。見た目からしてアルナよりいくつか歳上だろうか。その襟や裾から砂がサラサラと流れていく。

自身を不思議そうに見つめるアルナを見て、青年は自分の立場を認識し直した。

「あつと、助けてもらつたのに自己紹介が遅れてら。オレはヤシオ。このリーグとバトルキングダムとかいうのに挑戦しに来たんよ」

ヤシオは大きく手を広げるジェスチャーをした。どことなく見覚えがあつたがアルナにはそれが何か思い出せなかつた。

とはいえとりあえず第一印象としては悪い人間ではなさそうだった。

「あたしはアルナ。砂漠と遺跡を巡る旅をしてる。砂漠つてすごいんだ。砂漠つて聞くと砂がいっぱいある場所をイメージすると思うけど実は岩肌がゴツゴツしているタイプの砂漠が多いんだよ。他にも土や粘土でできてる砂漠もあつて、ここみたいに細かい砂の粒の集まりでできてる砂漠つてとつても珍しいんだ。でもその砂たちにもふるさとがあつてもっと粒子の大きいところの表面から風で飛ばされて集まってくるパターンがあるつていうのが最新の学会の見解でね。どえらいでしょ?」

息もつかずに自分の名前の何倍もの情報量を捲し立てた。これでも抑えたほうなのだがこの場ではどうでもいいことで、ヤシオは彼女のとくせいがスキルリンクなのではないかと内心疑った。

ここでヤシオは当初の目的を思い出したようだ。揉み手をしつつ御機嫌取りモードに転じる。

「それで相談なんだけども、ルシエシテイってどう行ったらいいんだいね？ そのジムに挑戦したいんだけどどうも迷っちゃったみたいでなあ。まああいだっこくらいまでは来てんべ」

ルシエシテイにはポケモンリーグの番人と称されるこの地方で最強のジムリーダーがいる。

その実力は他地方と比較しても突出していてリーグまであと一歩と迫ったトレナーですら、彼女に傷ひとつ負わせることができないままに敗れ去ることも多い。

ジム戦にはそこまで興味もなく噂でしかそのジムリーダーのことを知らないアルナだったが、バツジもろくに持つていなさそうなヤシオがやりあえる相手だとはとても思えなかった。

とはいえそれを口にするほど彼女は意地の悪い人間ではない。余計に持つていたらフエル地方の地図をヤシオに渡し、地図上を指でなぞった。

「ルシエにはオレントからの一本道でね」

言いかけて気づいた。この男、極度の（どえらい）方向音痴である。何セルシエを指していたのに砂に埋まっていたくらいだ。体内の方位磁針がズタズタになっている

のだろう。

などと大分失礼な想像を働かせ、アルナは決心した。

「よし分かった。とりあえずここを抜けるルートだけは案内するよ」

テルス山を抜けて6ばんどうろの方面に行くにはデイグダやモグリユーの掘った洞窟を抜けるのが手っ取り早い。しかし迷路のようなその洞窟をヤシオが無事に抜けるとは思わなかった。

「ほんとは？　ありがてえす」

オレ道覚えるの苦手だかなあとヤシオ。一応自覚はあるようだ。

「そうと決まったら行く行こー」

ここまで即決できたのはアルナがヤシオに興味を持ったからに他ならない。

危険なのでもちろんやらさないが、アルナも砂に埋まりたい欲を密かに抱えていたのだ。

「そういえばあなたはなんでジムとかキングダムに挑戦しようとしてるの？」

哲学や禅問答の類いではなく純粋な疑問だった。

自分にとつての砂漠がヤシオにとつてポケモンと身を投じる戦いであるということ
がアルナには不思議だったのだ。その根源にあるものに興味を持つのも無理はない。

顎に手をあてて考え込むヤシオ。しかし悩むほどのことでもなかったようだ。

「別に特別な理由はねっぺよ。オレがやりたいと思うこととポケモンたちがやりたいと思うことがいい塩梅にマッチしてるだけのことだからなあ。たぶんアルナもそうだべ？」

言われてみればそんな気がした。ヤシオは適当に喋っているようで言葉の節々に妙な説得力がある。

そう思い込まされているだけかもしれないが。

「そう、なのかな？」

強く否定することもできない。好みのルーツについて考えるのはかなり難しいことなのかもしれない。

いや、ひよっとすると他に何かがあるのかもしれないがそれを吐き出させるほどアルナはヤシオについて知らない。逆もまた然りだ。

「よし、じゃあ砂漠の話しよう」

「あんれま」

そんなことを話しながら（ほぼアルナがこの場所への情熱を語っていただけだが）歩いていると、視界の先に人が集まっているのが見えた。全員特徴的なファッションに身を包んでいる。うまく言葉では言い表せないがおかしな気配が漂っている。

「あれはもしかして噂に聞くポケットガードイアンの人たちでは!」

ありがたやありがたやとなぜか両手を合わせて拝むヤシオ。彼もまた異質だ。

「よく見て、PGの制服じゃないよ。もしかしたらあれはここ数年で公に知られるようになったっていう……ちよつと!」

忠告しようとしたアルナだったがそれより先にヤシオは好奇心のままに彼らにすり寄っていつてしまった。

「あのう。何をしていらつしやるんです?」

珍しいもの見たさというのは恐ろしい。時に人間を必要以上に大胆に仕立てあげてしまう。

それが正しい方向に働けばよいが、今回ばかりはそうではなかったようだ。

「!」

怪しい男たちは現れるはずのない通行人の登場に心底驚いたようだ。

「おい! 人がいるぞ!」

「クソツ、こんなところにわざわざくる物好きがいるなんて!」

この言葉には知らぬ存ぜぬを検討していたアルナもカチンときてしまった。自然と額に青筋が浮かぶ。

「こんなところ?! 砂漠はなあ、この星を知るうえで重要な場所なんだぞ! だいた

い砂漠というのは」

「そのへんにしとくべ」

飛び出していったばかりかヤシオを脇に退けて仁王立ちした。砂漠をバカにされるのはどうにも耐えられない。

ヤシオが止めていなければスキルリンク発動は間違いなかった。

しかし残念ながらハイティーンのアルナが凄んでも敵がビビるようなことはない。

「ククク、俺たちはバラル団。俺たちのテルス山作戦を目撃しちまうとはついてない奴らだ。俺たちに関わったらどうなっても知らんぞ？」

俺たち俺たちとくどいが問題はそこではない。

バラル団という単語にアルナは聞き覚えがあった。ラフェル地方にやって来てすぐ聞いた話によると、この地方で悪事を働く連中でその所在、目的、実態全てが謎に包まれているとのこと。

アルナの出身であるイツシュ地方でもプラズマ団という秘密結社が暗躍していたため、その脅威を推し量ることができた。

バラル団員たちはニヤニヤと笑いながらヤシオとアルナを取り囲んだ。

最初に喋った団員の頭を別の団員が小突いた。

「バカ！ 喋ってどうする！ とにかくお前らを無事に帰すわけにはいかねえなあ」

大の大人でもビビるようなところだが、アルナは威勢よく言い返した。

「あたしだってただで帰るつもりはないよ。あんたたちバラル団って言ってるけどどうせしたつばでしょ？ 5人いればあたしたちに勝てると思つたのなら甘いんじゃないの？」

「うっ……」

だいたいにおいてペラペラと威勢がよく、しかも集団でいるのはしたつばと相場が決まっている。

どうやらしたつばというのは凶星だったようでバラル団したつばたちとアルナは睨み合いを始めた。

遺跡の調査で気性の荒い墓荒らし（トレジャーハンター）に遭遇することも多いアルナは退いたほうが負けという意識が強い。安全策に走るつもりはなさそうだ。

しかしそんなことには特に興味のない者もいる。

「いやあみなさんお揃いで楽しそうですね。そんじや頑張ってください」

一触即発ムードのなか、ヤシオは穏やかにこの場を去ろうとしたがそうは問屋が卸さなかつた。

「おいおいおい!! 逃げられるとも思つたか？」

「そうだぜ！ 二度と舐めた口きけねえようにしてやる！」

したつばたちはモンスターボールからそれぞれラッタを繰り出した。したつばとはいえ5人。さすがに分が悪い。

ところが喜んだのがヤシオだ。膝を屈伸し、腕を交互に伸ばして準備運動をした。手首をしならせることも忘れない。

「おお！ 勝負ですか。やりましょうやりましょう！ オレもポケモンたちもウズウズしててなあ」

ヤシオがベルトからモンスターボールを手に取った。

その瞬間、その場に緊張が走った。

頭のとっぺんから足の指先までが冷えきって、次に全身が燃えているのではと錯覚するほど熱くなる感覚。

ヤシオとヤシオのポケモンが放つ威圧感とその場を完全に支配した。

「よっしー！ いくべー！」

ここで我にかえったアルナはヤシオがバラル団員たちを蹴散らしてくれることを期待したのだが、その希望的観測はあつさりと裏切られた。

二度あることはサンドパン。一度しかなかつたとしてもサンドパンはサンドパンだ。意味不明だがそう結論付けるしかないようなことが起きたのだ。

「あり？」

ボールを投げようと一歩踏み出したヤシオ。不運にもそこに砂地のポケモンが掘った穴が空いており、彼は再び地中に姿を消してしまった。

「なにやってんのー！ー!?」

アルナの悲痛な叫びは届かない。

面食らったバルル団員たちだが状況を把握し、笑いだした。厄介そうな相手が自分から退場してくれたのだから笑うほかない。

「これでそっちは1人、こっちは5人。勝負あつたな」

アルナを取り囲んだラッタたちが5匹同時に飛びかかった。1匹ずつ対応してはいけもう間に合わない。

しかし数で押せば勝てるという油断が彼女に血路を開いた。

「ノクタス、『すなあらし』」

アルナは最小限の動きでノクタスを繰り出してフィールド全体に作用する技を指示した。

途端に強烈な砂嵐が辺りを包み込み、バルル団員たちを吹き飛ばした。非常にスマー卜な一手だ。

高速回転ののち落下した5匹のラッタと砂嵐にあおられたしたっぱたちは仲良く目を回してしまった。しばらくは目を覚ますこともなさそうだ。

「さっすがノクタス！」

アルナはノクタスの頭を撫でて、ヤシオが落ちた穴を覗きこんだ。

「おーい大丈夫？」

「だいじだいじー！ 深淵を覗くってやつだべー！」

穴の奥底からヤシオの声が響いてきた。意味は分からないがとりあえず無事そうだ。

このまま埋まっている道理はない。アルナはワルビルに再び発掘をお願いしようとした。

「待ってて、今助けるから」

「いんや。俺のことより勝負はまだ終わってねっぺよ」

「何を言ってる——」

聞き返そうとする前に、アルナの目の前に轟音とともに何かが降ってきた。

岩か鉄の塊かと見紛うフォルム。ゴーレムポケモンのゴルーグだ。

「キミのこと、見てたよ。まさかすなあらしだけであれだけの団員を片付けちゃうなんてね」

ゴルーグの肩から誰かが降りてきた。砂嵐で顔はよく見えないが、ヤシオよりもさらに歳上と思われる男だった。

この男、これまでのしたつぱたちとは纏っている迫力が明らかに違う。

特別体が大きいわけでもなく見た目に奇抜なところがあるわけでもない。しかしアルナは彼の静のなかに激しい動を感じ、冷や汗を流した。

彼はそのままアルナの前まで進み出た。

「……ボクと勝負、してくれるよね？ ゴルグ、『アームハンマー』」

謎の男は答える暇さえ与えなかった。

砂嵐が吹き荒れるなか、ゴルグはその巨大な拳を固めてアルナ目掛けて振り下ろした。

しかし、顔をしかめながら拳をほどいてしまった。

「防いだか。まあノクタスなら覚えていても不思議じゃない」

一瞬のことながらノクタスはニードルガードでアルナを守った。しかもこの技は相手に幾ばくかのダメージを与える。

「ニードルガードは連発が効かない。ゴルグ、『ばくれつパンチ』」

「よけて！」

砂嵐下のノクタスは天候の力を借りて回避能力に磨きがかかる。難なくかわしてみせた。

「ミサイルばり！」

敵の懐に回り込んだノクタスのミサイルばりが炸裂した。威力は低いものの、確実に

命中させた。

「どうやらアルナの中で作戦が構築されていたようだ。」

「たたみかけるよ！ ノクタス、『ニードルアーム』！」

「……『シャドーパンチ』」

ミサイルばりに怯むことなく今度は必中のシャドーパンチがノクタスを襲った。効果はいまひとつとはいえ、力自慢のゴルグの攻撃であれば威力は凄まじい。

「もう一度『シャドーパンチ』」

「『ニードルガード』！」

しかしゴルグはシャドーパンチを意図的に外した。パンチが地面にヒットし、ノクタスは舞い上がった砂を被ってしまった。

「ノクタス、『ニードルアーム』！」

今度こそと勇んだ一撃だったが。

「『ばくれつパンチ』」

地面にめり込むほどの衝撃を受けたノクタスはまだわずかに戦う力を残してはいたが、アルナは交代を選択した。

「ノクタス戻って！ ワルビルおねがい！」

ヤシオ発掘で活躍したワルビル。起用に応えようとやる気満々だ。

「あなをほる！」

このフィールドを最も活かせる技を迷わず選んだ。

ワルビルは砂をかき分け地中に潜った。とりあえずゴルグのパンチ技の射程から逃れることと、死角から一撃を狙うという重要なポイントがあった。

男はニヤリと笑った。不吉さを感じたがもう遅い。

「……甘い、甘いなあキミたちは。ゴルグ、『じしん』」

慌ててアルナがワルビルに地上に出るように指示するよりもゴルグがその巨体で大地を揺らすほうが先だった。

ワルビルは自ら掘った穴から弾き出され、地面に叩きつけられた。

じしんはもともと威力の高い技だが地中の相手にはさらに倍のダメージを与える。アルナはもちろんそれを知っていたが、焦りから選択を誤ってしまった。

「『シャドーパンチ』」

影を纏ったゴルグの拳が迫る。かわすことはできない。

「『かみくだく！』」

必中を逆に利用して有効打を浴びせようというのだ。

この作戦はうまく機能した。ワルビルはシャドーパンチを食らったものの、そのままその拳に牙を突き立てた。あくタイプの技。これは効いた。

「ゴルグは苦し紛れにワルビルを振り払い、返しのシャドーパンチを放った。
「ワルビル！」

「しっぺ返しへの代償は大きかった。ワルビルは度重なるダメージにより戦闘不能。
「くっ……」

アルナが得意とする砂地のフィールドを利用した奇襲作戦だが、このゴルグのように圧倒的なパワーをもって攻めてくるタイプの相手には滅法相性が悪い。

さらにゴルグは地面タイプを持つために砂嵐によるダメージ蓄積がないのも向かい風となっている。

「このまま手持ち全部を戦闘不能にするつもりかい？ バラル団に立ち向かうのは立派なことかもしれないけどトレーナーのエゴでポケモンを傷つけるのは感心しないな」

男はワルビルに駆け寄り助け起こそうとするアルナを嘲笑った。

彼の中でポケモンとは何なのか。違和感を抱いたが、それを追いかける余裕はなく、アルナは忙しなく思考を巡らせた。

「降参するなら今だと思うけど。手持ちが全滅しちゃうよ？」

嘲笑される悔しさよりも何よりも、ポケモンに対する考え方が根本から違う相手なだけに負けるわけにはいかなかった。

歯を食い縛り、ワルビルをボールに戻した。

「そんなことはしないしさせないよ！ マラカッチ！」

次にアルナが繰り出したのはマラカッチ。ノクタスと同じく乾燥地帯に適應したくさタイプだ。

「早く終わらせようか。ゴルグ、『シャドーパンチ』」

ノクタス、ワルビルと立て続けに破ったゴルグの拳が唸りをあげて迫った。

「『コットンガード』！」

マラカッチは綿毛で体を覆うことで打撃によるダメージを抑え込んだ。それでも体が地面にめり込むほどの衝撃を受けている。

すぐにゴルグは次の動作に移った。

「『アームハンマー』」

「『せいちよう』！」

植物に近い体を持つくさタイプならではの技、せいちよう。いわゆる成長とは若干違い、体内の組織を活性化させて力をためる積み技だ。

アームハンマーを受けながらもマラカッチは自身の火力を増強した。

「もっかい『せいちよう』！」

「『ばくれつパンチ』！」

パンチのため大きく踏み込んだゴルグだが、砂に足をとられてよろけた。

「……ワルビルの穴か！ ゴルグ、もういちど『ばくれつパンチ』！」

大振りのばくれつパンチが空を切る間にマラカッチはもういちどせいちようを使い、瞬間的ではあるが火力を大幅に増強した。

「マラカッチ、反撃いくよ！」

ここまで防戦一方だったアルナが攻めに転じようとしていることに男は焦りを感じた。

すぐさまゴルグに指示を飛ばす。

「何か調子に乗っているようだけど勘違いもいところだよ。ゴルグ、そろそろ現実を見せ——ゴルグ!？」

突然ゴルグは膝をついた。体の色と砂風のせいで分かりにくいがその体に薄くやどりぎが巻きつき、体力を奪われている。

「『やどりぎのたね』!? そうか、ノクタスがまだ戦えたのに入れ替えたのはこれが狙いか！」

「ミサイルばりはカモフラージュ！ パワーじゃ勝てないなら頭を使わないとね！」

ここで長く続いた砂嵐がぴたりと止んだ。

視界が明瞭になり、これまでのように隠れながらの戦いは不可能になった。

「今だよ！」

タイムングを見計らってマラカッチが大きく飛び上がった。

「できるもんなら避けてみな！ マラカッチ、『ニードルアーム』！」

「ゴルグ！」

せいちようを重ねたことによる特別版のニードルアームが炸裂した。

アームハンマーを2回放ったことで素早さが下がっていたゴルグにはかわす余裕はなく、そのまま打ち倒された。

「やったやった！」

マラカッチとハイタッチして喜びを分かち合うアルナ。ノクタス、ワルビルも含めて大金星だ。

しかし男は意に介する様子もなく次のボールに手をかけた。

「たしかにゴルグはやられた。でもボクにはあと2匹手持ちがいる。1匹倒すのに3匹も費やしたキミにはもう余裕はないんじゃないかな」

その通りだった。この男の残りの手持ちは分からないが、ゴルグと同じくらいの力量を持つポケモンがあと2匹控えているとなるとアルナには荷が重かった。

それでも逃げることはできない。戦いがさらに過酷になっていくことを恐れることは許されなかった。

その時だった。

「そのへんにしといたほうがいいんじゃないかねえ」

のんびりとした動作で穴からヤシオが顔を出した。今回は自力で穴から這い上がったようだ。

身構える男。しかしヤシオは挟み撃ちを狙っているわけではなかった。

「この子に加勢するつもりかな？」

「まさかまさか」

ヤシオはゴルグが飛んで来た方向を指差した。

「直にPGも来るだろうし、バルル団さんのにももう潮時でしょう。お互いもう帰りましょうよ」

のほほんとしているヤシオだったがこの場では有無を言わせぬ勢いがあった。

ヤシオを無視して次の手持ちを繰り出すかと思いきや男は素直に勧告を聞き入れた。

「……どうやらそのようだね。うん、ここは一旦退こう。しかし覚えておくといい。ポクたちバルル団はラフェルの全てに目を光らせている。キミたちも命が惜しいならあまり粹がないことだよ」

男は現れたときと同じようにゴルグの肩に乗った。戦う元気がなくとも移動には堪えるようだ。

「……じゃあね。わざわざ来たかいたあったよ」

ゴルーグはその巨体に見合わぬスピードで飛び去っていった。

目を覚ましたしたっぱたちも猛スピードで逃げていき、バラル団はその場から一人もいなくなつた。

「ふう」

力が抜けたのかペたりと尻餅をつくアルナ。

「ナイスファイト。最後のニードルアーム、すごかつたなあ！ しかもあのゴルーグのパンチ、鉄筋でもおつかいちまうほどの威力があるのによく耐えたんね」

迫力が違ったもんなあとヤシオは興奮しきり。マラカッチの腕をマッサージしながら二人を褒め称えた。

「でもあのままあいつが引き下がらなかつたらあたしはやられてたよ。ありがとう」

ゴルーグが倒れた時の男の目が脳裏から離れない。

敵は本気でアルナを倒そうとしていた。彼が次のポケモンを繰り出し、あのまま戦いが続いていたらと考えると背筋が寒くなつた。

そんな不安をよそにヤシオはニヤリと笑つた。

「いやあそいつはどうだかなあ。たしかにあの男はアルナより実力では上をいつていたけども、ゴルーグだけでアルナに勝てるかもという慢心があつた。そこを崩したわけだしもしかしたらもしかしたかもしれないねえべ？ まあ根拠はないけど」

あの戦いがヤシオの目にどう映っていたのかは分からないが、彼の見立てではアルナにも僅かながら勝機があつたという。

「根拠はないの……」

とはいえ移動に使っていたグルーグをいきなり戦闘に繰り出したことから敵はアルナを侮っていた節がある。ヤシオの発言もその全てが適当というわけでもなさそうだ。早鐘を打っていたアルナの心臓もどこか抜けたヤシオを眺めているうちに穏やかになってきた。

余裕が生まれたことでいつもの好奇心が帰ってくる。

「ルシエに着いたらすぐにジムに挑戦するの？」

「そうすつかな。まあ混んでなさそうだしいいけつぺ」

たしかにルシエのジムまで辿り着くトレーナーは少ない。挑戦者でジムが混み合うことはないだろう。

「……聞こう聞こうと思つてたんだけど、あんたラフェルのバッジっていくつ持つてるの？ 4個くらい？」

戦おうとした時の迫力からいくつかのバッジを所持しているものと思われた。敵だけでなくアルナも感じたほどだ。

しかし怪訝そうな表情のヤシオ。

「嘘べえ言つてら。この通り、バッジは7個。ルシエのジムリーダーはリーグへの最後の番人だんべ？ えごつてえらしいしこんだけあつてやつと戦えるつてことよ」

少し砂がついたバッジケースを見せた。たしかに7個のバッジが輝いている。

無意識のうちに彼を過小評価していたことに気がつくもこれはどうしようもなかった。

そしてアルナにはどうしても気になることがもうひとつあった。彼女からすると一番聞きたかったのはむしろこっち。

「ねえ。もしかして穴に落ちたのつてわざと?」

目を二等辺三角形に尖らせてヤシオを見つめた。

あの場で観戦するために穴に落ちたのだとしたら言いたいことがたくさんある。とくせいスキルリンクの使いどころというわけだ。

「どうなの?」

突き刺すような眼差しが一直線にヤシオを捉えた。

「さあどうだかなあ。でも、『どえらい』バトルだったことにはちがいねえべ。なあ、未来のチャンピオン?」

追求をかわしてヤシオはいたずらっぽく笑った。

仕事の奥義

自然とともに息づく街、サンピエタウン。この街の一角にポケモン育て屋が存在する。

かつては一部のトレーナーの間でしか知られていなかったが現在ではすっかりメジャーな存在となった育て屋。読んで字の如くポケモンを預り育てる業務を行う人々のことである。

利用した経験のある方も多いかもしれない。しかし、その詳しい実態について知る機会はありません。ではないだろうか。

今回我々はここで育て屋を営むシーヴ氏の一日に密着した。

育て屋の朝は早い。午前5時には着替えを済ませ、預かっているポケモンたちを見回す。

——朝、早いですね。

「大切なポケモンをお預かりしていますからね。これくらい当然ですよ」
そう語るシーヴ氏の目は真剣そのもの。常に強い責任とともにある。

母の後を継いで始めた育て屋。体当たりながらも自分にとっての天職だと信じている。

「おはよう。調子はどうかな」

庭に出ると預かっているポケモンたちが出迎える。

既起きて活動しているポケモン、まだ寝ているポケモン。私たち人間と同じように生活リズムは様々だ。それを把握し一匹一匹に声をかけながら、健康状態を確認していく。

時間をかけてポケモンたちとやり取りしたシーヴ氏は彼らの状態をノートに細かく記録し、今度はそれぞれのフーズを用意する。

——どうでしたか。

「みんな元気そうです。食欲のない子もいないですしとりあえずよかったです」

ポケモンたちにフーズをやり終えると、今度は自分の朝ごはん。サンビエの幸が顔を揃える。

「この仕事は体が資本ですから。どんなに忙しくてもご飯はしっかり食べるようにしています。食べないと朝がきた感がないですし」

——ここまで朝が早い生活を続けているときさすがに堪えそうです。

「もちろん私もそこまで無理はしていません。夜を跨いでポケモンを預かっていない時はちやうど今ぐらいに起きてます」

体調管理も仕事のうち。トレーナーがポケモンを預けに来るタイミングは予測可能だ。いつ忙しくなってもいいように備えている。

——利用される方の層というのは。

「オーソドックスにしばらく預かってほしいという若いトレーナーの方が一番多いです。ああ、あとタマゴを探している方もいらつしやいますね」

ポケモンを預ける目的も多岐にわたる。そのすべてに対応すべくシーヴ氏は日夜研鑽を重ねている。

「そこまで大したことはしていませんよ。私がしているのはほんのお手伝い程度のことですから」

そのお手伝いに助けられているトレーナーやポケモンがたくさんいる。謙虚な姿勢の裏には仕事への誇りがあるのだろう。

——ジョウト地方のウツギ博士のタマゴ研究によるタマゴブームがありました。

各地方の育て屋で2匹まで預かるスタイルが一般的にはなったのもちやうどそこからだ。

「実は私もタマゴが現れる瞬間をこつそり見ようと頑張ってみたことがあつたんです。

でも何度やっても人間が見ているのが心配で分かるらしくて、絶対に出てきてくれないでした。神秘ですよね」

茶目つ気たつぷりに笑う。未だ尽きないポケモンへの興味関心も彼女の原動力になっている。

朝食後、洗濯物を干したら次の行動に移る。

——このあとのご予定は？

「木の実をとりに行きます。自然由来のものも食べてほしいので。日中陽に当たりすぎると熟しすぎてしまうのでこのぐらいの時間に採りにいくのがいいんです」

種類に合わせて味や成分が調整されているフーズはポケモンたちにとって優れた栄養源だが、それ一本にならないように気を遣っている。

「私たちもいくら栄養があるといってもカロリーメイトだけじゃ味気ないでしょ。土壌がよくて作物が育ちやすいサンビエですからおいしいものを食べてもらいたいです」
育て屋の裏手にある小高い丘を行くと、そこは天然の果樹園。あたり一面に木の実がなっている。サンビエの人たちはよくここで木の実採りをするらしい。

「これはオレン、モモンにカゴに……うん、ラムもある」

後から来る人のことも考え採りすぎないように必要なものを選びすぎるシーヴ氏。

人間に採られなかった木の実の野生のポケモンたちにとっての思いがけないごちそ

うになったり、地面に落ちてこの土地の栄養になったりする。

「ここのは新鮮ですから丸かじりでもいけますよ。みなさんもいかがですか？」

ご厚意に甘え撮影スタツフもいただくことに。……美味しい。市販のものとは鮮度が違う。

育て屋に戻って木の実をしまっていると、時計のアラームが鳴った。いよいよ開店の時刻。

髪を結わえて服を着替え、扉のプレートを裏返したところで今日最初のトレーナーがやって来た。

「いらつしやい。どの子を預かる？」

トレーナーが差し出したモンスタールボールの中にはジグザグマ。そわそわと落ち着かないところからおくびのような性格のようだ。

いくつかの必要事項を確認する。

「はい、確かに。いつでも迎えに来てね」

トレーナーは足早に去っていった。

——思ったよりあっさりしていますね。

「これくらいでちょうどいいんですよ。預ける側にも事情があったりしますし、あまり

しゅつちよこぼるのもね。もちろんお預かりの上で大切なことはきちん確認して
ますよ」

預かったジグザグマを連れて庭へ。
すると大きな物音が聞こえてくる。

——何かあったんでしょうか。

「どうやらケンカしてるみたいですよ」

性格の違うポケモンたちを預かっていると時にはこういうこともあるらしい。

「とりあえず止めましょう。やりすぎてケガに繋がってしまうこともありますから」

ケンカしているのはマンムーとトドゼルガ。いずれも大型のポケモンだ。シーヴ氏
はどうやって止めるのだろうか。

「ガルーラ、おねがい」

庭の端から駆けてきたのはガルーラ。一昨年のワールドレートで選出率トップを
飾ったバトル好きにはたまらないポケモンだ。

シーヴ氏は自らのポケモンも庭に放しておくことでこうした事態に備えている。

トドゼルガが吠えた。マンムーも負けじと雄叫びをあげる。

「この子たちは同じトレーナーのポケモンなんです。預かった時に仲が悪いとは聞いて
いませんが……」

まずはまわりにいるポケモンたちを離れさせる。ケンカの余波に巻き込ませてはいけない。

相当気が立っているのか、2匹は決闘の邪魔をしようとするガルーラに予先を変えた。

2匹分のふぶきがガルーラを襲う。少し離れた撮影スタッフにも伝わるほどの冷気だ。

ガルーラは脚を踏ん張ってじつと耐えている。

——反撃しないんですか？

「技と一緒にストレスを吐き出してもらうのが大事なんです。それにガルーラはやせ我慢をしているわけではないんですよ」

ガルーラをよく見ると体が薄く光っている。『まもる』で攻撃から身を守っているようだ。

「そろそろいいかな。ガルーラ、ほえる」

ガードを解いたガルーラの咆哮が響き渡る。

ほえるは相手の戦意を奪い戦闘を強制的に終了させる技。吹雪を撃つたことでイラが解消した2匹に効果は抜群だ。

すかさず2匹に木の実を食べさせるシーヴ氏。流れるような動作だ。プロの技が

光った。

「さつき採ったりラックス効果のある木の実です。一般的には寝る前に食べるものなんですけどね」

木の実の効果もあつてかマンムーもトドゼルガも落ち着きを取り戻したようだ。これでひとまず安心だろう。

「ジグザグマ、びっくりしちやつたみたいですね。後でまた様子を見に来ます」

落ち着いたのも束の間。シーヴ氏のところへまた別の来客が。赤い帽子を被り、赤い麻袋を抱えたなんとも色の揃った青年だ。

「こんにちは！ ゼルドス先生の薬、持ってきました」

「わざわざありがとうございます。このクツキー、よかつたら持つて行って」

「はいーいー！」

スキップしながら帰っていく彼を見送り、すぐに袋の中身を確認する。

——薬、ですか？

「はい。この町にゼルドスさんというお医者さんがいるんですけど、時々薬をいただいでるんです。今日は代わりの方が届けてくれたみたいで助かりました」

見せてくれた薬はなんとパラセクトの胞子に由来するもの。天然のものであれば安

心だ。

時刻はちょうどお昼時。

シーヴ氏もレジャーシートを広げ、ポケモンたちと一緒に庭で昼食をとる。

「今日はいい天気なので外でお昼にします。ポケモンたちの様子も見られますし一石二鳥です」

たしかにまわりにポケモンたちが寄つてきている。彼女からオーラのようなものを感じるのだろうか。

レジャーシートを敷いてバスケットの中から取り出したのはサンドイッチ。これもサンビエの幸だ。

「地産地消というと大げさですかね。地元のものでお腹を膨らませられるのは幸せなことですよ」

このリラックスタイムこそ本音を聞き出すチャンス。取材にも熱が入る。

——この仕事、苦勞も多いのでは。

「母を見ていたのでノウハウについて悩むことはありませんでしたね。でも実際にやってみると頭も体も追いつかないことが多くて戸惑いました。当たり前ですけどポケモンは生き物なので理屈だけじゃ通用しません。まあ正直なところどうしようもなく辛

いと思うことはそうはないんですけどね」

昼食後再び育て屋受付へ。

——待っている間、退屈しませんか？

「ははは。そんなことありませんよ。ほら」

見せてくれたのは分厚いファイル。

「育て屋協会に送る書類です。任意ではあるんですけど仕事について報告しています」
集められた情報はポケモン研究に役立てられるとのことだ。

ペンを走らせること2時間。

ここで本日二人目のトレーナーが現れた。彼はポケモンを引き取りに来たようだ。

庭で休んでいたポケモンを呼び、ボールとともにトレーナーに返す。

「じゃあ、また来てね」

トレーナーとポケモンのちよつとした再会を見届けることもシーヴ氏の喜びなのだという。

庭からポニータが駆けてきた。シーヴ氏のエプロンをくわえ、何かを主張しているようだ。

「あつ、きたみたいです」

ポニータの意図を察したのか庭へダツシユするシーヴ氏。速い速い。スタッフも必死で追いかける。

——どうしましたか？

「タマゴです。さっきの2匹から見つかったみたいで」

指差した先には仲睦まじくタマゴを見守るマンムーとトドゼルガ。

あれほど仲の悪かった両者の間にタマゴができるとはなんとも不思議だ。

「雨降って地固まるってことですかね」

発見したタマゴについてはトレーナーが戻ってきた時に渡すことになっている。そしてトレーナー自身の手でかえしてもらうのだ。

「タマゴをかえすには元気なトレーナーが連れて歩くのが一番です。外部からの刺激が孵化に必要なのかもしれません」

孵卵器の技術も進歩しているが、やはりトレーナーといるほうが何十倍も孵化が早い。外部の条件を敏感に察知しているのだろう。

「さて、この時間くらいから忙しくなりますよ」

その言葉通りラツシユの時間帯が訪れた。

せっかちなトレーナーたちをうまく宥めながら一つ一つの業務を丁寧にこなしていく。

ここで撮影スタッフは邪魔にならないよう移動。

すっかり日も暮れて閉店直前。最後のトレーナーがやって来た。なんと、このトレーナーは。

「待っていたよ。マンムーとトドゼルガの間にタマゴが見つかったんだ。渡しておくね」

彼は2匹、いや3匹とともに帰っていった。その満ち足りた表情にシーヴ氏も満足げだ。

「普段命というものについて考えることってあまりないですけど、タマゴをきっかけにそんな機会をつくってもらえたらなと思いますね。」

ポケモンが生まれるタマゴは卵焼きなどでお馴染みのあの卵とは本質的に違うものなのではないかという学説がある。

そもそもポケモンは卵生ではなく私たち人間と同じ胎生で、タマゴとは生まれてくるポケモンがまわりの環境を探るための一時避難場所だというのだ。

——タマゴという存在には謎が多いですね。

「仕事柄タマゴに関わることは多いんですけど、分からないことだらけです。育て屋協

会と学会が共同発表したタマゴグループについても正直そこまでは理解してませんし……」

最後のトレーナーを見送ったあと、扉のプレートを裏返してもう一度庭のポケモンたちを見回る。

「ジグザグマも他のポケモンたちと打ち解けたようです。とりあえず大丈夫そうですね」

こうして彼女の長い一日が終わる。遅めの夕食をとったら、明日に備えてすぐに休むことを心がけているようだ。

「夜中でもガルーラが何かあったらすぐに知らせてくれるんです。とくせいはやおきつてすごいですよ」

寝ている間に何かあってもすぐに対応できるように枕元に着替えを用意しておくことも忘れない。

寝ている間もプロとしてポケモンたちのことを頭から離さない。

——最後にお伺いします。この仕事のやりがいはどこなところでしょうか？

「ポケモンとトレーナーの間に立つことで両者がよりよい関係になれたらと思いますし、お預かりした数だけポケモンとの出会いがあります。同じ種類のポケモンでも個性があつて発見また発見の毎日ですよ」

明日もシーヴ氏はトレーナーとポケモンを繋ぐために奔走する。「いらつしやい。今日は、どの子を預けるんだい？」

——来週の『プロフェッショナルく仕事の奥義く』はなんと人間をも鍛え上げるトレーナー育成のプロ、育成屋のダンデ・ローズ氏に密着します。お楽しみに。



サンビエ某所の医院。

この街の開業医、ゼルドスはチャンネルをまわした。

「ヤシオー、テレビ始まるでー！」

「はーい」

ヤシオがパタパタと階段を降りてきた。

彼がここにいる事情は単純明快だ。

テルス山を抜けてルシエを目指していたヤシオだったが、道に迷ってサンビエ側に出てきてしまった。

途方に暮れていたところをゼルドスに拾われ仕事を手伝いながら数日の居候をして

いたというわけ。

間抜けといえればそれまでだが事実なので仕方ない。

「あれ、スポーツニュース終わっちゃいました?」

「安心しとき。結論から言うときゃメモリーズはムクホークスに惨殺されとる。うんうん、やっぱり時代はエレブースやな」

「……えっつてえ」

「分かりやすく落ち込むヤシオ。ゼルドスは申し訳程度の年長者の気遣いとして話題を変えた。

「それにしてもツイてるやっちゃな。いきなり転がり込んできたと思っただらまたまおつかいに行つた先でテレビに映るなんて。しかもプロフェッショナルとか全国ネットやんか」

冷蔵庫から缶のビールを2つ持ってきて1つをヤシオに手渡す。

「どうせ映るなら髪をもつとパサーりしときたかつたですけどね。最近のテレビは毛穴までクツキリ映るんで」

落ち込むのも早ければリカバリーも早い。

ビールを受け取りつつ、髪を気にするヤシオ。ファッションに無頓着な彼でもテレビに映るとなると話は別らしい。

そして2人はスモークチーズを着に飲み始めた。

「乾杯！ それにしても俺にも取材の話が来たらなあ。おっさんなのが運の尽きやなあ」

「そつすねえ」

「いや否定せんのかい！ あつ、やつと始まる。これでしばらく育て屋の姉ちゃんは街の有名人やな」

目的の番組が始まろうというまさにその瞬間、突然画面がテレビ局のスタジオに切り替わり、アナウンサーがアップで現れた。髪も若干乱れ、心なしか慌てているように見える。

『『プロフェッショナルく仕事の奥義』の時間ですが予定を変更してただいま入りました臨時ニュースをお伝えいたします』

「あれ?」

「あらま?」

人気番組を潰してまで流れる臨時ニュースにゼルドスは何かを感じ取り、飲みかけのビールを机に置いた。

「ネイヴユシテイでバラル団による大規模な奪還作戦が実行され、収監されていたバラル団幹部のイズロードが脱獄しました。他にも収監されていた凶悪犯が脱走したとの

ことです」

「あのイズロードが!?」

ゼルドスは驚きを隠せない。

「いずろおど? 悪い人なんですか?」

ニユースの重大さをあまり理解していないヤシオは聞き慣れない単語にぼかんとしている。

「ああヤシオは知らんか。何年か前に捕まったバラル団の幹部で、たしかギーとかセーとかいうPGのあんちゃんの大捕物だったんや」

イズロード脱獄がいかに重大な事態か話して聞かせるゼルドス。しかし残念ながらヤシオはピンときていないようだ。

「バラル団なら砂漠で見かけて戦ったけどそんなに大した連中には見えなかつたぞ。1人ヤバそうなのはいたけども」

吹き荒れる砂嵐のなか、見上げるほどのゴルグが振るった拳は記憶に新しい。

彼らを相手取って勇敢に戦ったのは自分ではなかつたはずだが自らの記憶を編集してしまったヤシオ。そのあたりの都合のよきも人生には必要なかもしれない。

「バラル団にも色々いるらしいぞ。ほんまもんの悪党から中にはフレンドリイシヨップの商品を並べ替えたりするようなセコいヤツもいるとかつて話や」

「そんな面白い人もいるなら会ってみたいような……」

ここでキャスターが画面外から渡された原稿を受け取った。スタジオも相当バタバタしているようだ。

「えー、対策にあたったPG、そしてネイヴュシテイに深刻な被害が発生したとの発表がありました。が依然その程度については明らかになっていません」

テレビの画面がネイヴュシテイ上空からの映像に切り替わった。

街のいたるところから立ち込める煙と倒壊した家屋が被害の大きさを物語っている。

「これが人災って嘘だべ……」

「まったくやな」

ガレキと所々の炎、そしてバラル団が放ったポケモンたちが陸路での取材班の進入を拒んでいるようだ。

ワイプで映っていたキャスターがさらに新たに原稿を受け取った。

「ネイヴュシテイ居住エリアにも甚大な被害があったため、家をなくした人々の受け入れ先についても今後各自自治体が協議していくとのことです」

「人口が多い街だけじゃあれだけの人数は受けきれないやろ。サンビエにも来るかもしれないなあ」

ゼルドスはチャンネルをまわしたが、どの局もネイヴュの事件についての臨時ニュー

スを放送していた。

諦めてテレビを切る。そしてスモークチーズを口いっぱい頬張るヤシオに向き直った。

いつの間にか呑んだくれの顔から腕利きのトレーナーの顔になっている。

「ヤシオ。ゆつくりしていつてくれとは言ったんやけど、リーグを目指すなら急いだよが、うが、いいかもしれん」

「えっと？」

「ラフエル地方で何かよくないことが起ころうとしている。俺たちラフエルのもんだけやない。君ら旅のトレーナーにとっても、な」

ゆつくりと。

ゆらゆらと。

静はそつと動へと変貌を遂げようとしていた。

レッド&ブルー

「バクフーン、ふんか！」

それは例えるならば歩く爆裂火口。ただしバクフーンはこの『噴火』を繰り返す行うことができる。

凄まじい炎と噴出物はその戦いのファイナーレに相応しいものだった。

「いやー、まいったまいった。君めちやくちや強いね。軽々しく勝負をしかけるんじゃないなかつたなあ」

15ばんどうろを根城にしているこのトレーナーはここまで10連勝と好調を維持していた。しかし今回ばかりは相手が悪かったようだ。

観光客風のカップルを見つけたまではよかった。男に勝負をしかければ彼女の手前、まず断られることはない。だからこそ全力で挑んだのだ。

ここまでコテンパンにやられると清々しきさえあった。そこで彼は賞金を支払うだけではなく気のよい現地人として振る舞うことにした。

「君たち観光だろ？ この先にモタナシティって街があるんだけど、もしよかつたら寄ってみるといい。メシも旨いしいところだよ」

「ありがとう、そうするよ。ほらメルル。シャキシャキ歩いてくれよ」
「やっぱり私には当たり強くないですか?！」

男女はどうろを東へ。

「メルルちゃんか。可愛かったなあ」

彼女いない歴と年齢がイコールで繋がってしまう彼からすると、あのトレーナーがどうにも羨ましくて仕方ないようだ。

「なんとというか俺にはインパクトがないんだよな。うん」

冷静な分析は見事だが彼の出番はこんなものである。

やって来たモタナシティ。街全体がお祭りムードに包まれている。そしてそれは翌日に控えた釣り大会のせいらしい。

イベントに敏感なメルルがこれを逃すはずがない。

「先輩先輩! 出てみましょうよ! でつかいのを釣ればいいんですよでつかいの!」

「メルルが釣るのか?」

「釣るのは先輩です。私はおーえんおーえん」

どこかにいるであろうオーエン氏とともにユマは痛む頭を抱えた。

とはいえ釣り大会という単語には胸が躍る。なんやかんやでメルルに流されてしま
う自分に内心苦笑しつつも大会の参加を承諾した。

街行く人々はみな釣り大会の話題で持ちきり。それもあつて参加の受付窓口を見つ
けるのにそう時間はかからなかった。

「先輩。優勝したらトロフィーは私にも持たせてくださいね？」

「へいへい」

とらぬジグザグマの皮算用とたしなめるのも面倒だったので適当に流した。

そしてそんな二人に興味を示す者が。

「君たち！ 釣り大会に出るのかい？」

暗がりから男が現れた。目をギラつかせて受付を済ませた二人に詰め寄り——

「どうだろう、誰がこの大会の優勝トロフィーをゲットするか賭けてみないか？ 一攫

千金も夢じゃないぜ？」

「一攫千金?! 賭けます賭けます！」

ユマがやんわりと断ろうとする前にメルルが話に食いついた。タッチの差だっただ
けにかなり悔やまれる結果となつてしまった。

男はニヤリと笑つてどこから入手したのか二人に参加者の写真つき名簿を見せた。
目を輝かせるメルルを無理やり引っ張つていくわけにもいかず、ユマも仕方なく話を聞

くことにした。

「二つ返事とは気に入った。俺の見立てでは優勝候補はサイノスっておっさんだな。なんでもボロのつりざおを配りまくる釣りマニアで過去に優勝経験もある。安パイだと思っぜ？」

賭け事は程度の差こそあれほとんどの場合胴元が儲かるようにできている。それをじゆうぶんに理解しているユマはこの男から胡散臭さしか感じなかった。

「私は先輩に賭けます！ これまでもそうだったようにきつとなんとかしてくれるはずですよ！」

男は一瞬驚いた表情を見せたが、狙いからはそれていなかったのかメルルの案を否定しなかった。

「大穴に突っ込むとはお嬢ちゃんもギャンブラーの素質がある。もちろんいいとも。思いきりベットしてくれ」

メルルが口にした金額はそこまでではなかったが大会を前にユマは重たい荷物を背負った気分だった。

大会当日もユマはどんよりとしたものを心中に抱えていたが競技が始まればそんな

ことは言っていられない。

レンタルした漁船を巧みに操って沖に出る頃にはいつもの調子に戻っていた。

釣糸を垂らしてからここまでそう大きな獲物はかかっていなかったが、湖に慣れ親しんだ彼は大物の気配を敏感に察知していた。

「せんばあい。ホントにここでいいんですかあ？」

日焼け止めを塗っておけばよかったと後悔するメルル。言い出しつべなどそんなものである。

すぐに大きなアタリがきた。

「これはでかいぞ。メルル、ネットボールを頼む」

「はーいー！」

活きのいいポケモンは釣り上げられたとたんに襲ってくることもある。備えはしておかなければならない。

「ぐつ、こいつは大物だ！」

ユマが力任せに釣り上げたそれは二足二手に赤い帽子の

「ぎゃあああああ！ 先輩、それ人ですよ！」

「いんやあ助かったよお。あんがとますあんがとます」

海水をひとしきり吐き出したのち、その青年はユマらを命の恩人と見定めて礼を述べた。

「本当に大丈夫ですか？」

土左衛門を釣り上げたかとはばかり思っていたユマは面食らってしまう。

「だいじだいじ！ ヤシユウ男児はタフが取り柄よ」

「おっとまたしても挨拶がまだだった。オレはヤシオ。ラフェルのリーグとキングダムに挑戦しに来たんよ」

大きく両手を広げるジエスチャーをするヤシオ。ユマもメルルもそのポーズに見覚えがあったものの、その場では思い出せなかった。

「俺はユマです。シンオウから来ました」

「メルルです」

自己紹介よりも気になることがあった。

「ところでヤシオさんはなんで海のなかに？」

「いんやあ、ルシエに行こうと思って歩いてたらいつの間にか海にボチャーリ落っこつてたみたいで」

説明になっていないが彼の言葉に嘘はない。

ヤシオはユマとメルルをしげしげと眺めた。

「お二人さんは海難救助の講習中つてどこかい？」

ピーカンの下、私服にライフジャケットというラフな服装を見てそう判断した推理力はお察しといったところ。

「釣り大会ですよ釣り大会。なんでもラフエルの名物イベントらしいんです」

「私は先輩にガッツリ賭けたので是が非でも勝つてもらわないといけないんです！」

ヤシオはポンと手を打った。

「なるほど。事情は分かった。そういうことなら助けてもらった恩もある。オレも手伝うべよ」

手伝いはありがたいが先ほどまで海中を漂っていたような男が助っ人としてどれだけ機能するかは正直微妙なところではある。

しかし陸まで送っていく時間のロスとは天秤にかけるまでもない。ユマもメルルもあえてそれを口に出すことはしなかった。

「釣りは一子相伝をその原則とし、名跡を受け継がせるにあたっては、外弟子を外部から『子』として受け入れその『子』を後継者とする」

突然難しいことを語りだしたヤシオ。

「つまりヤシオさんはその『子』ってやつなんですか？」

「ちがうけども」

「じゃあさっきの話はなんだったんですか……」

呆れながら再び糸を垂らすユマ。そこへ再びアタリがきた。

「ぬおつ、こ、こいつもデカい！」

「まーた誰か溺れてるんかね。だめだあ、海難事故には気をつけないと」

「失礼ですけどそんなのヤシオさんくらいですよ」

メルルとヤシオのとぼけたやりとりを尻目に、ユマはこれまでにない手応えの相手と格闘を始めた。

「先輩！ 頑張つて！」

「そうだ！ 先輩、頑張つてよ！」

応援が功を奏したのかははっきりしないが、海に引き込まれそうになりながらもユマはポケモンを釣り上げた。

「ハッ！ は！」

水しぶぎとともに現れたのはギャラドス。

コイキングの分布の広さから生息圏はそれと同等とされるが、釣りによる捕獲は難しいとされるポケモンだ。

そしてこのギャラドスにはもう一つ特徴があった。

一般的にギャラドスは7メートル弱ほどとされるが、この個体は目測でも10メートルを優に超えていた。

「先輩！ ボール！ 捕まえれば優勝間違いなしですよ！」

「お、おう！」

しかしユマが投げたネットボールはヒゲで弾かれた。捕まえるには弱らせる必要があるようだ。

「お望み通り勝負といこうおっ!!」

ギャラドスが咆哮とともに放ったはかいこうせんが浮かんでいた船の近くのブイを粉砕した。

「まずいな。あいつの技をまともに食らったら俺たち以前に船がもたない」

しかも釣り上げられたことでギャラドスはいわゆる『気が立っている』状態。距離をとって体勢を立て直す余裕などない。

「つまり、船をやらせないようにしてわけだべ。ならば簡単。飛べるポケモンと泳げるポケモンで的を絞らせないようにする！ うん。シンプルイズベスト！ いやベストだ」

半ばお荷物と化していたヤシオだったが、これは悪いアイデアではなかった。

トレーナー同士の勝負とは違い野生のポケモンとのバトルはルール無用。ライフジャケットは着用しているものの、海に投げだされてしまう状況だけは避けなければならない。

ギャラドスは体を揺らしながら狙いを定めている。迷っている時間はない。

「そういうことなら！ トゲキッス！」

「プルプル、おねがい！」

現れたのはトゲキッスとブルンゲル。空と海に役割を分けることのできるよいコンビだ。

「ほほー。トゲキッスねえ」

ブルンゲルのニックネームにはツツコまずヤシオはトゲキッスに興味を示した。

「トゲキッス、エアスラッシュ！」

「プルプル、シャドーボール！」

タイプ一致で放たれた二つの技がギャラドスを襲った。

ところがギャラドスはビックともしない。

「効いてない!!」

それはあり得ない。何せ土手っ腹に決まった。普通ならば倒れていてもおかしくないくらいだ。

「湖で見たことがある。あれはコイキングとして他の個体より長い時間を過ごしたギヤラドスだ！」

ユマの解説はこうだ。

通常ギヤラドスに進化するタイミングであえて進化をせず、コイキングの体でより研鑽を積むことでサイズだけでなくその能力にも磨きがかかることがあるという。

トレーナーのもとではなかなか起こらない現象のため研究者たちが躍起になって調査しているとのこと。

攻撃の対象を舟からポケモンに変えたギヤラドス。波間を漂うブルンゲルにその牙を突き立てた。

水中での機動力では敵うはずもなくブルンゲルはその餌食となった。

「プルプル！」

戦闘不能とはならないものの大ダメージを受けてしまったようだ。

「メルル、ブルンゲルを回復させろ！ その間は俺が引き付ける！」

ユマの指示でトゲキッスがギヤラドスの周囲を旋回するも、意に介さない様子。トレーナーの戦術を熟知しているかのようにその場で渦を巻き上げた。

『りゅうのまい』。確実に仕留める気だね」

ヤシオはのほほんとネットボールを乾いた布で磨いている。他人事なこの男を海に

叩き込んでやろうかと思つたメルルだが、培つた精神力で我慢した。

「エアスラツシュ！」

トゲキツス渾身の一撃も水中に潜られてはどうしようもない。

そして放たれた返しのはかいこうせんがトゲキツスを撃ち落とした。

「くっ」

ユマは慌ててオボンの実をトゲキツスに与えた。

「よっしー！ ついにオレの出番だな」

状況を見かねてヤシオがボールを手に取つた。

これ以上ややこしくなるのを避けるため止めようとしたユマだったが黙りこんでしまった。

ボールを手に取つた瞬間に彼は漂着物からトレーナーへと変貌し、その気迫が味方であるはずの自分にも強く伝わってきたからだ。

この男と彼が解き放つポケモンこそがこの状況を打開する助けとなつてくれる。そう信じられる気さえした。

ギヤラドスもヤシオを新たな敵を認め、警戒を強めた。

「くべー！」

整ったスリークオーターでボールをリリースしようとしたヤシオだったが、あいにくここは海。足元は揺れに揺れる船である。

「あり？」

当然のようにバランスを崩し母なる海へダイブした。むしろ漂着物として本来の居場所に戻ったとさえいえる。

「何やってんのー！ー！ー！」

ここまで頼りなかったヤシオが八面六臂の活躍を見せるのではないかと期待していた二人だったが、さすがに甘かった。

ギヤラドスの尻尾が船を襲った。

「きやつー！」

さすがに壊れはしなかったが漁船全体が大きく揺れた。そしてメルルが抱えていたネットボール入りの箱が手元を離れ海に落ちる不運。

敵はりゆうのまいによって素早さと攻撃力を高めている。少しでも隙を見せたらポケモンたちのみならずトレーナーも危ない。

ギヤラドスが再び攻撃体勢にはいった。

「プルプル、シャドーボール！」

回復したブルンゲルのシャドーボールが炸裂するも効果は薄い。

頭脳をフル回転させ、打開策を練るユマ。さすがに万事休すだろうか。

「待てよ？ 一つだけ策がある！」

「もうその作戦でいきましよう！ このままじゃもちませんよ！」

ユマがメルルに何事か耳打ちした。

「ここまで長く一緒にいた二人にはそれだけでじゆうぶんだった。

「トゲキツス！ ギャラドスにかまうな、そのまま上昇！」

「プルプル、海に潜って！」

トゲキツスは見えなくなるほどの上空へ、ブルンゲルはギャラドスの真下の海中へそれぞれ姿を消した。

そうなればギャラドスは当然自分から近い敵、すなわちブルンゲルを狙う。

「シャドーボール！」

水中では当たらないうえに当たったところでダメージは期待できない。しかしそれもユマの作戦のうちだった。

ドッグファイトを繰り広げるブルンゲルとギャラドス。やはりギャラドスが押しているようだ。

ユマが双眼鏡で上空のトゲキツスを確認してメルルに合図した。

「プルプル、海から飛び出して！」

宙に浮く程度ならともかくひこうタイプのパokemonのように空中を高速で移動することはできないブルンゲルにとつてそれは危険なことだ。それでもブルンゲルはメルを信じて指示にしたがった。

海上に逃れようとするブルンゲルを追うギャラドス。ついに水面に顔を出した。

「今だ！ トゲキッス、『ゴッドバード』！」

溜めにかかる時間をブルンゲルが稼いだおかげで間髪いれず技が発動し、回避の際を与えることなく真正面から決まった。

今回ばかりは堪えたようだ。ギャラドスはなんとか戦闘体勢を保っているものの既に体がふらふらとしている。

「ここで重要な見落としては？」

「メルル、ネットボールは？」

「あつ落としちゃいましたあ……」

これではここまでの苦勞から得るものがない。

しかし天はユマを見捨てなかった。

足元の海中から聞き覚えのある声があった。

「これを使ぶくぶく」

再び漂ってきたヤシオがユマにネットボールを投げて渡した。海に落ちながらも先

ほど磨いていたものを持つていたようだ。

「ヤシオさん！ 無事だったんですね」

「オレのことはいいからギャラド（ぼ）ぼ（ぼ）」

この大チャンス逃すユマではない。

「ここまで散々手こずらされたギャラドスを1個のネットボールで見事に捕獲した。

「それにしてもどうしてさつきのはギャラドスに効いたんです？」

メルルはユマからの答えを期待したのだが先に答えたのはヤシオだった。

「それはあのギャラドスが夢とくせい持ちだったからだべ。どうしてもオレたちトレナーはギャラドスを見ると無意識のうちにとくせいが『いかく』だという先入観が働くのな」

いかくはあいての攻撃力を下げるとくせい。つまり物理のダメージを減らすわけで、そうなると相手は攻撃の手段を特殊に変えるのが自然だ。

「相性がいいなら話は別だけでも。多分あいつはとくせい『じしんかじょう』で特殊防御が異様に高い個体だったんだろうな。ゴッドバードは効いてたし」

あれだけの技を食らっても平気だったのだから間違いないだろう。

「うん、よくわかんないけどすごいですね！」

残念ながら途中から理解を放棄していたメルルにはあまり凄さが伝わらなかったよ

うだ。

「準優勝の発表です！」

音割れ気味のマイク音声が市内各地のスピーカーから響き渡る。静まり返った会場に取って付けたようなドラムロールが流れる。

優勝候補筆頭のサイノスが3位で消えるという大番狂わせもあり、それは超新星の誕生を意味していた。

「ゼッケン番号31番、ユマ選手です！」

先に準優勝を発表することで優勝への期待を煽る好演出だったがこれにはメルルもがっかりとできてしまった。

「あれだけのギャラドスでも優勝できなかつたってことは優勝の人は何を釣ったんでしようね」

「マナフィとかでねえの？」

「いやいや私はフィオネ派ですけどね」

会話を横で聞いていたユマは頭がショートしそうになるのを必死にこらえた。

準優勝は残念だったがあれだけの死闘を繰り広げたのちの捕獲には後悔はなく自分のベストを出しきったという自負もあった。

「ユマ選手、特設ステージまでお願いします」

この場にいる全員がユマの登場を求めている。この規模の大会であれば準優勝でも快挙にちがいない。

「だそうです。ヤシオさんも一緒に行きませんか」

この何時間かで一応ながら仲間としての連帯感が芽生えつつある。チームとして彼もステージに上がる権利があるとユマは考えた。

申し出がなくてもふらふらとついてくるのではないかと思われたが、ヤシオはひらひらと手を振った。

「ははは。オレはいいよ。これは二人が勝ち取った勝利、オレはそれを祝うだけだ。それにルシエに行く船があるみたいだしそろそろ行くかんね」

特に何もしていないにもかかわらず一仕事終えた感を出しながら、漂着物は別れを告げた。

図々しさに慣れていた二人は面食らうも、引き留めることはせず彼を温かく送り出すことに。

ありがとう、と一言述べてヤシオはどこかへ去っていった。

「えっ、ああ。色々とありがとうございました」

「特に思い当たる節はないけどありがとうございました」

こちら、とユマがメルルを小突いた。

準優勝に続いて優勝者が発表される。司会者がまたマイクを手に取った。

「それでは優勝者を発表します！ 第103回、モタナ釣り大会の頂点に立ったのは」
今度は準優勝の倍以上の時間をかけて勿体ぶる。

「ゼッケン番号7番、コゴロウ選手です！ おめでとうございます！ コゴロウ選手、特設ステージまでお願いします！」

観客の歓声とともにクラッカーが小気味良い音をたてた。

その場の全員が勝者の華々しい登場に期待した。

しかしコゴロウがステージに姿を現すことはなかった。

「コゴロウさん、帰っちゃったんです？」

「まさか。そんなすごい釣り人が帰るわけないしその辺にいるだろ」

そしてそれはここまで冴えに冴えていたユマの直感が初めて外れた瞬間だった。

「……スタッフがコゴロウ選手を探しております。みなさん少々お待ちください」

優勝者が確定したことで再び会場に喧騒が戻った。彼らはこの後30分ほどをこうして過ごすことになる。

モタナシティのはずれ。釣りざおを片手に歩いてきた男がおもむろにサングラスとカツラを捨てた。

「ふー参った参った。気晴らしで釣りがしたかっただけなのに優勝なんてなあ」

誰もいない場所で愚痴をぶちまける優雅な一時だったが、思わぬ邪魔が入った。

「おろ？ 7番のゼツケンでもしかしてあんたコゴロウさん？」

「いやいやコゴロウはエントリーのための偽名で俺の本名はコタローって——つととあぶねえ」

コゴロウ、いやコタローはヤシオの存在に気がついて飛び上がった。そしてゼツケンをつけたままの自分に気がついてげんなりとした。

受付に返すのを忘れたのはともかくこんなものをつけたまま歩いていたら目立ちまくることこの上ない。

さて、うっかり口を滑らせかけたコタローが必死に守ろうとした個人情報だったがヤシオからするとさほど重要な問題ではなかったようだ。

「えっと。行かなくていいん？ このまま優勝者が表彰式に來ない場合は準優勝に流れらしいけども」

今回の場合でいけば準優勝のユマが繰り上げ優勝となる。それに伴い賞品も彼の手に渡ることになるのだ。

「いいんだよ。俺としてもそのほうがありがたい」

コタローにはあまり目立つてはいけない事情があるため当然の判断なのだがそんなことは知らないヤシオからすると、彼は釣り人の鑑そのものだった。

「そうなんか。オレは欲深い人間だから見習わなきゃいけないなあ」

感心しきりのヤシオを鬱陶しく思ってきたところでコタローのポケギアが鳴った。

「あつクロックさん！ すみません！ いやあの、モタナで釣りをしていたらこんな時間になってしまつて……そうなんです、これも作戦の一環でして。本当です。あつ、はい。これからですか。すぐに向かいます。え？」

どうやらかなり気を遣う相手のようで3秒に1回は頭を下げている。

そしてどうやらビデオ通話をしていたため相手からも後ろにいるヤシオが見えたようだ。そのことを突っ込まれたとみえる。

「後ろの人？　なんかそのへんをふらふらしてた変な奴です。絡まれただけで特に知り合いつかではないですけど……え？　分かりました。はい、はい。それじゃ失礼します」

通話を終えたコタローは人の良さそうな笑みを浮かべてヤシオに歩み寄った。

「親切に教えてくれてありがとう。それじゃあな」

親しげにヤシオの肩を叩き、立ち去った。

しばらく呆然としていたヤシオだったが船の時間が迫っていることを思い出して、いつものようにあさつての方向へ走り出した。

在る箱亡い箱

港からリザイナシティまでの配送を担当する陸運業者は今日の受け取りがいつもと違うことに気がついた。

「こちらリザイナシティ”CeReS”行きの荷物になります。……今日はいつもの方はお休みですか？」

「そうなんですよ。なんでも風邪ひいたとか。あつ、ハンコはどこに押せばいいですか？」

「ご冗談を。AIで管理されてるからそんなのいりませんよ」

高度に進歩した科学は魔法と区別がつかないとはよくいったものだ。学園都市として名高いリザイナシティは最先端の科学技術を備えた未来都市でもある。

もちろん運輸業も高度な技術で管理されており、職員たちの間では自分たちの社長はコンピューターだというのが定番のネタだった。

「そ、そうでしたっけ。あはははは」

臨時の代打ゆえ手慣れないところがあつたのだろう。よその部署から急遽こちらを担当することになれば戸惑うのは当然だ。

この時の彼はそう考えた。

これはちよつとした騒動の前奏。しかしそれを看破できる人間はこの場に存在しなかった。

「……お疲れ、ジユカイン」

カズヤは力尽きた。パートナーをボールに戻した。

これで彼の連敗記録がまた伸びることとなった。

トレーナーズスクールではこのような模擬戦が頻繁に行われる。ここリザイナシティが高度な技術を蓄えた都市である事実は揺るがないが、それでもその技術を扱うのは人間であるという理念が街に行き届いているのだ。

実践を大切にする教育はポケモン勝負を愛する子どもたちには好意的に受け取られているが、カズヤは別だった。

「はいみんな拍手。二人ともよく頑張ったネ。今日の授業はここまでだ。回復装置の場所覚えてるかな。帰る前にポケモンを休ませてあげてネ」

スクールの先生の言葉に嘘はなく、クラスの仲間たちの拍手も彼らの本心に間違いな

い。

しかしそれが分かってからこそカズヤは自己嫌悪に陥ってしまった。
グラウンドの準備室を出ると正午のチャイムが鳴った。

わいわいと騒ぎながら帰っていくクラスメートたちの輪に入ることはできず、カズヤは彼らと別の方向へジユカインと歩き出した。

「また負けちゃったな。ごめん」

このトレーナースクールに入学してから数年。他のトレーナーの卵たちと数えきれないほど勝負をした。しかしカズヤの戦績に白星が刻まれたことはこれまで一度もなかった。

しかも今日の相手は入学したばかりの生徒ともなれば精神的にもきつい。

うなだれるジユカイン。

「ごめんな。おまえはとても強いのに。勝てないのは俺の責任だ」

単なる慰めではなかった。

このジユカイン、かつて亡くなったカズヤの父のパートナーとして幾多の強敵と戦ってきた。実力でいえば折り紙つきなのだ。

P Gとして活躍していた父とジユカインは幼い頃のカズヤの憧れそのものだった。

その実力を引き出せない責任は全て自分にあると悩むことで余計にナーバスになっ

てしまうという悪循環にカズヤは吞まれていた。

今日は半日授業。いわゆる半ドンなのだが、どうにも帰る気分にはなれなかった。

「うん。森に行くか」

気分が晴れない時には少し歩いてハルザイナの森に行くのがカズヤの習慣だった。

薄暗い森は考え事をするのに最適の環境であるうえに上質な木の実を採集することもできる。草タイプのジユカインにとつても落ち着くようだ。

ハルザイナの森の奥。少し拓けた場所があり昔からのカズヤとジユカイン御用達の場所なのだが今日は先客があつた。

木の根に腰かけた男が一心不乱に何かを口に運んでいる。赤い帽子にリュックサックの出で立ちから旅のトレーナーなのではないかとカズヤは考えた。

「何してるんですか？」

カズヤの本能が気晴らしを欲していた。好奇心が警戒心に勝つたのは当然の結果だった。

男は朗らかに笑いながら水玉模様のキノコをもいでみせた。その異様な振る舞いに周囲の野生ポケモンたちがドン引いているが気にならないようだ。

「キノコよキノコ。ここ何日か何も食ってなかったかんね、これがまた旨いのなんのつ

て」

男は生えているキノコを手当たり次第口に運んでいる。

「それだいがカラフルですけど食べて大丈夫なやつなんですか？」

キノコについて特別な知識があるわけではないカズヤでも、色彩の豊かさと警戒色は緩めのイコールで結ばれることを知っていた。

「へーきへーき。チリソースをブチューりかければ食えないものなんてないってばあちゃんも言ってたし」

謎の理論を提唱しながらチューブ状の容器に入った赤い液体をキノコにかけた。マトマの実100%と書いてあり、味わわずとも辛さが伝わってくる。

カズヤはこの男を変人、むしろ変態にカテゴライズされるかもしれないが悪人ではないと判断した。

「あの。俺もここ座っていいですか」

「いいよお。兄ちゃんもキノコ食うけ？ 通販でチリソースいっぱい頼んでおいたから好きなだけ食いなね」

男が小脇に抱えた白い箱。中身は全てチリソースなのだろう。

さすがにこの誘いは丁重に断った。しかし妙に聞き上手なこの男にカズヤは堰を切ったかのように話し始めた。

1時間ほど語り合っただろうか。二人は互いの名前と身の上だけでなく最近のブームについても情報を交換した。

「ヤシオさんはすごいですね。ジムを巡ってリーグに挑戦してって俺からしたら雲の上の世界ですよ」

ヤシオはからからと笑った。

「そんな大したもんでもねえって。バトルマニアが高じてってかんじよ。勝負ってやるのも見るのも楽しいし、人ともポケモンともコミュニケーションできるし。難しいことは抜きにして楽しければいいじゃんか」

勝利という結果だけを求めていた、そのことに初めて疑問を持った瞬間だった。

すっかり打ち解けた二人だったがそこへ思わぬ闖入者があった。

「ふう。ここまでくればひと安心——おお!？」

箱を抱え葉っぱと枝にまみれた男がよろよろと藪から這い出してきた。

「げげーっ!　なんでこんなところにガキがいやがる!」

ヤシオとカズヤに気がついた男は頭を抱えた。

その服装はリザイナ配送センター職員のもの。しかし森に入ってくるのは不自然だった。

「見られちゃったなら仕方ない。お前らまとめて蹴散らしてやる!」

カズヤもヤシオも呆気にとられて何も言葉を発していなかったのだが、なぜか焦っている男はボールからバオツキーを繰り出した。

「このサンプルを先方に届ければ俺の口座の残高がぐぐーんとアップ。邪魔なんてさせるか！」

「なるほど泥棒か。ジュカイン！」

カズヤはジュカインをそのまま戦闘に出した。

「『ほのおのパンチ』！」

火炎をまとった拳がジュカインをとらえた。

「あ、ああ……」

炎にまかれ苦しむパートナーの姿がカズヤにパニックを引き起こした。口が渴き、頭が真っ白になり行動を指示することができない。

慌てて『でんこうせっか』を指示したが遅かった。

「そのまま押しきれ！ 『アクロバット』！」

身軽さと木々が生い茂るフィールドを活かした奇襲。これも効果は抜群で、たった2発でジュカインは地に膝をついてしまった。

「取引場所には誰も近づけるなど言われてるんだ。これ以上痛い目を見たくないならガキはさっさとママのところへ帰るんだな」

「くっ」

勝負となると体が縮こまってしまい、うまく指示が出せない。スクールの外での戦いでもやはりダメだったのだ。

お気に入りの場所を守ろうとしたささやかな正義感も自分には過ぎたものだったのかも知れない。カズヤは再び自己嫌悪に陥ろうとした。

『はじけるほのお』！

しかし勝負を急いだのかここでバオッキーはコントロールミス。技はカズヤを狙ったものとなった。

人間の体で食らえばそれなりのダメージになる。カズヤは回避行動をとろうとしたが避けきれぬものではない。

「ジユカイン！」

ギリギリのところではカズヤに降りかかろうとした炎を振り払った。

傷だらけのジユカインは自らを指して何かを伝えようとしていた。

「そうだよな。戦っているのは俺だけでもお前だけでもない。当たり前のことすぎて忘れてたよ」

この一種の開き直りがカズヤのスイッチだった。

『リーフブレード』！

小さく頷いたジユカイン。木の葉の刃を作り出し、流れるような動作でバオツキーを切りつけた。

「へっ、くさ技を食らったところで痛くも痒くもない。なあバオツキー？」

ダメージにはなったもののバオツキーは体を震わせてまだ戦うスタミナがあることをアピールした。

顔にこそ出さなかったが、カズヤは初めてまともな勝負ができたことに興奮していた。

「いやいや、次の一撃でバオツキーはダウンだよ」

喜びも束の間、今度はカズヤと同世代くらいの少女が現れた。タイミングからして味方ではないことは明らかだがその根拠がもうひとつあった。

その少女の奇妙なフアッションはカズヤもよく知っていた。最近ニュースで話題となっているバラル団だ。

「あんまり遅いから受け取りにきたよ」

「ひっ、すみません！ 暗くなるまで森に隠れてそれから渡そうとしてたらこいつらに邪魔されて」

見たところカズヤと変わらないくらい年の頃にもかかわらず男は最敬礼し、彼女を本気で恐れているように見えた。

「それじゃあ遅い。私たちは暇じゃないんだ、手を煩わせないでほしいね」
バルル団の少女はカズヤたちを一瞥した。

「欲しいのはサンプルだけって言ったよね。余計なのを連れてこいだなんて頼んでないんだけど？」

その目は冷ややかで男を目的を果たすためのモノとのみ認識していることを暗に伝えていた。

「ち、違うんですって！ に、荷物はここに置いておくんで。し、失礼しましたあ！」
恐怖が限界を迎えた男は箱を置いて一目散に駆けていった。

「まあいいか。目があるなら潰せばいいよ。」
握ったボールからカクレオンが現れた。

「やるしかないか、いけるかジユカイン？」

バオツキー戦で苦手な技を連続で受けているだけに心配ではあるが、カズヤの手持ちは一匹のみ。

さらに問題がもうひとつあった。

「ヤシオさん！ 何しやがみこんでるんですか、戦ってくださいよ！」

「まあまあ。跳ね橋は不定期で開閉するからヒウンアイスでも食べながらのんびり待とうや」

ヤシオは焦点の合わない目で虚空を眺めている。その目には彼にしか見えない跳ね橋が映っているようだ。

「は？」

話が噛み合わない原因は明らかだった。

バオツキーを倒したあたりから様子がおかしかったがヤシオはキノコの作用で幻覚を見ているらしい。この状態では戦力として数えるのは厳しそうだ。

「ちよヤシオさん！ しつかりしてください！」

頬をはたいても肩を揺すってもヤシオはうわ言のように幻の景色について眩くだけ。戦力どころか足手まといと化していた。

「そつちのお兄さんは面倒そうだったけどそのまま休んでいてもらえるならありがたいね。カクレオン、『きりさく』！」

『『リーフブレード』！』

先ほどの戦いで多少の勝負勘がついていたのが幸いした。

ジュカインはカクレオンの鋭い爪を防ぎ、返しの一撃を食らわせた。

「よし、もう一回だ！」

勢いに乗って敵を叩きたいところだったがここで突然カクレオンが姿を消した。

「姿を消すなんて便利な能力だね。私も欲しいくらいだよ。さあ、カクレオンを見つ

けられるかな？」

この姿を消す能力、腹のギザギザ模様は隠せないという欠点があるのだがここはうつそうと茂った薄暗い森。目視で探するのは不可能に近い。

「『かげうち』」

頭上から、背後から、はたまた足元からカクレオンがじわじわと攻撃をくわえていく。

「『エナジーボール』！」

なんとか反撃を試みるも姿なき挑戦者を討ち果たすことなどできない。

「あればあちゃん。こんなどこ来てどしたん？ あるつて来たんけ？」

どうやらヤシオの幻覚に件の祖母が現れたらしく、親しげに話している。ところが彼の目の前にいるのはパラセクトだ。

「唯一の味方はのんきにキノコ遊び。このまま倒すのはわけないんだけど、ちよつと気が変わったんだよね」

「何を言っている？」

「この森には迷子以外にも何かに疲れた人間が多くやって来るんだ。だから絶好のスカウトスポットってわけ。どうだろう、あんた、バラル団に入ってみる気はないかな」

ここで少女は初めてカズヤに微笑んだ。緊迫した場面に似つかわしくない、ファンシーさがそこにはあった。

「バラル団に？ 俺が？」

「そう。何も特別なことをする必要はないんだ。これまで通り生活してくれていい。時々私たちを手伝うくらいのことではじゅうぶんさ」

「もちろんあなたにもメリツトはあるよ。バラル団には腕利きのトレーナーがたくさんいる。そいつらがあんたをもっと強くしてくれる。リザイナのトレーナースクールだっけ？ そんなところにあんたの理解者なんていない。バラル団は言葉だけの公平の陰にいる弱者や落ちこぼれの味方なんだ」

「この甘い言葉に惑わされた人間がこれまで数多くいたのだろう。そしてカズヤも今日この森に来るまではその一人になり得た。」

しかし彼の目にはこの絶望的な状況にあつても決意の炎が燃え盛った。

「落ちこぼれだつて何だつていいさ。俺はコイツと、ジユカインと上を目指すんだ！」

「なあばあちゃん。チリソースあるけど食うか？ ほら、ちようどこここにキノコがあるから。あらま。最近のチリソースは黒い石ころなんだなあ。ははは」

間抜けを晒しているヤシオがなんとも痛々しい。

「交渉決裂つてことかな。残念だね、カクレオン！」

「あんれ、このキノコ抜けねえなあ。ばあちゃん悪いんだけどそつち持つてくれっけ？」
パラセクトの体からキノコを引き抜こうとするヤシオ。これには温厚なパラセクト

もついにトサカにきてしまった。

そんなことは露知らずカクレオンの爪は真つ直ぐにカズヤを狙っている。人間のスピードではもはや逃げることもできない。

『きりさく！』

姿を消したままカズヤの眼前に迫ったカクレオンだったが、突然姿を現してその場に固まった。

「何?！」

よく見るとキラキラと輝く粉が宙を舞っている。

パラセクトが怒りに任せて放出した胞子によって動きが鈍ってしまっているようだ。草タイプのカクレオンには効かないことも幸運だった。

この一大チャンスに逃す手はない。倒れ付したカクレオンは最後の力を振り絞って起き上がった。

『リーフブレード！』

『きりさく！』

両者の激突が衝撃波となってあたりの木々を震わせ、木の葉を巻き上げた。

そして視界が晴れた。立っていたのは——カクレオンだった。

「惜しかった。惜しかったよ。何かひとつのズレで勝敗は逆だったかもしれない」

少女はカズヤの健闘を称えた。彼女の勝利がほんの僅かの差だったことは本人が一番理解していたのだ。

「……までか」

カズヤが諦めかけたその時、頭上を飛び越えて大きな影がカクレオンの前に立ち塞がった。

どつしりとした体つききのポケモン。カズヤはその名前を知らなかった。

「ブリガロン、『アームハンマー』」

女性の声で指示が飛んだ。

そのポケモンは太い腕を振るってカクレオンを一発でノックアウトした。

「誰だー！」

少女は次のモンスターボールを手に取った。

が、また懐に戻した。

「しょうがない。助っ人が来たんじや私は帰るよ」

落ちていた白い箱を拾い上げて少女は森の奥へと消えていった。

緊張が解けへたりこむカズヤ。

そこへ茂みをかき分けて女性が現れた。まともな援軍の到着は天からの助けにも思えた。

「君、大丈夫？」

「はい。危ないところをありがとうございました」

正直今日はこれ以上女性を見たくないと思っていたカズヤだったが、その顔を見て飛び上がった。

「も、もしかして四天王のハルシャさんですか？」

そしてさらに数時間後。カズヤたちはリザイナシティに戻ってきていた。

PGの詰所での取り調べはあつという間に終わり、今は黄昏の街を歩いているところ。

「本当にありがとうございました。助けてもらっただけじゃなくて特訓もつけてくれるなんて」

四天王によるエキシビジョンマッチ形式での特別授業を野良で受けることがどれほど幸運なことか。

「いいのいいの。若いうちは何事も経験なんだから。これからも君の心のノートにたくさんレポートを書いてほしいな」

講師としての顔も持つハルシャの言葉はカズヤの胸に強く響いた。

ハルシャはきよきよると周囲を見渡した。

「あれ？　そういえばヤシオくんは？　さつきまで一緒にいたよね」

「あの人はああいう人ですから」

今思えば幻覚のタイミングはあまりにも都合がよかった。もしかしたら自分の成長のためにあえてあのような演技をしつつ、ピンチのところではパラセクトにダル絡みしたのではないだろうか。

ここまで考えてカズヤは買い被りが過ぎると苦笑した。

「バツジ、あと一個らしいですしルシエに向かったんでしようね。あそこのジムリーダーが相手じゃさすがにそううまくはいかないと思いますけど」

朝日や夕日にバツジをかざすのは絵になるとはヤシオの言。

「コスモスちゃんは容赦ないからね」

カズヤに同調しつつもハルシヤはヤシオに対して妙な胸騒ぎを感じていた。それはアカデミー講師としてでも四天王としてでもなく、ただのトレーナーとしての勘。

トレーナーの才を見抜く彼女の慧眼は彼に何を見たのだろうか。ハルシヤはそれを言葉にしなかった。

深夜、超常現象：C e R e Sに予定時刻を大きく過ぎて例の荷物が運び込まれた。

「カイドウさん。例のサンプルが届きました」

「ああ、そこに置いておいてくれ」

リザイナジムリーダーにしてこの機関のトップであるカイドウ。PGから盗難事件のあらましについては聞いていたが、検分を終えてその日のうちに手元に届くとは思っていなかった。

スクールの見習いトレーナーとカイドウが今でも頭があがらない相手である四天王のハルシヤの活躍で無事に取り戻されたとPG職員は話していた。

「そういえば帰り際に話してましたけどもう一人変なヤツがいたらしいですよ。妙な詛りで喋る赤い帽子の男。PGは最初そいつを犯人と勘違いしたとかで。でもバラル団はそいつが持ってたチリソースの箱をサンプルと間違えて持っていったっていうんだから笑っちゃいますよね」

結局ただの通りすがりだったらしいですけどねと笑う助手。カイドウはその男に強烈な心当たりがあつたが、あえて何も言わなかった。

カイドウは仏頂面を保ちつつ荷物を開封し中身を確認した。

この時間はカイドウと2人だけ。自分から喋らないと重苦しいムードに支配されてしまうこともあつてこの時間の助手は饒舌になる。

「それにしてもそのサンプル、一体何なんです?」

箱から出てきたのは黒い石のような物体。地質学分野で扱われる類いのものに見える。

「これはアローラ地方で採取されたネクロズマの体の一部だ。ヤツは強いパワーを持っているんだが、まだ不完全な形態である可能性が示唆されている。バルル団が目をつけたのもそのあたりの事情があるんだろう」

声が変わるに大きくなった。それだけ楽しみにしていたようだ。

「あつ、それニュースで見ましたよ。国際警察も動いたほどの事件だったらしいですね」
助手は最近契約したアンバサダーのマシンで2人分のコーヒーを淹れた。

サンプルを前に集中モードに入ってしまったカイドウ。こうなるとテコでも動かない。少しでもリラックスしてもらおうという涙ぐましい心遣いだ。

「このネクロズマ研究が実ったらここもウルトララボトリーですかね？」

「パワーアップ版だからといって安易に『ウルトラ』をつけるのはどうかと思うがな」
カイドウは仏頂面を崩さず、達観した様子で呟いた。

不可能のバラッド

僕はネイヴユ行き砕氷船のシートに座っていた。その巨大な鉄塊は分厚い流水を割りながら真つ直ぐに進み、ネイヴユ港に到着しようかというところだった。

雲が大地に暗がりをつくり、外套を纏った船員たちや、閑静な港に不釣り合いな灯台や、ラフェル放送の広告板やそんな何もかもを気だるげな画家の油絵のように見せていた。

ついに来た、それ以外の感想はなかった。

港に停泊した船から乗客が慌ただしく降りてゆく。スピーカーからは控えめな音量でBGMが流れ始めた。その方面には疎い僕ですら知っている『ラプラスに乗った少年』のメロデーはこの雪国に似つかわしいものだった。

その甘く優美なメロデーから逃げるように僕は船を降り、司法局の出先機関に駆け込んだ。

役所仕事は大変だというのがなんとなくの認識だがラフェルの最果てにあるネイヴユ支部ともなればさらに気が滅入る。僕はそう思ってしまいがこの人々は誰も彼

も真摯に職務に向き合っていた。

「ああ、トオルくんだね。話は聞いているとも。これが居住区への立ち入り許可証だ」

そうだ。これが欲しかった。リングマのような強面の男性職員はトレーナーカードとバッジを確認するとすぐにパスを渡してくれた。

「それにしても顔色が悪いな。大丈夫かい？」

「大丈夫です、ありがとうございます」

僕はそれだけ言い、出張所を出た。フローゼス・オーシャンの上空に浮かぶ暗い雲を眺め、この牢獄のような街の奥に足を踏み入れるために。

世界一周旅行が当たった。幸運を喜ぶというよりこれまで無為に過ごしてきた時間を埋める何かが得られるのではないかという気持ちが勝った。

記憶というのは実に都合よくできているものだ。その時は自分にとってのベストを追求していたとしても、今こうしてふりかえれば後悔に次ぐ後悔で細部まで塗り固められている。

正直なところ大学に籍を置きながらも今回の一大決心に踏み切ったのは少しでもそれらから解放されたかったからだ。

このネイヴで何があったか。絶対の牢獄は破られ、閉じ込めていたものたちが溢れ

た。表面張力で震える水面に最後の一滴を投じた輩がいたというところらしい。

バルル団という連中のことを僕はよく知らない。社会に対して何らかの鬱屈とした不満が燻っているのなら別の方法もあるだろうに、軽率なことだ。

降り積もった雪。同世代の女子ならば狂喜乱舞しつつフラッシュを雨霰と浴びせただろう。写真に映える眺めについて否定するつもりはない。

ふと見ると出来の悪い雪だるまのようなものがあることに気がついた。ここの住民は避難しているらしいので、ここに駐在している誰かが作ったのだろうか。

「そうだな、僕ならこうやって」

胴体だけで頭がついてないから違和感がある。手頃なサイズの雪玉を上に乗せてやればいい。

「待っちくり」

作りかけの雪だるまに語りかけられれば腰を抜かさないと人間はいない。僕もそんなところでマイノリティを気取るなどという高校生じみたことはしたくなかった。

胴体のほうの雪玉が割れて中から赤い帽子を被っていた男の顔が現れた。

どんな意図で雪のなかに潜っていたのかは分からないが健康に良くないことは明らかだ。

「何をしているんですか？」

何者ですか、通報してもいいですか、など候補はいくらでもあったが一番優しいものを選択した。

「道に迷っちゃまって。雪にズボーリ足をとられてたら頭の上に雪が積もるわ積もるわ……」

彼の言う道とはルートではなくてライフなのかもしれない。本当の本当に深い問題ならば僕が立ち入るのはむしろ無粋に思えた。

「でもそんなここにいたらさすがに風邪引いちやいますよ」

「だいいじだいいじ。ヤシユウ男児はナンタイおろしで鍛えられて——ちよつと引つ張つてくれっかい」

独特の訛りがあるがこの男は丁寧言葉を選んでいるように思えた。そうか。

立端のわりには軽く引き抜くことができた。彼はズボンのポケットからカイロを僕に手渡してにつこりと微笑んだ。

「助かったよ。あんがとます」

こちらも礼を返した。

彼は大きく両手を広げた。

「オレはヤシオ。旅のトレーナーだ。そんなにしてもルシエつて前に来たネイヴユとよ

く似ている街並みだんべな」

一瞬理解が追いつかなかつた。ただひとつ分かったのはこの人が迷っていたのはラ
イフではなくてルートだということだった。

「そんじゃありが」

手刀を切りながらのとうは口の動きだけで終わった。ヤシオさんは雪原に倒れ伏し、
そのまま動かなくなった。

参った。病院などないし、港までこの人を連れていくのも厳しい。電話してもすぐに
助けは来ないだろう。

仕方なく彼を背負って歩を進める。体育会系ではない僕にとつて鉛のように重い。
このままでは共倒れだ。

凍死だけはしたくない。徐々に奪われていく体温は死そのものより恐ろしい。自分
だけならいくらでもなんとかなるが道連れがいる今、下手には動けない。

そんな気持ちがあつたに届いたのか、遠くを男性が歩いているのを見つけた。地獄に垂ら
されたアリアドスの糸に声をかぎりに叫んだ。

「どうした。行き倒れかな」

その男性はヤシオさんの額に手をやった。父さんよりは若い僕よりもだいぶ上に

見えた。

「熱があるみたいだ。とりあえずジムに連れていこう」

「ジム——もしかしてあなたはユキナリさんですか？」

「そうだ。とりあえず話は向こうに着いてからにしよう」

ユキナリさんはマンムーを繰り出し僕とヤシオさんをその背中に乗せ、自らも飛び乗った。

凍土から掘り起こされて息を吹き返したことさえあるというこのポケモンならばこの寒さも足場の悪い雪原も脅威になり得ない。

ジムまでの雪原をマンムーは真つ直ぐに駆け抜けた。カロス地方では一部地域で移動に使われるらしいが他地方でも検討していいのではないか。

流れていく景色が沈黙を忘れさせてくれた。僕は口が達者ではないしおそらくはユキナリさんもよく喋る人ではない。聞こえるのはマンムーの鼻息だけだ。

ジムの応接室。ヤシオさんは薬を飲まされたうえで仮眠室のベッドに寝かせられた。

「改めて自己紹介しよう。僕はネイヴユシティジムリーダー、ユキナリ。まさかこんな時にPG以外の人が訪ねて来るとはね」

「トオルといいます。ラフェル地方のジムについて論文を書いています」

要は大学生を苦しめる状態異常のようなものだと思う。

「すると君はジムに挑戦に来たのかな？」

ユキナリさんはおそろしく乾いた声で言った。黒々とした彼の目は、僕を通りすがりの青年から氷雪の要塞を破ろうとする挑戦者へと映し変えた。

この街に立ち入れるのは基本的には25歳以下かつジムバッジを6つ持った者に限られる。ここまでのラフェルの旅で僕もその条件を満たしてはいた。勝利を重ねてリーグを目指すわけではないが、より活きのいい論文を書くには勝たないまでもいい勝負をすることが必要になってくる。

「今すぐに相手をしようと言いたいところだが君にも休憩が必要だと思う。準備ができたら声をかけてほしい」

そう言ってユキナリさんは出ていった。PGとしての顔も持つ彼は何かと忙しいらしい。そんななか時間を割いてもらっている以上ひとつの可能性を見せなければならぬ。

準備というほどのすることもないのだがヤシオさんの様子だけは確認しようと思が寝ている部屋に入った。

眠り込んでいるかと思つたが、彼はベッドから起きて乾パンを景気よく食べていた。まじまじと見るとがっしりとした体型とはいえない。彼を背負うのに悪戦苦闘した自分の馬力を疑ってしまう。

「ヤシオさん気分はどうですか」

「最っ高。それにしてもあんた誰だっけ？」

そういうえばこちらが名乗る前に彼は倒れてしまった。僕は椅子にかけて身の上について語った。

「ジム戦か。ここがルシエじゃなくてネイヴユだったのは驚いたけど観戦できるのはついてんな」

ヤシオさんは目を丸くした。たぶん僕は相当驚いた表情をしたのだろう。

「オレにはそれが一番なんだ。そんなもんよ」

「起きてて大丈夫なんですか」

「だいじだいじ。ヤシユウ男児はニヨホウおろしで鍛えられてるかんね」

ナンタイはどこにいった。

厚着したうえに毛布をすっぽりと被っているヤシオさんは平気だとは思うがこのジムは非常に寒い。そのうえジムリーダーがこおりタイプ使用とくれば寒がりはポケモンより先に参ってしまう。雪を被っていたような人間にはあまりに酷だ。

寝巻きから着替えたヤシオさんとジムに向かった。ギャラリーがいたところで何も変わらない。

「来たねトオルくん。それでは試合を始めよう。使用ポケモンは君の手持ちに合わせて1体、相手を戦闘不能にさせたほうの勝利ということにしよう」

窓から見えるジムの外の景色は散々たる状況だった。民家も商店も倒壊し巨大な何かが街を犯し、踏みにじっていったように見えた。ニュースや新聞で連日報道していたような人災ならどれほどの恐怖だったのだろう。

外に気をとられユキナリさんの言葉は半分くらいしか届かなかったがここはやることをやるだけだ。

「ユキノオー、頼む」

ユキナリさんが繰り出したのはユキノオー。くさとこおりの2タイプを併せ持つポケモンだ。冬と雪の権化という喻えも大袈裟ではないポテンシャルを秘めた強敵とどう戦うか、策は正直なところなかった。

とくせいによつてあられが降りだしたのもこちらにとっては痛い。

「ブースター」

僕の手持ちは2体だけだ。さらに純然たる僕のポケモンという但し書きをつけるならばこのブースターしかない。必然的にこのほのおポケモンが一番槍にして中堅、かつこちらの総大将に違いなかった。

「ブースター。相性をしっかりついてきたといったところか」

ユキナリさんはそれ以上の評価をしなかった。本当はもう少しユキノオーを観察してから切り出そうとしたが頭の中で何かが弾けて、それが僕を追いこしてしまった。

『『だいまんじ』だ』

タイプ一致でしかも相手の弱点を2つとも突いている。ユキノオーの実力を推し量るよりよほど建設的な一歩だと思った。

幼少の頃から慎重だの思慮深いだの言われるがそんなことを耳にするたびに笑ってしまう。僕はこういう男だ。ひよつとするとユキナリさんもその点は読み違えたのだろうか。

『『ふぶき』』

ユキノオーがその巨体から吹雪を発射しているというより発生している吹雪の核にユキノオーが存在するというのが近い。それらがどうこの戦いを左右するかまでは分からないが、先手をとったこちらの攻撃をさらなるパワーで打ち消した。

炎と吹雪がぶつかってフィールドに靄がかかった。あられとともに目眩ましにするには心許ないがもう一度こちらのフルパワーをぶつけてみたかった。

「もう一回『だいまんじ』」

ギアをいれる意味もある。ほのおタイプの技を連発することでブースターに文字通りのウォーミングアップを済ませたかった。

「いい技だ。威力も充分だし何よりトレーナーへの信頼を感じる」

ユキナリさんが右手を挙げた。発声せずともユキノオーは彼の意味を汲み再びブースターの炎をかき消した。

ヤカンにかけた火を消すような、子どもがバースデーケーキのロウソクを消すような、そんな決まりきった動作に重なって僕は自分でもわからない頭のどちらか片方が重くなった。

「しかし肝心の君に迷いがある。決断しているようでそれを裏打ちするものがない」

大きな声ではないが音叉の響きのように体全体が震えた。僕はどんな顔をしているだろう。ブースターは、ユキノオーは、ユキナリさんはどのように僕を見ているだろう。そんな感情が止めどなく巡った。

「こちらからもいこうか。『こおりのつぶて』」

ポケモンの技には確実に先手をとれるようないわゆる『出の早い』ものがある。でんこうせっかやマッハパンチなどそれなりに種類があるがこのこおりのつぶてはあられのせいで見えにくい。非常に厄介だ。

避けるよう指示を出したが間に合わなかった。速さという尺度で表すことが適切なのかさえ怪しい。相性があるためダメージはいくらか抑えられているにしても危険だ。

「ブースター、『でんこうせっか』」

スピードに乗ってしまえばブースターも一端のスプリンターになる。流れが相手にあるのでこちらも攻め方を変えたかった。

『ウツドハンマー』

ユキノオーはこちらの技をあえて受け、無防備なところに棍棒のような腕のフルスイングを食らわせた。

その凶体ならば回避行動をとるよりもカウンターに備えたほうが合理的ではある。消耗すらしスクと考えない敵に追い詰められているのはむしろこちらだ。

「すぐにユキノオーから距離を」

「逃がすな、『じしん』」

こおりタイプの弱点はいくつかあるがそのいくつかはじめん技で対策ができてしまう。当然ユキノオーが覚えていてもおかしくはない。

揺れる地面から逃げるには大きく跳躍するしかない。

『『ふぶき』』

迂闊だった。ジャンプしたブースターを強烈な吹雪が襲った。人間ならば病院送りになっていたであろう大技、ブースターは耐えたがその代償は大きかった。ここまで相手に読まれていた。

「大丈夫か？」

ここに來る途中飽きるほど目にした氷の塊。ブースターはその中に囚われてしまった。声をかけるが応答はない。

「戦闘不能と受け取つてもいいかな。このユキノオーは数多くの挑戦者を退けてきた。たとえばタイプ相性が悪くともそう易々と不覚はとらない。……降参、するかい？」

これはきつと彼からすると何度も見た光景なのだ。技の餌食となつて凍つてしまつたポケモンとすがりつくトレーナーは切り取つた日常に過ぎない。ギブアップの呼び掛けはせめてもの氣遣いなのだろう。

答えられなかった。ユキナリさんの言葉を借りるなら僕の迷いがそうさせた。この勝負を負けという形で終えても論文の作成上は問題がない。敗者ならではの視点というのを盛り込むのも悪くはないように思えた。負けたままが嫌なら何度だつて挑戦しにくればいい。

「それでいいのか、それでいいのか僕は？」

世界旅行を気楽に楽しむ苦学生としての役を演じることに後ろめたさを感じていたのではないか。様々な地方のジムの特色を探ることで叢書に名を連ねるだけでなく何かを変えたかつたのではないか。そのためにあえて不安定な状況にあるネイヴュを訪れたのではないか。

僕もブースターもまだやれる。いや、それは客観だ。僕もブースターもまだやりた

い。

「いや、最後までやらせてください」

ユキナリさんは小さく頷いた。10分の1秒ほど微笑んだ気がした。

「よく言った。トオル、こっから逆転いけっぺ。ブースターはまだ燃えてんぞ」

半壊している観客席からヤシオさんが叫んだ。無視するのも忍びない、小さく手を振って応えた。

もちろんまだやるといってもブースターは凍ってしまったって動けない。必然的にユキノオーに先手を譲ることになる。

「ユキノオーとどめだ。『ウツドハンマー』」

凍ってしまったことでブースターは自由を犠牲に鎧を得た。強力なこおりタイプの力によって構成された氷はブースターの体を外部の衝撃から守ってくれる頼もしい存在ともいえる。つまりユキノオーはブースターを直接殴ることではかダメージを与えられない。吹雪も氷の弾丸も揺れる地面すら氷に阻まれる。

ヤシオさんが身ぶり手振りで何か伝えようとしているのが気配で分かる。声に出さないのは勝負の公平性を守るためと解釈した。今回は間違えない。

フレアドライブ。

ブースターの高い攻撃力とほのおタイプの力を最大限に活かせる大技だが反動のり

スクがある。そしてクリアしなければならぬ壁もある。

ギリギリまでユキノオーを引き付けること。ユキナリさんに作戦を気取られないこと。一瞬で氷を溶かしてそこからさらに熱く熱く燃えること。

ユキノオーが左腕を振りかぶる。その一撃は氷を突き抜けてブースターまで到達する。そんなビジョンが脳裏をよぎった。

「いまだ、『フレアドライブ』！」

飯が絡めば馬鹿力を発揮するブースター。能あるムクホークこそ爪を隠している。

そこからは全てがコマ送りに見えた。ブースターは一瞬で氷を蒸発させ、炎を纏ってユキノオーに突撃した。ユキノオーもフルパワーでそれを迎え撃った。離れて立っている僕たちにも伝わるほどの衝撃がこの勝負に幕を引いた。

タイプ相性ではこちらに分がある。しかしユキノオーの実力とあられも含めたブースターの消耗まで天秤にかけると最悪の想像もできた。

天氣が晴れた。そこにはユキノオーとブースターが共に倒れていた。相討ちだ。

「なるほど。迷いがあったのは君ではなくて僕のほうだったか。学ばせてもらったよ」
にこやかに握手を求めてきたユキナリさんの言葉を上の空で聞いていた。

「プリズンバツジだ。ネイヴュは氷と牢獄の街だけど、君の力は氷を溶かし牢獄すら打ち破った。お見事だったよ」

引き分けてそこまで褒められてもどうしたらよいか困る。いくらジムリーダーは自らの判断でバッジを授与してもいいとはいえ逆に気まづくなった。

「よく見てごらん。ブースターはユキノオーの背中の上に倒れている。最後まで立っていたのは彼だ」

ありがたいごさいます、バッジに恥じないよう精進します、台詞なんてなんでもよかったです。

駆け寄ってくるヤシオさんに今度は大きく手を振りながら僕は意識を手放した。

その後僕は丸一日寝ていたらしい。目覚めた時にはヤシオさんはルシエに向かつて旅立っていたらしくそこにいたのはユキナリさんだけだった。

精神力が切れたのか寒さで風邪をひいたのかは分からない。それはどうでもいいことだ。

「また病人かと思ったが、むしろジム戦前よりいい顔をしているよ。若い世代にはそうあつてほしいものだ」

月並みな表現ではあるが心が晴れた。それが表層にも出ているのだろう。

「このままルシエジムにも行くのかい」

それについては考えていた。

「もしよかつたらなんですけど」

この街にもう少しいさせてほしい。今のこの街だからこそ学ぶことがある。迷惑はできるだけかけたくない。僕はユキナリさんにそう頼み込んだ。断られたらどうしようというのは杞憂に終わったことも添えておく。

「それにしても熱い戦いだった。ヤシオくん以降の連勝も君で途切れてしまったよ」
穏やかに語ってくれた。

「ヤシオさんもこのジムに？」

「まさかまたネイヴユに来ていてさらにジムの近所に埋もれていたなんてびっくりしたよ。とつくにルシエに着いてると思ってたからね」

その言葉が意味すること。ヤシオさんもこのジムに挑戦し、そしてユキナリさんを破っている。あれだけクセが強い男ならそう簡単には忘れないだろう。

「ヤシオさんって強かつたんですか？」

失礼な質問だとは思う。しかし学生の陰に隠れていたトレーナーの血が呼び覚まされてしまったようで聞かずにはいられなかった。

雪原に埋まっていた時から彼の目は輝いていた。自分の立つ位置に微塵の惑いもない、そんな目だ。今は僕もそうなのだろうかと気になった。

「面白い質問だね。もちろん僕を破ったトレーナーを弱いと評することはない。しかし

彼の場合は強いというか、こう——」

トレーナーではなく水や空気を相手に戦う感覚だったという。あまりに哲学めいてその言葉の意味を噛み砕くことはできなかった。

「じゃあヤシオさんなら最後のジムリーダーにも勝てますか？」

「またまた面白い質問だ。ルシエジムリーダーのコスモスについて知っているかな？」

「ドラゴン使いの女の子ですか」

間違つてはいないと思つたが今度は褒めてはくれなかった。

「あの子は天才だ。僕ら7人のジムリーダーに勝利したチャレンジャーでもそのほとんどが彼女の手持ちを1体も倒せずにやられてしまう」

ドラゴンタイプのポケモンたちがいかに強いかは妹からしよっちゆう聞かされていた。彼らはおそらく僕には縁がないがどこか身近に感じる存在でもあった。

7つのジムバッジを揃えたトレーナーを待ち受けるラフェルリーグ最後の門番。コスモスというのは人智を超えた化け物か何かなのだろうか。

「でもヤシオくんなら。もしかしたら違う結末を見せてくれるかもしれない。不落の飛竜が待ち望む天を墜とす英雄になつてくれるかもしれない」

昨日日本行きコスモスの船には乗せてあげたけど今ごろまた迷子になつているかもしれないけどね、とユキナリさんは笑つた。僕も笑つた。

こんなに笑ったのは久しぶりだ。窓の外を見ると厚い雲の隙間から僅かに光が差し込んでいる。

今日はいい天気になりそうだ。

とあるフレンドリイシヨップ。

「いんやそれにしてもトオルは凄かった。オレも負けてらんね、早くルシエに行かんなあ」

「あの。すみません。ちよつとよろしいでしょうか」

「なんですかい。あつ、そつちの棚のあなぬけのヒモを取ってもらえますか？」

「はいどうぞ——ラフェル放送局の者です。実力あるトレーナーさんを是非密着取材させていただきたいと思ひまして」

「それってテレビです？」

「テレビです！ 全国ネットで流れますよ」

「やったぜ！ どうぞこんなオレですけど密着してください！ 嬉しいなあ。ところで

「あなたはどちらさんで」

「これは失礼しました。私はクロックと申します。よろしくお願ひしますね、
ヤシ赤い帽子のトレーナーオ

魔の峡谷を往け

「……おかしい」

ホヅミは端末に映し出された無数の数字群を見て、首を傾げた。

周囲の動向にかすかな不審を感じ取った彼女がまず初めたのは、金の流れを洗い出すことだった。

それが諜報活動であれ町内の運動会であれ、どれほど秘匿した活動であつてもそこにはかなわず公表された金の動きが存在する。いかなる秘密計画も、人件費や光熱費なしに動いたりしないのである。

諜報のほとんどは、そうした公開情報の流れから情報を判断することにその要諦が存在し、若くして政府のバラル団特別対策チームに名を連ねる才媛である彼女にとって、そうした知識は行き付けの喫茶店でロブレイティーをオーダーするほどに日常的なものであつた。

しかし判明した事実にはホヅミら対策チームが共有する知識を裏付けるにとどまつた。
・政府からの予算が一部このチームに充てられている。その決算に不自然な書き換えは見受けられない。

・対策チームの長である元国際警察のカネミツはかねてよりバラル団による組織犯罪について一定の知見を有していた。

『雪解けの日』以前のバラル団の情報は政府が管理し、マスコミを通して一般に周知する部分は制限されていた。

これらの情報にはいささかの問題もない。

だがわずかな違和感がトゲのようにホヅミの心に突き刺さっていた。

国際警察を退職したカネミツはその後複数の警察組織を渡り歩き、その全てで成果をあげた。そしてそれらの組織から現政権に金が流れている。名目はあれどそのなかには公にできない性質のものも含まれている。が、それはそういうものだ、というのがホヅミの考えだ。その金はやがて少なからず民衆に還元される。度を過ぎれば野党側の格好のネタになるだけのことだ。

それは、いい。

バラル団の脅威がより明らかになった今、対策を打ち出している現政権やPGに対して世間は好意的だ。バラル団の情報も小出しに公開され、イズロード脱獄の失態についてつく者はあまりいない。不安を抱え、混乱しつつもすすがるべき存在があるというのは大きいのだ。

「行政府の長は連日連夜会見を開き繰り返しインタビューに応じている。支持率は上昇の一途を辿り、未曾有の事態にありながらもラフエル地方はひとつになつたといえる。」

（それは違うわね）

違和感の正体がおぼろげに見えてきた。

うまくいきすぎている。政府与党とP Gは民衆からの支持を集めている。

しかしこれまでの分析にカネミツの利益が全く含まれていないのだ。

確かに彼の手腕は高く評価されている。ホツミら部下からしても彼はいいボス以外の何者でもない。この先バラル団騒動が決着した後も彼を欲しがらる組織・団体はいくらでもあるだろう。

だが、それはこの際問題ではない。彼が前々からバラル団に対して様々な布石を打っていた理由にはなるまい。人間の善意に期待しすぎているというのは考えすぎか。

「ちよつと動いてみる必要がある、か」

その細い指がキーボードを巡る。

ルシエシティに向かう手段として最も一般的なのはラジエスシティからの連絡船を利用することである。ポケモンに乗って飛んでいくより安全なうえに、船旅はよい気晴らしにもなる。険しいシエトの峡谷をわざわざ進む理由を探すのは難しい。

しかし強い意志をもってその選択肢を蹴る者たちもいる。主にルシエのジムに挑戦しようという腕利きのトレーナーたちで、厳しい環境と屈強な野生ポケモンも彼らにとつてはよいトレーニング相手となりうる。

そんななか別の事情で峡谷をゆく少女がひとり。

「うわあーっ！ ひみつのコハクだ！ 怖い、今日ツキすぎて逆逆に怖いんだけどー」
ご存知砂漠マニアのアルナは考古マニアでもあり、それはつまり化石マニアでもあるということ。そもそも砂と考古という両分野は非常に相性がよいため彼女のような両刀マニアは少なくない。

この峡谷でトレーニングをしようとするトレーナーはいても宝探しに興じるトレーナーはそうはいない。発掘作業はとても捗った。

唯一障害となる野生ポケモンについても問題ない。

「バルジーナ、ふきとばしー」

ふきとばしで相手を遠ざけたり穴を掘って地中に逃げたりすることで、互いに傷つくことなく穏便に戦いを終わらせることができる。それが可能なのも彼女のポケモンが

フィールド慣れしているからだ。

「よし今度はむこうに行つてみよ！」

そして少女は荒野を駆ける。

切り立った崖も唸りをあげる激流も彼女を阻むことはない。

そうでなければ。その選択を避けていれば。時計の針を暫し進める。

「また会えて嬉しいよ」

何か言い返す余裕などない。そしてこちらには毛ほどの嬉しさもない。

砂漠で遭遇したバルル団員がにっこりとこちらを見つめている。

なぜアルナは逃げないか？ それは簡単だ。

「おいこらっ！ 離せッ！」

ボールを取り出すより先に彼のゴルグが彼女の体を鷲掴みにしてしまった。これでは何もできない。

ジタバタと暴れてみるも復讐に燃えるゴルグの豪腕から逃れることはできない。

「せつかくこゝで会つたんだ。いいところに連れて行ってあげよう」

ゴルグはアルナと男を掴んでそのまま上昇し、これまでいたのと逆方向へ飛んだ。

「ゴルグ、ここでも降下」

飛行した時間はものの数分。

上昇が速ければ下降も速い。アジトに連れていかれることも覚悟したアルナは気丈に振る舞った。

着陸とともに緩くなった手の拘束から逃れ、恋しい地面に足をつけた。そして気づいてしまう。

「これは!?!」

正面の崖は大きく崩れ、足元には稲妻のようなひび割れが。覗きこむとかなり深くまで地面が裂けている。

「どえらい地震、じゃないね。さっきまでいたあたりには何もなかったし」

これだけ地面がズタズタでなければ穴を掘ってこの場からの脱出が叶っていた。

「その通り。これは地震じゃない。崖も地割れもポケモンの技によるもの。正確にはそのぶつかり合いというべきかな」

「そんな、誰がこんな」

戦いの跡というより巨大な何かのピンポイントで暴れた爪痕に思える。

「……本当はボクが戦いたかったさ。でもまあ、エンジンがかかったクロックくんには何も言えないから。いざってときに幹部さまさまには逆らえないのがヒラの悲しいと

「ころだよねえ」

峡谷に現れたゴルグを連れたバルル団。そしてあの時砂漠にいたもう一人のトレーナー。それが意味することは簡単だった。

「たしかヤシオくん、だったかな？ 本気モードのクロックくん相手にあそこまでやるとは思わなかったよ。願わくばもつと見ていたい勝負だった」

声。言葉。それは紛うことなき想いの発露。この男は決して嘘を口にしない。信頼といえばおかしな話だが疑うことへの諦めが勝った。

「それでヤシオはどうなったの!？」

「戦いで崩れた崖と一緒に落ちていったよ。クロックくんはそれでも戦いを続けようとしたんだけど時間切れで他の幹部に連れ帰られちゃったってわけ」

激流を指差した。見れば最近土砂が流れ込んだ形跡がある。人が巻き込まれたとすれば大変な事態だ。

「そんなこと!」

ハツタリに決まっている。方向音痴が過ぎる彼でもそんなことになるはずがない。そう信じたかったが到底無理な話だった。

「正直ヤシオくんについてはボクも気になつてね、こうして彼を探してたんだ。まあ結局見つけられなかったから徒労つてやつだけ、まさか君まで来てくれるとは思わな

かったよ」

悪びれる様子もない。

「君を倒せなかった、いや勝ちきれなかったと言うべきか。失敗というのは自分でカバーしなくてはね」

殊勝な心がけだがそれどころではない。

ボールから繰り出したのはシャンドラ。高い特殊攻撃力を持つポケモンだ。ゴルグを先発させなかったのは手の内がバレているからだろう。

ゴルグの手から見下ろした限り近くに人の姿はなかった。つまり助けはあてにできない。

「言い忘れてたね。ボクはミカゲ。バラル団のミカゲ。……もう一度勝負、してくれよね?」

とても逃げられる状況ではない。アルナは腹を括った。

「イシズマイ、おねがい!」

手の内がバレている砂漠で戦った時の手持ちを先発させるのは危険と感じた。ここは相性のいい技でセオリー通りに攻めるしかない。

『すなあらし』!」

敵の視界を制限しつつ少しでもダメージを蓄積させる。アルナの戦法の生命線とも

いえる天候変化だ。

『シャドーボール』

『まもる』！

うまく防いだがニードルガード同様連続で使うことはほぼ不可能な技。こちらからも仕掛けなければならぬ。

ゴルグ同様シャンデラの技もまともにもらえば一撃で倒される危険がある。

『ストーンエッジ』！

鋭く尖った岩がシャンデラを襲った。急所に当たりやすいという意味でいわタイプ最高の威力を期待できる大技だ。

ダメージが大きいのかふらふらと漂うシャンデラ。未進化ながらイシズマイのパワーは相当なレベルだ。

「……もつと消極的な戦い方をする子だと思ってたよ」

回避を指示する時間がなかったわけではない。ミカゲはあえてシャンデラに苦手な技を受けさせた。

舐められている。腹立たしいことではあるにしてもアルナはむしろそれをプラスに捉えた。

「何とでも言っつて！ もつかい『ストーンエッジ』！」

「でも甘い。いわタイプなら有利をとれるとも思ってたかな？」

再びストーンエッジが炸裂した。しかし今度はシヤンデラは微動だにしない。

そんなはず、ない。視線に意識を集中させる。やせ我慢をしている様子はなくそのあたりの指示を受けた気配もない。

「どうして!?! 2回も当たればかなり……」

ここでアルナは押しているはずのイシズマイが右のハサミを庇っていることに気がついた。その分枝に力がのりきらなかつたようだ。

「あつー!」

シヤンデラがストーンエッジに紛れて『おにび』を放っていた。全く気がつけなかつたことを呪うもこればかりはどうしようもない。

「火傷してるんじゃないよね。『パワーじゃ勝てないなら頭を使わないとね』だっけ。あれからいい教訓になったよ」

そのままシヤンデラが放ったシャドーボールがイシズマイを呆気なく吹き飛ばした。

「くっ……」

先に倒されたが敵にダメージを与え、じゆうぶんに仕事をしてくれた。アルナは労いとともにもボールに戻した。

「イシズマイありがと。ゆっくり休んで」

2体目にバルジーナを繰り出した。あくタイプを持つこのポケモンも相性のうえで有利だ。とくせいのぼうじんも助けになる。

「この子なら砂嵐のなかでも戦える。『あくのはどう』!」

またも相性のよい技。先ほどのストーンエッジの蓄積もあつてシャンデラはふらふらと墜落した。

『おにび』

「真上に飛んで!」

予測さえできれば回避行動をとることは難しくない。バルジーナはそのまま高く飛び上がった。

「砂嵐を起こす要因は4つ。地表面の乾燥、土壤の柔らかさ、砂塵層の厚さ、そして強風!」

この峡谷もアルナの言葉を借りるなら『良質な砂嵐の産地』となる。土地がズタズタに荒らされていたことで砂嵐がより強力になっているのだ。

「シャンデラ、撃ち落とすんだ!」

勢いそのまま放つシャドーボールもおにびも砂嵐が壁となりバルジーナに届かない。

「一気に攻めるよ! 『ブレイブバード』!」

低空飛行で一気にシャンデラとの距離を詰めるバルジーナ。かわす隙を与えず大技

が決まった。

ゴルーグと戦った時には手持ち3体でやっとノックアウトした。このシャンデラがミカゲの手持ちでどれくらい的位置にいるのかは分からないがこれで互角の勝負に持ち込めたとアルナは考えた。

「……格が違うんだろうね」

一瞬の沈黙。

なんと崩れ落ちたのはバルジーナだった。

「バルジーナ!? どうして!」

たしかにブレイブバードは反動のある技だ。それでもそのダメージだけで使用した側も倒れてしまうということはあり得ない。

「!」

ひんし寸前のシャンデラが息を吹き返している。

「シャンデラって案外器用なポケモンだって知っていたかな。オーバーヒートみたいないわゆる高火力技のイメージが強いけど、実は曲者なんだよね」

『いたみわけ』。相手と自分の体力を足して分け合う技だ。イシズマイから受けるダメージを火傷で調整しつつそのまま2体目をも突破しようという凶悪な作戦だった。

アルナは次のボールを握りしめたがそれを投げて手持ちを呼び出すことができない

かった。

「さあ、勝負はまだ終わらないよね？」

「あ、ああっ、ああ——」

指が震えてボールを投げられない。戦いへの恐怖がアルナを支配した。

イシズマイの頑張りとバルジーナの奇襲がともに無駄となったばかりか現状ミカゲの戦法を破る手だてがなかった。

このボールの中のスコルピを含めてアルナにはまだ4体の手持ちがいる。戦闘の続行が不可能になってしまったわけではない。4体とも『おや』のために全力で戦ってくれるだろう。

だが震えが止まらない。誰を出してもきつとやられる。自分のために健気に頑張ってくれたとしてもだ。

さつきまでの闘志はすっかり萎み活発な少女としての姿は鳴りを潜めた。

砂嵐が晴れた。

しばらくそのまま待っていたミカゲだが、やがて無駄を悟った。

「トレーナーにやる気がないなら仕方ないね。ボクらは乱暴を好まない。でもちよつと眠っててもらおうかな」

ゴルーグとシャンデラがじりじりと迫ってくる。逃げようとするも、咄嗟に足がもつ

れてしまった。

適性の有無があるにせよトレーナーにはそれぞれのカラーがある。ポケモンのタイプ相性のようにそれらは複雑に絡み合い、勝負だけでなく日常にも関わってくる。

ミカゲのそれは慈悲とともに歪んでいると言えるだろう。バルル団の一員として悪事を働くというのはその表層に過ぎず、嗚呼、そう――

狂っている。激しさと穏やかさがこの男の中でうねりをあげている。砂漠で出会った時にそこへかすかなひび割れをいれてしまったのが失敗だったのだ。

アルナは目をぎゅつと閉じ、迫る災厄を自らの世界から遮断した。

ミカゲから下卑たものこそ感じないがこの現実を直視するのはあまりにも酷だったのだ。

「そのくらいにしておいたほうがいい」

閉じた世界に誰かの声が凜と響いた。

思えばあの時もそうだった。

健闘の末ゴルーグを倒したものの依然アルナが不利な状況に待ったをかけた男がいた。彼は本気を出してアルナを潰そうとしたミカゲを止め、口八丁ではあるが追い返したのだ。

「まだやるといふのなら俺が相手になろう」

着地をしくじらず、誰かが目の前に文字通り降ってきた。シチュエーションの違いこそあれ、

「ヤシオ!？」

目を開けた。しかし現れた男は赤い帽子をかぶっていないかった。後ろから見た背格好も異なる。妙な訛りもない。

救世主だ。誰かは知らないがこの危機的状況を打破してくれる、そんな存在が天から降り立ったのだ。

「ジムリーダー、シンジョウ。お前がトレーナーの道を外れるというのなら容赦はしない」

峡谷が絢爛華麗な舞台に変貌したかのようだ。彼の一挙一動が殺風景な景色を鮮やかに彩ってゆく。

シンジョウと名乗った男はバクフーンを繰り出した。その背中で燃え盛る炎は火山ポケモンの名にふさわしく凄まじい威圧感とともに純粋な強さが伝わってくる。

「この子の知り合いかな」

「違う」

「ボクらを挫こうとか」

「違う」

シンジヨウの返答、いずれも短く、そして鋭い。

「……成る程」

ゆっくりとミカゲは頷く。そしてシャンデラをボールに戻しグルーグに掴まった。

「残念だけどその子と勝負できないんじゃないやボクはもうここにいる意味がない。帰らせてもらおうよ」

視線をこちらに向けることなく、ミカゲは吐き捨てるように苛立ちをぶつけた。その言葉は独り言のようにも響いた。

シンジヨウはあえて追おうとはしない。

砂埃を巻き上げ、あの時同様グルーグとミカゲは空の彼方へと消えていった。

「バクフーン、戻ってくれ」

口が渴いて言葉が出なかったがバクフーンを引っ込めるシンジヨウを見て我に返った。

「あ、ありがと。あたしはアルナ。本当に助かったよ」

どこかの誰かと違い助けてほしいタイミングで間髪入れず手を差し伸べてくれる存在がどれほどありがたいことか。

ジムリーダーと名乗ったのが気になったがそのあたりを詳しく聞くより今は無事を喜びたかった。ごく自然に振る舞った結果として笑みが浮かんだ。

「別にいい。それよりあいつは？」

ミカゲの選択次第では激しい戦いになっていたかもしれない。それでもシンジヨウは冷静だった。

「バラル団。前に砂漠で揉めたことがあって」

それは災難だったなどとシンジヨウはへたりこんだアルナを助け起こした。

「さつきヤシオとか言っていたな。ツレか何かか？」

「いや、前にたまたま一緒になった変な人。私より先にここに来ていたみたいなんだけど——」

アルナはミカゲから聞いたヤシオとクロツクの話の話をシンジヨウに聞かせた。

詳細は不明だが今自分たちがいるこの場でヤシオとクロツクが激突し、ヤシオは倒れてそのまま行方不明となった。

正直なところアルナはヤシオにそこまで強い思い入れがあるわけではなかったが、知り合いがバラル団に襲われ行方不明ともなれば心配にもなる。

「つまりそのヤシオという青年は行方不明というわけか。とりあえずPGに連絡して捜索を頼もう。……その前に」

シンジヨウはマフオクシーを繰り出し、何かを指示した。こちらもよく鍛えられているのを見てとれる。

マフオクシーは懐から杖のような枝を出し、その先に火をつけた。

「何してるの?」

「マフオクシーには未来を見通す力がある。その応用で彼の安否だけでも探れないかと思つてな」

手に持った枝に灯った炎をしばらく見つめたのち、マフオクシーは一声鳴いた。

シンジヨウは眉を僅かにひそめた。

「大丈夫、彼の未来が見えたようだ。少なくとも彼は無事だ。怪我もないらしい」

そんなことまで分かつてしまうとは頼もしくも恐ろしい。

「じゃあもしかしてこの近くにいるの!」

アルナはマフオクシーに問いかけた。肯定してほしいところだったが首を傾げてしまった。

「えっと」

「こいつによると彼は近くにはいない。しかし遠くにもいないということらしいな。つまり——いや、なんでもない」

思うところがあつたのだろうか。

意味不明だがシンジヨウとマフオクシーが嘘をつく理由もない。いわゆる電波が繋がりにくい場所のようなものがあるのだろうか。

「じゃあどうしたら見つかるのかな」

穴掘りならすぐにでもできる。しかし場所が場所なだけに現実的ではなかった。

「命に別状はないならこういうのはどうだろう。PGの搜索を待つ間ヤシオが現れそうな場所を張る。彼が行きそうな場所に心当たりはないか？」

悩むまでもなかった。

悪い意味で天性の方向感覚を持つヤシオだが、答えはそう難しくなかった。あの時砂を踏みしめながら語り合った展望。

「ルシエジム。そうだ、最後のバッジをかけてジムリーダーに挑むって言ってたー」

峡谷にいたのもルシエに向かっていたからとするのが自然だ。砂漠で会った時期からして本来ならばとつくに着いているはずなのだが、大方寄り道に次ぐ寄り道で旅が長引いたのだろう。そう考えた。

「なるほど。コスモスのところか。ならルシエで待っていればいい。その前にルシエ署に寄ってからだが」

「ルシエのジムリーダーと知り合いなの？」

「まあな、横の繋がりがりってやつだ」

シンジヨウはマフオクシーを戻して今度はリザードンを呼び出した。

「先に乗っていてくれ。俺はPGに電話しておく。バラル団の騒動にかかりきりかもし

れないが何もしないよりましだろう」

「よ、よろしく」

リザードンはアルナを見つめ、そして姿勢を低くした。万が一にでも暴れられたらと尻込みしたが杞憂に終わったようだ。

電話などそこですればいいのにシンジヨウは不自然に距離をとった。だがこの1時間ほどでいろいろありすぎたアルナにとっては大した問題ではなかった。

物陰に入っしてしばらく話し込み戻ってきた。

「じゃあ行くか。リザードン、あまり飛ばさなくていいからな」

2人に乗せたりザードンはルシエシテイを目指して飛び立った。

天使の休息



ぴちよん。

額に垂れた水滴でヤシオは目を覚ました。

目を凝らしても暗くて何も見えないのだが、それなりに広さのある洞窟のような場所にいることだけは分かった。

手探りでリュックと帽子が近くに落ちていることを確認した。ラフェルの治安も捨てたものではないらしい。

ゆつくりと深呼吸しとりあえず記憶の整理を図る。

「えーつと。たしか峡谷でクロックとかいうヤツと戦って、そんで足元が落っこつて……」

ルシエシテイも目前、シエトの峡谷を抜けようかというところで突然クロックが本性を露にして襲いかかってきた。

これまでに見たことのない異様な敵に驚きながらも応戦したが、戦いの余波で崩落し

た崖とともに激流に沈んだ。落ちていく最中クロックのポケモンが虹色に目映く輝いていたことも不可解な記憶として残っている。暗転する視界と拡散する意識についてはあまり思い出したくはなかった。

何はともあれ、だ。

「こりややつちまつたね。オレもとんだでれすけど」

ヤシオは大きくため息をついた。

ポケモン勝負におけるトレーナーの主たる役割は戦闘の指示を出すことと認識されている。

もちろんそれは間違いではない。間違いではないのだが正確にはポケモンとともに戦うことであると表現すべきだ。

これは『心をひとつにして戦おう』という生易しい精神論ではなく、かといって相手のポケモンと生身で取っ組み合えという極端なものでもない。

指示を出す位置や声、さらには相手トレーナーやポケモン、フィールドに常に気を配らなくてはならない。どのあたりにボールを投げて手持ちを繰り出すかという要素もある。簡単なもののみを挙げてもこれだけ気を配らなくてはならない。携帯ゲーム機を握ってコマンド入力をすれば済むターン制勝負ではないということだ。

そしてトレーナーが戦闘続行不可能な状況に陥ればポケモンのコンディションに関

わらず問答無用で負けとなる。それも実力のうちだ。

なにも珍しいことではない。今回のヤシオは特殊なケースであるが戦闘の緊張で極限まで昂ったトレーナーが試合中に卒倒する事例は頻繁に報告されている。

ヤシオはトレーナーとして雑じり気のない真剣勝負の結果クロックに敗北した。それも惨敗と言わざるをえない。揺るぎない事実だ。再びため息が漏れた。

「あっお兄さん。目が覚めた？」

暗闇から女の子の声が出た。叫びそうになったヤシオは慌てて口をふさいだ。

早鐘を打つ心臓を落ち着かせようとしたがすぐには無理だった。

「ごめんね。驚かせちゃったかな」

「だだだだだいいいい。らいさまのほうがよっぽどこええんよ」

声だけでなく心臓も口から飛び出していたかもしれない。ポケモンという怯み状態を思わぬ形で経験してしまった。

ゆらりと明かりが灯りやつとあたりが見渡せるようになった。睨んだとおりのそこは洞窟で、発光したヤマミを抱き抱えた女の子がこちらを見上げていた。

知らない場所にいるだけに他に人がいるのは心強い。

「お嬢ちゃん、ここどこか分かるかい？　ってかどちらさん？」

あつオレはヤシオな。そうつけ加えた。

「そうね……じゃあヤシオさんはここどこだと思おう？」

「わがんね。洞窟っぽくはあるけどもなあ」

洞窟特有の湿っぽさはあるもののどこか温かさや懐かしさすら感じる。ヤシオはそれが何か考えようとしたがまとまらなかった。

額にしわを寄せる彼に女の子はにっこりと微笑んだ。

「洞窟、洞窟か。いいね。私も洞窟大好き」

ね？ と女の子は後ろに呼び掛けた。ヤシオはその時初めて彼女のうしろにイシツブテたちが集まっていることに気がついた。

「うーん？」

どうにも要領を得ない。女の子は見たところヤシオより10歳ほど若い。さらに服装からして裕福な家庭のお嬢様であることが見てとれた。なぜこんなところにいるのだろうか。

「もうひとつの質問に答えてなかったわね。私はルルシイ。よろしく」

恭しく頭を下げるその様子からも育ちのよさが溢れ出る。より一層この場所に似つかわしくないように感じられた。

違和感が拭えなかった。

「ルルシイちゃんだったか。もしかしてオレ、死んじまった？」

ヤシオがもう少し理知的な青年であれば集合的無意識の発露とでも評したか。

とにかくあの時の状況を考えれば当然だ。ここは天国もしくは地獄の入り口でこの少女はその案内人なのではないか、と。都会生まれで別段信心深くないことなど今は関係なかった。

よくよく考えれば不自然だ。

大怪我を負ったはずなのに体はどこも痛くはない。ボールを確認したところ手持ちはみな元氣だし服に傷や汚れもない。疲労すら感じなかった。

「——なーんちゃって！」

これは夢、激しい勝負で精神が擦りきれた末の束の間の夢だ。ヤシオはファンタジーに傾倒しつつある己に呆れてしまった。愛読する週刊少年スキャンプーに影響されたのかも知れない。

「いい線いつてるかも」

場を明るくしようと冗談めかして言ったのだが思わぬ返事にヤシオは固まってしまった。

「ここは階段の踊り場みたいな場所なの。1階でも2階でもないそんな場所ね。ヤシオさんはそこに引つ掛かっているのね」

にわかには信じがたいが実際にそうなっている以上どうしようもない。ヤシオは螺

旋階段ではなかったことを喜ぶことにした。

「つまり……死んだってわけではないんか」

「中間ってどこかしら」

ルルシイはさらりととんでもないことを言ったのだがそれを気にする余裕はなかった。

「なんでもいいべ。キャモメーズのVを見届けるまで死なねって決めてんの、オレは」
変な方向へのポジティブさを見せつけたヤシオに微笑みかけ、ルルシイはどこからかズタズタに裂けたあなぬけのヒモを出して見せた。

「これ。とっさに使おうとしたあなぬけのヒモで私のところに繋がったみたい」

クロックと出会った時に買った遭難対策のあなぬけのヒモが文字通りの命綱となった。無駄と分かっていても反射的に使おうとしたらしい。いい買い物だった。

「つまりオレは運がえがった？」

「かなりね」

ヤシオはほっと胸を撫で下ろした。

「そっけ。まあアレだ。重ね重ね申し訳ないけどとりあえずここの出口を教えてくださいかい？」

「そうしてあげたいんだけどね。出口はヤシオさんが自分で見つけるしかないの」

ヤシオの表情がまるでニヤースの目のようにくるくと変わる。

「あれま。迷子全振りのオレには酷だべ。まあ頑張つてみつか。いろいろあんがとます。そんじやあな」

「待つて待つて！」

帽子とリュックを拾い上げて歩を進めようとするヤシオをルルシイが追いかけた。

「出口は分からないけど道に迷わないお手伝いくらいはしてあげられる。たぶんヤシオさんには外でまだやることがあるんでしよう？ 力を貸すわ」

洞窟や森などといった天然のダンジョンはヤシオにとって何よりも恐ろしい天敵だった。地図がない、そもそも地理的に定義付けられないこの空間ともなればもはや言うまでもない。

「それは助かつちやうなあ。やつぱきゃモメーズ好きにわりいヤツはいねつてことだんべな」

「勝手にそつち側に引きずり込むのは勘弁してほしいのだけど……」

残念ながら『なかまづくり』はアイアントに任せておくべきだったようだ。

何事もなかったかのように即席コンピはヤミラミの明かりを頼りに洞窟の奥へ踏み出した。

数時間歩いた。洞窟は予想よりずっと広く、進んでも進んでも代わり映えのしない景色とともに掴み所のなさを感じさせた。

体力的には問題なくてもここまで歳の離れた相手とどんな会話をしたのかヤシオは困り果てていた。

「ん？」

懐のモンスターボールがカタカタと揺れた。見かねた彼の手持ちからの気を利かせろというサインだ。

さすがに何とかしなければならぬ。寂しい脳の容量から話題を紡ぎ出した。

「それにしてもルルシイちゃん。妙に慣れてるみたいだけでも、ずっとここにいるんか？」

「そうよ」

辛さを隠して振る舞っているようには感じなかった。

彼女の年頃ならば。友達と遊んだり、母親と買い物に行ったり、ポケモンたちと触れ合ったりしながらありふれた幸せな日々を過ごしているとヤシオはぼんやりとイメージしていた。

ところがどうだろう。このような場所で大人びた言動とともに自らを導こうとする。彼女がどうあろうとヤシオにはそこから明るい想像はできなかった。

「もしかしてだけんど、オレみたいな立場ってことけ」

「ふうん……」

ぐるりと首をまわしてルルシイはヤシオを見つめた。

「私はやりたいことをしているだけ。迷ってるわけじゃないよ」

「お、おお」

語気こそ強くなかったが、ヤシオに当惑を覚えさせるには十分だった。

「気まずい雰囲気になりかけ、再び沈黙に包まれることを覚悟したが今度はルルシイが口火を切った。」

「……ヤシオさんこそもしかして迷ってる?」

「いんや、ルルシイちゃんのパーペキなガイドのおかげで今のオレは迷子から一番遠い存在だんべよ」

彼女の目は誤魔化せなかった。洞窟散歩が始まってからというものの、ヤシオは足下ばかり見つめて歩いてきた。洞窟散歩が始まってからというものの、ヤシオは足下ばかり見つめて歩いてきた。

「そうじゃなくてね。ここから出た後の話。私にはなんとなく分かるの」

自分でも分かっていた。迷いの根源はクロックとの戦いだ。ヤシオは一介のトレーナーであり、強敵に敗れたり伏兵に苦しめられたりした経験はいくらでもある。

しかしこの戦いはこれまでのものとは別だった。ヤシオに対して牙を剥いたクロッ

クは正体を明かしつつも悪の組織の幹部としてではなくトレーナーとしての執念で挑んできた。初対面の相手にそこまでされる理由は分からなかったが、彼を異質とカテゴライズする動機としては十分だったのだ。

ヤシオはここにくるきっかけとなった峡谷での決闘についてルルシイに話して聞かせた。

「なんつーか。オレの前にまたあいつが現れて、しかも今度はバラル団として襲ってきたらどうなるだろうって思ってたな」

道端でトレーナーとする野良勝負、ジム戦や公式大会で行うリーグ基準に則った試合に生きてきたヤシオはこの地方でいえばPGとバラル団との間で行われるような大袈裟に言えば互いの存亡を懸けての勝負が受け入れられていなかったのだ。

「地方でのさばっていた悪の組織を凶鑑をもらって旅立った若いトレーナーがのしちまったニュースを聞いたことがある。カントーでもホウエンでもオレの地元でもそういう話があった。今まであんまし気にしないようにしていたけども、オレはそういうヤツらに対して一生かかっても超えられない壁で隔てられているんじゃないかなってな。今度ばかりはそれを無視できなかつた」

虹色の現象も含め、クロックはその壁の向こう側の存在だとヤシオは呟いた。

少しして年下の少女に愚痴るなど人としてどうなのだろうかと後悔したが、ルルシイ

は彼の言葉を素直に受け止めたようだ。

ルルシイは人差し指をぴつと立てた。

「それならこう考えてみたらどうかしら。ヤシオさんがどのくらい強いトレーナーか私は知らないし、そのクラックという人がどんなんだったかも分からない。もしかしたら世界にはヤシオさんが一生どころか二、三生くらいかかっても敵わない相手がゴロゴロいるのかもしれない」

手厳しいなどヤシオは苦笑し頭をかいた。

「でも。ヤシオさんは死ぬ直前までいってここでまた生を拾った。こんな経験なかなかできないでしょ。『一生』にカウントしていいんじゃないかな。だからね、一生の壁ならもう超えてるわ」

屁理屈どころかダートしてんしやで大気圏を突破するレベルの飛躍だ。

「ルルシイちゃん考えがぶつ飛んでんな」

「とにかくね。ここで一生を超えたんだしまたぶつかってみればいいじゃない。それもダメならもう一回悩んでみればいい」

ヤシオはここまで彼女に対して抱いていた不思議な感覚の正体をやっと掴んだ。彼女は大人びている。年頃の少女が背伸びをしているというわけではなく、自分と同年くらいの女性が少女の体をとっているような雰囲気さえあった。

「そうかいね。あのジョルジ・クロキだつて何度も屈辱を味わつてでっかくなつたんだ。それにそもそもジムバツジすら集めきつてないオレには贅沢な悩みだつたべ」

簡易的なカウンセリングではあつたが何らかの作用があつたようだ。

ルルシイは彼の瞳に輝きが戻つたことを見てとつた。

「そろそろ大丈夫かな。ヤシオさん、上を見てみて」

「おつ?」

俯いた顔を上げると、洞窟の裂け目から光が差し込んで見えるのが見えた。ルルシイが特に反応しないところから察するにその光源はヤシオにしか見えていないようだ。

足を止めた二人はこの奇妙な散歩の終わりを悟つた。

「見つかったみたいだね?」

「うん。あれが出口だあな。ルルシイちゃん、色々世話になつたお礼にここを出たらオレが何かうめえもんをおごつてやるよ。いかげん腹減つたべ?」

「ごめんなさい。私は一緒に行けないの」

ルルシイは申し訳なさそうというより寂しそうな表情を見せた。ここまでポーカーフエイスを貫いていただけに風いであいた心にさざ波を起こさせる。

普通ならどしてよ? と聞くのがヤシオだがそれを呑み込んだ。

この子はここに残らなくてはならない。そしてヤシオのように迷つてしまつた者を

導くという役目がある。そう思った。

不思議な体験というのは人の心にここまではたらきかけるものなのだろうか。

「そっか。メシはまた今度な」

オレはグルメだから旨いもんをいっぱい知ってんのと誇った。彼としてはその約束が果たせるかどうかよりも明るい気持ちで彼女と別れたかったのだ。

「うーん、つつてもあんな狭い隙間から外に出れっかね。ポケモンの技でぶっ壊すのも危ないし」

よく分からない場所で荒っぽい手段に訴えることはできない。

頭を抱えるヤシオにルルシイが新品のあなぬけのヒモを手渡した。

「これを使つて。ヒモが引つ掛かったらあととはしつかり掴まつてれば大丈夫。でも決してこつちを振り向いてはだめ。向こうへ出るまではね」

渡りに船、というよりヒモとでもいうべきか。

いよいよヤシオはあなぬけのヒモに足を向けて寝られなくなった。

「オツケー。いろいろありがとうな。……こん次に会う時にはオレはもつと凄いトレーナーになつてつから楽しみにしちくり」

「分かつたべよ。ふふふ」

おうと威勢よく応え、ヤシオはずつと手に持っていた帽子を深々と被った。そして投

げ縄の要領で光が差し込む方へあなぬけのヒモを投げる。ヒモは何か引つかかりそのままピンと張った。

「じゃあな！」

「じゃあね」

ルルシイだけでなくヤミラミも、そしてイシツブテたちも手を振っている。

「こりやあいいや。らくちんらくちん！」

ヒモは掴まったヤシオをひとりの上に上へ上へと引つ張りあげていく。

退屈を満たすもの

ルシエジムリーダー、コスモスは紛うことなき天才である。

強者かつ曲者揃いで知られるラフェルのジムリーダーたちのなかでも突出した実力を持ち、リーグ最後の番人として挑戦者を退ける。

噂には聞いていたが百聞は一見にしかずだ。実際に目の当たりにするとそれが大袈裟な喩えでないことを認めざるをえない。

「カイリユウ」

大きな体からは信じられないスピードの一撃が炸裂した。観覧席にまで空気の揺れが伝わってくる。

技を指示するまでもない。崩れ落ちる相棒を目にした挑戦者はがっくりと膝を着いた。

5体のポケモンを連続で撃破したカイリユウは役目を終え、ボールに戻った。

「またカイリユウだけで全部倒しちゃった」

「あれがコスモスのやり方だ。最初から容赦なく攻めてどんどん圧をかけていく。相手にするのはかなり辛いだろな」

アルナはここに来てから何度目になるか分からない『どえらい』を口にした。

自分より年下のトレーナーは珍しくないが、ジムリーダーでしかも地方最強を誇る少女ともなれば驚くのも無理はない。

とぼとぼと挑戦者がジムを去っていく。その背中を見てみると仕方のないことだとわかっていても辛くなってしまう

「私が戦つてもボコボコにされちゃうんだろうな……」

脳裏にこちらを見下ろすミカゲがちらついた。

ルシエシテイに到着したシンジヨウと再会を果たしたコスモスは喜び（彼女の表情の機微を読み取れないアルナにはあまりそうは見えなかったが）、アルナを挑戦者と勘違いする小さなハプニングがあったものの彼らをジムに招待した。そして2人はルシエに滞在しつつ時々現れる挑戦者とコスモスとの試合を見学しているというわけだ。

「だいたい何？ あの技見えないうちに相手のポケモンが吹っ飛んじやつてるし。カイリユー半端な、いやどえらいって」

技というよりもはや手品の類いに見えてしまう。アルナは鼻息荒くシンジヨウに説明を求めた。

「あれは『しんそく』だな。そもそもが速い技だがあのカイリユーが使うと人間もポケモ

ンも肉眼で追えたものじゃない」

挑戦者が先に指示を出してもカイリユーが相手に致命的な一撃を食らわせるほうが早い。それを続けていれば何もできないまま手持ちが全滅してしまう。

アルナたちがここまで見た試合でカイリユーを破った者はいなかった。コスモス本人は『調子がいいだけです』などと話していたが、そのずば抜けた実力を認めざるをえなかった。

ドラゴンタイプを扱うコスモスへの対策として、こおりタイプやフェアリータイプを中心に手持ちを選抜してくるトレーナーも多い。それでも相性の差を引っくり返してしまうのだからいかに彼女が恐ろしい使い手かわかるといふものだ。

戦いを終えたコスモスが執事を伴って戻ってきた。勝利にも関わらず表情があまり晴れないのは戦いに手応えを感じていないせいだろうか。

「ほんつつつとに強いね。挑戦してくるのはみんなバツジ7個のトレーナーなのに」

アルナはコスモスの肩をバンバン叩いて褒め称えた。体育会系のノリにも怯むことはない。

「だからこそ私が最後の番人として彼らをジャツジする必要があります。強さに限ったことじゃない。資質とも違う。言うならば『色』でしようか」

目の前のアルナに対しての発言なのだが星に語りかけているような、そんな響きだっ

た。とにかくクールな彼女にもジムリーダーとしての確固たるポリシーがあるらしい。「色、色かあ」

小さい頃父親が土産に買ってきてくれた色砂を思い出した。

「じゃあさじやあさ、あたしは何色？」

どうにも会話のレベルすらコスモスに遅れをとっている。ならば自分の理解できる範囲に持ち込むまでだ。

「……強いて言うなら茶色でしょうか」

「びつみよー」

なんとかコスモスの言葉を噛み砕こうとするアルナ。

ぐう。

急速に頭を使ったせいかわの笛が鳴った。かなりアクティブな彼女も心は乙女だ。途端に顔が真っ赤になった。

「あつ」

「もうお昼時でございませう。皆様でお食事などいかがでしょうか」

執事が正午を少しまわった時計を指した。

「でも、まだ」

「本日挑戦の申し込みがあつたトレーナーとの試合は全て終了いたしました。コスモス

様、どうぞご友人とごゆるりとお過ごしくください。その間ポケモンたちを休ませておきましょう」

この早口である。

執事からは是非でもお嬢様^{コスモス}を友人との食事に行かせるんだという気迫が伝わってきた。彼なりに人付き合いをあまりしない彼女を思いやっているのが分からないコスモスではない。

大型ショッピングモールのフードコートで食事をする人々がみなこちらを見つめている。それもそのはずだ。ジムの外で、しかも友人と食事をするコスモスなど金のコイキングより珍しい。

「なんかもものすごく見られてるけど」

「もう慣れました。ジムリーダーはみんなそうです」

それはお前くらいのもんだ、とシンジヨウはあえて口にしなかった。

ミルタンチーズピザを頬張るコスモスは百戦錬磨のジムリーダーではなく年頃の少女の顔をしていた。世間から多少ずれているところがあつたとしても彼女は他人と何ら変わらない。

洒落たレストランでも高級な料亭でもなくフードコートを選んだのは彼女なりのオ

フの行動なのだろう。

だからこそ挑戦者を前にしたオンの彼女は不落の飛竜として牙を剥く。役割を演じているのではない。その瞬間において最も望ましい方向へ自らを突き動かしているのだ。

大きくカットされた肉をアルナは豪快に平らげた。野宿が多いこともあつてこのような場所での食事は久しぶりだった。

「とっしんステーキうまー!」

「昼間からよくそんなに食べられますね」

いつの間にか打ち解けた女子たちを前にシンジヨウは考えた。コスモスに勝つことができるのはどんなトレーナーだろうか、と。

タイプ相性で攻めるのは正しい。王道とさえいえる。こおりタイプならひこうやじめんを併せ持つドラゴンポケモンに大ダメージが期待できるしフェアリータイプならドラゴンタイプの大技も効かない。

シンジヨウもほのおタイプを使い手としてみずタイプやいわタイプなど相性の悪いポケモンで攻められることが多い。

彼の場合は文字通り火力を磨くことで対応しているがコスモスはどうも違う。彼女のポケモンも威力の高い技や攻防一体のスピードで相手を圧倒するが強さを裏打ちし

ているのはそれではない。

直前の試合でカイリユーが『しんそく』を連発して挑戦者を完封したがそれはコスモスが敵を侮って本気を出していなかったわけではないし、パワーとスピードに任せた雑な戦法をとっていたわけでもない。

そうすべきと彼女が判断したからだ。

つまり、初手でコスモスが『しんそく』を指示した時点で勝負はほぼ決していたことになる。それを嫌ってゴーストタイプを繰り出しても攻め手がなければそれ以外の技であつさりに対処されてしまうだろう。

強いポケモンに幅広い戦略、さらには運の要素すら必要となるかもしれない。

「シンジヨウさん？ そろそろ行きますよ」

「おかいもの！ おかいもの！」

「ああ」

コスモスの腕を引くアルナはそのままシヨツピングモールへ向かうようだ。シンジヨウは思索を中止して彼女たちを追いかけた。

「これ！ こつちがいいって！」

「いや、これにこれを合わせてだな」

人形のように端整なルックスのコスモスをブティックに引きずり込んだらやること

はひとつだ。

やれVネットクのボーダーだ、それスポーツタンクトップだと試着室で目まぐるしくファッションショーを繰り広げる。

「またですか……」

似たようなことを考える者は他にもいたようでコスモスは早々に諦め、もはや抵抗しなかった。

「若いんだからおしやれしなきゃ!」

「アルナさん、私と2つしか違うんですよね」

今日日親戚のおばさんですらその語り口はすまい。

「コスモスは何を着ても似合うな。ファッションモデルでも通用するんじゃないか?」

「シンジヨウさんの身長を10センチほどもらえるなら検討します」

対応も慣れたものだ。

その後もファンシーショップや骨董品店など時間の許す限り3人はモールを駆け回り、思う存分買い物を楽しんだ。アルナ、シンジヨウと過ごした半日はコスモスにとつて久しぶりの休日となった。

「ありがとうございます。よい気晴らしになりました」

夕陽が差し込むジムでコスモスは感謝を告げた。抱えている紙袋にはアルナとシンジョウが選りすぐった今日の戦利品がぎっしりと詰まっている。

「たまには自由に過ごしてみるのも悪くないだろう？」

「はい。コー、いやランタナさんの域までいくとさすがにまずいですけど」

どこの地方にも一人くらいは自由人なジムリーダーがいるものだ。

「こつちこそありがとう。あたしも楽しかった！」

「それじゃ、俺たちはホテルに行くから。おやすみ」

手を振りながらジムをあとにしようとしたその時だった。

ジムの扉が外から開き、中に誰かが入ってきた。

「おこんばんは。ルシエジムってここで合ってるべ？ 初めての街は迷子になりやすいからいけねえや」

赤い帽子にリュックサック、癖のある訛りが特徴的な――

執事の予定になかった最後の挑戦者は砂漠で会ったあの時と同じように飄々とした印象をその場にいる全員に振り撒いた。

挑戦者は語る

「手を緩めるなジャローダ！ 『リーフストーム』だ！」

空風吹き荒ぶ荒野の果て。

高度な戦いを繰り広げるポケモンたちに対して人間のいかに脆弱なことか。

特攻を大幅に下げルリスクを伴う大技だがクロックの指示に迷いはなかった。

ジャローダが放った尖った葉が奔流となつて嵐を巻き起こし、既にボロ雑巾と化しているヤシオと彼のポケモンに更なる猛攻を仕掛けた。

「うおっ！ つていうかジャローダに手はねえべ！」

ここまでの戦いで目が慣れていなければ指示どころか自らの反応すら間に合っていないかつたに違いない。

『リーフストーム』は茎頂で形成されるものとはパワーが違う。この葉の一枚一枚が君たちを確実に蝕むんだ」

その言葉に嘘はない。タイプ一致で放たれた技のパワーは二本の足に依存する人間には到底耐えられるものではない。ヤシオはその場にうずくまることでなんとかやり過ごした。

「よくわかった。あんたつえーよ。バラル団なんかやめてプロトレーナーを目指しやあいいがね」

流れ弾となった葉が頬を撫で一筋の血が流れた。状況からみてその程度で済んだのは幸運なのだろう。

いささか虫のよい考えではあるがツキに見放されたというほどでもない、と脳内をクリアにした。

そしてさらに続けた。

「んー。オレにはどうにもあんたのことが分かんね。真つ当にやってるようにも見えないなあ」

ミカゲにソマリとこれまでに遭遇したバラル団員は悪と狂気に支配されていた。その点クロックはどうだろうか。

話しつつ時間を繋ぎ、ポケモンのダメージを確認。一旦ボールに戻した。

一方、クロックは血走った瞳で彼を睨み付けている。

「ジバコイル、シザリガー、それにムクホーク。僕が鍛えに鍛えたポケモンたちをここまで破つたのは見事だったよ。だが君にはもう後がない。せめて後悔しないエンディングを選ぶといい」

バラル団幹部としてのクロックは言うまでもなく腕利きのトレーナーなのだが、今回

は少々事情が異なる。

ヤシオはPGでもなければ直接バル団の作戦を邪魔したこともない。本来であればクロックにとって無視して差し支えないような取るに足らない存在だ。

だとすれば何が彼をここまで昂らせるのか。この時のヤシオに知る由もなかった。「最後だ。君の全てを僕にぶつけてみせろ」

クロックはジャローダをボールに戻した。そして新たなボールを手に取った。それが下がった特攻を戻すためなどではないことをヤシオは本能的に理解していた。

「いけ——ガブリアス！」

マツハの地竜がクロックの意思が形を持ったかのように降り立った。その雄叫びが放つプレッシャーはその場の全てを支配してしまふほど。

クロックは触れずともその場の全てを圧迫していた。

しばらく沈黙したヤシオ。それでも自らを奮い立たせ、最後のボールを手に取った。

「いんやあ。すんげえ鍛えられ方してる。たしかルシエもドラゴンタイプのジムらしいしいい特訓になんね。うんうん」

「御託はいい！ 僕もガブリアスも戦いに飢えている！」

髪を逆立てて叫ぶクロック。話を通じねえなあとヤシオは頭をかいた。

ぶつかればどちらかが倒れる。そしてそれがどちらになるのかは些末な問題なのか

もしれない。

「まあいいや。オレはあんたに勝つてルシエに行く。そんだけだ」

ヤシオは6つめのボールを手に取った。

さすがに震えが止まらないかと懸念したが、そこは場数。ハハ、とそれなりに根拠のない、それでいて陽気な笑いがこぼれた。

「最後の最後でミオすけにあやかることになるとは思わなかったが、出せるもん全部で戦うのがトレーナーってもんだ！　いぐぞ！」

そう、この出会いがもたらしたものはきつと負の領域に留まるものではない。

交錯する想いが共鳴して、響きあつて、繋がっていく。

そして投じた最後のボールから——

「君、聞いているのかね！」

突つ伏して眠っていたヤシオは慌てて飛び起きた。

寝ぼけた頭で周囲を確認する。居眠りは数十秒のはずだが去年の夏から1年以上寝ていたような気さえした。

狭い部屋に向かい合わせの椅子と机。そして即座に自分がルシエ署に來ていること

を思い出した。

そして額に皺を寄せてこちらを睨み付けている中年男性がP Gで、色々と話すがあつたことまで頭が追い付いたところで一息つく。

やつとのことでルシエジムに到着し、しばらくぶりにアルナとの再会を果たしたヤシオだつたがすぐにジム戦というわけにはいかなかったのだ。

彼の搜索の必要がなくなったことをP Gに伝えなければならなかつたし、様々な経緯についても彼が貴重な情報を持っているであろうことは明らかだつた。

複数のバラル団事件に（直接かという怪しいが）関わり、しかも幹部であるクロツクと交戦したとなればP Gが彼から情報を得ようとするのは当然のことといえる。

「まったく。困るんだよ、こっちはただでさえバラル団で忙しいっていうのに」

情報提供者ののはずのヤシオに対してP Gは何故か横柄な態度をとつていた。それを怪訝に思わない彼は正直なところやややおめでたい。

「じゃあ改めて事件のことを話してもらおうか」

「いやあ、あの時はオレも必死で必死で……」

実はこの場においてヤシオと中年P Gにとつて不幸なすれ違いがいくつかあつた。

ひとつ、最近ルシエティで下着泥棒の被害が多発していたこと。

ふたつ、つい先ほど逮捕された下着泥棒の背格好とファッションがヤシオに酷似して

いたこと。

みつつ、署の奥で待機していたヤシオがこのPGの早とちりで取調室に連れ込まれたこと。

「君は自分が何をしたか分かっているのかね！」

「分かっていますよ！ いい特訓だと思つてたら（ガブリアスが）虹色にプアーりなつて、そんでもつてこつちが手を出そうとしたら」

言い切る前にPGが机を両手で叩いた。そして掌が痒くなつたのかももう一度叩こうとして手を膝におろした。

「特訓だど？ 虹色（の下着）だど？ 押収されたなかにそんなものはなかつたぞ！ さては別に隠しているものがあるんだな、さっさと白状しろ！」

「隠してないがね！ オレは（ポケモン勝負の時には）常に出し惜しみせず全力でやつてんです！ つていうかそれがトレーナーとしての性でしょうが！」

「そんなこと（下着泥棒）にトレーナーの性があつてたまるか！」

この場に冷静に状況を分析できる者がいないのが悔やまれる。売り言葉に買い言葉で両者はさらにヒートアップした。

「あるつたらあんですよ！ おまわりさんも昔はそうだったはずですよ！ 基礎に戻つたらどうなんですよ！ Simple is best！」

「ふざけるな！ 私は法と秩序を守る者だ！ そんな劣情にまみれた君と一緒にしても
らいたくはない！ あと無駄に発音いいな！」

「とにかく！ 虹色になったらそれまでと全然違ってたんです。ノーマルからメガになっ
た時点でもう凄かったのに、そこからなんかも爆発的というか」

こうなつてしまえばもう止まらない。

「爆発的って！ さては外（下着）だけでなく中（その着用者）にも何かしでかしたんだ
な！ こういったケースでは被害者が泣き寝入りしてしまつて被害届が出ないことも
ある、あらためて調査が必要ということか。言え、他には何をした！」

「そりゃあ外（屋外）だけでなく中（室内）で（勝負を）やることもあるでしょう！ だ
いぶ前だけどネイヴユのユキナリさんとは室内での一戦でしたよ！」

「ユキナリ……ユキナリ特務か！ 室内で一線を越えた？ 私は研修時代にあの人の
世話になつたんだ！ そんな彼に狼藉をはたらくなどもう許せん！」

この不幸な勘違いに二人が気がついて、事態が正しい方向へと收拾していくのにはも
う少し時間を要するようだ。

さて、意味のない仮定ではあるがもしもホツミが職を亡くして求職に走ることになつ
た場合その履歴書は難儀なものとなるだろう。

シンオウ地方の平凡な家庭に生まれたホヅミはキャリアとしてシンオウ警察に勤めるも僅か1年で辞め、その後は数々の職を転々としていた。しかも本人がその理由をあまり語らないとなれば誰もが良くない想像をするに違いない。

……表向きには。

ホヅミにとって久しぶりとなるルシエシティはどこか華やいでいた。

街のいたるところに開催が迫っているポケモンリーグのポスターが貼られ、町行く人々もどこか熱に浮かされているように見える。

しかし彼女の向かう先はそんな受けられたムードの対極に位置するような場所、PGのルシエ署だ。

活動がより活発になったバラル団に加え、ラフェル地方に存在する他の犯罪組織も連日ワイドショーを騒がせている。

負の連鎖がそこにあることは疑いようもなく、エネコの手すら借りたいような状況だった。

「ラフェルオフィスサービスより参りましたミツホと申します。担当の方をお願いできませんでしょうか」

いつも通りの営業スマイルにいつも通りの営業トークを取り繕う。

そう、今の彼女はバラル団による組織犯罪対策特設チームのホヅミではなくオフィス用品を取り扱う営業として働くミヅホなのだ。

もちろん無断で特設チームとの副業をしているわけではない。ここは彼女の潔白のためにも説明の必要があるだろう。

カネミツによって率いられるこのチームには2種類の人間が存在する。ラフェル地方の組織から引き抜かれた者とそれ以外の者だ。それだけなら出身の違いなのだが両者にはさらに別の相違が存在する。

後者の人間、つまりホヅミを含む者たちは籍はあれど『いない』とされているのだ。バラル団との因縁があるラフェルの組織から出向してきていれば当然敵からも知られている可能性がある。そこで表向きに発表されているメンバー以外の人員を秘密裏に補充し陰からも捜査にあたらせているというわけだ。

ミヅホ、いやホヅミが在籍するラフェルオフィスサービスはその隠れ蓑のひとつということになる。これはバラル団との高度な情報戦を象徴しているといえるのかもしれない。

そして、シンオウ警察時代から特殊な組織犯罪の対策チームとして活動してきたことでホヅミの奇妙な経歴が出来上がってしまったというわけだ。

やって来た担当者はもちろんホヅミをオフィスサービスのミヅホと信じて疑うこと

はなく、奥の応接室へと通した。

「わざわざルシエまですみません。窓口の机とパイプ椅子が古くなってしまいましたね、ぜひそちらで調達させていただきたいんです」

商機あり、とセンサーが告げる。

「ありがとうございます。こちらカタログになります」

カバンから出したタブレットにはところ狭しと椅子やら机やらの写真が載っている。

「窓口用でしたらこちらの机はいかがでしょう。椅子と合わせてお安くご案内いたします」

「うーん。私個人としてはいいんですけどね、これだとちよつと豪華過ぎちゃうんですよ。最近はそのいうのにうるさくてねえ」

市民の声がチョコクでこっちに届くつてのはいいことなんですよけどね、と担当者は肩をすくめた。

「キミねえ、そろそろ帰ってくれないと困るんだよ。こっちだって忙しいんだから。下着泥棒と勘違いしたのは謝るからさ」

「んなこと言われてもオレはありのままを言ってるまででー！」

声が廊下にまで響いてくる。

「取り調べ中でしたか」

彼は禿げ上がった額をハンカチで拭きつつため息をついた。

「あーいやいや、あれは取り調べなんかじゃないんです。あの男性は搜索願いが出されていましてね、無事見つかったはいいんですがどうやらバラル団と揉め事を起こしていったらしいですよ」

バラル団という単語にホヅミは敏感に反応した。

思わぬ収穫があつたかもしれない。

「それで？」

気まずそうな様子から難儀な事情を見てとつた。

「そのあたりの事情を聞いたんですけどどうにも要領を得んのですよ。砂漠で穴に落ちたーとか峡谷で川に落ちたーとか雪に埋もれたーとかって。しかも虹色のポケモンにやられて死にかけたところからあなぬけのヒモで帰ってきただなんてどつかで頭でも打ったんでしようなあ。こつちとしては聞くことは聞いたしもうお帰りいただきたいんですけど……」

ホヅミが取るべき行動は一つだった。

「彼がみなさんのお仕事の妨げになっているようでしたら私が連れていきましょか？」

「こういうのは慣れていきますので」

なるほど、彼から見て前線で営業活動を行うミツホはクレマーの類いにも強そうに思えた。

どうせオフィスサービスから備品を購入することだし少しくらい面倒を押し付けてもバチは当たらない。そのような思考に行き着くのも当然といえる。

「ありがとうございます。我々も犯罪者の取り調べには慣れているのですがこういったケースにはどうにも……お願いできますか」

バラル団騒動でただでさえ忙しいPGからすれば無駄に居座ろうとする情報提供者にかまっている暇はない。ホヅミが隠れた同業者であることは幸運かたまた不幸か。

ホヅミはつかつかと歩み寄り、なんとかその場で粘ろうとしている男の首根っこをひよいと掴んだ。

「ラファエルオフィスサービスの者です。ちよつと来てもらいますよ」
「えーとどちら」

体格に差はあれど最低限の訓練をこなした自負がある。男が新手の登場に面食らっている間にホヅミは彼の腕を掴み、文字通りルシ工署から引きずっていった。

「……あの、ジムに行きたいんですけども」

とうに日が落ちた夜の喫茶店。ホヅミはロズレイティーをオーダーした。

「何か飲みますか？　ここは私が持ちます」

「タピオカミルクティーで」

飲み物が届き、ホヅミはいよいよ本題に入った。

「ヤシオさんといいましたか、さつきルシエ署でしていた話をもう一回してもらえますか」

「はい？　あなたもPGの方なんですか？」

「し・て・も・ら・え・る？」

「へ、へえ」

剣幕に圧された男はラフェル地方に来てから今までのことを全て語った。脇道に逸れるだけ逸れるような相当長い話になったがホヅミはメモをとりつつ最後まで聞いた。

砂漠でバラル団が何らかの活動を行っていたことはアルナという少女から通報があった。ハルザイナの森での一件についても居合わせた四天王がバラル団班長を撃退したと報告されている。

つまりこの場での問題は峡谷での決闘ということになり、ホヅミが疑問点をピックアップした。

「つまりバラル団幹部のクロックという男は虹色のポケモンを使ったということ？」

「んと。正確にはボールから出てきた時には普通のガブリアスだったんです。ただ戦つてる最中にブアーリ光って」

ただ光っただけではなく、能力の大幅な上昇がみられたらしい。もしやと思う節はあつたがそれよりも身近な可能性を潰そうというのがホツミのやり方だった。

「それって例えば『つるぎのまい』のような能力を上昇させる技によるものとは違うの？」

「オレも最初はそう思いました。でもなんか違つたんです。トレーナーが技を指示した様子はなかつたし、そもそもオレと同じくらいあいつもガブリアスの変化にびっくりしてましたから」

あくまでも戦局におけるサブプロットに過ぎなかつたというのがヤシオの弁だった。

「それでガブリアスの『じしん』で足元が崩れて峡谷を流れる川に落ちたと」

「そうです。まあ落つこちてなくても負け試合でしたけどね」

なはは、とヤシオが笑つた。

バラル団幹部のクロックについてはホツミら特設チームでも情報が共有されている。

幹部としては若く、言動からも他の幹部のような悪の秘密結社の重鎮としての圧を感じることはなかつたと記録されている。むしろ好青年であるかのような印象が強かつたとさえ語る者もいた。

しかし与しやすい相手ではないことは間違いない。

ひとたびポケモンを繰り出せば苛烈なまでの強さを誇り、これまでに逮捕を試みたP
Gたちが何人も返り討ちに遭っている。

あの雪融けの日には刑事部第五課のソヨゴ警部と交戦、勝負の軍配こそ僅差でソヨゴ
に上がったが余力を残して撤退しバルル団全体としての作戦を完遂してみせた。

(私だつたら瞬殺されてた、か)

しかしホヅミは腑に落ちない。

バルル団が一般のトレーナーを理由もなく襲ったケースは報告されておらず、クロツ
クがラフエル放送局の人間に扮してまでヤシオを付け狙ったのは不自然に思えた。

「もしかして、以前にクロツクと何かあった?」

となると私怨によるものという可能性を探るのが道理だがヤシオは首を横に振った。

「ない……はずです。っていうかあいつはオレに対して特に思い入れがないように感じ
たんだいね」

クロツクは全力でヤシオを挫こうと向かってきたが、その目線の先には何か違うもの
が映っていた。うまく言葉にならなかつたのでホヅミにどれだけのニュアンスが伝
わったのかは分からない。

「それじゃもうひとつ。ガブリアスが虹色に光つたつて言つてたけど。私が思うにそれ

はReオーラによるものじゃないかしら」

「りおーら?」

ラフェルの地下には莫大なエネルギーを伴ったオーラが血液のように巡っている。そしてあるタイミングでトレーナーとポケモンに作用し、不思議な力を与える。

不定形かつ不可視のエネルギーであるため観測が困難で、雪融けの日以降学者たちが日夜頭を捻っているがその全貌は掴めていない。

しかしこれまでの観測によってサンプルは徐々に集まっており、バラル団と同様そこらもある程度共有されている。

「Reオーラがあなたとあなたのポケモンに作用していたら結果は逆だったかもね。やりにもよって悪人に味方してしまうなんて……」

「ヤシオでいっすよ。あと、オレにはあのクロックがどうにも悪人には思えないんです。騙し討ちで危害を加えるつもりならいくらでもチャンスがあつたしなあ。本当にオレと戦いたかっただけだったりして」

「そんじゃ、オレはジムに行きます。あんまし役に立てなくてすみません」

喫茶店の前で別れを迎えるその時に沸いて出たそれは紛れもなく彼の本心だった。

「案外そうでもないかも。これ、ポケギアの番号。何か思いついたこととか気がついたこととかあったらいつでも連絡してきて」

教えたのはラフエルオフィスサービスのミツホではなくホヅミの方に繋がる番号だった。捜査にあたる者としてはギリギリの行為だが、この男からは他にも何か有用な情報が得られるような気がしたのだ。

「いい。この通りの突き当たりを右ね？　そこまでは絶対に曲がっちゃだめ」

ここまでの話を聞いて分かったこととして、彼のドタバタは全てその方向音痴だった。同じルシエにある施設ですら辿り着けるか確証はない。

「はいー。タピオカごちそうさんでしたー」

分かっているのかいないのか。

小走りに駆けていく背中を見つめることはせず、ホヅミは別件に対処するためその場をあとにした。

実は後悔がひとつあった。ヤシオにあえて伝えなかったことがあったのだ。

CeReSが発表した最新の見解ではReオーラはこの大地に染み込んだ英雄ラフエルの波導とされている。

つまりあの場でラフエルの遺志に選ばれたのはクロック。ヤシオではない。

リーグをかけて最後のジムリーダーに挑もうとしている彼にそれを伝えるのはあま

りにも酷だった。

いずれCeReSの見解が知れ渡った時に彼はそれを受け止めることができるだろうか。

ホヅミを撫でる夜風を彼女が妙に冷たく感じたのは温度差だけではないのかもしれない。

竜乙女の純心

明るる日、ヤシオは再びルシエジムを訪れた。迷わずに到着することができたのは昨晩のシンジヨウのアドバイスに従って宿舎からタクシーを利用したからに他ならない。

空は晴れて雲も高い朝。

ジムの前では執事と見知らぬ女性が待っていた。

「おはようさんです！」

「おはようございます。ヤシオ様、お嬢様がジムにてお待ちです」

いよいよか、とヤシオは目を輝かせた。そして執事の隣に目をやる。

「それでそちらの方は？」

「申し遅れました。ラジエス中央情報局のエルメスです。本日のジム戦の取材に参りました」

「あー、それってテレビです？」

心臓が早鐘を打った。

この流れはまずいと彼の第六感が最大音量で告げていた。

「いえ。ネット上の記事にはさせていただきますが」

「そりやあよかった。いえね、最近テレビマンに崖から落とされたんですよ」
「それは大変でしたね」

エルメスは一瞬目を丸くしたものの、所詮は他人事だった。

ヤシオの脳裏には未だにガブリアスを駆るクロックが強烈に焼き付いている。なんとなくマスコミに感じるものがあるのも無理はなかった。

「おはようさんですー！」

コスモスは今日もクールに、そしてどこか厭世的に挑戦者を待ち受けていた。

「おはようございます。ルシエジムにようこそ。挑戦者^{ヤシオ}さん」

「やつと勝負できんね。それにしてもジムリーダーさん、こうしてまともに話すのは初めてだね。今日はどうぞお手柔らかに」

「ええ、こちらこそ」

私にその色を存分に。

「ヤシオー！ がんばんなよー！」

観覧席からはアルナがこちらに手を振っていた。その隣で何やら真剣な顔をしているのはシンジヨウ。そしてさらにその隣にはエルメスが腰かけている。

「もちの口コン！ ヤシユウ男児は普段はへ口くても本番につえーよー！」

実のないヤシオの言葉を脇に置いて、ルシエジムの実に見事な広い土のフィールドには万全の整備が施されていた。

コスモスとヤシオはフィールドを挟んで白く描かれた円の中に立った。

コスモスの艶消しブラックの瞳がヤシオを見据えた。彼女はヤシオにどんな色を見出だしたのだろうか。

「このジムはラフエルリーグ公式ルールに基づいて設計されており、試合もそれに準じて行います。ここまできた挑戦者にはもはや言うまでもないこととは思いますが、規則ですので確認しておきます」

『トレーナーはフィールドの両端にあるトレーナーズサークル内で指示を出すこと』。『試合中一匹のポケモンに指示できる技は4種類まで』。『ポケモンの交代は両者に認められる』。

なあなあにしているジムリーダーもいるがコスモスは遵守して試合に臨むタイプのようだ。

この勝負の主審を務める執事が両手の旗をあげた。

「両者、最初のポケモンを出してください」

2人がボールを手を取った。

そしてその瞬間が再び訪れた。

頭のとっぺんから足の指先までが冷えきって、次に全身が燃えているのではと錯覚するほど熱くなるあの感覚だ。コスモスの言葉を借りるならば二人の色が混ざり合い、そして溶け合う瞬間。

あの砂漠の再現にアルナは再び体の震えを感じたが、隣のシンジヨウとエルメスはただフィールドを注視している。

「カイリユウ」

コスモスが投じたボールから光とともに大きな姿が飛び出した。

「おお、でっけえー！」

一番手で繰り出したのはやはりカイリユウだった。

「こつちも負けてらんねえ。よっし、いってみんべー！」

対するヤシオはアーボックを繰り出した。

カイリユウとアーボックが睨み合う。どちらも臨戦態勢だ。

「試合、はじめー！」

合図とともに両者同時に動いた。

「アーボック、とにかくつつこめー！」

「カイリユウ」

間合いを詰めようと突撃をかけたアーボックだったが、カイリユーの『しんそく』が決まるほうが先だった。アーボックは凄まじい衝撃とともに吹き飛ばされ、フィールドを越えてヤシオの背後の壁に叩きつけられた。

「すんげー！ パワーが段ちつてこういうことだんべな」

アーボックはその細長い体を器用に丸めつつ体勢を戻した。見るに、闘志は失われていないようだ。

「もつかい！ ガーりいげー！」

再びカイリユーに迫るも同じように『しんそく』の餌食となつてしまった。アーボックはヤシオの立つトレーナーズサークルの手前まで弾き飛ばされた。

アーボックは苦しきからか再び体を丸め、そしてもう一度体勢を立て直した。

「まだまだー！」

ヤシオはなおも同じ指示を出し続けた。そのたびにアーボックは『しんそく』の餌食になり、すぐに起き上がるも攻撃を受け続け、カイリユーに対して技を放つことさえままならなかった。

「ねえシンジヨウさん、これまずいんじゃないの?！」

これはアルナとシンジヨウがここ数日で何度も見てきたパターンだった。『しんそく』を食らつて最初から後手にまわる展開は挑戦者に焦りを生じさせ、ジム戦そのもの

の方向性を決定づけてしまう。

トレーナー心理にダメージを与える凶悪な戦法によってバッジを集めてきた者たちですら精神的に崩れてしまうのだ。

「こらーヤシオー！　なにやってんだー！　やる気がないならあたしが代わりに戦うぞー！」

ヤシオの自棄をおこしたかのような戦いにアルナはギャラリーから叫ばずにはいられなかった。

なんとなくそれっぽいことを言い、さらにオーラを発して期待させつつのこの体たらくではヤジられるのも無理はない。

「……トレーナーの交代はルール上認められません。私もアルナさんと同意見です」

コスモスが呟いた。何かしらのスイッチが入ったとみえる。

「ドラゴンが聖なる伝説の生き物というのは今さら言うまでもないでしょう。彼らは捕まえるのも育てるのも難しいとされています。しかしうまく育てれば無類の強さを発揮する。ラフェルの強者たちを破りここまでたどり着いたことは称賛に値しますが、そんな小手先の攻撃でリーグへの扉を開こうというのならあまりに無謀。それとも今からシツポまいて帰りますか、ヤシオさん」

クールな彼女に似合わず語気が強くなった。

どこか雰囲気の違いを挑戦者に期待している節があったのか手応えのなさに失望したのか。あるいはその両方なのだろう。

「……わりいけど」

頬を擦りながらコスモスの話を聞いていたヤシオだったが聞き手に徹するのをやめ、切り出した。

「シッポならもうとつくにまいてっぺ？」

「なにを言つて——」

『とぐろをまく』！ もう堂々とやつてよし！

アーボックの目の色が変わった。そしてこれまで繰り返していた体を丸める動作を今度は大きくやってみせた。

「なるほど、彼の狙いはこれだったか」

アーボックの動きを見てシンジョウはヤシオの不可解な指示の意図を理解した。

「どういふこと？」

聞くは一時の恥とばかりにすかさずアルナが教えてシンジョウ先生モードを展開した。一方隣のエルメスは理解することを放棄したのかただ微笑んでいる。

本人は気がついていないが実はかなり面倒見のいいシンジョウ。できるかぎり噛み砕いて伝えた。

「アーボックがどれだけ素早く動いてもカイリユースピードを捉えることは難しく『しんそく』を連発されればその対処は厳しいものとなってしまう。だからとくせいの『いかく』に加えて『とぐるをまく』ことで防御力を高め、ダメージを抑える作戦に出たんだ」

もちろん、それまでに攻撃を受け続けることになるアーボックとの信頼関係がなければなし得ない作戦だ。

「アーボック、やり返してやれー」

再びアーボックがカイリユースに迫る。コスモスはまたも指示を出さず、ただ一声カイリユースを呼んだ。

同じ技の連続の効果が薄いことを悟ったカイリユースは次なる一手として翼を大きく羽ばたかせた。

飛行タイプの強力な技、『ぼうふう』だ。いくら防御力が高まろうと特殊攻撃力によってダメージを与えるこの技であれば関係ない。

なんとか踏ん張っていたアーボックもたまたまらず風の渦に巻き込まれた。

そこへカイリユースが再び突撃をかけた。今度は『しんそく』ではない。

『げきりん』か。決めにきたな」

シンジヨウの読み通り、風が止まないうちに持ち技の最強格で片をつけようという算

段なのは明らかだった。防御力が上昇していても地に足がついていない状態では（そもそもアーボックに足はないが）踏ん張りがきかずガードは必然的に甘くなってしまう。強力なオーラをまとったカイリユーがその力を解放させた。高めた防御力ですらの前では意味をなさない。

誰もが混乱のリスクを背負った大技で捻られるアーボックを夢想した。

『ダストシユート』

静かに、それでいてはつきりと響いたその指示にアーボックは風にあおられながらも的確に応えた。

「……まかれたことに気がつけなかったのが失敗でしたか」

攻撃の寸前で至近距離からの『ダストシユート』を浴びせられたカイリユーはふらふらと不時着し、そのまま前のめりに倒れた。

「カイリユー戦闘不能。アーボックの勝ち」

5対5の勝負、最初の一戦をものにしたのはなんとヤシオだった。

競技において先制は重要視される。ポケモンバトルにおいてもそれは例外ではない。

『とぐろをまく』は攻撃と防御にくわえて命中率も上昇させる。リスクこそあれ極限まで積めばカイリユーの動きもとらえられるということですか」

「あらためて言われると照れんな」

観覧席もちよつとした騒ぎになっていた。

「勝った！ ヤシオいけるよ！」

「たしかにアーボックは見事だったがコスモスが恐ろしいのはここからだ。コスモスはこうなることも想定していたはずだ」

次にコスモスが繰り出したのは――

「ガブリアス」

ガブリアスが峡谷の再現とばかりに登場した。

「あつガブリアスけ。きちいのが来ちまったな！ アーボック、ちーつと休憩。スターミー！」

さすがに勢いに任せて戦うことはできないと判断したヤシオはアーボックを下げてスターミーを繰り出した。

表情の読めないポケモンだがヤシオの目にはやる気に満ちているように映っているようだ。

「今度はこつちから攻めつぞ、『れいとうビーム』！」

この対面ではスターミーのスピードが上回った。中心のコアから放たれた青白い光の帯が真っ直ぐにガブリアスを襲う。

「『がんせきふうじ』」

4倍の弱点で当たれば大ダメージ間違いなしといったところだったが、ガブリアスは目の前に岩石を積み身を守った。

この『がんせきふうじ』、本来は相手にぶつけることで素早さを下げる技だがこの場では氷タイプの技を防ぐ盾として使われた。

「しつかりケアしてくんなあ。スターミー、ハイドロポン」

ヤシオの指示が届く前にガブリアスが強く地面を揺らした。スターミーは相手に撃とうとした『ハイドロポン』を地面に発射することで空中に逃れたが、それは大きな隙となった。

当然それを見逃すコスモスとガブリアスではない。

『ドラゴンダイブ』

体がひしゃげるほどの一撃をもらったスターミーはなんとか耐えたが、ノックアウト寸前にまで弱っていた。

『ドラゴンダイブ』は痛えべ。スターミー、『じこさいせい』

スターミーが体を発光させて回復している間にガブリアスはフィールド上空に岩を射出した。

「えっ、『ステルスロック』？ 今のコスモスからしたらチャンスじゃないの？ スターミーが回復してる間に攻撃したらいいのに」

アルナからすれば弱っているスターミーを沈めることがコスモスの最善手だと考えていたばかりに、これは不可解だった。

すかさずシンジヨウが補足する。

「俺が思うにそれこそがコスモスが相性の悪いスターミー相手にガブリアスを引つ込めなかつた理由だ。後続を削るためにリスクをとつたということなんだろうな」

「〔苦労様」

シンジヨウの言葉通り、『ステルスロック』が終わり次第コスモスはそのままガブリアスを引つ込めた。

「スターミー。こっつからだ。がんばっぺ」

「エストル」

聞き慣れない名前にヤシオは新種のポケモンの登場を警戒したが現れたのはジャラランガだった。相性で有利ならやることは変わらない。

「『れいとうビーム』」

「『きあいだま』」

れいとうビームを寸前で仰げ反つてかわしたジャラランガはそのまま返しの一発を見舞った。

格闘タイプの特特殊技である『きあいだま』が炸裂した。効果はいまひとつだがジャラ

ランガの実力はタイプ相性をものともしない。

『サイコキネシス』!」

今度はスターミーが有利をとった。フィールドに広く効果が及ぶこの技は回避が難しいのだ。

「こりや決まった、おっ?!」

否、『サイコキネシス』はジャラランガに届いていない。咆哮による強烈な空気の振動が攻撃から身を守る防壁となっていたのだ。

『おたけび』をそう使ったあたまたげたな。ならこつちも応用いぐぞ! スターミー!」
ジャラランガの足元のフィールドが捲れ上がった。バランスを崩しかけたジャラランガは地面、壁と順に蹴って空中へ逃れた。

「やられたらやり返す。『れいとうビーム』だ!」

先ほどガブリアスの攻撃を受けたパターンをそのまま返した形になった。これはかなり効いたようだ。

「とどめの『ハイドロポンプ』!」

絶体絶命の状況ながらジャラランガは回避の動作をとらなかつた。それどころか激しい水流に逆らい、スターミーとの距離をぐんぐん詰めていった。

「まずい! スターミー、よけろ!」

ヤシオがコスモスの狙いに気がついた時にはもう遅かった。ゼロ距離からの『スケイルノイズ』が炸裂した。スターミーはがっくりと崩れ落ち、コアの点滅も消えてしまった。

「スターミー戦闘不能。ジャラランガの勝ち」

これまでのコスモスの戦い方からゴリ押しを警戒していなかったことが裏目に出た形となった。

『おたけび』でロボンプのパワーが落ちてたか。サイキネを防ぐためだけじゃなかったんだな。スターミー、ありがとう。後は任せてゆっくり休んでな」

「ロボンプ？」

コスモスは眉をひそめたがヤシオは気がつかない。

これで両者4対4の状況になった。アーボックのダメージまで考慮すると一転してコスモスが押している展開といえるだろう。

「もっかい！ アーボック！」

ヤシオは再びアーボックを繰り出した。

ステルスロックによるダメージもあり、見た目にも体力は限界に近づいている。

「アーボックはカイリユウ戦のダメージが残ってるんじゃないの!? 解説どうぞ！」

「ちよつと待ってくれ」

これにはギャラリーも予想外だったようだ。

『ダストシユート』！』

渾身の一発だったがスピードで勝るジャラランガには当たらなかつた。ジャラランガの軽快なフットワークをもってすれば命中率の低い技を回避することなどわけはない。

「この技は多少のノーコンに目をつぶんなきゃいかん。やっぱまかなきゃ足のはええ相手だと当たんねえべな」

「それなら、『とぐろをまく』！」

カイリユー戦同様にアーボックはとぐろをまいて能力を高めた。

『きあいだま』

反応が遅れたアーボックだったが、ギリギリで技が逸れて難を逃れた。『きあいだま』も命中率の面において厳しい技なのだ。

『かみくだく』！』

『カウンター』

ここはコスモスがヤシオの指示を完全に読みきつた。とぐろをまいたことによる攻撃力の上昇を物理技に活かしてくる場合の最善策だ。

再びアーボックが壁まで吹っ飛ばされた。持ちこたえたのは相性が悪くダメージが

抑えられていたからにすぎない。攻撃力が上昇してただけに危なかった。

「いんや『カウンター』か……相性の悪い技にしといてえがった、いやよかねえな」

『ダストシユート』の命中精度はやや上昇しているがジャラランガに隙はなく当てるのは困難だ。

『とぐろをまく』間に攻撃されれば無防備になる。

『かみくだく』と、カウンターをもらう。

悩んでいる時間はない。

「アーボック、もっかいいぐぞー！」

当然ジャラランガはカウンターの構えをとった。これが決まればアーボックは間違
いなく戦闘不能になる。

「思つきしいけよ、『ドラゴンテール』！」

技を食らった直後に反撃しようとしたジャラランガだったがボールに戻る方が先
だった。

ヤシオの意図はギャラリーにも届いたようだ。

「あんな隠し球があつたか。強引に交代させてしまうことでスターミーをやられた嫌な
流れを変えられる。さらにカウンターの反撃に怯える必要もない」

コスモスを相手にそこそこ戦えているヤシオ。それに対してアルナが思うことはひ

とつだった。

「なんでそれを砂漠でやってくれなかった……」

この技を受けた場合の交代先を選ぶことができないことを理解しているコスモスはあえてボールに触れなかった。

そして勝手に飛び出す形で再びジャラランガが現れた。

「えっ、どういうこと!? 別のポケモンが出てくるんじゃないの!?!」

「よく見ろ。出てきているだろ」

アルナと同じくヤシオも目を丸くしていたが、すぐに気がついた。

「なーる。もう一匹いたってことけ!」

「その通りです。それにしてもドラゴン使いにドラゴンタイプの技で不意打ちを仕掛けるとは面白い方ですね。ここからはパシバルが相手です」

よく見ると先ほどのエストルとは構えが違う。

「ジャラランガの強さは身に染みてつてからなあ。アーボック、交代。ハッサム!」

ヤシオはボロボロのアーボックを戻し、ハッサムを繰り出した。そのハッサムにも尖った岩が容赦なく襲い掛かる。

「ハッサムよう、『ステルスロック』がいじやけつちまうね。なんとか解除してくれないもんかね」

『ドラゴンクロー』

「おっと、『バレットパンチ』」

ジャラランガの爪とハツサムの鋏が交錯した。パワーは互角に見えたが、体術の巧みさでジャラランガが勝っていた。

『バレットパンチ』！

続けて打ち込まれた速く、そして重い弾丸のようなパンチをジャラランガは何の苦もなく受け止めた。

「うそべー」

そしてその勢いを逆に利用して地面に叩きつけた。

「バレットパンチって先制できる技でしょ、なのになんでジャラランガは反応できるの!？」

「ジャラランガの爪先をよく見てくれ。やや外側を向いている。ああなっていると脚のラインが真っ直ぐになって関節の可動域が大きく広がるんだ」

これは人間を含む二足歩行の生物に共通する身体の特徴で内股に立っていると両肩が閉じ、体の動きが正面に集中する。逆に外にひらいていると瞬発力が阻害される代わりに限界からの一伸びを助けることになる。

格闘技の心得はなくとも絵画を趣味とし、物体を細かいパーツで捉えることができているコスモスならではの鍛え方だ。

『スカイアツパー』

「下からくるぞ！ 気をつけろ！」

大振りに振り上げられた拳をハッサムは反り返ることでかわす。しかしそれすらコスモスの狙い通りだった。

「今よ、尻尾を使つて」

尻尾での足払いでバランスを崩したハッサムに『ドラゴンクロー』が炸裂した。

『りゆうのまい』

すぐに反撃できない隙を見てすかさず能力の上昇を図った。その無情な戦法は敵の組み立てを一つ一つ確実に潰していくコスモスのスタイルがポケモンにも共有されていることを感じさせた。

「こつちがまいたらそつちはまうってか。容赦ねえべ」

起き上がったハッサムが真っ直ぐにジャラランガに迫った。

『つばめがえし』！

「受けてから投げて」

「そつげ。なら『バレットパンチ』！」

『つばめがえし』を受け止められたハッサムだったがそれは逆に敵との距離を詰められたことになる。間髪いれず次の攻撃で初めてジャラランガに一発をいれた。

「やっと当たったか。いやあ、しんど！」

『ドラゴンクロー』

スピードが上昇したジャラランガの攻撃はもはや目で追うことはできず、反射で捌くしかない。

「打ち負けるな、『バレットパンチ』！」

拳と鉄の応酬が激しく繰り広げられる。先制技がさほど有効打になっていない理由は素早さの上昇だけでなく、ジャラランガの卓越した格闘センスにあった。

ハッサムの視線、踏み込み、羽ばたき、関節の動き、重心の移動など全ての情報が次の一手を読みきる標となっていたのだ。

細かく指示せずともそれを織り込むコスモスも流石だが、彼女の意思を完全にトレースしているジャラランガも脅威的といえる。

一方コスモスからしても『りゆうのまい』によって能力が上昇したジャラランガと打ち合っていることに何かを思わないこともなかった。

「斬つてよし、鉄んでよし、そして殴つてよしというわけですか」

「照れるけどもつとほめちくり。おーい、バックな」

飛び退いたハッサム。ヤシオはすかさずボールに戻した。

「ちーつと休憩。トゲキツスたのんだ！」

しゆくふくポケモンのトゲキツスがフィールドに降り立った。降り注ぐ『ステルスロック』によるダメージを受けてから、ふわりと舞い上がった。

「ここもヤシオが先に動いた。」

「トゲキツス、『マジカルシャイン』！」

トゲキツスが強い光を放った。

4倍弱点の強力な技だがやはりスピードでジャラランガに分があった。

「『ドラゴンクロー』」

「えっ!? 効かねえべ?」

ジャンプしてかわしたジャラランガはそのまま垂直落下しつつ『ドラゴンクロー』をなんとフィールドに打ち込んだ。

無論準備運動などではない。ガブリアスの『じしん』とスターミーの『サイコキネシス』でフィールドが荒らされていたこともあり、砂煙がジム全体に飛散した。

「げほっ、フィールド捲るんじゃないやなかった、スターミーあとで反省文な、げほっ」

この目眩ましの間にジャラランガは砂煙のなか激しく舞った。

「巻かれたらとことん舞うってそっちも相当だべ。『エアスラッシュ』！」

こちらにも弱点を突いた技だったが視界が悪いなかさらに速くなったジャラランガを捉えることはできなかつた。

『どくづき』

そして一瞬で距離を詰め、きつい一撃を見舞った。避けることはかなわずトゲキツスは大ダメージとともに叩き落とされた。

『はどうだん！』

トゲキツスはなんとか起き上がり反撃に転じたがジャラランガは拳を固めて『はどうだん』を受け流した。

「柔よく剛を制すってやつか」

このジャラランガも苦手な遠距離からの攻撃への対策が万全であることをまざまざと見せつけてくる。

これ以上『どくづき』を受けるのはまずい。ヤシオはなんとかこの状況を打開しようとした。

「きつちいな。トゲキツス、真上に飛べ！」

『スカイアツパー』

急上昇するトゲキツスをジャラランガが『スカイアツパー』で追う。空中の敵にも当たる珍しい格闘技で勝負を決めにきたようだ。

観覧席のアルナは追われるトゲキツスをはらはらと見守っていた。

「安全な高さで『はねやすめ』させるつもりだったんだろうけど。飛んでる相手にも当た

る技が来たらどうしようもないよね」

「いや。そうでもないかもしれないぞ」

ジャラランガの拳が腹にめり込んだ。苦痛に顔を歪めるトゲキツス。

「今だ！ ジャラランガを捕まえろ！」

タイミングを逃さずヤシオが叫んだ。

「えっ!? ヤシオ何言ってるの？」

「トゲキツスはいわゆる鳥ポケモンたちとは違い、飛行タイプながら翼をさながら人間の腕のように使うことができるポケモンだ。『なげつける』や『きあいパンチ』なども覚えることができるしな」

トゲキツスは翼でジャラランガをがっちりとホールドした。逃れようとジャラランガは連続で『どくづき』を仕掛ける。

「空中に誘えばこっちの戦場ってこったな。『マジカルシャイン』！」

回避不可能な状態から放たれた弱点を突いた一撃。効果は抜群だ。

技によるダメージとフィールドに突き落とされたダメージは予想以上に大きかった。

倒れたジャラランガはそのまま動けなかった。

「ジャラランガ、戦闘不能。トゲキツスの勝ち」

主審のコールにトゲキツスは翼を広げて応えた。

「ヤシオ、押ししてるよ！　これはもしかしたらもしかするかも！」

「さすがに少し驚いたな」

「ガブリアス、お願い」

コスモスは再びガブリアスを繰り出した。

「イツキに畳み掛けっぞぞ！　『マジカルシャイン』！」

スピードで負けているトゲキツスだったが技の速さで先手を取った。

当たればこれも効果は抜群だったが命中寸前でガブリアスは体をひねってかわした。

「『マジカルシャイン』！　もっかい『マジカルシャイン』だ！」

続けざまに攻撃するも本来のスピードで勝るガブリアスには余裕があった。

「あれ？」

カイリユウの時とは別の意味で投げやりなヤシオの指示にアルナは首をひねった。

「どうしたんだろ。さすがにガブリアス相手だとさっきみたいな作戦はないのかな」

砂漠を愛するアルナにとってガブリアスこそ最強の砂ポケモンというイメージがある。そんなガブリアスにヤシオが策を見出だせないというのも頷ける話ではあった。

「やはりそうか。この勝負、コスモスが優位に立っている」

しかしシンジョウの見立ては違った。

「どづいづい」と？」

「理由は分からないが彼にはガブリアスに対して気負いか焦りのようなものがある。スターミーを出した時からそんな気はしていたがコスモスも同じことを感じているはずだ」

続けざまに放たれた『エアスラッシュ』もガブリアスを捉えることはできなかった。「スターミーやトゲキッスはドラゴンタイプに対して強力な有効打を持つポケモンだ。なのに彼は勝負を急ぎすぎた。今も『マジカルシャイン』が決まってない理由、分かるか？」

「えーと、えーつと」

「トゲキッスとガブリアスの距離、ですよね？」

意外にもここまで静かに試合を観戦していたエルメスが正解を導いた。

「そう、問題は間合いだ。あの遠距離から安直に撃つていけばガブリアスなら目を瞑っていても避けられる。つまりPPの消耗にしかならない。さっきのジャランガの時のように反応できない距離まで迫るか別の技で牽制するくらいの工夫がないと。アロボックの作戦といい彼にはそういった策を閃く力があると思っただが」

カイリユーとジャランガを破って勢いに乗ったはいいが、動揺からか完全に空回りしてしまっている。

コスモスがあえてガブリアスでスターミーを深追いせずに交代したのは『ステルス

ロック』以外にも理由があったということらしい。

観覧席での会話の間に返しの『がんせきふうじ』がきまった。ジャラランガ戦で満身創痍だったトゲキッスにはひとたまりもない。

大きなダメージを受けたトゲキッスはなんとか起き上がろうとしたが、かなわなかった。

「トゲキッス戦闘不能。ガブリアスの勝ち」

「うーん。まじいね、こりゃ……」

序盤こそ有利に戦いを進めていたヤシオ。しかし彼とポケモンたちの奮戦が龍の鱗のその一枚、逆鱗に触れてしまった。

コスモスのドラゴン軍団はまだ3体残っている。

その視線の先に

ルシエシテイジムリーダーを務めるコスモスという少女はまさしく天賦の才の持ち主であつた。

これまでに数々の女傑を輩出した門番の一族のなかでも特に才に恵まれ天に愛された彼女は、20年にも満たない人生で数多の挑戦者たちを退けてきた。

彼女にとって挑戦者との戦いはジムバッジに相応しいか見極める儀式であると同時に相手の『色』を見ることでもあつた。

情熱の赤。冷静の青。向上心の黄色。様々な色を持つトレーナーたちが彼女の前に現れたが、やがてその色は輝きを失つてしまつていた。

敗北を、目の前がまっくらになると表現することがあるがコスモスの考えではそれは正確ではない。

人は敗北に打ちひしがれた時『色を失う』のだ。

絶望、嘆き、悲しみ、憎悪。敗れ去つた挑戦者たちが見せる色はどれも暗く、濁つていた。

それでは、今日の前にいる挑戦者はどうだろう。

(紫。都合がいい色ね)

赤と青が混ざり合った中性色は周囲によってそのイメージを変化させる。

神秘と不安。高貴と低俗。二面性を列挙すればきりが無いが見るものによって、また置かれる状況によってもゆらゆらと水や空気のように揺れ動く。

リーグ最後の砦に挑みこじ開けようとする彼は、ある意味コスモス自身を映し出す鏡なのかもしれない。

それでも、コスモスがやることは変わらない。色が失われるその瞬間まで。

それが彼女の使命なのだから。

「アーボック、頼む！」

トゲキツスをやられたショックも癒えないまま次のボールを放るも、『ステルスロツク』のダメージもありアーボックは傍目にもノックアウト寸前だった。

『ダストシユート』！

『がんせきふうじ』

狙いは外していなかったものの、スターミー戦同様ガブリアスは岩石によって攻撃を

防いだ。

「うわあ、惜しい！　今のが当たってれば」

「あのダメージだとさすがに『とぐろをまく』余裕はない。焦りはあるだろうがここは攻め続けるしかないだろう」

シンジヨウの言葉は遠く届いていないが、ヤシオも方針は同じだった。

「やつぱりとらえきれねえ、『かみくだく』だ！」

「回り込んで」

ならばと飛びつくも、やはりスピードではガブリアスに及ばない。アーボックの決死の攻撃も空を切った。

いよいよアルナも事の深刻さを重く捉えるようになってきた。

「まずいよ。策がないじゃん。そうだ、さっきの『ドラゴンテール』なら」

「それは難しいな。あれは出が極端に遅い技だ。さっき決まったのはジャラランガが『カウンター』を狙っていたところにピンポイントで当てたからにすぎない」

ヤシオが指示を出しアーボックが構えをとる前にガブリアスが動くことは間違いない、それが決まり手となることもまた確実だった。

「『かみくだく』！」

「『ドラゴンダイブ』」

最後の力を振り絞ってガブリアスに迫ったが、そこまでだった。ガブリアスはパワーでもアーボックを圧倒していた。撥ね飛ばされた大蛇はもう起き上がれない。

相性で不利なトゲキッスに続いてまたもガブリアスが敵を蹴散らした。

「アーボック、戦闘不能。ガブリアスの勝ち」

アーボックはボールへ消えていった。

「お疲れさん。ゆっくり休んでな」

「もっかいいぐぞー！ ハツサム！」

残り2体となったヤシオの手持ちからハツサムが再び登場した。

「ここからだ！ 『つばめがえし』！」

「『がんせきふうじ』」

必中の攻撃を仕掛けたが、岩石によって進行を遮られ技は不発に終わってしまった。

「そのまま『バレットパンチ』だ」

「足下を強く踏んで」

先制できる『バレットパンチ』なら『がんせきふうじ』も間に合わないという判断だったが、ガブリアスは足下の岩を踏みしめ――

鍬が砕いたのは捲られた岩だった。

「畳返しか。コスモス、ここにきて冴えているな」

「そんなのアリ!?!」

思わぬ策にギャララーも沸いた。

『バレットパンチ』も失敗に終わったところに、横薙ぎに払ったガブリアスの爪が襲い掛かった。

『つばめがえし』!」

『ドラゴンダイブ』

この一撃もガブリアスが上回った。

「ハッサムでも力負けしちゃうか……」

「それもあるかもしれないが一番はガブリアスの体幹にある。体の重さはハッサムのほうが上、それでも力学的エネルギーが保存されることで強い衝撃インパクトを生むんだ」

「ハッサム、だいじか!?!」

『がんせきふうじ』

休む暇さえ与えない。

今度は防御ではなく純粋な攻撃として放たれた岩石がハッサムをフィールドに埋めてしまった。小刻みに岩が揺れていることから、ハッサムはなんとか脱出しようとしているのだろう。

「これでボールには戻せませんね」

「参ったなあ、ステルスロツクがんせきふうじに岩ストーンとオレたち岩ストーンに泣かされすぎじゃんね」

「ステツク？」

「ああああああ！ しつかりしろ、オレ！」

視線を下げていたヤシオだが頬を両手で打ってガブリアスを、そしてそのさらに先のコスモスを見据えた。

「やっと目え覚めた。切り換えてかなきゃなんね。起きたまんま寝てたらしようがないべ」

ここでコスモスはヤシオの色が微妙に変化したことに気がついた。

「よく分かりませんがそれはよかった。『じしん』」

『つるぎのまい』！」

埋まったままではかわすことが困難と判断し、補助技を指示した。攻撃を受けつつもハッサムは自らの攻撃力を大幅に上昇させ、岩を砕いてガブリアスに迫った。

『バレットパンチ』！」

『がんせきふうじ』

「その角度なら岩は右だべ！ ガブリアスはながるからおつきくカーブだ！」

再び岩石によって進行を妨げられたが、ヤシオから軌道の指示を得たハッサムはうまく回り込んでガブリアスの背後をとった。

『ドラゴンダイブ』

「げっ!？」

しかしそれすらもコスモスの読み通りだった。ガブリアスは背中にも目がついていてたかのように真後ろに技を放った。今回もハッサムはかわすことができなかった。

パニックになるかと思われたが、ヤシオの口の端が上がった。

「なーんちゃって。ハッサム、そのままガブリアスにしがみつけ! 『バレットパンチ』だ!」

転んでもただでは起きないのはヤシオも同じだった。

なんと、ハッサムはガブリアスを羽交い締めにする形をとり、そのまま連続で『バレットパンチ』を見舞った。

これは効いた。ガブリアスに初めてダメージらしいダメージが通ったのだ。

「おわずぞー! ガンガン殴れ!」

ヤシオは拳をブンブン振り回した。当然ハッサムはそれどころではないので見てはいない。

ガブリアスに連続で技が決まる。これは相当効いているはずだ。

『つるぎのまい』でパワーが上昇している分、ガブリアスでも簡単には振りほどけないということか」

「バレパン効いてるよ！ あのままタコ殴りにしちゃえば勝てるんじゃない！」

シンジョウが答える前にエルメスが溜め息をついた。

「それは無理でしょうね」

ガブリアスにしがみつき、圧倒的優位に思われたハッサムが自ら拘束を解き、倒れ付した。よく見ると体中が傷だらけになっている。体力も限界に近いようだ。

「さめはだ。ハッサムの技が当たると同時にハッサム自身も弱っていく。あんなふうにし
がみついでいれば尚更だ」

ジャラランガから受けたダメージもあるしな、とシンジョウ。

「くうーっ！ あのままのしちまえると思っただけど甘かったか。ハッサム、まだやれっ
か？」

ハッサムは右の剣を挙げてヤシオに応えたが明らかに満身創痍だった。

「それでこそ！ テクニックあつてのテクニシャンだんべ。ハッサム、『つばめがえし』
！」

『じんしん』

フィールド全体が強く揺れるも、今回は用意があつた。ハッサムは先ほどの岩石を踏
んで飛び上がった。

「畳返しに対抗してロイター板か、面白い」

「あたしからすればあんたの頭の中も相当面白いけどね……」

「『がんせきふうじ』」

「狙いはガブリアスだけだ！ そのままガーリ砕いてやれ！」

パワーとスピードに押され気味だったこれまでの展開から、やっと両者が互角になる瞬間が訪れようとしている。

もうかわす必要はない。飛んでくる岩石を『つばめがえし』で次々に砕き、ハッサムはガブリアスに迫った。

「『ドラゴンダイブ』」

そしてそれはガブリアスに技の準備のための時間を与えることになった。

「一発かませ！ 『バレットパンチ』！」

ハッサムとガブリアスの最後の激突は真正面からのぶつかり合いとなった。

「ハッサム！」

なんとか着地したハッサムだったがそのまま仰向けに倒れ、力尽きた。

「ああ。せつかく頑張ったのに……」

「ハッサムの強みである近距離での打ち合いを許さなかったコスモスが上手かった。あとは、さめはだと『ステルスロック』の微差が響いたな」

そう言いつつもシンジヨウはガブリアスから目を離さない。

「ハッサム戦闘不能。ガブリアスの勝ち」

「ダメだ。今のオレにはガブリアスを正面からのしちまうだけの力がねえ。ポケモンたちが頑張ってくれてるのはほんつとにでれすけで嫌んなつちまう」

「……少々驚きました。ガブリアスに何か嫌な思い出でも？」

「まあそんなところで。だからこうするしかなかった」

すると、爪を振り上げ勝ち誇っていたガブリアスが崩れ落ちた。

「ガブリアス、戦闘不能」

「なんで!? ヤシオはガブリアス相手にさっきのバレパンくらいしかまともに戦えてなかったのに」

「だからこそその苦肉の策だったんだろう。俺もさっきまで気がつかなかったくらいだ」

倒れたガブリアスをボールに戻そうとしたコスモスは何かに気がついた。

「猛毒ですか」

そう、ガブリアスが倒れたのは猛毒のダメージによるものだった。

「えっ、てことは『どくどく』!？」

「ハッサムがガブリアスの背後を取った時に仕込んでおいたんだろう。さめはだのダメージを嫌わなかったことが効を奏したな」

「それより彼の最後の1匹が気になる。持っているボールはあと2つ。専門だから分かるんだがその片方からは炎タイプ特有の気配を感じる」

「いやそんな雨降る前は匂いで分かるみたいなこと言われても」

ヤシオの最後の1匹の予想でアルナとシンジヨウが盛り上がっていることも露知らず、ヤシオはもはや何リットルになるかすら分からない冷や汗を拭った。

手持ち3匹でやっと倒したガブリアスだが、手放して喜ぶことができる結果とは言い難いようだ。

「やっぱりガブリアスはきちい。そのあたりはオレの宿題。ハッサムもみんなも、ものすごく頑張った。今日はそれでよし」

「ここで仕切り直しとなった。」

「エストル」

コスモスはジャラランガエラストルを繰り出した。

「絶対勝つ！」

ヤシオが最後に繰り出したのはマツギヨだった。

「最後の1匹はマツギヨでしたか」

「うーん、そりゃ違うな」

「どういうことですか」

「マツギョだけじゃねえべ。オレもいるんさ。だから2匹だ！ 見せてやれ、『ほうでん』！」

一瞬の雷撃が弾けた。

「『おたけび』」

スターミーの『サイコキネシス』の時と同様にジャラランガの正面に音波による壁が展開された。

「そこだ！ ぐいっとでつかく曲げろ！」

コスモスがヤシオの指示の意図を汲みかねたその間に『ほうでん』が壁を跨ぐ形でジャラランガにヒットした。

「そんな芸当がありましたか」

「ヤシユウ男児なら、らいさまを味方につけなきや嘘だんべ。そして何より意表がつけるってな。『ねつとう』！」

「『スケイルノイズ』」

タイプ一致にくわえて地の火力にも差がある『スケイルノイズ』の威力が上回った。

「やり返すぞ。『ほうでん』！」

今度も回避しようとしたジャラランガに『ほうでん』をコントロールすることで命中させた。

『ほうでん』！』

かわすかき消すかの指示をするかと思われたが、あえてそうせずコスモスはゆつくりと呼吸を整えた。そして腕と脚のストレッチを行った。

「使いどころです」

一言呟いてコスモスは突然踊り出した。

繰り返す、踊り出した。

当然アルナは戸惑った。

「不思議ちゃん？ もしくは天然ちゃんなのあの子は!？」

「それは否定しないが。まあ見ていれば分かる」

踊りの両腕を回し、そして龍の口のように大きく開く独特の動きがジャラランガとシンクロした。

ジャラランガの踊りがその鱗を震わせる。擦れ、弾ける音が響く。そしてジャラランガは大きく跳躍した。

「いきます、『ブレイジングソウルビート』」

『ねっとう』！』

『ねっとう』が命中するも、ジャラランガは溜まった振動エネルギーを竜のオーラとともに撃ち出した。

「まともにもらうな！ 『ほうでん』！」

少しでもダメージを和らげようと『ほうでん』を放ったが効果はどれほどあったか。マツギョへのダメージは相当なものだった。

『きあいだま』

『ほうでん』

激しく技を撃ち合うマツギョとジャラランガ。遠距離の攻防とは思えないほどの迫力だった。

予想外のマツギョの健闘にアルナは拳を握りしめた。

「いけいけ！ がんばれマツギョー！」

「問題はこのあとだ」

「えっ」

頼まずともシンジヨウが解説モードに入った。

『『ブレイジングソウルビート』は攻撃と同時に全能力を上昇させる。つまり一つ一つの動作が必殺を生むんだ』

「ええー！ やつとガブリアスを倒したのに。コスモス、ガチすぎるっしょ……」

「それがジムリーダーというものだ」

『スケイルノイズ』

「ジャラランガの足下に『ねっとう』！」

不可解な指示の真意はすぐに判明した。

「湯気による目隠し。シンプルですがいい手です」

しかしそんな小細工が通用するコスモスではない。

「エストル、気にしなくていいわ。そのまま正面に『きあいだま』」

最初よりも一回り大きくなったエネルギー弾が撃ち出された。

『ほうでん』！

マツギヨは電力を調整し、自身の前に展開した。その『ほうでん』が網のように『き

あいだま』を捕らえる。

「クーリングオフだ、返してやれ！」

そしてそのまま押し返した。

音波で攻撃する『スケイルノイズ』ではこうはいかない。

「おお、すごい！ でもジャラランガは素早さも上がってるんでしょ？ 避けられちゃ

うんじゃ」

「……いや、よく見ろ」

飛び退こうとしたジャラランガだったが、そのまま膝をついてしまった。

「あつ、麻痺だ！」

「あれだけ『ほうでん』を受けていればおかしいことではないな」

シンジョウの長きに渡る戦いの経験は、『ほうでん』による麻痺の追加効果の発生確率は同じ電気タイプ、『10まんボルト』のその3倍ほどであるという概算を算出していた。

「運に頼つたとも、当たりを引くまで粘つたともとれる。ただ、この場では正しい判断だったことは間違いない」

ジャラランガは跳ね返された『きあいだま』をかわすことができずフィールド後方の壁に叩きつけられた。

「ジャラランガ戦闘不能。マツギヨの勝ち」

「ここまで追い詰められたのはいつ以来かしら」

ジャラランガをボールに戻しながら、コスモスは目の前の敵への認識を新にした。

二面性を体現するヤシオ。こちらが押せば同様に押し、逆に引けば同じく引いてくる。脅威ではないが不思議な印象を受ける相手だった。

だからこそ、この1匹を残していた。

純粋な火力でその色を、その情熱を、その闘志を消し飛ばす。ラフェルリーグ最後の

番人が最後に残っていたポケモンはそんな役目を担うに相応しかった。

「それではまいりましょう」

コスモスが繰り出したのはサザンドラだった。

凶暴ポケモンの別名を持つその姿はこの戦いが最終局面に突入したことを暗示しているかのようだ。

残りの手持ちの数で追いついたヤシオがほつと胸を撫で下ろした。

「これでそつちもやつと最後か」

「いえ、違います」

「おっ?」

コスモスがにこりと微笑んだ。

「サザンドラだけではありません。私もいるのであと2匹。今度はこちらからいきます。『あくのはどう』」

サザンドラが奥底からふつふつと沸き起こるオーラを黒い帯のように発した。

「やつべ、『ねつとう』」

ヤシオとしてはそのまま押しきりたかったが、軌道をわずかにそらすのがやつとだった。

「火力高え。マツギヨ、慎重にいこうな」

「『だいもんじ』」

「『ねっとう』」

今度は水が炎に勝った。しかしタイプで有利なサザンドラにダメージはあまりなく、体が濡れた程度で済んだ。

「もういちど『あくのはどう』」

「岩に隠れるんだ！」

身を潜めるもその岩が砕かれてしまった。

「『ほうでん』！」

「『あくのはどう』」

技を放とうとしていたため、互いに回避行動がとれなかった。サザンドラは麻痺を免れたが、マツギヨは怯んでしまった。

「『ラスターカノン』」

「うわわ動いてくれー！」

祈りは届かず光の束によってマツギヨはさらにダメージを受けた。

「『あくのはどう』」

「『ねっとう』」

今回も軌道をそらすのみ、しかしヤシオは続けて指示を飛ばした。

『ヘドロばくだん』！』

一瞬の隙を突いて技が決まった。タイプ不一致なうえに十分な溜めをつくらずに放った分威力はあまり伸びない。

「サザンドラ!？」

状態異常はみられないが、なぜかサザンドラが苦しんでいた。

シンジヨウがいち早くそのカラクリに気づいた。

「技の順番の妙だ。『ねつとう』で体を濡らして『ほうでん』の通りをよくする。そしてそこでできたわずかな傷に『ヘドロばくだん』を強引に練り込む」

「傷に塩、いやヘドロか。ヤシオもやることえげつないね」

しかしヤシオとしては別の成果が欲しかった。

「うーん、火傷も麻痺も毒も引かねつか。まあ、とにかくこいつは状態異常のデパートだ。決まると痛えど」

「ご忠告ありがとうございます。『ラスターカノン』」

また岩陰に隠れてマツギヨは難を逃れた。

『あくのはどう』

「ずっと隠れてらんね、『ほうでん』！」

『ほうでん』でやっと互角になったが、サザンドラには余裕があった。

「このままPPが枯れるまで撃ちますか」

短時間に同じ技を連続すれば打ち止めがきてしまう。この戦いに限っていえば『ほうでん』はヤシオたちの生命線だ。

「くつ、マツギョー！ 一旦やめだ。『ヘドロばくだん』」

この技なら分かっていれば回避は難しくくない。サザンドラはひよいとかわした。

「『ラスターカノン』」

「こつちもよけろ！」

「『あくのはどう』」

「かわせ、あつ無理だった」

スピードではやはり遠く及ばない。

サザンドラは次々に技を繰り出す。

それはまるでコスモスとシンクロしているかのよう。彼女も高揚を隠せない。

「こんなに楽しい勝負は久しぶりです。ヤシオさんも楽しんでますか？」

「も、もちろんだんべな！ マツギョ、右！ いや違うやつば左！」

地上を這い回って逃げ惑うマツギョとあわあわと指示を飛ばすヤシオ。

対するサザンドラは空中から悠々と攻撃を続ける。

合間に放っている『ねつとう』や『ヘドロばくだん』はサザンドラに当たってはいる

ものの先ほどのようなコンボでない分効果は薄い。戦況は依然としてコスモス有利だった。

「私にはわかりません。そのように守勢一方でも、こちらへの一手を練っている。いや、そう私が見せ掛けられているだけなのかもしれないですね」

「照れんなあ。つと、あぶね！」

『ラストアカノン』がフィールドごとマツギヨを薙ぎ払った。ここまでのダメージの蓄積もある。

「思うに、ポケモンとは実に不思議な生き物です。彼らには草を操る技も水を踊らせる術も、炎を纏う態も思いのまま」

「お、おう！ マツギヨ逆だ逆！」

マツギヨはその場で跳ねることなどでなんとか攻撃を回避した。汗まみれで指示を飛ばすヤシオも気が気でない。

「しかしそんなポケモンの中でも星を墜とす業は誇り高きドラゴンタイプの最終形態にのみ許された特権。ヤシオさん、リーグに手を伸ばさんとするトレーナー。あなたとあなたが育てたポケモンは本当に強かった。心からの敬意を表し最後まで全力でお相手します」

コスモスが右手を挙げるとサザンドラは真上へと上昇した。そして全身のエネルギー

ギーを体内に集中させた。

「ドラゴンの奥義をここに。サザンドラ、『りゆうせいぐん』！」

この試合で初めてとなるコスモスの力の入った指示だった。サザンドラは大きく口を開いてフィールド上空に深紅の弾を発射した。

「あれは……?」

『りゆうせいぐん』。ドラゴンタイプ最強にして最も習得が困難とされている大技だ。使い手は数少ない。そう見られるものではないな」

サザンドラが撃ち出した弾が弾けた。するとその一つ一つが流星のごときエネルギーを内包した『竜星』と化し、真っ直ぐにマツギョへと襲いかかった。

『りゆうせいぐん』は俗にいう撃ちつばなしの攻撃だがコスモスが鍛えに鍛えたものなら特別だ。竜星はその全てが正確無比に敵のポケモンを狙う。回避も防御も不可能だろう」

シンジヨウの言葉通りマツギョは降りしきる竜星に吞まれていく。その様子はあまりにも酷で、そして美しかった。

やがて煙が晴れ、ひっくり返りピクリとも動かないマツギョの姿が現れた。

「終わりましたか」

コスモスはふうと息を吐いた。彼女も彼女なりに張り詰めていたようだ。

「ありがとうございます。とてもいい勝負でした」

「……」

そしてヤシオを見た。

彼の色は『りゆうせいぐん』の圧倒的な破壊力の前に暗く濁って――

「マツギョ戦闘不能、サザンドラの勝ち。よって勝者、ジムリーダーのコ」

「(じ)やつペ言つてんじゃん」

いなかった。

「はい?」

執事が聞き返したが答えは予想外の形で返ってきた。

『『ヘドロばくだん』!』

突然息を吹き返したマツギョが一矢報いた。上空のサザンドラもこれには反応できずかわせない。

「なぜ!? マツギョは『りゆうせいぐん』のダメージで戦闘の続行が不可能なはず」

「言つたべ? オレのマツギョは状態異常のデパートだ。『ねつとう』の火傷、『ほうでん』の麻痺、『ヘドロばくだん』の毒、そして」

よく見るとマツギョの体の傷が塞がっている。ジャラランガとサザンドラとの連戦によるダメージの大部分が癒えているようだ。

「最後のーっはこいつ自身が『ねむる』こと！ 人もポケモンも寝りやあだいたいハッピールだ。マツギョ、斜め下に『ねっとう』」

それはスターミーが『ハイドロポンプ』でやったものの応用だった。水流によって押し出されたマツギョが猛スピードで上空のサザンドラに迫る。

「っ！ サザンドラ、もういちど『りゆうせ』」

『discharge』！

再び竜星に襲われるその刹那にこの日一番の雷撃が炸裂した。

そして結果は目で追うまでもなかった。

その凶暴さを完全に失ったサザンドラがゆっくりと墜落し、倒れた。

「サザンドラ戦闘不能、マツギョの勝ち。よって勝者、チャレンジャーのヤシオ」

ヤシオは口をパクパクさせ、固まった。そして。

「おおおお！ いやったああああ！」

まるで幼い子どものように喜びを爆発させた。

「ありがとうございます！」

「こちらこそあんがとます。とても、とつつつてもいい勝負だったべ」

コスモスもヤシオも最後のポケモンをそれぞれボールに戻した。

そしてコスモスはトレーナーズサークルを出てヤシオに歩み寄る。

「ヤシオさん、お疲れ様でした。これがこのジムを制した証。ジークバッジです。どうぞ持っていてください」

「おおつ、かつけえ！」

それは門番に、竜姫に、竜騎士に、竜の魔女に、そして不落の飛竜に打ち勝った天を墜とす英雄の印。

主が敗れたにも関わらず執事はどこか嬉しげだった。

「まさかお嬢様に勝つてしまわれるとは。いやはや。それにしてもお嬢様、いい表情でした。撮らせていただいた動画を是非とも奥様にお送りして差し上げたいのですが」

「どうやら審判の傍ら懐のビデオカメラを回していたようだ。Z技のポージングまでばっちりとれているとのこと。」

「カメラごと燃やされたいのですか、ブロンソ」

執事は一步下がって深々と頭を下げた。

「見れば見るほどよくてきてんなあ……」

ヤシオは手渡されたバッジをしげしげと眺めている。そんな彼にコスモスにはどうしても聞きたいことがあった。

「ひとつ聞いてもいいですか。どのようにして最後の作戦を？」

はにかんでいたヤシオだったがもはや隠すことでもない。正直に答えた。

「サザンドラを見た瞬間ピンときた。そして戦っているうちに確信に変わった。こいつは『りゆうせいぐん』を切り札に隠し持つてる、ってな。最後の1体なら引つ込めはない。もし使うとしたらトドメにぶつ放してくるんじゃないかって思ったんだ」

それまでに見せたタイプ一致の『あくのはどう』、苦手な氷とフェアリー対策の『だいまんじ』と『ラスターカノン』。特防方面にタフなマツギヨへの確実なトドメとするにはさらに高い火力が必要だった。

『りゆうせいぐん』は強力な分使えば特攻が大きくなる。そのタイミングに合わせてR、いや『ねむる』ことでチャンスを作れると思ったってこと」

タイミングを間違えれば即敗北という賭けだったが首の皮一枚繋がったようだ。

そこへ観覧席の3人も降りてきた。

「おめでとう、ヤシオ。どえらい勝負だったよ」

「いやー。わざわざありがとうな。えーっと、アルマ」

「アルナだつ！ こちとらイツシユからわざわざ来てんの！ いい加減覚えろっ！」

「おおそっけ!! オレもイツシユだ。ご飯も旨いしご飯も美味しい、いいとこだっぺ」

「ご飯しかないのか、という言葉葉をこらえるコスモスとシンジヨウはやはりジムリーダーの器だ。」

「えっ、イツシユ!? イツシユのどこよ?」

「ヒウン。ジムは奇抜だけどアイスはすげえんよ」

「ええー！ あたしライモン！ ジョインアベニユーですぐじゃん！」

同郷だったことはさすがに驚きだったが、垢抜けないヤシウ節（本人談）で話すヤシオが大都会の出身だったことはアルナにとって実はそこまで意外でもなかった。

（素が出た時普通に喋ってたしね）

シンジヨウがヤシオに右手を差し出した。

「俺からも祝わせてくれ。ラフエル地方のジム制覇、本当におめでとう」

「あんがとます！ あれ、そういえばあーたもジムリーダーなんでしたっけ」

「ああ。いつか勝負したいな」

エルメスは握手する2人を笑顔で見つめていた。

「みなさん、ありがとうございます。おかげさまでいい記事が書けそうです」

「記者さん、オレについては嘘でもいいんでカッコよく書いてくださいね」

「私も可能な限りダイナマイトセクシーに描写してもらえるとありがたいです」

無茶なお願いをする挑戦者と門番。
チャレンジャー ジムリーダー

「それでは私はこのへんで失礼します」

「帰りは連絡船だろう？ 港までオレが送っていこう」

すぐに戻る、とシンジヨウはエルメスとジムを出て港へ向かった。

コスモスとアルナはそんなシンジヨウの背中とヤシオを見比べた。

「人生経験の差、ですね。アルナさん」

「そだねー」

「……オレ本当に勝ったんだよな!？」

ルシエシティ外れの港でエルメスは船を待っている。そしてそれをシンジヨウが見守っていた。

沈黙に耐えられなくなるのは当然。

「シンジヨウさん。ここまで送ってもらえればもう大丈夫です。それとも私にまだ何かご用でも?」

ナンパ? と冗談めかしてエルメスが笑った。

しかしシンジヨウは笑わない。それどころか表情を険しくした。

「それはこっちの台詞だ。ここでの用はもう済んだのか?」

「はい?」

「悪事だけでも十分なのに、まさか劇団もやっているとは知らなかったな」

エルメスは一瞬驚いたものの、微笑んだ。

「我ながらよくできたと思っただけです」

首から顔の皮を剥ぎ、着ていた服を脱ぎ捨てるとそこにいるのはもはや記者のエルメスではなかった。

長い睫毛に整った顔立ち。すらりとしながらも出るところは出た凄味のある女優のようなスタイル。

そして何よりその口元はエルメスだった頃から常に笑みを湛えている。

バラル団幹部、ハリアーがそこに立っていた。

「あらためてご機嫌よう。遠きジムリーダー」

「そんなことはいい。本物のエルメス女史はどうした」

「まあ、この一時に他の女の話をするなんて。……彼女なら今頃上司にどやされながら必死で原稿を詰めているでしょうね。嘘だと思ふならラジエス中央情報局に問い合わせてみては？」

その睫毛に震えはない。嘘ではなさそうだ。

「それにしてもどこで気がつかれたのですか？」

「匂いだ」

ハリアーは袖の匂いを嗅いだが、すぐにからかわれていることに気がついた。

「貴方も人が悪い」

「本物の悪党に言われるとは光栄だ。お前が真似たのは見た目だけ。中身はバラル団幹部のままだった」

さらに続けた。

「俺とエルメス女史とは面識こそないが共通の知り合いがいる。初見で本人でないことは分かったし、戦いを見る目が明らかに記者のそれではなかった。それに勘も鋭すぎたな」

だからこそシンジヨウはアルナとエル^{ハリ}メスの間に座ったのだ。

「正体が分かっていたのならジムで言ってくれば良かったものを。そうすれば4対1でしたのに。そんなに2人きりがお好みでしたか？」

言いながらハリアーは艶やかに科を作ってみせた。

状況が状況なら蠱惑的に映っていただろう。

「俺もジムリーダーの端くれだ。神聖なジムをお前のような輩に荒らさせるようなことはしない」

言外にジム戦の只中にあり激しく消耗したコスモスとヤシオ、そしてバラル団とのいざいざに巻き込まれるべきではないアルナと執事への配慮があった。

「そうでしたか。まっこと、良い勝負でしたね」

「どうせそうは思っていないんだろう」

ハリアーがにまあ、と笑った。

「ええ。ヒトがポケモンを使役し、自ら傷つくことなく戦わせる。嗚呼、なんと嘆かわしいことでしょう。パートナーとの絆だの信頼だのと謳う忌々しいトレーナー。だからこそ我々バルル団はその歩みを止めてはならない」

それは地下の暗さが水を研ぎ澄まして大河を作るように。

「ヒトがもたらす秩序など所詮は砂上の楼閣。彼らがいうところの生存競争は即ち殺戮を意味する。文明を持ったから？ 宇宙に選ばれたから？ そんなことに意味がありませんか？」

「私たちは間違っていない。何ひとつ、ね。貴方もいつか解るはずです。その吐き気を催すような理想はそれ以上に穢れた現実に押し潰されるためのものではない」

黙って聞いていたシンジヨウが口を挟んだ。

「それは違うな。現実の薄汚さに立ち向かうためにヒトはみな美しく生きる、いや、そうあろうとするんだ。バルル団の御大層なお題目は知らないが、結局はお前の変装と同じ。形を繕っても中身が伴っていないんだ。そんな連中に好き勝手やらせるほどラフエル地方も俺たちトレーナーも腐ってはいない」

「余所者に何が解るのです」

「だからこそだ」

一瞬ハリアアの目つきが険しくなったが、またすぐに薄ら笑いを浮かべた。

「……お話になりませんね。私の興を削ぐとはとことんつれない男」

ハリアアはサザンドラを繰り出した。コスモスが育てた個体とは全てにおいて異なる方向の鍛え方をされているのが見てとれる。

しかし技を指示することなくその背に跨がった。

「ここで俺を潰していかなくていいのか？」

相手は悪の組織の幹部、何も遠慮はない。

もちろんシンジヨウにはハリアアが牙を剥いて襲い掛かってくるのなら迎え撃つ覚悟も用意もあつた。

「あら、そんなに熱くお誘いいただけるとはなんて。でも、何もこのような不粋な場所ですうする必要はないでしょう？」

しかし、この場でハリアアにその意思はなかつたようだ。次のアクションを起こす前にサザンドラはシンジヨウを掠めて飛び去つた。

シンジヨウは念のためリザードンを繰り出し、ハリアアが空の彼方へ消えるまで警戒し続けた。

そして数分経ち、リザードンをボールに戻してジムへ戻るべく歩を進めた。

「……腹芸なんてするもんじゃないな」

やむを得ない状況ではあったが、この場で戦えば港の施設や場合によっては通りすがった人々にも被害が及ぶ可能性があった。PGにあえて通報しなかったのもハリアーを過度に刺激しないようにするため。

欲をいえば何らかの情報を聞き出すか倒して捕縛するところまでこぎ着けたかったが、極力戦いを避けたいこちらの事情を気取られない程度に敵を煽りつつルシエシテイからの撤退を確認できたのはひとまず上出来だった。

しかしすれ違うその刹那、確かに聞こえた。

『次は強者が集う祭典で』。

『ネイヴユの大晦日』

「おつ、トオル。買い物帰りか？」

「はい。今晩は鍋にしようと思つて」

「鍋かあ。いいよな、団らんの象徴つていうかさ」

トオルの新たな友人、ザックは何でも屋としてネイヴユ復興に尽力していた。時々その仕事を手伝うこともありこうして会えば立ち話をするほど仲がいい。

「鍋は1人より2人、2人より3人だ。ユキナリさんは今日帰ってくるんだろ？」

「そうみたいです。今から楽しみで楽しみです」

「そつか。よろしく伝えてくれよ。あつ、よいお年を！」

そんじやあな、とザックはフワライドに掴まって飛び去つていった。

荷物を積んだソリを引きながらトオルは雪原を足早に歩く。

ジムでの一件以来ネイヴユに留まつて何かと多忙なユキナリにかわつて雑用をしているのだが今日は特別。年末ということもありPG本部への出張からユキナリが久々に帰ってくるのだ。

「とりあえず鍋だよ。大晦日には鍋つて昔から決まつてる。そうだよな、ブースター？」

別に決まっつてはいないが。

とはいったものの鍋^カへの道のりは険しい。

壊滅的な被害を受け住民の大部分が避難したこの街で物資を調達するのは一苦勞だ。定期的にやって来る輸送船を利用するかネイヴユを配達区域から外していい命知らずなネット通販サービスに頼るか^カの二者択一となる。

そこでトオルが選んだのは後者、ラフェルオフィスサービスが運営する通販サイト『ラフ天市場』だった。その理由は港の集配センターへ自ら取りに行くことで割引になるからという切実かつ単純明快なもの。運動もかねて港まで行き、予算からみてだいぶ奮発した鍋の具材セットを受け取ったというわけだ。

ばらばらと粉雪が舞っているが薄く陽が差しており歩くうえで特に支障はない。あとは帰って仕込みを済ませてあるつまみとともにユキナリが戻ってくるのを待つだけだ。自然と足取りも軽くなる。

トオルが世界一周旅行を当てラフェル地方に来てからしばらく経つ。ジムについての論文を執筆するなかで生じた迷いを払拭できたのがこのネイヴユだった。彼のトレーナーである以上やはり勝ちたいという気持ちに火をつけてくれたネイヴユジムとユキナリへの感謝の念は尽きない。

だからこそこのような雪中行軍も苦ではない——とも言っていられない事態となった。

突然粉雪が豪雪となり、立っているのも困難なほどの吹雪が巻き起こった。たまらずトオルはその場に膝をついた。

ユキナリが口を酸っぱくして言っていたことを思い出す。吹雪を体に受けてはいけない。どんな方法でもよいから一旦身を隠す方法を考えろ、と。

遮蔽物のない雪原だ。道具はないがひとまず積もった雪を固めて塀を作ることですべてを確保した。そして魔法瓶に入れておいたマトマスープを一口。

「ブースター、暖をとらせて」

いくらウォームテックを着込んでいてもさすがに寒い。体温が高く寒さにも滅法強いブースターの存在が何よりありがたかった。そうでなければあの日のヤシオのようになつてしまつていただろう。

(さて……)

ネイヴユの天気は変わりやすいがさすがに限度というものがある。さらに、この感覚には覚えがあつた。

(ポケモンのとくせい、そして技か)

ユキナリ戦でユキノオーが見せた『ゆきふらし』からの『ふぶき』のコンボに似てい

る。技の主こそ捉えられないが明確にこちらを狙っていることは間違いない。

そうなる問題となるのはそれが野生のポケモンかトレーナー付きのポケモンかなのだが、それについてもトオルには確信があった。

よく見ると雲が立ち込めているのも吹雪いているのもきれいにトオルの周辺のみ。ここまでピンポイントならば指示を出しているトレーナーの存在は疑いようがない。

このまま隠れ続けていてもじり貧だと判断した。トオルは呼吸を整え、堀から顔だけ出して叫んだ。

「どこの誰だか知りませんが何の用ですか！ こちらに戦う意思はありません！ いい加減寒いんでそのくらいで勘弁してください！」

最後のは切実な願望。

トオルの叫びは吹雪の轟音のなかに消えていった。これはさすがに無駄なように思われたがそうでもなかった。

吹雪がぴたりと止み、雪原をこちらに向かう足音が聞こえてきた。誰かがいる。そしてその誰かはトオルに敵意を持っている。

「永久の氷獄へようこそ。歓迎いたしますわ」

凍てつくような寒さのなかでもその女性の声はよく通った。

どんな荒くれ者かと思いきやそこにいたのははつきり見ずとも明らかかな、こんな場所

に似つかわしくない妙齡の美女だった。

御丁寧にボールから出して連れてくるキュウコン・ツンベアー・バイバニラの3匹がこの状況をつくりだしていることもすぐに分かった。

さらに彼女についてトオルにはもうひとつ判断材料があった。

「PGの方ですか？」

うつすらと見える彼女が纏った制服。ネイヴユに駐在するPGが着ているものによく似ていた。

「ご明察。私はネイヴユ支部長のカミーラ。見かけない顔ね。さらにソリなんて引いてジムへ向かうなんてドがつくほどの不審者とお見受けします。最近何かと物騒だしここで片付けておきましょう」

カミーラが笑った。紅い唇が血の色に見えた。

トオルの第六感が最大音量で悲鳴をあげていた。この女はヤバい。理由こそ分らないが本気で不運な通りすがりを挫こうとその鎌首をもたげている。

「ちよつと待つてください、僕はユキナリさんのところでお世話になっているトオルといます！ 怪しい者ではありません！ 必要ならトレーナーカードも学生証も見せます！」

「悪いけど怪しいかどうかはこつちが決めるの。そつちでやっていいのは辞世の句をひ

ねることくらいね」

もちろんこれまでの人生を5+7+5で集約することなんてできるはずもない。警察呼びますよ、も相手が警察なら通用しない。こうなると最早話し合いでの解決は望めないのでトオルに残された手は少なかつた。

「それでは遠慮なくいかせてもらいましょつか」

バイバニラの『れいとうビーム』がトオルを襲う。咄嗟に身を伏せて体とソリの荷物を守った。

「隠れていても無駄。『めざめるパワー』」

あれだけ苦労して作った雪の塀があつさりと溶けていく。自身は氷タイプながら炎タイプの『めざめるパワー』を撃っているようだ。

そして寒さと熱さのダブルパンチは相当にきつい。

「危ないでしょうが！ PGがそんな横暴、許されるとでも思ってるんですか！」

「私の辞書に乱暴なんて文字はないの」

「酷い落丁だな!？」

続いてキュウコンの『ふぶき』にツンベアーの『いわなだれ』と手を緩める気配がない。い。

たまらずその場から逃げようとするが雪深く足元が安定しない。雪国出身でないト

オルにはフィールドからして酷だった。

「さあさあ。楽しませて頂戴な」

このカミーラ、とにかく話を通じないタイプの人種であることだけは確実なようだ。暖かいジムであつあつの鍋をつつくためにもここを突破しなければならない。

「やるしかないか。ブースター、頼む」

今の純粋な手持ちがブースターしかないトオルは数のうえでは不利だが、炎タイプだったのは幸運だった。

氷は熱で溶かすのみ。地の利こそ相手にあるが、それでも全く戦えないわけではない。

「ふうん、そのブースターが……」

繰り出されたブースターを見てカミーラは顎に手をあて何事か考えている。

ならばとトオルが先に動いた。

「『だいまんじ』！」

燃え盛る炎がバイバニラを襲った。これは相当効いたようでバイバニラは真後ろに倒れた。

「よしー！」

「なにが？」

たった今ブースターに倒されたはずのバイバニラが背後から再び『れいとうビーム』を放った。

『みがり』か。ブースター、今度はツンベアーに『でんこうせっか』だ！

体温が雪を溶かすため雪原でも脚の回転が落ちることはない。ブースターは体ごとツンベアーにぶつかっていった。とにかく的を絞らせないように立ち回りつつ少しずつでも相手にダメージを与えていく。競技としてのポケモン勝負ではなかなか出てこない発想だ。

「今度はキュウコンに『だいもんじ』！」

これもヒット。ここまでカミィラは回避や防御の指示をほとんど出していない。もし舐められているのだとしたら彼にとっては大きなチャンスだ。

『フレアドライブ』！」

『れいとうビーム』

力比べだったが相性の差でブースターが押しきった。

「もういちど『フレアドライブ』！」

バイバニラを蹴りとばし、キュウコンにも大ダメージ必至の攻撃を当てた。

『れいとうパンチ』

『でんこうせっか』

元の素早さは低くとも小回りが利く。ブースターはツンベアーの一振りをかわして『だいもんじ』を見舞った。

「キュウコン、『ふぶき』。バイバナラ、『フリーズドライブ』」

「二枚抜きだ！ 『フレアドライブ』！」

容赦ない波状攻撃にもひるまずブースターは周囲に春をもたらすほどの大暴れをみせた。

「なるほど。パワーは申し分ない。シンプルだけど的確な戦法も実戦向き。さらに1対多数もやれる。ただ、手放しには喜べないんじゃない？」

見るとブースターは傷だらけになっており肩で息をしている。反動のダメージがそれだけ重いということなのだろう。

「攻撃力の高いブースターの『フレアドライブ』は一番威力が出る技だけどこれ以上連発すると戦闘不能、かといってそれ以外の技じゃ火力不足。どうするの？」

「くっ……」

これだけ攻めればなんとかなると思っていたが見通しが甘かった。キュウコンが貼っている『オーロラベール』が敵の苦手な技のダメージを軽減しているのもトオルにとっては痛い。

逃げようにもカミィラもそのポケモンたちも隙を与えてはくれないだろう。

「ん?」

するとトオルの懐のボールがカタカタと揺れた。そして一匹のポケモンが勝手に飛び出してきた。

「リオル!? ダメだって。ほら、ボールに戻るんだ」

はもんポケモンのリオルだ。どうやらブースターに代わって戦うつもりのように覚束ない足取りでキュウコンの前に立ち塞がった。

「あら。他にいるならブースター任せじゃなくていいのではなくて?」

「ちよつと事情があるんです」

カミーラが纏う殺気が一層強くなった。勝負慣れしていないポケモンに対して手加減しようという気配は一切ない。

「まあいいでしょう。ちよつとやりたいこともあつたし」

「ブースター、『だいもんじ』」

薙ぎ払うように放たれた炎の塊がキュウコンを牽制した。ブースターが秘めた熱はまだまだ有り余っているようだ。

「まだそんなスタミナがあつたの。でももう終わり。キュウコン、『ぜったいれいど』」

力量に差があればあるほど決まりやすい一撃必殺が放たれた。ひ弱なヒトの体ではブースターとリオルを庇うことすらできない。

「断頭台なんて洒落たものはいらないわ。ただ永久に凍りつきなさい」

『ふぶき』や『れいとうビーム』などとは比べ物にならない、質量を持った強烈な冷気が氷の柱となつてその場を支配した。それはまさに氷の牢獄。プリズンバツジを携えるトオルにも対処の術はなかった。

(もうだめか……ん?)

目の前に巨大な氷の壁ができていた。これは2つの氷タイプのエネルギーがぶつかりあつたことを意味するがトオルの手持ちに氷タイプはおろか氷タイプの技を使うポケモンもない。

先に事情を察したのはカミーラだった。

「リオルの『まねっこ』。当たつてもキユウコンには効かないけど悪くない出来」

リオルが『ぜつたいれいど』を真似たおかげで防ぐことができたらしい。

「前にこの技を炎で打ち砕いた憎々しいトレーナーがいたけど、まさか真似ることで防ぐトレーナーがいるとはね。存外ネイヴユも捨てたもんじやないってことかしら」

「リオル、ありがとう。休んでいいよ」

トオルはリオルをボールに戻し頭を回転させた。防いだはいがすぐに次がくる。

幸いこの壁が目隠しになり逃げる時間を稼ぐことができる。なんとかジムまで逃げることができればセキユリティを盾に籠城してユキナリが帰ってくるまで凌ぐことが

できる。

氷技が連発されたおかげでジムの方向へなだらかな斜面ができています。こうなれば走るよりもソリが速い。視界も良くなっておりお膳立てはできていた。

「よし。ブースター、『でんこうせっか』」

紐を啜えたブースターが全力で走った。それが強力な推進力を生み、高速でソリが滑り出す。

ソリはどんどん加速していく。止まる際にはブースターの技を利用すればいいのでそこも問題ない。トオルの策は見事にはまっていた。

「いいぞ。ジムが見えてきた！」

遠くに見えるジムがだんだんと大きくなってきた。オートロックを開けてすぐに閉める。モタモタしなければ問題ない。

「ブースター、ありがとう。戻って休んで」

そしてソリを乗り捨ててたつたひとりジムへの道走る。トオルはポケットの中のカードキーをすぐに出せるよう構えていた。

あと僅か。足の指の感覚はとうになくなっていたがそれでも走る気力は衰えなかった。

(あと少し！)

そして敷地内に入ったところで目の前にカミィラを抱えたツンベアーが降り立った。「スピード違反。取り締まりの対象よ」

逃げようにも他の手持ちに周囲を囲まれてしまっている。

「残念ね。ミスはなかったけど雪原で私から逃げ切るなんて夢のまた夢ってこと」

「ツンベアーの『ゆきかき』か!」

雪中での素早さが倍加するとくせいはネイヴユならばほぼ永続のものとなる。雪が当たり前の環境ゆえに見落としていた迂闊さをトオルは呪った。

「さあて。ここまでコケにしてくれたお礼に念入りにヤキをいれぼぼぼぼぼぼ」

カミィラが頭から大量の雪を被り沈黙した。

「そこまで。カミィラ、さすがにやりすぎだ」

マンムーに股がつたユキナリがそこにいた。トオルは助かったことを実感し、へなへなと座り込んだ。

「間に合ってよかった。港でザックくんに会った時からなんだか胸騒ぎがしてね。その女性はジムで僕に勝ったトレーナーを襲ってはPGに勧誘する困った御仁なんだ。トオルくん、怪我はないかい?」

「ちよつと死にかけただけです……」

カミィラは勧誘を別の何かと勘違いしているのではないだろうか。そう言いたかつ

たがとりあえず今はジムに帰りたいかった。

「あらあら。ホントに殺そうとしてたなら今頃は三途の川にいるはずなんだけど？」

雪から脱出したカミーラ。ツンベアーたちがそれをおろおろと眺めている。

「トオルくん、といったかしら。注文はつけたいけどまあ及第点つてとこね。卒業したらPGネイヴユ支部に来ない？ 辺鄙な場所ではあるけど金、権力、女、全て保証しますわよ」

「就活に文字通り命をかけたくはないので」

「あら残念」

ユキナリはトオルを助け起こし、マンムーをボールに戻した。

「さあ帰ろうか」

「はいー！」

その夜。トオルはユキナリと向かい合って特製鍋を味わっていた。

「それにしてもトオルくん、災難だったね。まあ僕の責任でもあるか。しばらくチャレンジャーに負けてなかったからネイヴユで一番厄介な女性について教えていなかった。申し訳ない」

問題はそこではなかった。

「いや、それはもういいんですけどね。なんでこの人もいるんですか」

トオルの隣で招かれざる客が蒟蒻を箸で器用につまんでいた。

「ついてきちゃったんだから仕方ないじゃないか。さすがにこの寒さのなかを放り出すわけにもいかないし」

ユキナリのお人好しっぷりにどつかりと胡座をかきカミィラは大口をあけて蒟蒻を頬張った。

「そうよ。蒟蒻は今夜食うにかきる、ってね」

「ただでさえ寒いのにこれ以上冷やさないでください——じゃなくって！ さつき僕をあれだけ殺しかけておいてなあにバクバク食べてるんですか！ あつ、ユキナリさんそつちのお肉はまだ半生ですよ」

悪びれる様子はない。

「別にいいじゃないの。男だけの辛気臭い空間に華を添えてやろうという粋な計らいと受け取ってほしいですわ。それとユキナリ、その肉団子は私のだからそつちの豆腐にしときなさい」

「辛気臭いのは否定しませんが今度は血生臭いんですけど」

「そこは否定しようか？ トオルくんも辛辣過ぎやしないかい!？」

思わぬ流れ弾。

それにしても一回りほどの年齢差があるはずの2人だが食べた言い合ったり忙しい。ユキナリは気にせず自分も食べることにした。

「さつきから遠回しに私が図々しいとでも言いたいわけ!？」

「ストレートにそう言ってるんですよ」

「わかっけないのね。私の辞書の図々しいは慎ましいの項目に載っていますのよ」

「酷い乱丁だな!？」

「そういえば会合の時にリーグマニアのPGからちらつと聞いたんだけど」

「ユキナリさんも唐突ですね」

ベガスシティのPG本部で仕入れてきたネタについて話したくてウズウズしているのが伝わってきた。

「ヤシオくん、ルシエジムでコスモスに勝ったそうだ。そのままリーグに挑むらしい」

「無事にルシエに着いたことのほうが驚きですよ」

「たしかに」

PGとしての顔を持つユキナリは峡谷でのヤシオとクロックの一件についても知っていたがあえて口にしなかった。

「ああ、ヤシオって接触しようとしたらその前に迷子になったあのトレーナーね。その

子にも唾つけとこうかしら」

「別にいいですけどどとりあえず通り魔だけはやめてくださいよ」

今度こそヤシオがミイラになってしまふ。ひよつとしたらもうなっているかもしれないが。

なんやかんやで夕食の席は盛り上がり、カミィラがどこからか出してきた酒やキー局の特番など3人はそれぞれの抱える事情をこの一時限りは忘れ楽しんだ。

「おっと。いよいよ今年も終わりか」

「ちがうちがう。来年が今年になるのよ」

心底どっちでもいい。トオルはそう思ったが蕎麦のめんつゆを水で薄めつつ聞き流した。

掛け時計が0時を告げた。

世界がどうなるうとこの瞬間は等しくやってくる。バラル団もジムも長く遠い旅路さえもそれを妨げることはできない。

今年はどんな一年になるだろう。

5+5+5から成る新年の挨拶が居間に木霊した。

ステークホルダー

元よりのお祭り好きの住民性を加味しても今日のシャルムシティは普段とはまた違う喧騒に包まれていた。そしてそれはシャルム屈指の高級ホテル、『イツシユ・ヒルトン』のロビーで人を待つ二人のうら若き女性も感じるところだった。

「すごい人だね。どこのホテルもほぼ満員だつてさ」

「そうですね」

ここシャルムシティはイツシユ地方を中心とする他地方からの移民たちによって栄えた街で、それに伴った異文化交流が盛んな街でもある。ゲゼルシャフトとゲマインシャフトが有機的に結合したような小気味良い煩雑さはラフエル広しといえどもここで見られない希有な特徴だった。

この街で暮らす人々はその末裔でありシャルム原初の混合文化を知らず知らずのうち現代へと繋いでいるのだ。

「それにしても本当なのかな、こんなに人がいっぱいいるところを暴獣が襲うなんて」「匿名のメールの信憑性については怪しいものですけど、つい最近暗躍街の前例があつたばかりですしね」

「こそそと不穏な会話をしている二人。その職業についてはもはや語る必要はないだろう。本来であれば地元のPGのみで対処するイベントの警備にこの二人を含めた本部からの助っ人たちが回されたのにはこういった事情があったのだ。」

PGとしての階級も年齢も上のツキミだったが、部下のフランシスカに対してどこか苦手意識があった。ツキミのプライドにかけてその理由は自分より若干高いフランシスカの身長などでは断じてない。

「来ましたよ」

仕事モードをフルに展開しフランシスカが呟いた。その視線の先から脂ぎった中太りの男がこちらに向かってくる。

「やおおはよう。君たちが今日のコンパニオンか。堅物揃いかと思っていたがPGも気が利くじゃないか」

彼はハロルド。有数の富豪であり不動産から飲食・物流など幅広く手掛けるラフェル経済界の重鎮である。

それと同時に何かと黒い噂が絶えない男でもありPGはあえて彼を泳がせる判断をすることで芽づる式の検挙を狙っていた。

「刑事部捜査五課のツキミです。毛ほどもコンパニオンではありませんがよろしくお願いいたします」

「同じくフランシスカです。断じてコンパニオンではありませんがよろしくお願いいたします」

示し合わせることもなくわざときつく返した。

実はツキミが思っているより彼女はフランシスカと相性がいいらしい。

ハロルドはそれを下卑た笑顔で流して金箔でコーティングされたタブレットの画面を見せた。

「今さら確認するまでもないだろうが、今日の私のスケジュールだ。シャルム交流記念日を祝して開催されるシャルムフリーダムマッチの来賓として大会を視察したのちに会食をして上がり。まあ私ほどのVIPともなればどこぞの輩が狙ってくるかもしれない。くれぐれもよろしく頼むよ」

本来組織犯罪に対応するPG五課の人間がこのような職務にあたるのは、不安定な情勢のなか警護を主に行う者たちが政府要人のほうへ回されているからに過ぎない。

「はあ……」

体よく雑用を任された形に気づいた時にはもう遅い。目の前のいけ好かない成金ダルマのお守りをフランシスカとしなければならぬのだ。

フランシスカの上司のツキミ、そしてツキミのさらに上司に当たる女性もいるにはいるのだがもし彼女をハロルドの警護にあてたら彼を三枚に卸してしまうことが容易に

想像できる。だからここは自分が踏ん張らねばとツキミの額には若さに似合わぬ皺が刻まれることとなった。

とはいえポーズだけでも警護を行ったという事実は重要で当局の姑息さが見え隠れしつつも一介のPGである彼女たちは結局のところそれに従うしかない。

「こちらへどうぞ、車を用意してあります」

「ああ」

ツキミの気が遠くなっている間にフランススカが体に触れないように細心の注意を払いつつハロルドを外へ促した。会場までは徒歩でも十分に移動が可能だが警護対象を歩かせるわけにはいかない。

シャルムフリーダムマッチは先週行われた予選を経て今日の本選に至る。これには大会を盛り上げると同時に予選から本選まで参加するトレーナーやその試合の観戦を希望する者たちを街に滞在させるというシャルムシティとしての狙いもある。

そんな思惑がありつつも参加資格に一切の制限はなく、シャルム王感謝祭に次いでこの街が賑わう一大イベントとなっていた。

ハロルドはスタンドマイクの前で一礼し、お約束通り頭をマイクにぶつけた。

「えー、ご紹介に預かりましたハロルドです。この歴史ある大会にはかねてより多額の

出資をさせていただいており、こうして毎回呼んでいただけすることに底辺感謝している次第です。えー、かつては私もトレーナーとして数々の武勇伝を残して——」

開会式でのハロルドのスピーチの九割が自慢話になるのはもはや大会名物だった。

長々と喋り、特別観覧席へと引つ込んできたハロルドをツキミはあくびの涙をこらえつつ迎えた。

「この後なのですが」

「ああ、他の来賓とはさつき挨拶を済ませた。さあ君たちもかけたまえよ。私と特等席で観戦としゃれこもうじゃないか」

「折角ですが私たちは警護がありますので」

頼まれてもごめんだという風味を言葉にたつぷりと染み込ませてツキミはフランシスカと座席後方に控えた。

「それは残念。……というか、その、暴獣だったか？ 本当に襲ってくるのか怪しいものだな。まあ君たちが私に密着して警護してくれるというならむしろ感謝したいくらいなんだがね」

「来るものには対処する他ありません」

腰にさりげなく回された腕をこれまたさりげなく避けたフランシスカ。ツキミもハロルドの腕のリーチから逃れた。

「まあいい。今日の来賓にはコスモスさんも呼ばれている。私の権限で席を隣にしてもらった。楽しみはむしろこれからだ」

その期待は分も持たず裏切られた。

「すみませんちよつと通りますようおつ！」

青年がハロルドの隣の席に座ろうとする。それは別にいい。

問題は彼がチリソースで真っ赤になったホットドッグのプレートを持っていて、しかも段差で躓いてしまったということ点にある。

するとどうなるか。ホットドッグのうちのひとつが宙を舞い、緩やかな放物線を描いてハロルドの顔へ。言うまでもなくチリソースは非常に目にしみる。

「あああああああ！」

「うわあやっちゃまった！ そのチリドッグあげますんで！」

「いるか！ つてこら、目に練り込むんじゃない！」

悶絶するハロルドの顔を青年が乱暴に拭く。

少々の騒ぎもフランシスカが用意した濡れタオルで事なきを得た。

「いんやすみません。お騒がせしました。だいじですか？」

「まったく……そもそも、そこはコスモスさんの席だろう。部外者は一般観覧席に行き

なさい」

青年は何が面白いのか目をくりくりとさせた。

「ならここで合ってます。オレはコスモスの代理で来てるヤシオっていいいます。いやー、モツさんも粋な計らいをしてくれるもんで。そんじゃ失礼しますよ。どっこらーっと」

言葉のわりに遠慮なくどっかりと座り込んだ。

ヤシオからの説明は以上だった。既に彼の興味は隣の不動産王から試合及びチリドッグに移っている。

「待て待て待て！ どういうことだね」

「言葉通りの意味ですって。忙しいんで代わりに行くけ？ って言われたんで行く！

って」

不安定なラフエルの情勢のなか、何かと多忙なコスモス。観戦も含めて勝負事に目がないヤシオは絶好のパス相手だったのかもしれない。

「それは残念だ……」

もしコスモスがこの場にいたらこの男に混ざり合った色の涯を見出したことだろう。全ての絵の具をパレットにぶちまけ、さらに金と黒で乱暴に溶いた色こそがこのハロルドだった。そんな彼をコスモスが好ましく思うはずもない。

(ツキミ警部補)

フランシスカがこっそりと呼び掛けた。

（ヤシオさんはイツシユ地方出身のトレーナーのようです。ルシエジムに問い合わせたところ事実確認が取れました）

すぐに裏をとったフランシスカも凄いが即座に対応したルシエジムサイドも凄い。ツキミはひきつった笑顔で頷くほかなかった。

「うーむ今回もコスモスさんに私のトークスキルでお楽しみいただこうと思っていたのだがな。切り替え切り替え」

コスモスが来なかったのはハロルドを避けるためではないかと思ったツキミだがあえて口にしなかった。

話の流れが理解できずヤシオはただにこにこしている。

「……名乗り遅れたな。コスモスさんの代理なら知らんはずないだろうがご存知私はハロルドだ。ラフェルの未来を照らす選ばれし資産家といえは分かるだろう」

「なるほど蛍光灯職人の方ですか」

「ちつがう！ 蛍光灯一本でのしあがるとかストイックすぎるだろう！ ついでに我が家はシャンデリアだ！」

「ハーデリア？」

「せめてシャンデラと間違えろ！」

男たちのあまりに実のないやりとりに二人のPGは呆れ返っていた。

「そんでそつちのお二人は？ ボディーガードけ？」

「仕事です」

「そうです仕事です」

意思に反していることをそれとなく伝えることも忘れない。

『それでは第一試合、ユマ選手対マツケ選手の試合を始めます。両者最初のポケモンを出してください』

アナウンスが場内に木霊するとヤシオはハツとした表情で残りのチリドッグを飲み込んだ。

「ハデリオさん、あれオレの知り合いなんです。ユマー！ 頑張れよー！」

「ハロルドな!? ハーデリアに引つ張られただろ」

残念ながら訂正は届いていない。タオルを振り、ヤシオは叫んだ。

「おおおお！ いいぞ！ そのまま押してけ——ユマには漂流中に助けてもらったことがあるんです。あれがなけりゃあオレはとつくの昔に土左衛門だっぺな」

言いつつも試合から視線は動かさない。

「聞いてない。断じて聞いてないが」

もう面倒だったのでハロルドはそれ以上追求しなかった。

『勝者、ユマ選手！』

試合はドリユウズの活躍により早々に決着した。

「ドリユウズのパンチ力とくせい『かたやぶり』で圧をかけたか。シンプルだからこそ、このような大会で有効な作戦ともいえる」

「でしょ。ああいうガリー攻める戦い方ってポケモンへの信頼がないとできねえべ？」

「あとは状態異常を仕掛けてくる相手や相性の悪い技を上から叩き込んでくる相手に対応できるかだ。幸いドリユウズ一体で片付けたから手の内を必要以上に明かさずに済んだのだろうかな」

「バトリオさん話せるっすね」

「ハロルドな」

ヤシオとハロルドは意気投合しつつあった。

そしてそれはセクハラの魔の手が自分達に伸びてこなくなることを意味しているのでツキミたちにとっては歓迎すべきことだった。

大会は進む。

『おーっと！ ラガルド選手、絶妙なタイミングでポケモンを交代！ 苦手なタイプの

技を無効化してしまったア!」

PGたちのささやかな心配をよそに。

『ゴゴロウ選手、驚異の連続急所! あえて最終進化をさせずに戦うこだわりが豪運を引き寄せたア!』

そしてそれは。

『ユマ選手のドリユウズ怒濤の反撃! もう誰にも止められないイ!』

彼にとつて予定調和だった。

「さすがに上位に勝ち残ってくるトレーナーはそれなりに強いな。まあ私ほどではないだろうがね」

トレーナーとしての血が騒ぐようでハロルドは眼下の試合についてここまでヤシオと熱く語り合っていた。

ヤシオも、そしてフランシスカもツキミも迫力の戦いに思うところがあったようだ。

「ベスト4ともなると腕自慢が揃うんだべな」

「そうね」

「そうですね」

「ちよ、無視?! 私もほぼ同じこと言ったよね!! 警護対象にもう少し優しくしてもバチは当たらないよ?!」

そろそろ暴獣が現れるのではないかというピリピリが皮肉にも警護対象に突き刺さる。

「ベスト4はユマ選手の他にコゴロウ選手とマケー選手とラガルド選手か」

「ラガルドって確か元四天王の。プロトレーナーとしてのキャリアもありますし、この中だと彼が優勝大本命でしょうね」

「つばユマだべ。なんてったってあいつには切り札がある。勝ってほしいなあ」

そこでヤシオのポケギアが鳴った。

「もしもし。あつメルルか。ユマはどうしてる？ は？ 緊張でガチガチ？ そんなチリドッグでも食わせときゃよかんべ。口にガツてやつときな」

どうやらヤシオはユマの連れと電話しているらしい。

来賓に用意された高級弁当に舌鼓をうつハロルドにはヤシオのチリドッグへの信頼は不可解だった。

そして呑気に食事を味わうことのできない二人はまたひそひそと話していた。

(暴獣の動きは?)

(入口を張っているシャルムのPGからは異常なしと。引き続き警戒するように伝えておきました)

上司は自分であるにも関わらず部下のフランススカを頼っている節のあるシャルム

のPGについてツキミは複雑な気分だった。

『それでは準決勝を始めます。選手の皆さん、入場をお願いします』

勝ち上がった四人がスタジアムに再入場した。歓声とともにスタジアムが再び熱気に包まれていく。

そしてチリドッグの効果があつたかは不明だがユマはマケーを、ラガルドはコゴロウをあつさりと破り決勝戦の対戦カードが決定した。

「うーん。あのコゴロウさんどっかで見た気がすんだよな。どこだったっけな」

このチリドッグ男の発言にたいして中身がないことはとうに分かっていたのでツキミもフランシスカも無視を決め込んだ。

回復マシんでポケモンたちを元気にした二人が決戦の舞台に立った。

『お待ちせいたしました。シャルムフリーダムマツチ決勝戦、ユマ選手対ラガルド選手の試合を始めます。使用ポケモンはこの試合のみ三体になります。それでは両者最初のポケモンを出してください』

ラガルドはこれまでの試合同様にギルガルドを先発させた。対するユマが繰り出したのは大方の予想に反しエルフーンだった。

「色違いのエルフーンだ?!? 生意気なトレーナーだ。とはいえ相性では明確に不利だな。当然の報いだ」

「じゃあんめよ。交代するのも手だと思っただけですけどそれだとせつかくの奇襲の意味がねえべ。ユマ、悩みどころだがね」

試合開始のコールとともにエルフーンはギルガルドに種を発射した。

『やどりぎのタネ』。メジャーな戦法だな。あれがラガルドに通用するとは思えん」

ハロルドの言葉通りギルガルドは難なくかわして『ラスターカノン』を撃ち込んだ。その流れるような動きに一切の無駄もなくエルフーンは相性の悪い技をいきなり浴びることとなってしまった。

ところがユマの指示は変わらなかった。再び放たれた『やどりぎのタネ』をギルガルドはその剣で振り払った。

さらに反撃を指示するかと思いきやラガルドはあっさりギルガルドを引っ込めた。

「ヌメルゴンか。たしかにギルガルドとの相性補完を考慮すれば妥当な引き先ではあるが」

ヌメルゴンの『れいとうビーム』がエルフーンを襲ったが、今回は余裕があった。敵の懐に回り込んだエルフーンは『やどりぎのタネ』を見舞った。

「おろ、効いてねえ。あのヌメルゴン『そうしよく』ってことけ」

「ラガルドの戦法は敵の技を無効化し食らうダメージを徹底的に抑えるというものだ。シンプルに攻めようとしてくる輩に攻略はできんだろうな」

ヌメルゴンの特性を察したであろうユマは意を決してエルフーンを『れいとうビーム』に飛び込ませた。これでは回避のしようがない。

正気を疑うような指示だったがこれが功を奏した。

『れいとうビーム』が命中したエルフーンが掻き消えてヌメルゴンを攻撃した。

『みがわり』で技を受けて『がむしやら』。くうー、ユマー！ いいぞー！」

しかしそれは逆に敵の前で完全に無防備になってしまうことを意味する。次の『れいとうビーム』を耐えることはできず、エルフーンは倒れてしまった。

次いでユマはバクフーンを繰り出した。ヌメルゴンに対しては相性が悪いようにも思えるがその心配は無用だった。

「おおおおおー！ すごい！」

なんと『りゆうのはどう』を超火力の『ふんか』で押し返しヌメルゴンを撃破したのだ。

グラウンドレベルにいるラガードだけがエルフーンがやられ際に『おきみやげ』を遺してバクフーンをサポートしたことを察した。

「バクフーン相手じゃギルガードはしんどい。三体目をオープンすつかね」

「私ならあえてギルガードでいく。このような勝負で先に手持ちを全て見せてしまうのは避けたい」

ラガルドはハロルドと違う考えのようで、トリトドンでバクフーンを迎え撃つ選択をした。

「ユマもラガルドって人も楽しそうだな。オレも出ときやよかった」

「そうしてくれれば今頃はコスモスさんとの一時だったんだがね」

ハロルドにとつては切実だった。

試合はバクフーンの連続攻撃を耐えきったトリトドンがユマの最後の一体と相対する展開となった。

今度こそドリユウズと思いきやユマの最後の一体はバンギラスだった。その特性によつてフィールドに砂嵐が吹き荒れた。

「おっくるぞっくるぞっ」

遠く声は聞こえないがユマがネックレスに手をあてて何事か呟くとバンギラスが赤い光に包まれた。それを見てヤシオは手を叩いて喜ぶ。

「待つてました、メガシンカ！ これ見なきや年は越せねえべ」

「もう年明けてるんだけどな」

トリトドンが『だいちのちから』で攻撃したがメガバンギラスにダメージはほとんどなく、返しの『ストーンエッジ』でバクフーンの仇を取った。

『両者ともに最後の一体となりました！ 勝負はどうなってしまうのか！ 決着の時が

刻一刻と近づいています!』

ラガルドは最初に繰り出したギルガルドに勝負を託した。

会食を終え料亭から出てきたハロルドはやつれた様子のツキミとフランシスカの他にヤシオがいることに気がついた。

「なんだまだいたのか」

「さっきまでユマたちと残念会をしてたんです。次はギルガルド対策を万全にするって張り切ってました」

孫について語る老人のような無邪気さが清々しくも胡散臭い。

「まあラガルドに勝てるとは思っていなかったが追い詰めはしたからな。あのトレーナーも筋は悪くないんだろう」

「ツンデレルドさん!？」

「ハロルドな。そんなことより私はこれからこちらのお嬢さん方とアフターなんだが」

言外にセクハラを匂わせたにも関わらずヤシオは目を輝かせた。

「バトルですか? 大会見せてウズウズしてたんです。オレも混ぜてくださいよ、リー

グの前にたくさん勝負しときてえんです」

「この勝負バトル・フリック厨が！」

つまんねえの、とヤシオは口を尖らせた。

「さあさあハロルドさんこちらへ」

「選ばれし資産家に無駄な時間なんてありませんよ」

これ幸いと今日一日の骨折り損が確定したツキミとフランシスカはチームプレーでさっさとハロルドを帰りのポケット・スカイカーゴに押し込んだ。

来られては困るのだが、来なかつたら来なかつたでなんともいえない気分になるこの業務に二人は慣れていなかった。

ツキミが敬礼しフランシスカもそれにならった。

「それではハロルドさん、本日はお疲れ様でした。私たちもP G本部に帰りますのでとっととお帰りください」

「終わった途端冷たいな！ 三年目の彼氏か！」

釣れない相手と察したこともあり夜の帝も退散することにした。しかしそれだけでは気がすまなかつたのでちよつとした饞別を用意することにした。

「これも何かの縁だろう。君たちにもいいものをあげよう。私書いたビジネス書、『ハロルド革命』だ。ビジネスだけじゃない。人生の指針になること間違いなし。内容につい

ての質問があれば私が直々に答えよう」

受け取ってパラパラと中身を確認したフランシスカが真つ先に手を挙げた。

「はい質問です」

「そういう積極性は大切だ。なんだね」

「今週の可燃ゴミの回収日っていつでしたっけ」

「いや捨てる気だよね!？」

「ボディーガードさん。それはよくねえですって」

「今日初めていいことを言ったな。ヤシオ、もっと言つてやれ!」

「本は資源ゴミだべ」

「うんもう帰るねみんなおやすみ」

資産家も不動産王も肩書きであつても職務ではないため、その印象から受けるほど堅苦しいものではない。むしろ司法・立法・行政に対するそこそこの立ち位置を保証してくれる威光のようなものであるとハロルドは考えていた。

行使する権限にもさらにはえば実際の行動にも何らかの意味を帯びてしまう政治家

やPGとは違い自己の裁量によって活動することができる。これは大きな強みだった。

だからこそシャルムから戻った彼が、その足で深夜にベガスの地下ブロックにある会員制クラブを訪れたとしてもそこに客観的な意味など生じるはずもなかったのだ。

「スレッズ・ハンマーをくれ」

「かしこまりました」

ここはハロルドの長きにわたる夜遊びの歴史が発掘した名店で、その隠れ具合が彼にとつて色んな意味で都合がよく多数存在する行きつけのうちのひとつだった。

注文を済ませると個室に区切られた一画にあるソファアームにどっかりと腰を降ろした。

「お待たせしました。本日お相手させて頂いたきます、テアでございませう」

待たせることなく飲み物を持った色々と激しい衣装の女性が個室に入ってきた。怪我でもしているのか右足を少し引き摺っている。

「チェンジ」

「ちよつと!? 大事なお話があるんですよね!？」

「冗談だ。かけたまえ」

テアと名乗った女性はテーブルにグラスを置き、ハロルドの対面に座った。薄暗がりがよく見るとその顔はあどけなくこの場には似つかわしくない。どうみても未成年だがそんなことはどうでもよかった。

「毎度のことだが密会ならばもつと分かりにくい場所でもよかつたんじゃないのか？
私は普段からそうしているが」

「そこは上司からのアドバイスです。『普段と違う行動には余計な価値が生まれちゃう』
とかなんとか。それにここにいるのをすっぱ抜かれても週刊誌のハロルドさんの武勇
伝が潤うだけでしようし」

木は森へ。人は人へ。ありふれた方向こそが秘匿の王道であるというのはいついか
なる場合でも変わらない。

「それは違いないがね。自ら出向いてこないとは舐めた男だ」

「そんなこと言わないでくださいよ。こっちも今書き入れ時なんですから」

テアの上司が顔を出すのは何回かに一度といったところで、ハロルドはそれが若干不
服だった。

「そんなに忙しいものかね、バラル団は」

「おかげさまで」

彼女こそPGが追っているハロルドの黒い噂そのものだ。この場にツキミとフラン
シスカがいればさぞ盛り上がったことだろう。

つまりはハロルドからバラル団への資金の流れがバラル団の活動を下支えするとと
もにハロルド自身の立場を確固たるものとしているという構図である。

今日のテアはとにかく上機嫌だった。

「首尾よくやつてもらって大助かりですよ。シャルムに派遣されたPG、今頃やけ酒ですな」

それなら私たちもあまり変わらないか、とテアは笑った。

「私も驚いたさ。まさかあんなメール一通でPGが動くとはな」

PGに届いたシャルムへの暴獣襲撃を伝えるメールはハロルドが他地方のサーバーを経由して送ったものだった。それがバラル団からの指示によるものであることは言うまでもない。

わざわざバラル団がそのような要求をしてきた意味は分からない。そういうものと割り切っていた。

愚者は経験に学ぶが自分は歴史に学ぶ。ハロルドは蛍光灯などに頼らずそうやってのしあがってきた。

テアがどこからか出した自分のグラスにペットボトルのサイコソーダを注いだ。悪には悪のコンプライアンスがあるのだろう。

「早速本題に入りましょうか。今回もいい『儲け話』を持つてきましたよ。あっそうそう、今度のポケモンリーグについてもお知らせしておくことがあります」

「なるほど盛りだくさんというわけだ。スポンサーとしてはそうでなくては困るな」

二つのグラスがキン、と小気味良い音をたてた。

似て非なる

市井の生活はいざ知らず、今もラフエル政府は大きく揺れていた。

バラル団の暗躍とそれに伴うならず者たちの活動激化が四方八方で騒がれる。これは地方全体の治安維持を危うくするには十分すぎる事態だった。司法が傾けば立法にも行政にもまずいい影響は期待できない。

だからこそラフエル^特オフィス^別サービス^対を任せられたカネミツの手腕には期待がかかっていた。

「入ってくれ」

書類を持ってきた秘書官はネクタイがややくたびれ、目の下にうつすらと隈ができていた。オフィシャルな組織でない以上設立目的以外の規定は一切ない。しかし生真面目揃いの対策チームのメンバーにはそう気が休まる状況などないということをカネミツは理解していた。

「バラル団幹部ハリアーと接触した他地方のジムリーダーからの報告です。ホヅミ捜査官が纏めたものが先ほど到着しました」

「ああ。ご苦労だった」

たまたま部下のホヅミがルシエに行っていたのが幸いした。PGと特別対策チームとは目的を同じくする組織同士だが、それゆえの対立軸も存在する。初動で遅れをとっていたら情報を完全に得ることは困難だっただろう。

肝心のホヅミはこちらに戻ることもなく調査を続けているようだが今のカネミツにはデータの奔流を処理していくことが全てだった。

手渡された書類はミリ単位の狂いもなく束ねられていた。

「……紙媒体のみですが」

「かまわない。今回に限ってはハッキングに対して臆病でないといけないからな」

文字の羅列を一瞬で脳の髓にまで記憶させる。

気になる点はいくつもあるがやはり問題はハリアーが去り際にラフェルリーグについて触れたことだった。

警備にあたるであろうPGがてんでこまいなのはいうまでもない。それでも中止という案が出てこないのは先日のシャルムフリーダムマッチでの一件と暴力に屈しないという政府の意向などを汲んだ結果とカネミツは解釈していた。

つけたままのテレビでは公共放送のキャスターが実感のない声で政府の公報を読み上げている。

自分が出る。そして秩序のために。

それこそが彼の全てだった。果たして秘書官はその考えをトレースしていたかどうか。

深夜の街の外れをタキシードにシルクハットの大層目立つ男が歩いている。その素顔はマニキュラを模した仮面で隠されて異様な雰囲気を漂わせる。

もちろん営業終わりのマジシャンなどではない。もしそうなら物陰から『エレキネット』が飛んでくるはずなどないのだから。

「つー、ご苦労なこった」

人間離れた身体能力でひらりと回避し、握り損なうことなく懐からモンスターボールを取り出した。

指示が飛ぶ。女性の声だった。

「デンチュラ、もう一度『エレキネット』」

『『シャドーボール』』

現れたシャンデラが軽く技を放ただけで展開された電気の網が弾け飛び、さらにデンチュラをそのままノックアウトしてしまった。

その威力は凄まじく鍛え方のレベルが窺い知れる。

そしてデンチュラだけでは厳しいと察したか新手が繰り出された。

「マタドガス、『ヘドロばくだん』！」

「ベトベトン。本物を見せてやれ」

同じ『ヘドロばくだん』でもベトベトンの技が優にマタドガスを上回った。

マジシャン風男はトレーナーが隠れている物陰を割り出し声をかけた。

「よく俺に辿り着いた。でも鍛え方が全然足りねえし、そもそも泥棒を捕まえようとする側がコソコソするのはアベコベだろ」

正直なところあわよくば、と思っていたホヅミだったがここで本来の目的に立ち返ることにした。

「そのようです。さすがは稀代の怪盗ワイルドセブンといったところね」

転んでもただでは起きないというのがホヅミのモットー。姿を見せ、デンチュラとマタドガスをボールに戻しつつ両手を挙げてそれ以上戦う意思のないことを伝えた。

指名手配犯として数々の組織から追われるワイルドセブンにとっては肩透かしもいところだった。

「おいおいどうした。俺を捕まえにきたんじゃねえのか？ 腰抜けが」

「私はPGじゃないしそもそも業務外なので。正直お手上げです」

「珍しい奴だ」

この場に関しては腰抜け上等だった。

そう、ホヅミはワイルドセブンからある情報を得ようとしていたのだ。

「ちなみに今夜は何をギツてきたんです」

警戒するのが馬鹿馬鹿しくなったのかワイルドセブンもポケモンをボールに収めた。

「今日の獲物は隕石だ。大昔にネイヴュに落ちたものの一部らしいがそんなことはどうでもいい。重要なのはこいつが誰かにとつて値打ちのある『宝』だつてことだ」

「お守りにでもするんですか。民芸品として価値が出るかも」

「冗談きついな。盗むために盗む。それが俺のやり方だ」

ホヅミとワイルドセブンとは天と地ほどの実力差がある。それによつて彼はホヅミを脅威と認識しておらず、ギリギリのところまで会話が成立していた。

「なるほど。では本題を。これまでに盗んだもののリストはありますか？」

「そんなもん必要ねえよ。全部頭ここに入つてる。泥棒の流儀だ」

「ならば話が早い。実は私の知り合いに骨董品が好きなたちがいましたね。なんでもラファエルの英雄譚に御執心だそうでした」

「ああ、ラファエルの剣を有り難がるような連中だろ」

あと一步のところまで邪魔が入った例の件をワイルドセブンは未だに苦々しく思つて

いた。

「剣じゃないんです。英雄に対するもつと直接のアプローチとでも言いましょうか」
今夜の勝負はポケモンでも捕物でもない。情報だ。

「あなたのこれまでの戦利品の中に黒の宝玉、『ダークストーン』は——」
「！」

ここまでパーフェクトコミュニケーションを連発していたホツミだったが、仮面の奥に覗くワイルドセブンの瞳に怒りの色が宿った。

一瞬で仮面がマニニューラからエンテイに変わる。そしてホツミがその変化を認識する間もなく辺りが火の海になった。

「あつっ！ いきなり何すんの!？」

「チツ、話は終わりだ。じゃあな、PGもどきさんよ」

炎の向こうから声がしたのを最後にワイルドセブンは姿を消した。追いかける間もない。仕方なくホツミは3つめのボールを炎のないほうへ投げた。

「ゴチルゼル、『あまごい』。馬車の時間には余裕で間に合いそうね」

こうして僅かな情報とボヤ騒ぎ、そして毛先の焦げという収穫を得てその場を後にすることとなった。しかしそれらは意味のないものではない。

1時間後、バンバドロ・キャリッジの客席で微睡みながらもホヅミは思考を巡らせていた。

(あの反応、有力候補とみていたワイルドセブンもダークストーンを所持していない。それも屈辱的な何か、ラファエルの剣を横取りされた時よりも堪える何かがあった。つまりダークストーンは別の誰かの手にあつてあの怪盗ですら迂闊に手が出せない状況にある)

決めつけるのは早いかもしれないが今のラファエルでそんな相手といえれば答えは出たようなものだった。

そして更なる疑問が浮上する。

あの時ホヅミがルシエを訪れたのは古くからジムを守るドラゴンと縁深いエイレム家を調査するためだった。

そして接触を図りたかった相手はコスモスでもその先代でもない。ホヅミにとって必要な情報を持っていたのは執事のブロンソという老人だった。

残念ながら伝承に関する記録は焼失してしまっていた。ホヅミはあえて深掘りしなかったがリーグの内々とバラル団とで何かがあつたということらしい。

それでも有力な情報は得られた。

(海の彼方イツシユ地方の英雄伝説とラファエル地方の英雄譚の関連。現にホワイトス

トーンは確認されている。だとしたら)

意図的に隠されている何かがある。そしてそれはバラル団に対して自分たちが打てる最も有効な一手に関わるものだ。とホヅミは考えていた。

捜査員に対しても情報が操作されている。PGよりも柔軟に動くことができるはずの特別対策チームには鈴どころか重い鎖がついていた。

この不信心は無視できるものではなかった。独断でワイルドセブンの接触したのも自分の持つ情報を伏せておく必要を感じたからだ。だった。

(ああもう、次から次へと！)

ハリアーの言葉を素直に解釈するならラフェルリーグでバラル団は何かしでかそうと企んでいる。それはなんとしても阻止しなければならない。本部もそのための策を講じているのだろう。

ワイルドセブンとの小競り合いをする前からトレーナーとしての力量に欠けることは分かっていた。それでもすべきことは変わらない。

ペットボトルのロズレイティーを一口だけ飲み、ホヅミは再びミツホとなって眠ることにした。

チャンピオンロードはルシエの西海岸から海を渡った先にある。つまりルシエでジム戦を終えたあとは峡谷へ戻らずにそのまま進めばよい。

テルス山やシエトの峡谷のように手付かずの自然が色濃く残るこの地はまさに修行にうってつけだ。

ここには気性の荒いポケモンたちが多く生息する。さらに、8つのバッジを手にしたトレーナーたちがリーグ前の調整をも行おうとするため常に誰かが何かと戦っている状態。まさに修羅の道というにふさわしい。

そしてそれを満喫している者がここにいた。

「ちゃんぴおんろーどくみのむっちゅー」

ヤシオは上機嫌でチャンピオンロードを闊歩する。その音痴にも拍車がかかる。

それもそのはず、ここでの戦いは彼を高揚させるに足るものだったのだ。

「やっぱりチャンピオンロードは楽しいな。みんなはどうよう？」

懐のボールが6つかタカタと揺れる。もちろん同意見のようだ。

とはいえここまで戦い通しでさすがに休息が必要だった。

「腹も減ったしメシにすっか」

ぐう、と腹の音が鳴った。腹ごしらえは急務だった。

ヤシオはリュックから小型コンロを取り出すが肝心の食材がない。

「ふっふーん。いいのがありますがね」

生えていたキノコをひよいともいで焼きはじめた。そしてチリソースをたっぷりかけて一口。

「んー！ 知らない種類だけどこのキノコも美味しいな。チリソースとの相性もいい。みんなも食うかい？」

懐のボールが6つガクガクと揺れる。同意見ではないようだ。

「好き嫌いしちやでつかくなねえど。まあみんなさつき木の実バクバク食ってたし
いっか」

食事を片付けて出発、と思いきやヤシオはあたりをきよろきよろと見渡したのち座り込んでしまった。

そしてルシエを発つ際に貰ったメモを広げる。

『①戦いに夢中になりすぎないこと』、『②ちゃんと方向を意識して歩くこと』、『③迷った時のために来た道を覚えておくこと』、『④よくわからないものを拾い食いたくないこと』か。アルナ大先生、そりやねえべ。……はあ」

そう、彼は既に道に迷っていた。そしてその原因は実に簡単だった。

「そりやバンバン戦つてりや迷うべ。道なんて気にしてなかったしなあ」
どうすつかなあ。頭をかいいた。

トレーナーや野生ポケモンと数え切れないくらいの勝負を繰り広げ、さらなるレベルアップを目指したはいいがその代償は思った以上に大きかったのだ。

「うーん。まあなんとかなつか。なあスターミー？ オレも気をつけていくからさ」
ボールから漏れる光はスターミーの特性『はっこう』。おかげで視界は良好なのが救いだつた。

客観的にみてあまりあてにならない勘を頼りに歩く。

ほどなくしてトレーナーの少年を見つけた。

「なあ、オレと勝負すつペー！」

まったく自分たちのトレーナーおは、とポケモンたちが呆れるくらいヤシオは迷子対策四原則をあつさりと振り捨てた。

即座に勝負開始という場面だがそうはならなかった。

「勘弁してくれよ。さつき恐ろしく強いトレーナーにボロボロにされてもう帰ろうと思つてたところなんだ。まさかゴリラランダーが電気タイプの技でやられるなんて……」

よく見るとゴリラランダーにキズぐすりをスプレーしているところだった。ヤシオも

「直接見るのは初めてでじつくり観察したかったがもつと優先すべきことがあった。」

「電気技?」

「そうだ。速いうえにあの威力じゃお手上げだよ」

その信じられないといった口調にヤシオも思わず引き込まれる。

「へえそんなにつええんけ?」

「そりやもう。自慢じゃないが俺だつて地元じゃスーパー神童と呼ばれてるんだ」

「いやガッツリ自慢だべ」

彼はズタボロになった相棒を回復させ、そそくさと帰り支度を始めた。

「いけると思つたけどあいつはヤバかった。勝負にすらならなかつたよ」

「そんならオレも戦つてみたいな」

「ついさつきあつちに歩いてつたから追いつけるんじゃないか? 俺はもう帰る。修行

のし直しだ」

「そつか。今度会つたらオレとも勝負してくれな」

トレーナーはあなぬけのヒモを使いチャンピオンロードを抜けていった。

そしてヤシオは大切なことを忘れていた。

「あつ強いトレーナーの特徴を聞くの忘れた。あなもどりのヒモを使つてくんねえかな。そんなないけども」

どうしようもないので飛び出してくる野生のポケモンと戦いながらヤシオはさらに奥へと進んでいく。

しばらく進むと少し開けた場所へ出た。どこからか光が差しているようだ。

そしてまたトレーナーがいた。

「ちよつとすいません」

「ハロー！ 私に何か用？」

テンションが高い。

「このあたりにめちやくちや強いトレーナーがいるらしいんですけど見ませんでした？」

「強いトレーナー？ それはもう私で決まりでしょ。何せ私は最強なんだから！」

年の頃はヤシオと同じくらいだろうか。その女性は自らを最強と名乗った。

ちなみにヤシオの経験上この手の自意識過剰タイプのコレクターが本当に強かったパターンはあまりない。

早々に切り上げて他をあたったほうがよいと判断した。

「あー。ありがとうございます。それじゃもつと奥も探してみます」

「ちよつと!?! 信じてないわけ!?!」

「疑ってるわけじゃないんです。これは形式的な質問で皆さんに聞いてるんですよ」

「二時間サスペンスの刑事か！」

ヤシオとしては例のトレーナーがチャンピオンロードを抜けてしまふまえに是非とも勝負を申し込みたい。リーグの試合で当たる可能性のある相手であろうとスーパー神童がシツポ巻いて帰るほどの実力とぶつかってみたかったのだ。

ヤシオはラフエル地方に来てから久しぶりとなる愛想笑いをした。

「ははは。そうですね。じゃあオレはこのへんでいってみます」

「待った！」

その女性はモンスターボールを握り、ヤシオの前に突き出して見せた。

「勝負しましょう。赤い帽子のトレーナーに舐められるなんて絶対にあっちゃダメなの」

情熱を燃やす方向は自由ではあるのだが。

「あいつといい、赤い帽子ってそんなダメけ？ 今度から黒いのにしよっかな」

ヤシオの経験上赤い帽子に執着するトレーナーは恐ろしい。ここは口八丁で乗り切ることは不可能だった。

勝負を挑まれたら逃げられないのがトレーナーの性だ（先ほど断られはしたが）。覚悟を決めた。

ボールを手を持った両者の闘志がぶつかり合う。

「でも勝負なら大歓迎だ！ やりましょう！」

「そうこなくっちゃ！」

投じたボールからそれぞれアーボックとサンダースが飛び出した。

「オレはヤシオ。よろしく！」

「私はミント。ヤシオ、いいことを教えてあげる。このチャンピオンロードの出口つて実はすぐそこなの。そしてこのあたりは一本道。だからこのあたりで張ってれば激しい戦いを抜けてきたトレーナーたちと戦い放題ってわけ」

「ん？ つてことは」

「さあ始めましょう！ サンダース、『10まんボルト』！」

「つとと、『ダストシュート』！」

遠距離からの撃ち合いはほぼ互角だった。

「なかなかいいじゃない！ 草タイプも一撃で倒せるくらいの火力があるんだけどな」
「ここまでくればいくら鈍くても気がつく。」

「やつぱりゴリ坊をやったのはそいつか。つくづくオレって人を見る目がねえんな」

ミントこそが目当ての相手だった。

ボヤいていても仕方がない。

コスモス戦のように『とぐるをまく』ことも考えたが、特殊攻撃に厚いサンダースに

は悠長に思えた。

「アーボック、『じしん』！」

「『めざめるパワー』！」

尻尾で地面を叩こうとしたアーボックだが『じしん』は不発に終わった。

「氷タイプ、『めざめるパワー』にはこういう使い方もあるってわけ！」

地面が凍結しており、アーボックの尻尾が滑ってしまっている。

『じしん』を使うポケモンは基本的に体重を利用して地面を揺らすか体の一部分で地面を叩くことで揺らすかのどちらかに分類される。体重60キロ少々アーボックは後者に該当し、フィールドを封じられた形になった。

「『めざめるパワー』」

「滑ってかわせー！」

不安定な地面も這って移動できれば怖くない。すぐに反撃に転じることができた。

「『ダストシュート』！」

「『シャドーボール』！」

ヤシオにも、そしてアーボックにもサンダーのスピードを目で追うことが不可能だった。

『ダストシユート』は地面を撫でただけで終わり、逆に『シャドーボール』がアーボツクに直撃した。

ベターな手の連続にミントがベストで応えているというそれだけのこと。

「つ、なんてスピードだ」

「迅雷つて呼ぶ人もいるそうよ」

そこはノータツチで済ませた。

「おいアーボツク大丈夫か？」

アーボツクは立ち上がったがかなりのダメージを受けてしまったようだった。

『シャボル』であれつて相当だべ」

「シャボル……？」

ここは攻め方を変える必要があった。

『かみくだく』！」

「アーボツクの頭にジャンプ！」

近接攻撃に切り換えるトレーナー心理をミントは完全に読んでいた。

大顎の一撃をかわしたサンダースはそのままアーボツクの頭にしがみついた。手のないアーボツクには振り落とす術が乏しい。

「もらった！ 『10まんボルト』！」

直接食らっては回避のしようがない。

万事休すとヤシオは視線を落とす——ことはしなかった。

「それを待ってた！ アーボック、真上に思つきし『ダストシユート』だ！」

「えっ!？」

ヤシオも読まれることを読んでいた。こうなればシンプルな技と技のぶつかり合いだ。

電圧に苦しみながらもアーボックは真上に技を放った。そして自分ごとサンダースに『ダストシユート』を浴びせた。超スピードを誇るサンダースでもこれは避けられない。

そしてひとつの結果をもたらした。

「アーボック、よく頑張った。サンキューな、ゆっくり休んでくれ」

ヤシオは激しい戦いのすえ戦闘不能となったアーボックをボールに戻した。

「お疲れ、サンダース。やっぱり私達は最強ね」

ミントもダメージを受け毒状態になったサンダースを回復させ、ボールに戻した。

ヤシオはどっかかりと腰を下ろした。

「うーん負けた負けた。話通りだ。ミントさんはつええなあ」

「まあ当然ね。世界最強の私にちよつと粘っただけヤシオも筋は悪くないんじゃない

「？」

「まさか地面を凍らせて地面技を防ぐなんてな。いやホントたまんねえべ。勉強さしてもらいました」

「やれることは全部やる。トレーナーとしてそうあるべきと思っているわ」

「それな！」

気をよくして自慢気に過去の武勇伝を語り出すミントと目を輝かせながらそれを聞くヤシオ。驚くべきことに数時間はそうしていた。

「へえ。七地方でリーグチャンピオンってすごいなあ。もうバケツトモンスターてなものしょ。あつキノコ食います？」

「そうでしょうそうでしょう。もつと褒めなさい。あとキノコはノーサンキュー」

「オレの知り合いにもリーグチャンピオンになった奴がいるんだけどやっぱり上の舞台にいる人達は違うってことだんべ」

「まあね」

「ここでヤシオはミントの眼をじつと見つめた。

「だからこそオレはそういう相手とどんどん戦いたいし、勝ちたいんだ」

さつきは負けちまったけども、と小さく添える。

「言つてなさい。最強とはすなわち無敗。ラフェルリーグだろうとそれは変わらない」

豪胆か、自信家か、慢心か。

おそらくそのいずれも間違っていない。

しかしヤシオには分かった。

ミントには揺るぎない決意と実感がある。

「ミントさん、色々ありがとうな。オレもまたイチから頑張ってみるよ」

「二サス風に締めるのやめなさいよ」

表裏一体？

ここラファエル地方にはラファエルリーグとラファエルチャンピオンシップというトレーナーたちにとって大きなイベントが2つ存在する。

ラファエルリーグとは正式にはポケモンリーグラファエル大会のことで、カントーのセキエイ高原に本部をもつポケモンリーグのラファエル支部にあたるものだ。8つのバッジを集めたトレーナーがリーグ優勝を目指し戦いを繰り広げるといふ他地方と同じシステムで行われる。

一方のラファエルチャンピオンシップはラファエル地方で独自に行われるチャンピオン及び四天王を決める大会でのことを指す。

地方によつてはポケモンリーグの優勝者をそのままチャンピオンとしたりチャンピオンリーグなる大会を開催したりしているが、ラファエルではバッジ以外にも条件を設けて厳正に選別されたトレーナーを集めて行われる。そして成績順にチャンピオン以下四人の四天王が決まるということになる。

と、二大会が並び立つややこしいルールだが人々からは好意的に受け取られていゝる。お祭り好きのラファエルの風土にくわえ興行として地方全体が潤うことがその要因

だろう。

そしてそんな今回のラフエルリーグに決意をもって挑むのはなにもトレーナーだけとは限らない。

すうっと深呼吸をした。そうすることで安らぎの分子が肺に流れ込んでくるような気がした。何せここが彼女にとっての正念場なのだ。

マイクを持つ手の震えを鎮める。語りかけるのはこちらに向けられた大型カメラではなくその向こうにいる視聴者だ。

出された合図に体が自然に反応した。

「リーグ会場のエルメスです！ 開会式を控え、スタジアムが凄まじい熱気に包まれている様子が伝わりますでしょうか。ここから生まれる名勝負に期待が高まります！」

何かに突き動かされるように滑らかに言葉が出た。

緊張でカチカチにはなつたがそれでも想定していた内容をなんとか嘯まずに言い終えることができた。

「はいオツケーイ。それじゃいったん撤収な」

記者席に戻ったエルメスを他局の先輩記者が迎えた。労いをこめてペットボトルを放つて寄越す。

「お疲れさん。急なお鉢だったわりにはなかなかよかつたんじゃないのか？」

「ありがとうございます。まあ棚ぼたですよ」

「ごっそさんです、とラツパ飲みで一気に流し込んだ。渴いた喉がおいしいみずで潤った。」

それにしても本来は局の看板がやるはずだったリポートがまさか自分にまわつてくるとは。少々腑に落ちない部分もあるがリポーターとしての仕事が増えつつあることは素直に喜ばしい。

『「このご時世で危ないから行きたくないですう」ですって。先週私が行ったマルマイン大爆発祭りの密着取材のほうがよくぼど危険だったつーの!」

髪がチリチリになつても保険つておりないんですよ、美容院の予約だつてなかなかとれないのにとエルメスは口を尖らせた。

「まあまあ。それにこんなご時世にリーグなんてやつてる場合かつていうのはごもつともだ。かなりの数のPGが配備されてるらしいがそれでも物騒だしなあ」

連日報道されるバラル団関連のニュースに彼らも気が滅入つていた。そしてそんな二人の会話で記者席に重苦しいムードが漂う。これはいけない。

「あつ、そういえば今回のリーグはどうなんです」

「そうだな、今回新たにジムバッジを集めきつたトレーナーは僅かだ。だから参加人数は例年並みらしい。大会のルールも特に大きな変更はないそうだ。予選リーグをやつ

て勝ち残ったメンバーで決勝トーナメントの流れだな」

二人はすぐに軌道修正を図った。息の合った連携なだけに同じ職場でないのが悔やまれる。

「優勝候補はどの辺りでしょうか」

「そうさなあ。やつぱりボ——」

ここですいに周囲の我慢が決壊した。他の記者たちもとにかく自分の予想と一押しトレーナーについて語りたくて仕方がなかったのだ。

「そりゃあもちろんミントちゃんでしょ！　なんてったってリーグを七つ制覇してるんだぜ。俺、プロトレーナーチップスでミントちゃんのカード当てるために50袋は食ったもん」

最後のは単なるカロリー自慢だがたしかにミントは強豪トレーナーで通っていた。数時間前にエルメス含め複数の取材を受けていたが、その全てに完全優勝と豪語しておりしかもそれが単なるビッグマウスととられないあたり彼女の評判が窺える。

その後ろから別の記者が体を乗り出した。

「プロトレーナーってんならラガルドも見逃せないぞ。特に最近調子がいい。シャルムフリーダムマッチでは持ち味を存分に発揮して優勝したしな。君はどう思う？」

このようにラフエルリーグ常連のラガルドも有力な優勝候補に数えられている。

チャンピオンシップでの勝ち点が足りず、剥奪されたとはいえ四天王の称号を勝ち取ったこともある凄腕だ。

まだまだラガルドの情報について披露しようとしていた彼をベテランの記者が制した。ワイシャツのくたびれ具合からこの記者席では最年長に思われた彼だがその口から勝者の予想が語られることはなかった。

「おいおい、一点買いは素人がすることだろ。ミントにもラガルドにも可能性はあるんだろうが……まあ伏兵の大物喰いが見られるならそれはそれでスリルがあつていいんだが」

まるで取材よりも、そして勝敗よりも重視している何かがあるような口ぶりだった。

そしてそのままちよいと一服、と記者席をあとにした。

少し面食らったが、勝敗予想にはさらに熱が入った。

「大物喰いならゴゴロウが——」

「いやいやあいつの炎ポケモンが——」

「バトル山の——」

プレゼンがオーバーヒートしてきたところでスタジアム全体に放送が入った。

『ただいまよりラフエルリーグ開会式を行います。選手のみなさま、ご来場のみなさま。スタジアム中央のステージにご注目ください』

途端にスタジアムが水を打ったように静まり返った。

『それではフリック市長、よろしくお願いいたします』

金髪が眩しい男性が登壇し、白い手袋越しにマイクをとった。

「今回のラフェルリーグで大会委員長を務めさせていただくペガスシティ市長のフリックです」

俳優のような端正な顔立ちに細部まで弛みのない所作。聴衆は大会委員長の挨拶と
いうより劇場での観劇に近いものを感じたことだろう。

「皆さんもご存知の通り現在このラフェルでは大きな悪意によって多くのものが奪われ、私たちの心は悲しみに満ちています。ですが今この瞬間にも、元の生活を取り戻すため大勢の方々とポケモンたちの力がラフェル全体に注がれています。困難に折れることなく立ち続けるその姿は一市長として本当に頼もしく、さらにラフェルに生きる者として誇りに思っています。人もポケモンもその力には限界があります。しかし仲間
に支えられることで、かつての英雄たちのように大きな困難を乗り越えることができる
と信じています。私たちに今、できること。それはこの大会をさらなる一步を踏み出す
きっかけとすることです。今大会にも素晴らしいトレーナーの皆さんにお集まりいた
だきました。ラフェル全体を盛り上げるような熱い勝負に期待をしております」

万雷の拍手とともにフリックは降壇し、続いて来賓として招かれていたハロルドが登

壇した。彼の挨拶についてはいつも通りの一言で片付くので掘り下げる必要はないだろう。

その後大会ルールの確認や予選リーグの組分けなどが発表され、ラフェルリーグは正式に開幕を迎えた。

その貫禄にエルメスは感心しきりだった。もちろんハロルドではない。

「さすがフリック市長ですよ。あの若さでよくぞ思いきつてくれましたよ」

「リーグ側はどうしても開催する気だったらしいが大会委員長がバックにいないとどうしようもないもんな」

ラフェルリーグはラフェル市長の一人が大会委員長を務めることになっている。名誉ある仕事なうえに自らの街のPRにも繋がるので平常時であればその立場は奪い合いになる。しかし開催すら危ぶまれた今回は辞退が相次いだ。

そんななか名乗りをあげたのはペガスシティ市長のフリックだった。

ネイヴユ避難民の受け入れを積極的に進めただけでなく、職を含めた彼らの生活のサポートを万全にしたことで他地方の行政からも注目の的となっていた。その彼が『やる』と言えば誰もが諸手を挙げて賛成するに決まっている。

エルメスも先輩含む他の記者たちもフリックの手腕と決断力を讃える原稿を書くことだろう。『ラフェルを照らす光』に絡めた記事が出回るのはそう遠くない。

とはいえ何事にも例外は存在する。

おそらくそうしないであろう記者が1人、開会式を見もせず、会場の片隅で話していた。聞くべき者が聞いていなかったことが悔やまれる。

「そつちの首尾はどうだ？」

『上々だ。既に3のうち2は済んでいる』

通話の相手はどこか気象の荒れている場所にいるらしく声とともに強い風と雷鳴が聞こえてくる。

「景気がよさそうので何より。まったく、班長連中でよさそうなものをよりによつて俺が記者ごっことは超過勤務もいとこだ。ブラックでもホワイトなのがバラル団じゃないのか」

『まあそう言うな。こつちは私で事足りる。幹部のワース様に御足労いただくのはあまりにも申し訳ない』

ワースはふんと鼻を鳴らし、くたびれたワイシャツの裾を伸ばした。

「幹部のイズロード様々つてわけだ」

どこで差がついちまったかねえとぼやいた。

『むしろ私からすればそちらも羨ましいがね。イキのいいトレーナーが山ほどいるのだろうか？ 真の値踏みはお前にしか務まらない。それに作戦にはベストの環境ではないか』

「記者どもと同じ話題で盛り上がれるなんてつくづく俺たちは幸せだな」
イズロードの側の轟音がさらに強まった。

『お出ました。3を3にする時が来た。いい運動になるといいんだがね』

「おう。お前さんの値打ちを見せてやれ。ああ、あと俺からもよろしくと伝えといてくれ」

豊穰の神に。ワースは通話を切った。

開会式後会場内をふらふらとうろついていたヤシオは見知った顔を見つけて駆け寄った。

「シンジヨウさん！ やっぱ来てましたか！」

「そつちこそよく会場まで辿り着いたな」

嫌味ではなくヤシオを知る者ならば誰しもが感じることだった。

ヤシオは方向音痴ゆえ苦戦したが、そもそもチャンピオンロードの突破はリーグに参加するための予備選でもある。野生ポケモンや他のトレーナーとの連戦に打ちのめされてしまう者も少なくないのだ。

「市長さんの挨拶！ ありやもう永久保存版だべ。オレがこれまで出たリーグは毎回タマランゼ会長のエンドレススピーチだったからなあ」

今日のヤシオはいつもの倍喋る。それだけ興奮しているのだろう。

「いやあオレもう楽しみで楽しみで。そういうヤシオさんは予選リーグ何組でした？」

「俺はE組だった。そっちは？」

「A組でした。あつけらかなのAですね」

「……A組なら1番コートで最初の試合なんじゃないか」

イツシユの出身でアルファベットの順番には十分に親しんでいるはずのヤシオだが冷や汗が流れた。

「やつべえ！ ちよつくらいってみます！ 決勝トーナメントで会いましょうや！」

「ああ。それまで負けるんじゃないぞ」

表情を変えないシンジヨウだが、その内にはリーグの高揚以外のものがあつた。

そんなことは露知らずヤシオは足早に駆け出した。見送るシンジヨウがどんどん小さくなっていく。

「これよりテスケーノ選手、プリスカ選手、ヤシオ選手による予選Aリーグの試合を始めます。試合は総当たりのリーグ戦形式で行い、1位となった選手が決勝トーナメントに出場となります。使用ポケモンは3体で交代は自由です」

レフェリーが改めてラフェルリーグの公式ルールについて確認した。ジム戦でも聞いていることなので特に驚くこともない。

なんとか開始時間に間に合ったヤシオは話を聞きつつ他の2人を観察した。ヤシオよりだいぶ若いと思われるプリスカは神妙な面持ちでメモを取りながらレフェリーの話の一字一句聞き漏らすまいとしている。着ているネルシャツも背負ったリュックもピカピカの新品であるところから初めてのリーグなのだろう。

問題はもう一人。

「第一試合はテスケーノ選手対ヤシオ選手です。それでは両者、準備をお願いします」

その男は、荒く削った岩石を思わせた。

茶色いヴィンテージもののジャケットに無精髭の目立つ顎。全身から漂う殺気じみたオーラ。PGに通報すれば何らかの理由をつけて連行してもらえそうだった。

「お前、見ない顔だな」

つかつかと歩み寄ってきたかと思えば見た目通りの声で見た目通りのことを述べた。挨拶は必殺であるというのがヤシオのモットーだ。

「ども。ヤシオつていいいます。お手柔ら——」

大柄かつ強面のテスケーノに圧される。

それでも握手を求めたヤシオだったが、テスケーノは応じない。値踏みするかのよう

にじろじろと対戦相手を観察した。

残念ながらヤシオはお眼鏡にかなわなかったようだ。

「俺は前回の大会で決勝トーナメントに出てる。つまり今回も直接決勝トーナメントに
いってもいい存在だ」

「いやその理屈はわからんけども」

「とにかく！ こんな予選なんて必要ない。カワマタとかいったか？ まあせめて
ウオーミングアップくらい役には立ってくれよ」

とはいえ鼻つ柱の強いトレーナーは珍しくないし、チャンピオンロードでそれ以上の
逸材に遭遇している。ヤシオはテスケーノの手をとって半ば強引に握手した。

「そっけ。準備運動で怪我しないでくんさいね」

「けっ、シードがあれば……」

レフェリーとプリスカが見守るなか、テスケーノとヤシオがそれぞれトレーナーズ
サークルに立ち最初のボールを手に取った。その動作に一切の迷いもない。

「キノガツサ！ やっちまえ！」

テスケーノは一番手としてキノガツサを繰り出した。

ファンシーな見た目のきのこポケモンながらパワーのある格闘戦士でもある。

「いつてみんな、スターミー！」

対するヤシオはスターミーに先鋒を託した。

「試合、はじめ！」

先制したのはスターミー。

「やんぞ、『れいとうビーム』！」

狙いは悪くなかったがキノガツサのフットワークがそれを上回り、『れいとうビーム』はフィールドを冷やしたのみに終わった。

「へっ！ そんな攻撃当たるかよ。眠っちまいな！ 『キノコのほうし』！」

『サイコキネシス』！」

キノガツサを見れば誰しもが『キノコのほうし』による眠り状態を警戒する。ヤシオも当然ケアしていた。強力な念力が降りかかる胞子を弾き飛ばし、相性を突いたダメージを与えた。

「あぶいな。寝ちまつたらどうしようもねえ」

しかしここはテスケーノが一枚上手だった。

「かかったな！」

スターミーの頭上に何か固いものが落ちてきた。避ける暇もなくダメージを受けてしまう。

コアが点滅する。効果ばつぐんの一撃をもらってしまったようだ。

「なるほど。胞子に紛れて『タネばくだん』。こいつは痛え。スターミー、ごめんな」
2発目の『タネばくだん』はなんとか回避した。

「あんなこと言われちまったけどオレのほうこそウオーミングアップが必要だったみたいだ。よっし、いぐぞスターミー！」

砂嵐を呼ぶ女

フリックから見てどうにも警察組織というのは無慈悲な存在であるが、それらを束ねる長の立場にある者にはもはや血肉を有していない何かに思えた。

バラル団特別対策チーム室長のカネミツも、配属されたPGたちに指示を飛ばしているであろうデンゼルもそうだ。彼らは前線で体を張り続ける若者やポケモンたちをボタンひとつで届く用度品の類いだと信じ込んでいる。

実に嘆かわしいことだった。

「貴方もそうは思いませんか」

「はい？」

スタジアムを一望できる大会委員長特別室が今日の彼の城だ。モニターも設置されており全試合をオンタイムで観戦することができる。

しかし全てが思い通りになる空間ではない。フリックの隣には席を勧めても頑なに座らない男がいる。

「ときにカネミツ室長。こんな場でお聞きするのも心苦しいが、室長は今回のバラル団の動きをどのようにお考えですか」

そのような内に秘めたものをいちいち外に出しては市長は務まらない。行政を預かるとはそういうことだ。だからこのように話しかけることもする。

「どう、と一言で申し上げるのは難しいでしょうな。しかし一地方の秘密結社という枠に収まらない存在になってしまっているのは間違いない」

まるでその質問を予想していたかのようにカネミツはそう言った。背筋もネクタイも、背広の裾に至るまでピンと伸びている。

「とするとなぜラフェルリーグを？」

わざわざ警備を固めやすいリーグを狙うことに意味があるのか。フリックはカネミツに意見を求めた。

「そもそも犯行声明が本当であるという前提で話を進めますが、他地方でもリーグが襲われた例があります。力を蓄えた悪がその脅威をアピールし、目的を果たそうという段階に移ったと捉えるべきでしょう」

シャルムフリーダムマツチの一件もある。

手の甲に浮かんだ筋から彼がこの事態を忌々しく感じていることは明白だった。

「バラル団は次の段階へ移行する、というわけですか。不吉な予言ですな」

カネミツの推測はフリックにとって興味深いものだった。だからこそ気持ちを押し殺してでも会話をする価値を見出させる。

「もしくは」

続きがあるようだ。

「彼らは歴史に選ばれようとしているのかもしれない。これまで悪事を働いてきた他地方の組織はその悉くが若く意志あるトレーナーによって破れ去ってきました。今回もバラル団に対し勇敢に立ち向かったトレーナーたちの報告を聞いていますがそれでも全体的にみればその勢いは留まることがない。だからこそ——」

悪は悪であるからこそ挫かれる。カネミツはそう主張した。

「なるほど。そうなるにあなた方はリーグ開催を決定した私や協会幹部をさぞ恨んでいらつしやることでしょう」

「いえ。ここがなければ別のどこかが、というそれだけの話です。来ると分かっているなら対策もできる。PGも全力を尽くしてくれています。我々には身を滅ぼそうとトレーナーたちの晴れの日を守る責務があります」

バラル団を止めるためならどこまでも無慈悲になれる。彼はそういう男なのだ。

「その言葉に救われました。それなら私も安心してトレーナーたちを応援することにしまししょう」

【予選Aリーグ、決勝進出者はヤシオ選手！】

【予選Bリーグ、決勝進出者はハイネ選手！】

場内アナウンスが響いた。先に開始された予選の結果が出始めているようだ。

「どうです。決勝進出者が出揃ったら誰が優勝するか賭けでもしませんか？ 大きくベットするのが私の流儀でしてね」

カネミツがきつちり30度頭を下げた。

「すまないが私はこれで。警備については先ほどお話しさせていただいた通りですの
で」

もう一度頭を下げ、カネミツは足早に部屋を出ていった。フリックが話を振らなければどうにそうしていたのだろう。

一人きりになった。

艶消しブラックの瞳は再びスタジアムへと落ちていく。

「歴史に選ばれる、か。面白いことを言う。そんなものに価値などないだろうに」
開会式の時には晴れ渡っていた空が曇り始めていた。

初日の全行程を終えて夕方。ヤシオは早めのディナーのためにスタジアムのフードコートに来ていた。

トレーにはホットドッグが鎮座しているのだが、ヤシオはそれよりも通話を優先し

た。

「おつミオすけ？ オレだよオレオレ。や、イズっちじゃなしに。今ラフェルリーグに
いんのよ——そりやあもう。予選はもうバッチシだ。ガ—りやつて勝ったからな。こ
こをホップとして次でステップてわけ。え？ ストップしないように、つてウマイこと
言うんじゃねえよ。そんじゃあな。決勝トーナメントはよそれでも中継するみたいだし
応援してくんなね」

相手の声は聞こえないがよく知った相手なのだろう。

ポケギアのライブキャスターアプリを切った。そしてホットドッグにありつたけの
チリソースをぶちまける。そして大口をあけてかぶりつこうとしたその瞬間、見知った
顔を認めた。

「シンジヨウきーん！ こっちこっち！」

どうぞどうぞとヤシオは隣の席を勧めた。

トレーの角度を一定に保ちゆつくりと歩いてきたシンジヨウはヤシオのトレーを見
て目を丸くした。

「相変わらず凄いものを食べてるな」

「大味こそ正義だんべ。それよりその糖分の暴力みたいなのは何ですか？」

「ヒメリパフェのホエルオーサイズだ」

「なんて?」

「ヒメリパフェのホエルオーサイズだ。大きい。うまい。以上だ」

暫し沈黙の妖精が二人の間を飛び交った。

賑わうフードコートの前騒も初日の戦いを終えた二人には心地よい。

「お互い無事に予選を突破できてよかったな」

「そつすね。オレ途中からですけど試合見えましたよ。タイプ相性の悪い相手なのにあつさりひっくり返しちゃって」

「かえってそういう相手の方が慣れてるんだ」

「えっぐいなあ」

ジムリーダーとしての経験の賜物ということらしい。

「そつちはどうだったんだ? 正直そんなに心配はしていなかったが」

「いやあ、強かったですよ。決勝トーナメントで当たってもいいくらいの相手でした」

自分の強さを誇るでもなく、かといって卑下することもない。どこか通じ合うところがあつた。

ここでヤシオは何か気がついた。

「そーいやアルナは? 一緒じゃないんけ?」

「このタイミングでか」

砂漠で自らを発掘してくれた恩人のことを忘れるはずがない。もつともこの場に本人がいたら『こないだ名前を忘れてただろーが!』と言うだろう。

「アルナはあの後別の調査に行くとかで出かけていった。『リーグは絶対応援に行く!」

二人とも全勝してね!』と言っていたんだが予定より難航しているんだろうな」

「無駄に声真似上手いっすね……っっていうかさらつと物理的に不可能なことを要求してきたな」

ヤシオは知り得ないことだが、アルナにもバラル団とのちよつとした因縁ができてしまっている。しかし彼女の旅路についてシンジヨウは心配していなかった。

「他の予選で凄そうな人いました?」

「目の届く範囲だと隣のリーグにいたパンデュールだな。あのガブリアスは相当厄介だ」

「うわあガブリアスけ」

トレーナーが揃えばバトル談義に花が咲く。ヤシオもシンジヨウも予選の戦いや他のトレーナーについて熱く語り合っていた。

そしてトレーナーが揃えばさらにトレーナーが引き寄せられる。

「あらあら。聞き覚えのある声がするかと思つたらこないだの二サス男にイリスの友達じゃないの!」

「おっ！ タカビーだけどもめちゃくちゃ強いミントさん！」

特に席を勧められたわけではないがミントはのっしのっしとこちらへ来てヤシオとシンジヨウの対面にどっかりと腰をおろした。いつの時代も遠慮や奥ゆかしさといったものから解き放たれた者は強い。

「タカビーってなによ。それはもうめちゃくちゃ神憑りのに強い勝負の女神の化身というの認めるけど」

「いやそこまでは言ってるねえべ。あと神を重ねがけすんなし」

スルーしてパフェと格闘していたシンジヨウだったが諦めて闖入者に目をやった。

「ミントも相変わらずだな」

「もちろん。私の強さは永久不変よ」

「そういうことじゃないんだがまあいいか」

「あんれそっちもお知り合いで？」

聞けば共通の知人を通して付き合があつたとのこと。ヤシオは世間の狭さとチリソースの旨味を感じた。

そしてそんな男二人の乱れた食生活を見逃すミントではない。

「二人とも食生活がなってない。その真つ赤な塊と糖分の交響楽団はなに!? 私を見てみなさい。このバランスの取れた食事！ 最強は体の内側からも作れるの！」

尊大なだけではないストイックさも彼女の魅力なのかもしれない。

「サンキューオカン」

「ありがとうオカン」

「オカン言うな！」

バランスの取れた食事は人を饒舌にするようで、火がついたミントは自分の優勝について既に確定したかのように語りだした。さらに過去の大会の思い出話を挟むものだから止まらない。

「どうよ？」

ひとしきり捲し立ててどん、と胸を張った。彼女のライバルもよくやる仕草だ。

「やっぱミントさんはすげえ。あんなだけベラベラ話してて一回も噛まねえんだもん」

「そこ!？」

「そーいやキャモメーズがエテベリア選手を獲得してましたけどどうみますか」

「私に聞かないで!？」

シンジヨウがスプーンを休ませた。

「まあ話は長いがミントの強さは本物だ。鍛えあげられたポケモンたちと個々の長所を活かした的確な戦術は新人トレーナーたちのいい見本だと俺は思ってる」

「うんうん。たしかにあのサンダーズ強かったもんなあ。電気タイプの王道ってかん

じ

「そう！　そういうのもつとちようだい！」

褒めて褒めて地獄に福音が鳴り響いた。

【お待たせいたしました！　決勝トーナメントの組み合わせを発表いたします！】

アナウンスが流れた。そして各テーブルに設置されたモニターに決勝進出者十六人の名前が横一列に表示された。

【組み合わせは抽選ソフトにより厳正に行われます】

「このノリ、町内会のビンゴ大会を思い出しますね」

「なんか冷めるからやめなさいよ」

ヤシオとミントが小声で言い合う。

【それではご覧ください！】

予選リーグ順に並んでいた名前がシャツフルされる。そして並びが変わったところでトーナメント表として浮かび上がった。

【ご覧の組み合わせで決勝トーナメントを行います！　試合は明後日から行います。出場選手の皆さん、今日はゆつくり休んでトーナメントに備えてください】

再びフードコートが賑やかになった。決勝トーナメントに出場する者もそうでない者も組み合わせに興味がないはずがない。

「席替えみたいでドキドキしますね」

「なんか冷めるからやめなさいよ。えっと、私は第一試合。相手は——誰でもいいか。勝つんだから」

「俺は第五試合だ。ミントとは別の山だな」

「オレは第八、つて最後じゃんか。うわあ、対戦相手のジュリオつて人予選をこんな短時間で片付けてるんかよ」

「とはいえ予選が最初だっただけに最後の試合というのは少し拍子抜けではあった。

「またお預けになったが準決勝で勝負だ。ヤシオ」

「燃えてきたなあ。試合できるのを楽しみにしています」

大きなパフエと真つ赤なホットドッグが火花を散らす。

「けっこうけっこう。勝つた方が決勝で私にボッコボコにされる権利を得られるのよ」

「こまでくるとミントの操縦法も分かってくる。経験に学ぶものは多い。

「じゃあ初戦の相手の情報収集と調整があるので俺はこれで失礼する」

「そつすね。オレも宿舎に戻ります。お二人ともちつと早いけどおやすみなさい」

「ちよつと!?!」

「いつの間にかそれぞれ完食しシンジョウとヤシオは帰っていく。

「もう行っちゃうの。まだ話は終わってないのに」

一瞬のうちに二人の背中中は遙か遠くへ。これは諦めるしかない。さすがのミントも話し相手がいなくなってしまうことに意気消沈してしまった。

「ここいいかな」

しかし救いはあつた。

「もちろんオツケー！ 座って座って」

「悪いな。他の席はみんな知り合い同士で座ってるからなんか入りづらくて」

目の前にトレイを置いて一人の男が腰かけた。年の頃は先ほどの二人と同じくらいに見える。その手の道に明るいとはいえないミントでも彼の服の下の鍛えあげられた肉体を感じ取った。

（まあ人間が戦うわけじゃないけど）

黙って食事をはじめた男だったが不意に顔をあげた。

「あんた、ミントだろ？」

「有名な辛いわね！ サインしてあげようか？」

男の目付きが鋭くなった。

「さっきここに座っていたのがヤシオで合ってるか？」

「え、そうだけど」

ヤシオのサインを欲しがるとは物好きを通り越して変人や変態の域だ。しかしラフ

エルは多様性を受け入れる場所。あえて何も言わなかった。

「そうか……あれが……楽しみだ」

「もしかしてあんた」

「ジュリオだ。明後日の試合俺はあいつに勝つ」

時間は少し遡り、テルス山。この場所を久しぶりに訪れる者がいた。

サンバイザーにタンクトップ、膝丈のズボンと動きやすさを重視したまさに探検に特化したお馴染みのフアツシヨン。

「原点回帰！」

アルナがテルス山に帰ってきた。しかし今回の目的は砂漠ではない。

6匹のポケモンたちをフルオープンにしても歩いていることから普段とは違うものが窺える。

「このあたりかな」

地面に触れて土の柔らかさを確認した。帳面にメモを取り、端末にもデータを送信しておく。

「湿性砂質未熟土ちよい粗め。ここなら掘りやすいかな。ワルビルおねがいね」

ワルビルの首に小型カメラを取り付ける。こうなると慣れたもので、ワルビルはこくりと頷いて地中へ消えていった。

ルシエでヤシオのジム戦を見届けた後アルナは再びラフェルの遺跡を巡る旅をしていった。

砂漠マニアであると同時に考古学の徒である彼女には過去からのメッセージを受けとることが現代を生きる者の使命であるという考えがあるのだが、それ以外にも調査を進めなければならぬ理由があった。

「やっぱりラフェルで何かが起ころうとしている。悪い奴らつていつもそう。こういう時だけ昔の人を頼ろうとしちゃって。ねえ？」

地上待機の5匹ともそうだそうだとも言いたげにアルナに同調した。

あの後訪れたラフェルの遺跡の全てでバラル団もしくはその痕跡に遭遇した。その度に撃退したりPGに通報したりと善良な市民として振る舞ってきたアルナだったが、それは彼女の愛する過去の遺産が侵されつつあることを意味していた。

「あの日、ここにもバラル団がいた。何かやる前に逃げちゃったしその後PGの捜査も入ったはずだけど今はほったらかし。だったら今回はあたしがなんとかする！ えいえいおー！」

自分一人ではどうにかなる相手だとは思っていないができることはやっておきたいと

思う正義感は持ち合わせていた。

ワルビルが戻ってきた。カメラ映像を確認する。読みが当たっていたようだ。

「ありがと。そんじや行きますか」

アルナはヘッドライトを装着し、ポケモンたちをボールに戻してからワルビルが大きめに掘った穴に飛び込んでいった。

嫌な予感ほどよく当たる。

「やっぱりそうだ。山の地下にしては不自然に歩きやすい。誰かが大掛かりにここを掘ってる」

本来地中というより砂と土に埋もれた洞窟のような場所というイメージで、当然整備などされていないため入ることはできてもこのようにスムーズに動くことはできない。

壁面や足元を観察する。一般人なら見落としているわずかな痕跡もその目は見逃さない。

(見つけ)

爪のようなもので掘った跡があった。誤魔化そうとカモフラージュされているがその部分だけ下の層が薄く見えている。

(かなり新しい。この先にまだいる可能性が高いね)

足音を消して慎重に進む。どちらへ行くべきかは点々と続く痕跡と蓄えた地学の知

識が教えてくれる。

行き当たるのにさほど時間はかからなかった。開けた空間の手前でアルナは足を止め物陰に隠れた。中から漏れてくる明かりが緊張を掻き立てた。もちろんその光源は人工のものだ。

そつと覗くと柄の悪い男が二人何やら作業をしている。スキンヘッドとモヒカンが妙に似合っていた。

「それにしてもよ、バラル団の連中も好き勝手してくれるよなあ！」

スキンヘッドが大声を張り上げた。アルナは慌てて耳を塞いだ。

「まったくだ。俺らの名前で予告を出すだけならまだしも出すだけ出して何もしないつてのはいただけねえよ。こつちだつて信用商売なんだからな」

スキンヘッドもモヒカンも口ぶりからしてバラル団ではないようだが堅気の者でないことも明らかだった。

それにしてもよく喋る。静かな空間に二人なのでそうでもしないともたないのだろう。

「依頼でもないことをやるのは屈辱だがそれでもバラルの天下よりはマシだつてのがリーダーのお考えだ。分かりやすく助かるぜ。今ごろはもうリーグに向かつてるだろうから俺らもここでやることやつてさっさとリーダーたちに合流しようぜ」

心拍数が跳ね上がった。

バラル団以外にもリীগを狙う存在があつて、そのトップが直々に出ようとしてい
る。

早鐘を打つ胸を押さえつける。そして脳内に選択肢を並べ結論を出した。

(やるしかない！)

その行動に明確な理由はなかつたがだからこそそれが理由だつた。

「おいこら！ こころは悪巧みをする場所じゃないぞ！ 見た目通り悪そうな奴ら、とつ
とと自首しろー！」

男たちは一瞬ぎよつとしたが、すぐに下卑た笑みを浮かべた。

「退屈な仕事かと思つたら神様も粹なことをするじゃねえか」

「まあ連れ帰るとしてだ。ここは俺が先に味見をしてやる」

彼らの狙いがその若い肢体にあることを悟つたアルナだがここは冷静に動いた。

「もつかい言う。あんたらがここで悪いことをしようとしているならあたしが許さな
い」

「そりやおつかねえ。是非とも許してもらいたいところだなあ」

「そうだな。なんならそつちが許してゝつて泣いてもいいんだぜ？」

男たちはガマガルとアイアントを繰り出した。やる気のような。閉じた空間、逃げ場

はない。

「イシズマイおねがい！」

アルナはイシズマイで迎え撃つ構えだ。

男たちはまた笑い出した。

「ププツ、おい見たかイシズマイだってよ。ガマガル、『ハイドロポンプ』！」

「アイアント、『アイアンヘッド』だ！」

「てっぺき！」

イシズマイは殻の硬度を高め『アイアンヘッド』を防いだ。元から高い防御力がさらに高まっているためまさに鉄壁の守りといえる。

アイアントは怯んだが今度はガマガルが前に出た。

「バーカ！ 一番痛い『ハイドロポンプ』は防げねえぞ！」

「そうかな？」

スキンヘッドには強力な水流がイシズマイを飲み込むビジョンが見えていたがそうはならなかった。

「なに!？」

イシズマイにヒットする直前で水流が大きく逸れていった。そして別のところに命中する。

その理由が水飛沫をあげて登場した。

「水分補給バツチリ！ マラカッチ、『エナジーボール』！」

「『よびみず』か！ ガマガル、『ようかいえき』！」

特攻が上昇していれば打ち負けることはない。渾身の『エナジーボール』がガマガルを一撃でノックアウトした。

「調子に乗るなよ！ 『シザークロス』」

「『がんせきほう』」

マラカッチを狙ったアイアントも岩タイプ最高火力に沈んだ。

「どーだ参ったかー！」

予想外の反撃に男たちは揃って尻餅をついた。

「参った。降参だ」

「とても敵わねえ」

俺達では。

そう呟くと同時にアルナの背後に何か猛スピードで迫った。

「『ニードルガード』」

アルナの窮地を何度も救ってきたマラカッチの得意技が攻撃を弾き返した。

「今のを防ぐとは。誰だか知らんが喧嘩を売ってくるだけのことはあるじゃねえか」

アルナが隠れていた反対側から男がもう一人現れた。金の首飾りをじやらつかせた目つきの悪い小男だ。

「先輩！」

「これももう勝ったわ！」

敗北したにも関わらず二人とも威勢がいい。

「ガマガルもアイアントも『あなをほる』ポケモンだけど手や足にその跡がなかった。つまり穴掘りをするポケモンともしかしたらそのトレーナーがいるって思ってたんだ」

「素晴らしい洞察力だ。気に入った。そんなトレーナーを慰み者にしようとはお前たち、迂闊だったんじゃないか？」

「へえ……」

「返す言葉もねえ」

「まあ関係ないことだ。『ドリルライナー』」

先ほどは目で追えなかったが今回は見えた。トゲの塊がまっすぐに突っ込んでくる。

「イシズマイ、『てっぺき』！」

火花が散った。

くるくると回転しながら降り立ったのはサンドパン。

「あの爪の跡。やっぱり！」

「おっと、誰が一発って言ったよ？」

『ドリルライナー』のおかわりがイシズマイを弾き飛ばした。さすがにこれは予測が
できなかった。

サンドパンの隣にもう一匹が並び立つ。こちらも鋭い爪を武器とするポケモンだ。

「ドリユウズ!!」

「そうだ。こいつらを組ませれりゃシンプルに強い。ガキでも分かるカンタンな理屈
だ。ドリユウズ『すなあらし』!」

途端に砂嵐が吹き荒れた。地上と違い抜けていく場所がないため、視界もほぼ効かず
いつもより激しくトレーナーとポケモンを襲う。

「マラカッチ戻って。ノクタスお願い!」

「砂を食らうマラカッチを下げるか。妥当な判断だ。サンドパンやれ!」

サンドパンはその鋭い爪をイシズマイに向けた。

「『シザークロス』!」

爪と鋏の応酬はリーチの差でサンドパンに分があつた。さらにイシズマイの攻撃が
サンドパンを捉えきれていない。

「『すながくれ』。便利な特性だよなあ?」

「くっ」

馴染みの深いものにやられる展開は辛い。

「おっとこつちがお留守だ。『アイアンヘッド』」

「ノクタス！」

ドリユウズの技は先ほどのアイアントと比べ物にならないほどの威力があった。なんとか視認できるくらいに砂嵐の中、その緑の体がすっ飛んでいった。

「どうしたどうした！ 『ブレイクロー』！」

サンドパンの爪が連続でイシズマイを捉えるたびにダメージが増していく。

「『てっぺき』だかなんだか知らんが今のイシズマイは豆腐より脆い。次のポケモンを出そうがこつちの砂嵐ゴールデンコンビは破れねえぜ？」

「さっすが先輩！」

「やっちまえー！」

ギャラリーと化した三下たちも有利を察して楽しそうに声援を送る。

「砂嵐ゴールデンコンビか。悪者のくせにいいことを考えるね」

「はあ？」

「それならこつちは砂嵐ゴールデンチーム！ 天然物の砂嵐に打たれてきたキャリアが違うんだ！」

「自棄でもおこしたか？ こつちのポケモンはまともに攻撃を食らってない。もうお前

は負けてんだよ」

「そうだそうだ！」

「先輩ニヒルでかつこいいいですぜ！」

「やれ」

ドリユウズとサンドパンが今度はアルナを直接狙った。

直ぐにでも逃げなければ危ない場面だが、アルナはその場に仁王立ちしている。

「ダブルで『ドリルライナー』！」

「……あたしの勝ちだ！ 『がむしやら』！」

サンドパンとドリユウズが地面に叩きつけられた。たった一度の攻撃で2匹とも大ダメージを受けたようだ。

「クソツ、イシズマイはボロボロのはず。新手を出しやがったのか！」

「違うんだなあこれが」

砂嵐が晴れた。アルナの前に立っていたのは。

「マラカッチだと!?! いつの間にまた出した!?! お前はあの後ボールに手をやらなかったはずだ！」

「悪者の癖に変なところで素直なんだね。あたしはマラカッチを引つ込めてない。ノクタスはフェイク。だいたいあんた、ノクタスがいるのをちゃんと見たの？」

言われてみれば男は激しい砂嵐で相手のポケモンを輪郭と色で判断していた。

「マラカッチだからなんだってんだ！ サンドパン『きりさく』だ！」

「『がんせきほう』」

サンドパンは岩の塊をぶつけられて倒れた。

「まだだ！ ドリユウズ『つのドリル』！」

アルナとマラカッチとで目が合った。両者頷く。

「できるもんなら避けてみな！ マラカッチ、『ニードルアーム』！」

金属質な打撃音で勝負に幕が降りた。

「先輩が」

「嘘だろ先輩」

「……こんなことがあっていいわけがねえ。俺が負けるなんてことはねえんだよ！」

男は上着の胸ポケットから何かを取り出した。小型の装置のようだ。

「このオモチャを預かっておいてよかった。俺がこれを押せば天井が崩れてお前ら皆生き埋めだ」

二時間サスペンスでよく見る爆弾の起爆装置だ。作るのにはさほど難しい技術はないとテレビでとりあげられていたが、アルナも本物を見るのは初めてだった。

「先輩!？」

「それはまずいですよ！」

「るせえ！ 元はといえはお前らがこいつの侵入を許したのが悪いんだ！」

説得しようにも今しがた勝負で打ち負かした相手をどうにかできる文句の用意はなかったし、取り押さえようとしてもその前にボタンを押されてしまうだろう。

「こういうのは躊躇なくやるに限る。地獄でまた会あららら」

装置が男の手を離れて宙に浮いた。

さらに不幸は続く。男三人の体にロープのような糸が巻きつきそのまま捕縛してしまつた。

面食らうアルナの元に女性が駆け寄つた。そして先ほどの装置の配線を切り、鞆にしまつた。

「よかつた。間に合つたみたいね」

事態が飲み込めなかつた。

「えーつと？」

「私はラフエルオフィスサービスのミツ、いやホツミといいます。暴獣構成員の逮捕へのご協力、感謝します」

インファイターズ・メソッド

リーグに出るようなトレーナーたちにとつて闘志の薰りとは心地のよいものである。

一般に伝わりやすいように言えば『より強く、高みを目指そうとする者たちの熱意がぶつかる空間は心地よい』といったところか。

そしてそれは中一日で試合当日を迎えたヤシオも例外ではない。気持ちが高ぶったまま歩いているところに暗がりから男が現れ声をかけてきた。

派手な服装ではないがギラギラとした印象のこの男はラフエル地方における影のお祭り男として知られているのだが、イツシユから来ているヤシオは当然知らない。

「やお兄さん！ この後の試合に出るんだろ？」

「そうですね。関係者の方ですか？」

ヤシユウ節も咄嗟には出ない。

「俺はメリウス。通りすがりの博徒だ。どうだろう、誰がこの大会の優勝トロフィーを手にするか賭けてみないか？ 一攫千金も夢じゃないぜ？」

「ええ。こないだゼルドスさんに勧められて勝ったトキワ記念の馬券で大負けしたばつかなんだよ。やるわけねっぺや」

「負けたといつても小銭をスツただけのことなのだ。だが負けず嫌いのヤシオはそれを引きずつていた。」

「そこをなんとか」

「つつてもなあ」

「罅があかないところだが調度よく予選A組の2人がやってきた。テスケーノもプリスカも試合直前のヤシオを応援するために駆けつけたのだ。」

「俺は賭けるぜ！　たくあんコーラ代の120円、もちろんヤシオの優勝にベットだ」

「私もです！　ヤシオさんに夕飯代50円賭けます！」

「いや夕飯もつといいもん食いなね！　テスケーノのおっちゃんをよく分からんもんを飲んでないでプリ嬢になんか食わしてやってくれよい……ってなんか2人ともオレが負けたときのために保険かけてっぺ!？」

ワチャワチャとした騒ぎがもう1人を引き寄せた。

「楽しそうな話をしているな。俺も混ぜてくれよ。賭け先は中に書いておいたからや」

目付きの鋭い男が現れ封筒をメリウスに手渡した。

封筒の中身を確認してメリウスは上機嫌になった。

「勝負に出たね。いいよいいよ！　そういう度胸、俺は大大好きだ！　お兄さんもこ

のあと試合かい？」

「ああ。このヤシオと戦うんだ」

それから時間が経ち、トレーナーズサークルに入ってからでもヤシオには気になることがあった。

「ジュリオさん、あん時どんな賭け方をしたんです？」

「秘密だ」

「けちい。まあいいや。よろしくお願いします」

「ああ。お手柔らかに」

フィールドの両側でのんびりと会話する2人だが、その様子は観客席及び中継を見ている者全てに晒されている。

試合開始を控え、レフェリーがトレーナーズサークルの2人に呼び掛けた。

「この試合の使用ポケモンは5体。それ以外は予選同様にリーグ公式ルールに則って行います。それでは両者最初のポケモンを決めてください」

「カイリキー、頼むぞ」

「いつてみんなバマツギョー！」

ジュリオはカイリキー、ヤシオはマツギヨを繰り出した。特に相性の有利不利はない対面だ。

「試合、はじめ！」

『ほうでん』！

マツギヨの放つ電撃がカイリキーを捉えた。ジュリオは何を思ったか回避の指示を出さなかった。それどころかカイリキーをそのまま突撃させる暴挙に出た。

「ほ、いや『どろぼくだん』！」

今度は弾丸のような泥がカイリキーに直撃した。それでもカイリキーは止まらない。

『クロスチョップ』だ」

腕が4本なら威力も倍加する。『どろぼくだん』の構えを解かなかったマツギヨはフィールドにめり込むほどの大ダメージを受けた。

「あーもう、ヤシオ何やってんの！」

観客席にはA組以外にもヤシオをハラハラしながら見守る者たちがいた。

ヤシオの試合より先に圧倒的な実力で決勝トーナメントの1回戦を突破したミントとシンジヨウだ。

「これはジュリオが一枚上手だったな。彼はヤシオをよく研究している」

「どういふこと?」

「ヤシオはああ見えて慎重で生真面目な奴だ。カイリキーの特性が『こんじょう』か『ノーガード』かで対策を考えているんだろう。ジュリオはヤシオがそういうものか考え方をすることを予習している。もちろんどちらも強力な特性なのは間違いないしその発想は至極全うではあるが……つまりはポケモンというよりトレーナーを対策しているということだ」

「昨今、複数の特性を持つポケモンはカプセルによってその入れ替えが可能になった。前回の戦いでどうだったかはもはや参考にならないのだ。」

「ふーん。まあどうなろうと最後にガツーンとかましてやればいいのよ」

「ミントは横綱相撲に理解のあるタイプのようなのだ。」

そしてシンジョウの指摘通りヤシオは冷や汗を流していた。

（もし『こんじょう』ならマツギヨの状態異常を絡めた戦法はまじい。かといって交代してやっぱり『ノーガード』でした、じゃ目もあてられんし）

『クロスチョップ』

『どろばくだん』で凌ぎきれ!」

腕の振りを至近距離からの『どろばくだん』連発でなんとか抑えた。

しかしカイリキーはそれでも止まらない。

『ばくれつパンチ！』

パンチならチョップのさらに倍になる。4つの拳が正確無比にマツギョに遅いかかった。

「マツギョー！」

最初のクロスチョップに加えてかなりのダメージを受けてしまっている。混乱してしまっていることもあり戦闘の継続もなかなか厳しい状況だが、得るものもあった。

「4発全部当てたな。そのカイリキー、『ノーガード』だべ。それさえ分かっちゃえばやりようはある」

ジュリオが笑った。

「正解だがもう少し早く分かっていたらよかったな。『ばくれつパンチ』」

「今だ！ 『じわれ』！」

幸運なことに混乱はすぐに解けた。

満身創痍のマツギョが迫るカイリキーに一撃必殺を放った。『ノーガード』では回避できない。

誰もがマツギョの大逆転を想起した。

「カイリキー、危なかったな」

なんとカイリキーはフィールドに『ばくれつパンチ』を連打して『じわれ』を食い止めていた。

「あれを防ぐか。馬鹿力すぎんべ」

「カイリキー、いったん戻ってくれ」

ここでジュリオはカイリキーを引つ込めた。慌ててヤシオもマツギヨをボールに戻す。

「ムクホーク。このまま流れを作るぞ」

「させつかい。トゲキツス！」

一転飛行タイプの特決となった。

『『ブレイブバード』！』

『『エアスラッシュ』！』

飛行タイプの物理と特殊がぶつかり合った。それだけに素の威力の高い方が押し勝つことになった。

「トゲキツスだいじか？」

ダメージを抑えることはできたようで、翼を振るって応えた。

「休む暇を与えるな。ムクホーク、『すてみタックル』！」

トレーナーもポケモンも反動を全く考慮していない。よって技に迷いが無い。

「食い止めるべ！ トゲキツス着陸！」

空中では攻撃の軌道が読みにくい。ヤシオはムクホークの動きを捉えることを最優先に考えていた。

地上のトゲキツスに対してムクホークは急遽照準を修正した。

『『マジカルシャイン』』

その隙を見逃さなかった。虹色に輝く光の束がムクホークを軽く弾き飛ばした。

「いい技だ！」

「あざます！」

トゲキツスは再び上昇してムクホークを追った。なんとか背後をとって攻撃しようというのだ。

しかしムクホークは飛行の軌道が自在でなかなか追うことができない。

『『ブレイブバード』』

『『エアストラッシュ』』

次の激突は互角だった。

「今だ！ 『はどうだん』！」

波導によって放たれるエネルギー弾がムクホークを襲った。タイプ一致でこそないが必中の技が決まった。

「飛び道具では向こうに分がある。ムクホーク、トゲキツスを追うんだ」

「なら振り切る！」 『マジカルシャイン』

「それを待っていた」

「ぷえっ!？」

ムクホークはトゲキツスの真上でわざと『マジカルシャイン』を受けた。虹色の光でムクホークの姿が見えなくなる。

『ブレイブバード』！

今度はトゲキツスがまともに技を受けてしまう。

「そのままの距離を維持しろ！」

「来てくれるなら待つまで。土手っ腹に『エアスラッシュ』！」

眼前に迫るムクホークに渾身のエアスラッシュが決まった、かのように思えた。

『とんぼがえり』

「な!？」

当然ここは『ブレイブバード』もしくは『すてみタックル』がくると踏んでいた。

ムクホークはふわりと宙返りをし、紙一重で攻撃をかわした。そしてそのままの華麗な動きでトゲキツスの頭を蹴り飛ばしてボールに戻っていく。もはや追撃は不可能だった。

「トゲキツス戦闘不能。ムクホークの勝ち」

「トゲちゃんありがと。次の試合もあるからゆっくり休んでな」

ヤシオはトゲキツスをボールに戻した。

「頼むぞお、ハッサム！」

「ドータクン！」

次は鋼タイプが並び立った。

「『バレットパンチ』」

目にも止まらぬ速さで突き出された鍔が鈍い金属音を響かせた。

「『どろぼう』！ おかわりも狙え！」

ムクホークにやられたことをハッサムがやり返す。相性を突いた技のラツシユがさらにダメージを上乗せした。

「よしここでもつかい——」

突然ハッサムの動きが遅くなった。先ほどまでの連撃が嘘のように体の冴えがなくなってしまう。

不可解な現象だが跳ねた石がゆつくりと落ちる様を見れば嫌でも分かる。

「『トリックルーム』か。どうも素直にやられてくれると思っただら仕込みがあっただけ」

「摩訶不思議空間へようこそ。家主のドータクン共々歓迎しよう」

「嫌な物件なこつて。『バレットパンチ』」

「『てっぺき』」

今度の『バレットパンチ』は満足なダメージにならなかった。

「かつてえ！」

「それだけじゃない。『ボディプレス』！」

再びの金属音はさらに重く響き、一撃でハッサムは膝をついた。

「『トリックルーム』で素早さを逆転して『てっぺき』で攻防一体。あとはタコ殴りにして隙を見て『トリックルーム』を再展開する。ドータクンより遅い特殊型のポケモンを出さない限りパターンにハマられることになる、か」

「悪くない戦法ね。まあ私には通用しないけど」

タカビーとはこういうことを言うんだらうなと思ったシンジヨウだが女難の経験からそれを口に出すことはしなかった。

「『バレットパンチ』！」

「『てっぺき』！」

ハッサムは出の早い技でなんとかドータクンに食らいついていく。しかし攻撃はな

かなか通らず、逆にダメージを受け続けていた。

『バレットパンチ！』

「効果が薄いことは分かっているだろう。いい加減交代したらどうだ」

ひたすら同じ指示を出し続けるヤシオにジュリオも呆れていた。

「オレはあまのじゃくなんだ。交代しろーり言われたら絶対やんねえ」

「ならばせめて楽にしてやる。『ボディプレス』」

「あー。あれをもらったら終わりね。ヤシオ、完全に浮き足立ちちゃってる。口だけの

男じゃない」

「いや。そうでもないかもしれないぞ」

ハッサムがドータクンにしがみついた。

「いいぞ！ そのまま放すなよ！」

『トリックルーム』の時間切れを狙うつもりか？ 無駄なことだ！」

「そこじゃないんだなあ」

ドータクンがぶるぶると震え出した。よく見るとしがみつくハッサムの体から煙があがっている。これはたまたらない。

「ハッサムは体も筋肉も金属でできてんだ。その羽は飛行じゃなくて熱を逃がす体温調

節のためのものだんべ。つまり羽ばたかずに戦ってれば体はどんどん熱くなる。その熱ならカチカチになったドータクンにも有効ってことだがな」

「ドータクン振り切れ！」

「ムクホークの時はそっちが引っ付いてきたのに都合のいいこつたな」

ここで『トリックルーム』が消えた。

「鬱憤を晴らすぞ！ 『どろぼう』！」

「『トリックルーム』」

摩訶不思議空間の再展開とはならなかった。

高熱で体力を奪われていたところに『テクニシャン』補正のかかった悪タイプの技。

これは勝負あった。

「ドータクン戦闘不能。ハツサムの勝ち」

「ドータクン。すまなかった。ゆっくり休んでくれ。カイリキー、また頼む」

「ハツサムはいったんクールダウン。ここで目立ってやれスターミー！」

「『ストーンエッジ』」

「『ハイドロポンプ』」

回避の許されない技のぶつかり合いとなった。スターミーのコアが早くも点滅を始めた。一方のカイリキーも肩で息をしている。

「粘られると面倒だ。『ぼくれつパンチ』！」

『ストーンエッジ』が急所に当たったのかスターミーは動けない。

「あれ？」

ここでカイリキーも停止した。体からパチパチと音がする。

「麻痺?! 『ほうでん』が効いていたか！」

「しめた、『じこさいせい』！」

スターミーは奪われた体力を急速に回復した。ダメージを受けやすい分回復も早い。

「今度こそ『ぼくれつパンチ』だ！」

『サイコキネシス』！」

回避ができなくても当たる前に攻撃してしまえば問題ない。ヤシオはエスパークの技でごり押しすることだけを考えた。

「カイリキー、戦闘不能。スターミーの勝ち」

「スターミー。このままいくぞ」

「ならこつちは……」

ジュリオはカイリキーを戻して再びムクホークを繰り出した。

『『ハイドロポンプ』』

「縦に宙返り」

高速で飛行するムクホークはなかなかのを絞らせない。

『「れいとうビーム」！』

「360度ロール」

同じく飛行タイプを併せ持つトゲキッスならともかく点の攻撃ではなかなか捉えられない。

『「ブレイブバード」』

そして回避から攻撃へと転じた。スピードのあるスターミーでも反応できなかつた。

しかしヤシオはそれも覚悟のうえだった。

「捕まえたぞ！ 『サイコキネシス』！」

カイリキーの時のように強い念力がムクホークを押さえ込む。

『「インファイト」』

しかし翼と足を激しく振るうことであっさりと抜け出した。

「そんな使い方ありかよ!？」

「距離をとれば技が当たらない。近づけば強力な技で攻められて搦め手も通用しない。

ヤシオにとって苦しい相手だな」

「わざと攻撃を食らって反撃するとかしかないんじゃない？ 残りの体力だと厳しいかもしれないけど」

『『ハイドロポンプ』』

「そのまま急降下」

『『れいとうビーム』！』

「真横に、いや今のはフェイントだ。構うな『ブレイブバード』！」

一直線に突っ込んで来るムクホークに氷の塊が降ってきた。

「先に放った『ハイドロポンプ』を『れいとうビーム』で凍らせたか。いいぞ、あれならムクホークの動きを止められる」

「あんたヤシオとシンクロしてんの？」

「よし、『れいとうビーム』」

しかしヤシオの指示がスターミーに届くことはなかった。

『ブレイブバード』がヒットする鈍い音がスターミーの幕を降ろした。

「スターミー戦闘不能、ムクホークの勝ち」

「そんな。今のは」

氷の塊が体に当たったにもかかわらずムクホークは技を当てることを優先した。

「見くびるな。俺のムクホークはそのくらいじゃ止まらない」

次のボールを手に取った。

「そっけ。スターミーの敵討ちだハッサム！」

「ならこっちはドータクンの敵討ちだ」

『バレットパンチ』

『ブレイブバード』

真つ向からのぶつかり合いになった。その力は互角。

『すてみタツクル』

「そのまま投げ飛ばせ！」

攻撃を受けつつもハッサムはムクホークと組み合った。そして地面に叩きつけた。

『インファイター』

『バレットパンチ』

鍔が翼を掻い潜ってムクホークに届いた。

「垂直に上昇して距離をとれ！」

「ハッサム戻れ！ マツギヨ、もっかい！」

ヤシオはここで交代を決断した。

『ほうでん』

「垂直降下から『すてみタツクル』！」

「『あくび』！」

予想外の技が命中した。ムクホークは時間差で眠ってしまったことになる。

上空に逃れさせようとしたジュリオだったがよりよい解決策を捻り出した。

「『とんぼ』」

「『ほうでん』！」

「『あくび』による眠り状態は時間差で訪れる。そして『とんぼがえり』なら眠る前に攻撃しつつ交代できる。そこを突きたいいい読みだ」

「それなりに考えているってことか。うんうん、それでこそトレーナーよね」

苦手な電気タイプのを技をまともに食らったムクホークはついに力尽きた。

「ムクホーク戦闘不能、マツギョの勝ち」

「ムクホークお疲れさん。いい手だと思ったがあそこのとんぼは甘えだったか」

「いやこつちもアドレナリンが耳から漏れそうですがね」

「エレキブル、スタンバイだ」

ヤシオはマツギヨを戻さない。互いに相手に対しての手はあった。

『どろぼくだん』

『れいとうパンチ』

大きくジャンプしたエレキブルが冷気を纏った拳でマツギヨを打ち据えた。

『じわれ』

『じしん』

地面の亀裂同士がぶつかって消えた。

「電気タイプが地面技使うの反則じゃないんけ？」

「ブーメランだ」

エレキブルの攻撃を跳ねて回避しつつ反撃を狙おうとはしているが、コスモスのサザンドラの時のようにマツギヨは防戦一方だった。

「ヤシオはマツギヨにもう4種類の技を指示している。ダメージは『どろぼくだん』か『じわれ』でしか与えられない」

「もうマツギヨはヘロヘロでしょ。私なら交代するけど」

「残す手持ちはヤシオが3体でジュリオが2体。数では有利だがマツギヨとハツサムは連戦でかなり消耗している。だから最後の1体は少しでも温存したいということなんだろう」

「『れいとうパンチ』！」

「『どろばくだん』！」

苦手な技に構わずエレキブルがマツギヨに決定打を叩き込んだ。

「マツギヨ戦闘不能、エレキブルの勝ち」

「マツギヨ。無理させてごめん。うまくやるからゆつくり休んでくん」

ヤシオは残りのボールに目をやった。

「ニイニイのタイだ。気張るぞハッサム！」

再びハッサムを繰り出した。ドータクンとの戦いで相当体に負担をかけてしまっているためかなり辛そうだ。

「『バレットパンチ』！」

「『まもる』」

反応が難しい速度での攻撃も『まもる』の前には形無しだ。弾かれたハッサムはよろけてしまう。

「ハッサムを捕まえろ」

エレキブルの2本の尻尾がハッサムに絡み付く。自慢の鋏もこれで使えない。

「抜け出すんだ！ 『どろぼう』！」

「無駄だ。エレキブルの体内には街1つ分の電力が貯まっている。それが高圧電流とし

て流れる尻尾がこいつの武器だ。金属でできているハッサムには効果覷面だろうな」

さらにドータクンとムクホークから受けたダメージも大きい。想像もできないレベルでの感電にハッサムは苦しめられている。

「もつと電圧を上げろ！ そのまま倒しきるぞ！」

唇を噛んでいたヤシオだったがここで顔をあげた。

「逆に考えりやチャンスだ！ そのまま投げ飛ばせ！」

エレキブルの体が持ち上がった。

「焦ることはない。エレキブル、電圧を上げる。ハッサムの体力はもう限界だ」
「そつげ。じゃあ見ててくんな」

ハッサムはフルパワーでエレキブルをフィールド反対側の壁まで放り投げた。

「なんだと!？」

『バレットパンチ』！ ボコってやれ！」

今度こそ鉄の一撃が決まった。そしてハッサムは連続攻撃の手を緩めない。

「畳み掛けつぞ！」

「攻撃に備えるんだ！ 『まもる』！」

「そこだ！ エレキブルの足元に『ぎんいろのかぜ』」

『『ぎんいろのかぜ』!？」

ミントが吹き出した。

「ラフエルリーグはいつからコント大会になったの？」

「俺も公式戦でハッサムに使わせるトレーナーはネットの動画でしか見たことがなかった。ある意味貴重な経験をしているのかもしれないな」

ダメージにこそならなかったが牽制にはなった。

『バレットパンチ』！

『ワイルドボルト』！

先制技のスピードと反動ダメージが味方した。

エレキブルの巨体が倒れた。

「エレキブル戦闘不能、ハッサムの勝ち」

とはいえハッサムも鎧を杖にしてなんとか立っているにすぎない。

「さすがに強いな」

「いやいやジュリオさんの猛攻もしんどいですよ」

「そうか。でも勝つのは俺だ。とっておきでいかせてもらおう」

ジュリオはバシャーモを繰り出した。

「ほーん。バシャーモか。ハッサムどうする？」

ハッサムは眼差しで戦闘の継続をアピールした。

「そつか。まあそうだんべな。ならやつぺ。『バレットパンチ』！」

鍔が空を切った。技を放つ前にかわされたような感覚という無茶な表現でしか言い表せない。

「はつやいな。それなら『つばめがえし』！」

これなら狙いを外すことはない。

残りの体力からは信じられないスピードで鍔がバシャーモを捉えた。

「いい技だ。それに適格な判断だ。だが——」

「そこは、俺たちの距離だ」

フィールドを転がったのはバシャーモではなかった。

「ハツサム戦闘不能、バシャーモの勝ち」

「嘘ベ!？」

「あの『つばめがえし』は最善手だった。しかしバシャーモはそれを捌ききった。相性じゃない、体術でハツサムを上回ったんだ」

「ふうん。面白いじゃない。ジュリオが決勝に勝ち上がってくるつてもアリかもね」

「ナチュラルに俺を敗退させないでほしいが」

「くうくつ！ やっぱりリーグってのはこうでなくちゃあ！」
「楽しそうだな」

「そりやあもう！ ジュリオさんもそうでしょ？」

「まあな」

「こうなつたらこつちも出すしかない。いってみんな、バシヤーモ！」

「なるほど。ヤシオから感じる不思議な炎タイプの気配はバシヤーモだったか」

「私からしたらその探知能力のほうが不思議なんだけど」

満足げに頷くシンジヨウをミントはナゾの実でも見つけたかのような視線で刺した。

「まさかバシヤーモ対決とはな」

「オレもびつくりですよ。心置きなくやりましょうや」

『ほのおのパンチ』！

『ブレイズキック』！

炎を纏った拳と蹴りが交差した。爆ぜるような匂いが漂う。

「距離を離すな！ 打ち続けろ！」

「こつちも打ちまくれ！」

至近距離での打ち合いが続いている。互いにパンチとキックをかわしつつ、しつこく有効打を狙っている。本来なら僅か数寸の間合いではこのように技に勢いを乗せることができない。体重移動と関節の捻りを巧みに操ってありつたけの力を込めているのが見てとれた。

「ヤシオのバシヤーモはダツキングでジュリオのバシヤーモはウェービングか。見ていて飽きないな」

漫画ならば目がキラキラと輝いていたことだろう。

「この格闘オタク」

ここでヤシオがキックの打ち止めを指示した。

「『じしん』!」

「『ブレイブバード』」

今度は相性を突いた技がぶつかった。2体のバシヤーモはそれぞれ後方に回転し、間合いをとった。

「『ブレイズキック』!」

ヤシオのバシヤーモの右脚が空を切った。

「遅い！ 『ブレイブバード』！」

ジュリオのバシヤーモの反撃が決まった。反応できるスピードではなかった。

「『かそく』か。あれは厄介だぞ」

「私のサンダースより速くなってから粹がってほしいけどね」

「もっかい『じしん』」

「地上に留まるな。飛べー」

バシヤーモが大きく飛び上がった。もう1体もそれを追う。

「そこだべー！ 『ブレイズキック』！」

「叩き落とせ！ 『インフアイト』」

ヤシオのバシヤーモが連続で見舞った蹴りを全てかわし、逆に拳と蹴りの応酬を浴びせる。

たまらず墜落しかけたところでなんとか立て直して着地した。

ヤシオは頭をかいた。

「どんどん速くなってんな。参っちゃまうねこりゃ」

「それだけじゃない」

急降下するやいなや一瞬で間合いを詰めてきた。

『ほのおのパンチ』

ノーガードの腹にまともに入った。地面を蹴って制動を掛けることで追撃を逃れた。

「バシャーモ！ やつべえ殺される」

「えらくビビるな」

「こつちにも事情があるんで、『ブレイズキック』！」

しかし当たらない。ジュリオのバシャーモは止まっていないと目で追えない程になつていた。

『インファイト』！」

虚空から拳や脚が生えてくるようなラツシュ。ヤシオのバシャーモは僅かに軌道をそらすのがやっとだった。

「俺は武道を嗜んでいる。戦いの基本は単純な動きの反復にある。そしてそれを近距離で正確に再現することをポケモンたちと徹底的に鍛えてきた」

「でしようなあ。5体ともボコス力殴つてくるんでたまんねえ。なんかトレーナーのオレも体バツキバキですもん」

「光栄だ。それなら最後までボコスカさせてもらおうか。『ブレイブバード』！」
ムクホーク戦から何度も見ている技だがやはり反応できなかった。

「バシャーモ！」

ヤシオのバシャーモは仰向けに倒れた。ノックアウトは免れたようで小さく震えながらなんとか起き上がろうとしている。

「バシャーモの怖いところはまさにアレだ。『かそく』でどんどん速くなるんだ。敵の攻撃をかわしつつ一方的に攻めることができる」

「ヤシオこそ『トリックルーム』を使うべきだったってことね」

「それができない以上スピード以外の方法を探るしかない。炎タイプが持ち合わせている熱がカギになるだろうな」

「ヤシオ。俺は最後まで手を抜かない。そっちのバシャーモが倒れるまで徹底的にやる」

「だってよ。バシャーモ、そろそろいいんでねーの」

バシャーモがすつくと起き上がった。

その体から青白い炎がオーラのように立ち上る。

「これ待ちましたよい、と。発動に条件があるってえのが難ありだね」

『かそく』でないヤシオのバシャーモは『もうか』。ピンチの時の炎タイプの技の威力が桁違いになる。

「そっちも全開か。でも『もうか』が発動したということは限界が近いはずだ。それに技の威力は上がってもスピードとは無関係だ。俺のバシヤーマに攻撃を当てられるか？」

「まあ無理でしょ。だからこうする。『ブレイズキック』！」

今度は一味違う。バシヤーマの脚からさらに炎が太く伸び、フィールド全体を焼き払った。

「さすがの火力だ。飛べー！」

先ほどと同様にジュリオのバシヤーマは高く飛び上がった。

「どうする。さっきの再現をするか？」

ヤシオに逡巡の色はなかった。

「バシヤーマ、『スカイアツパー』！」

「受け止めろー！」

元は空中の相手を狙うための技だ。地上では難しくともこのような場面なら当てられる。今回ばかりはジュリオも回避は厳しいと判断した。

ジュリオのバシヤーマは『スカイアツパー』をブロックし、さらに高く飛び上がった。

「いけつぺやー！ バシヤーマー！」

青白い炎が螺旋を巻いて、燃え上がる。ヤシオのバシヤーマもロケットのような勢いでさらに上空へと飛び上がった。

「決めにいぐぞ! 『Flare Blitz!』!」

「迎え撃つ! 『フレアドライブ!』!」

トレーナーの叫びが木霊して全身全霊の大技同士が炸裂した。
スタジアムは轟音とともに青と赤の炎に包まれた。

観客席も、そしておそらく中継の向こう側の人々もこの対決を口をあんどりと開けて見守っていた。

「さっき言ってたカギってこういうこと?」

「いやさすがにここまでやれとは」

シンジヨウが言いたかったのは彼が得意とする熱気を利用した防御壁のことだったのだが、別解があつたようだ。

炎と煙が晴れ、2体のバシャーモが地上へ降り立った。そしてそれぞれトレーナーへ歩み寄る。

ヤシオのバシャーモはゆつくりとヤシオの方へ向かったが途中でその歩みが止まった。

「よく頑張ったな。次の試合もお前に」

ジュリオはそれを横目で確認した。そして戦い抜いたバシヤーマを労る。その労いの言葉をにこにここと聞いていたバシヤーマだったが、笑みを浮かべたまま崩れ落ちた。

「バシヤーマ戦闘不能、バシヤーマの勝ち。よって勝者、ヤシオ選手」

長く張り詰めていた緊張の糸がぷつりと切れた。

「よっしやあー！」

ヤシオは喜びを爆発させてすぐさまフィールドのバシヤーマに駆け寄った。そしてボールに戻した。

「バシヤーマ、マツギヨ、トゲキツス、スターミー、ハツサム。ナイスファイト！　アーボックも応援ありがとな。次はお前の力が必要になるからよろしく」

バシヤーマと、そしてボールの中のポケモンたちと喜びを分かち合った。

そこへ最後のボールを手にしたジュリオが歩み寄ってきた。

「ありがとう。いい勝負だった」

「こちらこそありがとうございました」

敗退にも関わらずジュリオの表情は晴れ晴れとしていた。自分はそのように振る舞えるかヤシオは少し考え込んでしまう。

「まさか『フレアドライブ』一撃でもっていかれるとはな。近接戦では負けないつもりでいたんだが」

「オレもジュリオさんと戦うための作戦を考えてたんです。技が当たらないなら面積も体積も根こそぎ焼ききるしかないんじゃないかって。あとは『インファイト』を耐えてくれたバシヤーモのおかげですよ」

「磨いてきた近距離戦が仇となつたか。俺ももつともつと修行しなければいけないな。ヤシオ、改めてありがとう。君と君のポケモンなら優勝だつて夢じゃない。いつかまた勝負しよう」

「はいー」

がっちり握手する両者に観客席から惜しみ無い拍手が送られた。

こうしてヤシオはなんとかベスト8入りし、準々決勝に駒を進めることとなつた。

しかし彼はまだ知らない。このスタジアムを取り巻くのが熱気の渦だけではないことを。そして、彼を捉えて放さない狂気じみた視線を。

響応の牙

その日の試合を終えたヤシオは会場近くのバーで食事をしていて、壁に埋め込まれたテレビは彼が楽しみにしていたラフエルの報道番組の時間となった。

若手アナウンサーがスタジオ内の特設スタジオから呼び掛ける。

「ここからは現在開催中のラフエルリーグのコーナーです。今夜も素敵なゲストが熱戦を解説してくれますよ！ 今日担当してくださるのは熱いキャラクターでお馴染み、ダンデ・ローズさんです！」

「やあどうも！ ダンデ・ローズだ！ 現地に呼んでくれるとはありがたいかぎりだ！」
がっしりとした体つきの中年男性が登場した。一言二言くらいで血管が切れそうなくらいのテンション。ラフエルでは有名人らしい。

「やはり予選を突破したトレーナーの皆さんには鬼気迫るものがありましたね」
「そうだな！ 目的はそれぞれ違うにしても、リーグに出るからには勝ちたい！ 一番高い場所に立ちたい！ それがトレーナーの性だ！」

「ではさっそくまいりましょう。Vのフリをお願いします」
「任された！ ポケバトウウウレディイイイゴオオオオオ！」

画面が切り替わりミンントの顔写真が表示された。

「やはり話題となったのはミンント選手の試合ですね」

「うむ！ 彼女はとにかく強い！ わしの見立てでは対戦相手のロウ選手も綿密な作戦のもと臨んでいたが、それでも押しきれなかったな！」

また画面が切り替わった。

「ここを見てほしい！ ミンント選手のギャロップがロウ選手のオーダイルに攻め込まれている……：ように見えるが！ ギャロップは攻撃をあえて受けながら敵に狙いを定めている！ そしてドン！」

ギャロップが『つのドリル』でオーダイルをねじ伏せた。スタジアムが一瞬静まり、そして爆発のような歓声があがった。

「とかく一撃必殺は当てるのが難しい！ 10回やって3回当たれば上出来つてとこだろうな！」

「ではなぜミンント選手は『つのドリル』を？ 一部メディアでは圧勝を確信したためなんて声もあるみたいですが」

「それは違う！ むしろ逆だ逆！ まずは相性だ！ もちろん交代してもいいがそれだ

と後続に負担をかけてしまう！　あとは他の選手に一撃必殺を戦略としてちらつかせる狙いもあつただろう！」

「次はシンジヨウ選手の試合だ！　炎タイプのエキスパートである彼に対抗するならば・地面・岩といった相性を突いた攻撃が有効だし、実際パリツシュ選手もそう考えていたのだろう！」

「しかしシンジヨウ選手の試合運びは危なげなかつたという印象ですね」

「いわゆるタイプ統一パの妙だ！　相手は当然相性のよいポケモンを固めて攻めてくる！　それは脅威ではあるが逆に考えれば『相手の思惑が読める』ということだ！　あとはそこをケアできれば統一パが脆いなどということはない！」

「なるほど。メンバーの選出から戦いが始まっているんですね」

「次はわしの知り合いでもあるコウヨウ選手だ！　実は彼女はあるバトル施設の元締めなんだが、日々たくさんのおトレーナーを見ているもんでよく情報交換をしているんだ！」

「なるほど。ダンデ・ローズさんはポケモンバトルのトレンドの研究でも有名ですね。情報網を他地方にも張り巡らせていると」

「わはは！　彼女の試合の特徴は勝ちパターンが多さだ！　経験に由来する引き出しの多さが武器でどんな状況からでも豪快に攻めていけるのが強みだな！」

映像が切り替わった。メガシンカしたフシギバナがスワンナを『やどりぎのタネ』で絡め取っている。『エアスラッシュ』による反撃を受けてはいるがまるで意に介していない。

「これは彼女が得意とする持久戦だ！ この少し前に放った『はっぱカッター』に『やどりぎのタネ』を紛れ込ませることで作戦を気取られないようにするという戦術だ！ この映像だと飛行タイプの技を食らってはいるが、フシギバナは体力を回復する手段を豊富に持っている！ それにタフに鍛えられてる！」

「なるほど……」

「それだけではない！ 火力でゴリ押ししたりスピード勝負を仕掛けたりもできる！ 破天荒というほかない！」

映像が切り替わる。コウヨウの他のポケモンたちも対戦相手に同情するレベルで大いに暴れていた。

「様々な組み立てができる柔軟性がコウヨウ選手の武器というわけですね」

「うむ！ この後の試合も楽しみだな！」

「それにしても今日は一段とテンションが高いようですが」

「そりゃそうだ！ ここには強いトレーナーがたくさんいる！ わしの考えとしてポケモンと同じくらいトレーナーも強くならなければいけない！ その手段は色々あるが

わしの道場で体を鍛えるのがいちばん！ 何かあった時に備えて強い体と心を育てるのだ！ そしてわしの道場ならそれができる！ 見学も体験も年中無休で受け付けているぞ！ 画面の下に表示されている番号にすぐ電話だ！」

「生放送なので番号は出ませんがありがとうございます。他に気になった試合はありましたか？」

「うむ！ そしてもうひとつ紹介したいのはヤシオ選手とジユリオ選手の試合だ！ 接戦をなんとかものにした形ではあるが特にわしが注目したのは」

「すみませんここでお時間です。スタジオにお返しします」

「ああん」

ヤシオはがつくりとうなだれてグラスになみなみと注がれたポーリック・ナイトを飲み干した。

「まーたオレんところはカットかい。プロフェッショナルも再放送されねえしついてねえべ。どーせオレなんてカットの申し子なんだ。カット太郎なんだい」

そんなヤシオの肩を叩く者があった。

「まあまあ。次の試合で目立てばいいじゃない？」

このようなバーに似つかわしい赤を凌駕する燃えるような紅髪の女性だった。

しかしムーディーな雰囲気にならない理由がある。ヤシオがちょうど今見ていた人

物だったのだ。

「あんら。あーたコウヨウさん？」

「ご名答！ 君はヤシオくんだよね。こっちで一緒に飲まない？」

「せっかくだしそうすつペヤ」

コウヨウのテーブル席には先客がいた。

「オトギリくん、ヤシオくんを連れてきたよ」

「ああ……」

「ども。オレヤシオっていいいます」

「オトギリだ……」

どうにもこのオトギリ、元気がない。

「ごめんね。オトギリくんも準々決勝進出者なのにさっきのリーグ特集で名前を出して

もらえなかったからいいじけちやったの」

「俺はいじけてなんかない……」

「なるほど。オトギリさん、そんなことで悩んだってしょうがないですよ。生きていれ

ば大変なことだってたくさんあるべ？」

先ほどまで同じことでいじけていた者の台詞とは思えない。

「オトギリくんの次の相手はミントちゃんでしょ？ 優勝候補に勝ったらオトギリくん

でーコーナー作れちゃう勢いなんじゃない？」

「それもそうだな。ほら、コウヨウさん。たんと飲んでくれ」

「立ち直りはっや」

オトギリが復活しコウヨウのジョッキを口切りいっばいまで満たしていく。

「ぶっはあ！ そうだそうだ、若人よ元氣であれ！ 私も四捨五入すれば若人！ 次の

試合ラガルドさんに絶対勝つー！」

ラガルドは確かな実力をもつプロトレーナーとして有名な人物だ。そちらも激しい勝負になるだろう。

「ヤシオさん、といったか。次の相手は？」

「パンデュールだ。今から楽しみでしょうがねえ」

「パンデュールくんか。試合を見てただけどあの子も凄いやね。執念で戦ってるっていうのかな、他の人たちとはちよつと違う雰囲気があるのよね」

「そうだね」

「でもあの子はよく分からないんだよね。私、決勝トーナメントに出てる人みんなと仲良くなるうとしてるんだけど、パンデュールくんは話しかけようとしたらすーつといなくなっちゃって」

「きつとシャイなんだろうな」

オトギリは自分の言葉を嘯み締めるように頷いたがヤシオは別のことを考えていた。その日眠りにつくまで。

「しゃあ！ やんべー！」

日がやや傾いた昼下がり、最終調整を終えたヤシオは足取り軽く準々決勝に向かおうとしていた。

周囲に人影はない。この時間は誰もが観客席か関連施設のライブビューイングで観戦をしているのだ。

しかし例外もいた。

暗がりから現れた人相の悪いスキンヘッドの男がヤシオに話しかけた。

「おい。メインスタジアムはどっちだ？」

「あつちですよ。これからオレが試合すつから応援してくれつと嬉しいですよ」

迷子対策にとシンジョウとミント、さらには初戦終了後のジュリオからもメインスタジアムまでの道のりを繰り返し叩き込まれていた。

そしてヤシオ自身は気がついていないが服のポケットというポケットに地図のメモを入れられ、万全の体制が整っていた。

「そうか。じゃあそうするか」

その手のことには疎いヤシオですら分かる筋肉量に内心驚いたが、テスケーノ然り厳しい見た目であつても勝負を愛する者に悪人はいないというのが彼の信念だった。

「そんじや行きますか。オレは選手通用口つーところから入るんで途中まで案内しますよ」

「それには及ばないな」

ヤシオの足下が崩れ、何かが飛び出してきた。

「うおい!? なにすんだ!」

大顎がヤシオを掠めた。咄嗟にボールから飛び出したハッサムが彼を突き飛ばしていなかっただら胴と脚が泣き別れしていたことだろう。

「仕留めにいったんだが。そいつに感謝するんだな」

「サンキューハッサム。つたく、試合前なのについてねえべ」

大顎の主、いかくポケモンのワルビアルがこちらを睨み付けている。その巨体に似合わず地中を猛スピードで移動するポケモンだ。

もちろん野生の個体ではないことは明らかだ。

さすがのヤシオも状況を把握した。目の前の男は悪意をもつてワルビアルに自分を襲わせている。理由に心当たりはないが敵であることは間違いない。

「『かみくだく』！」

「『バレットパンチ』！」

試合に向けて調整を済ませていた鉢であれば大顎とも十分にやりあうことができる。
ワルビアルは深追いせず、後退した。

「今のでなんとなく分かっただろ？ 言葉より行動で示すつてのが俺の主義でな」

「わけわかんねえよ。あんたなにもんだ？」

「オレはアバリス。『暴獣』のトップだ。こうして直接名乗つてやることは二度とない。
覚えておいて損はないぞ」

「オレはヤシオ。何度でも名乗つてやるがトレーナーのトップ志望だ」

「ほう。お前も自分のペースを崩さねえつてか。いいねえ、そういう奴のほうが潰しが
いがあるつてもんだ！」

それに呼応するかのようにワルビアルが動いた。今度はヤシオたちにも構えがあつ
た。

「ハッサム、『いわくだき』！」

「穴に飛び込め！」

攻撃をかわしてワルビアルは先ほど飛び出してきた穴に身を潜めた。

「どこから出てくるか分かんねえべ！ 足下に気をつけろ！」

「ほう、素直なんだな」

なんと、飛び込んだ穴からそのままワルビアルが飛び出してきた。そしてハツサムの胴に噛みついた。

人間には計り知れない痛みに見舞われハツサムは身をよじらせて苦しんでいる。

「その顎はやべえぞ！」

「それだけじゃねえ」

突然ハツサムの体が燃え上がった。

『ほのおのキバ』か！ 頑張れハツサム、『いわくだき』だー！

力が完全に入らないながらも両腕の鋏からの『いわくだき』がワルビアルを強かに打った。

これにはたまらず牙の拘束が解かれ、互いに敵のリーチから逃れる格好となった。

スタジアムに向かうこの平坦な道。しかし地中というフィールドを活かせるのがワルビアルだ。

4倍の弱点を突かれたのと同時に弱点を突いた攻撃を連続で当てることができたが、先制され本来の威力を出せなかった分どちらが有利かは歴然だった。

『じしん』！

アーボックがサンダースに仕掛けようとして阻止された時の記憶がまだ新しい。

「させるな、押さえるんだ！」

ここはミント戦の経験が活きた。ハッサムは鋏で体を押さえつけて上下の体重移動を封じる。しかしそれはワルビアルのリーチに入ることの意味した。

再びワルビアルの大顎がハッサムを掠めた。

『バレットパンチ』！

完璧なタイミングで技を放ったがワルビアルはヤシオたちの予想以上に俊敏に動き、鋏を踏みつけた。

『いわくだけ』！

「甘いな」

空いているほうの鋏は両腕で抱え込む。攻撃の手段を絶とうというのだ。

『ほのおのキバ』！

これも大ダメージとなった。

「炎への弱さがハッサムの泣き所つてのはガキでも知ってる。甘かったな」

「オレにとつてはおっさんのがよっぽど甘え。糖尿に気をつけたほうがいいがね」

「負け惜しみを、なっ……？ どうした!?!」

ワルビアルが地面に足をとられて動けなくなっていた。否、足下の砂が渦を巻いてワルビアルを引き込んでいる。

『すなじごく』だと!』

「そう。こつちに来てから砂漠のエキスパートと知り合っただけどもな。道案内のついでに色々レクチャーしてもらってたんだ」

威力は低いがバインド効果のある技だ。すぐに抜けることは難しい。

「そのまま『むしくい』!」

本来ハツサムの顎の力など知れている。しかしこの場では非常に有効な攻撃だった。相当効いたようでワルビアルは膝をついた。

「テクニシャンか。ご丁寧なこつた。ワルビアル、立て!」

意地を見せなんとか起き上がり『すなじごく』から脱した。

「まあいい。こうなったら力比べだ。ワルビアル『かみくだく』!」

「こつちも決めにいぐぞ! 『ばかぢから』」

両者がぶつかろうとした瞬間、突如として地面から光が溢れた。渦を巻くそれはアバリスとワルビアルを包みこみ虹色に輝いた。

ホヅミから聞いていたし、何よりヤシオにとっては忘れられるはずもないものだった。

「Reオーラ! 峡谷でクロックがやったアレか!」

「お前も知っているのか。俺にも経験がある。そういえばあの男はキセキシンカがどう

とか言っていたな」

もはやアバリスの言葉はヤシオに届いていない。

ヤシオは無我夢中で光に向かつて手を伸ばしたが、その手に輝きが呼応することはなかった。

「滑稽だな。お前は選ばれなかったんだ。正しい心を持ったトレーナーが聞いてあきれ
るぜ」

ワルビアルが真つ直ぐに突っ込んでくる。その能力が大幅に上昇していることはもはや疑いようがない。

「『ばかちから』！」

全身の力を集中しようとしたハッサムだったが動き出すことができなかつた。

ポケモンはトレーナーと呼吸を合わせて戦っている。それは指示を出す側と受ける側といった単純な問題ではなく、両者の意思の疎通が様々な方法でなされることで互いの良さを引き出し合うということに他ならない。

ハッサムはその呼吸の乱れを感じ振り向いた。そしてそのまま固まってしまふ。

無理もないことではあるが彼らはR e オーラが人間に与える作用について無意識のうちにもその可能性を排除していた。

ヤシオの腹にいつの間にか肉薄したアバリスの拳がめり込んでいた。

「おっ……何すんだ……」

最後の食事からしばらく経っていたが、それでもヤシオは口内が酸っぱい何かで満ちていくのをぼんやりと感じた。

トレーナーはただポケモンに指示を出すだけの存在ではない。ポケモンとともに戦う存在だ。

この言説は間違っていないが、だからといって腕まくりをして自分のポケモンに加勢しようとする者はいないだろう。人が鍛えたところで上限は知れているし、それを超えようと鍛えるのであればその時間をポケモンとの特訓に割くのが普通だ。

ポケモンにトレーナーを襲わせようとする連中と向き合わなければならないPGであればその限りではないが、それでもポケモンを戦わせながら自分も相手トレーナーを攻撃しようとする敵というケースはそうそうあるものではない。

そしてそんな暴力に裏付けられた強さを理解するにはヤシオの世界はまだまだ狭かった。

「予定ではさつきと片付けるつもりだったんだがな。こんなに粘られるとは思わなかったぞ。確かにお前の勝負の腕はそれなりだ。あのまま続けてりゃこつちも痛手を負う可能性だつてあつた。リーグに出てくるだけのことはあると認めてやるさ。……だが、それだけだ」

アバリスの手刀がヤシオのこめかみを打ち据えた。

呼吸もできなくなるほどの痛みが身体中に走った。そのまま立っていることもできず、ヤシオはうつ伏せに倒れてしまった。

「あいにくだがこれはトレーナーどうしがお行儀よくやるポケモンバトルじゃねえ。強さだけがモノをいう殺し合いだけ。つたく、なーにがトレーナーの祭典だ。まあだからこそ壊してやらなきゃなあ?」

ヤシオを見下ろすアバリスの瞳が残虐の色に染まる。

バルル団とは違う。荒淫と放蕩を着に隅から悪事を貪ってきた色だ。

「やらせねえぞ、オレはこの大会——」

盛り返そうとしたヤシオだが頭を踏みつけられ、そのまま動かなくなった。

不測の事態にハッサムはヤシオを庇おうとしたがトレーナーの指示がなくてはそのパフォーマンスはどうしても落ちてしまう。おやに辿り着くことは叶わずワルビアルに尻尾で撥ね飛ばされた。

握力が失われたのかヤシオの手からハッサムのボールが離れ転がった。懐からも5つのボールがこぼれ落ちた。

「さあどうするよ。哀れお前のご主人様はのびちまった。他の手持ちも聞いとけ。まとめてかかってきてもいいが俺のワルビアルはちよいと凶暴でな。そのままボールに戻

らないならこいつのやわい喉なんざ一噛みで砕いちまうぜ？」

トレーナーを人質にとられてはどうすることもできない。ヤシオのポケモンたちはボールの中で沈黙し、ハッサムも自らボールに戻った。

「ギョーと」

アバリスは小刀を取り出しヤシオのボール全てに細工を施した。

「ボールの開閉スイッチはもう作動しない。これで抵抗はできねえなあ？」

そのまま小刀を振り上げる。ボールがカタカタと揺れた。

「約束が違う？ 俺は慈悲深いんだ。ワルビアルの手をわざわざ汚させねえしお前らには特等席での見物を許してやる。まあ、ただこいつをブツ刺してえだけなんだけどなあ！」

人間もポケモンも己の存続を自然に考える。それが命あるものの原理だからだ。しかし他者の原理を曲げようとする存在についてヤシオは真に理解していなかった。

最後の一刺しを食らわせんとアバリスが踏み出す。その足が踏みつけているのは地面ではない。

己の絶望だ。或いは己の卑劣だ。

「お前は何でもない。俺がそう決めた」

その言葉を否定するかのように複数の気配がこちらに近づいてきた。

「おいヤシオ。そろそろ試合の時間だぞー。こっちにいいのか？」
「ヤシオさーん？」

テスケーノとプリスカの声がした。大会スタッフと思われる複数の足音を伴っている。

アバリスは腹立たしげに小刀を懐にしまった。

「時間をかけすぎたか。ワルビアル、雑魚に構うな。本来の仕事に取りかかろぞ。そいつはお前が掘った穴にでも落とすとしけ。土葬に早すぎもへったくれもねえ」

ワルビアルがヤシオと彼のボールを穴に蹴り込んだ。

そして穴の上に備品の入った段ボールを山盛りに積んで完全に塞いでしまった。

「やり手には程遠いな。あばよ、選ばれなかつたヤシオ」

メインスタジアムでは準々決勝最後の試合がまさに始まろうとしていた。

「どうしたことでしょう！ ヤシオ選手、試合開始時刻を過ぎていられるにもかかわらずまだ会場に姿を見せません！」

実況の声が虚しく木霊する。

既にパンデュールはトレーナーズサークルでその時を待っている。不思議なことに

苛立った様子はない。

「だからあれだけ言ったのに。あの方向音痴、首に紐つけとけばよかったのよ」
「いや、それはさすがに」

自分達の試合を終えて観客席に陣取るミントとシンジヨウにとつて、本日最後の楽しみであるヤシオの試合が彼の不戦敗で終わることは由々しき事態だった。

「ああもう！ 私、探してくる！」

「よし、俺も——ちよつと待て。来たみたいだ」

フィールド反対側の入口が開いた。これでやつと試合が始まる。遅れてきた挑戦者にスタジアムが沸いた。

そしてその歓声はすぐにざわつきへと変わった。ジュリオと熱い勝負を繰り広げたヤシオの姿はなく、そこに現れたのはアバリスだった。

「遅くなったな。ラフェルリーグは俺達がぶっ壊す」

スタジアムの音響がアバリスの声を会場全体に広げると同時に似た風貌の柄の悪い集団が雪崩れ込んできた。

「せっかくのお祭りに華を添えてやろうつてな。さあ野郎共、破壊だ！ 略奪だ！」

野太い声に音響がハウリングを起こした。

そしてそれはラフェルリーグが壊れる音だった。

あらし

誰が、どのような判断をした結果なのかを知る者はいない。しかしそこは阿鼻叫喚の地獄だった。

避難誘導に慣れているPGたちがなんとか観客たちを非常口のほうへ誘導していく。ババル団事件で培われた彼らのスキルが混乱する人々を導き、将棋倒しの危機を回避した。そこまではまだいい。

問題は彼らの預かり知らないその後だった。

会場の外にはライブビューイングに集まった観衆が大勢いた。彼らはこの騒ぎにパニックになり、ある者はその場から離れようと、またある者はスタジアム内に様子を見に行こうとする。

そこへ野次馬や取材クルーも集まり、スタジアムの外に人の渦ができる形になった。そうなるにせつかく誘導されてきた避難者たちとぶつかって狂乱を巻き起こす。

PGたちもそこにまで対処する余裕はなかった。暴獣たちは待つてはくれないのだ。炸裂音が爆風を呼ぶ。

アバリスの攻撃命令とともに『はかいこうせん』の帯がフィールドから観客席に向

かって伸びた。その一つ一つからPGと彼らのポケモンたちが『まもる』や『ひかりのかべ』を駆使してなんとか観客たちを守っていた。

しかしそれらが有効なのは対面での勝負の場合だ。今回のように敵から一方的に攻められるのを防ぐというのには限界がある。当然消耗も激しくなる。

それでも戦線を維持できているのはミントやシンジヨウ、コウヨウなどといった腕利きのトレーナーたちがPGの助太刀に入っているからだ。

周囲の味方を巻き込まないように窮屈な戦いを強いられつつも彼らは目の前の敵を押し返していた。

大会委員長特別室ではフリックとその警護担当たちがモニターを見守っていた。

「賊の一部は観客席にまで来ているようですね。一般の方の避難が間に合えばよいのですが」

モニターには人々が置いて逃げた荷物を物色する姿が映っていた。

「なんと忌々しい。奪うことで足りることはないというのに」

フリックは眉を寄せたが冷静だった。

「観客席側に人員をまわしてください。こうしてはいられない、私が指揮をとります」
もちろんそんなわけにはいかない。

「フリック市長。ここなら安全です。今しばらく辛抱いただき、安全が確認でき次第避難していただきます」

「うむ、みなさんの邪魔になつては元も子もない。分かりました。私のことよりにかぐご来場の皆様の安全を優先してください」

警護担当が感心するくらい、フリックからは怒りや苛立ち、焦燥といったものは感じられなかった。

「そっさいえば」

口を開いたついでとばかりにフリックが続けた。

「カネミツ室長はどちらに？ さつきからいらつしやらないようですが」

「えーっと、連中が現れる数分前にここを出ていったみたいですね。話しかけられないような何か物々しい雰囲気でしたよ」

「一番最初に乗り込んできた暴獣頭領に向かつていったのを見たつて無線連絡もあつたみたいですが……」

警護担当者たちは顔を見合わせた。そっさいえばタイミングが良すぎるよな、と小声で話しているのがフリックの耳にも届いていた。

「ははは。それだけ彼は持つてゐるつてことでしょうか。羨ましいかぎりだ」

笑いながらフリックの指はポケットの中の携帯端末を探っていた。

「ツキミ警部補、後ろきてます！」

「うわつ、マジ!? えつとえつと、ブーバーン、『かえんほうしゃ!』」

ブーバーンが迫る敵のポケモンたちを一掃した。警部補昇進を助けてくれた火力はこの状況でも頼りになった。

ツキミとフランシスカのコンビはシャルムの一件に引き続いてラフェルリーグの大会警備に派遣されていた。

「サンキューフラン。あつ、そつちもきてる！」

「ニャオニクス、『サイコキネシス』」

冷静な指示とともに放たれた強力な念力が敵を退けた。PGの上層にはこのようなフランシスカの手腕に期待をかけている者も少なくない。

ゆつくり時間をかければどんな人間でも最適解を導くことができる。フランシスカはそのための時間を常人より節約できているというのがツキミの見立てだ。

「それにしてもさ、バルル団に備えて張ってたのに暴獣って。偉い人たちはこうなることを知ってたのかな」

「いずれにしても超過勤務ですね。次の賞与査定にプラスに働くことを祈りましょう」
本来の業務に戻れたのは果たして喜ばしいことかどうか。ブラックな勤務環境に慣

れつつあるツキミとフランシスカには判じ物のようにしか思えなかった。

そして後輩かつ部下にもかかわらず自分よりも落ち着いているフランシスカに対しツキミはもはや諦めと憧憬のようなものすら感じていたのだ。

その感慨を断ち切るかのように、ツキミの第六感が危機を告げた。

「フラン足元！ 何かいる！」

歳の功かフランシスカよりも素早く反応したが、それでも間に合わなかった。

地面を突き破って、ドリルがニャオニクスとブーバーンを吹き飛ばした。予想外の攻撃をもらってしまった2体はそのまま動くことができない。

2人は戦闘不能となったポケモンたちをすぐさまボールに戻し、新手の登場に備えた。

『『つのドリル』。一撃必殺つてのは、分かりやすくいい。単純な破壊こそ至高だ』

ドリルの主、サイドンが姿を現した。もちろんトレーナーを伴っている。

見た印象は他の有象無象と変わらない暴獣構成員だった。しかし雰囲気が違う。「わざわざ不意打ちとは天下の暴獣も堕ちたものだな」

言おう言おうと思っていたことを先にフランシスカに言われ、ツキミは間の悪さに下唇を噛んだ。

「PGも、むさい連中ばかりじゃないってことか。百聞は、一見に如かずだな」

その下卑た目が品定めするように2人を見つめていた。

嫌悪感と言うまでもないが、とはいえブルーバートンとニャオニクスをまとめて撃破した相手だ。これまでの敵とは一線を画している。

「俺たちは依頼されたことを、やる。やりさえすれば、途中で拾ったもんは全部自分たちの好きにできる」

その口が紡ぐ言葉は不気味に辿々しい。

そしてここでいう全部、にはツキミとフランシスカも入っている。それを察することのできない2人ではない。

内心ビビっていたツキミだが、優秀な部下が彼女をカバーした。

「生憎だがこの世に悪を為す者の好きにできるものなどない。哀れなものだな」
「言うじやねえか。サイドン！」

ツキミもフランシスカも次のボールを手に取った。

「フライゴン！」

「リーファイア！」

観客席には逃げ遅れた一般人と彼らをなんとか逃がそうとする同僚たちがいる。彼女たちからみて、荷の重い相手だが援軍を期待するのが厳しい以上なんとか乗りきらねばならない。

「『だいちのちから』！」

「『リーフブレード』！」

数ではツキミたちが有利だ。先手から相性のよい技を次々に浴びせるといふシンプルな作戦をとった。

まともに対面してしまえばサイドンの素早さなど知れている。フライゴンとリーファイアの連撃が決まった。

「たしかによく鍛えられてる。必死さも感じる。だけどよう、それだけじゃちいとも恐くない」

強がりではなかった。攻撃は通ったものの、思ったようなダメージは入っておらず、サイドンは即座に『ロックブラスト』で反撃してきた。

「『りゆうのはどう』！」

「『アイアンテール』！」

フライゴンが『ロックブラスト』を相殺し、リーファイアがサイドンを打ち据えた。

「まさか!?!」

これも効果は抜群のはずだが、サイドンに怯んだ様子はない。

「しんかのきせきって知ってるか。サイドンは進化の余地を残している。それと引き換えに防御を固めるって寸法だ」

サイドンの元から高い防御力を高めると同時にやや心許ない特防を補うことができる便利な道具だ。

「そんな貴重なものをどこで！」

「俺たちには俺たちのつてがある」

フライゴンとリーフィアの2体がかりでも圧されてしまう。さらにサイドンのリーチに入れば『つのドリル』もある。そうなれば中長距離を保つしかない。

『『ロックブラスト』』

「フラン、くるよ！」

「はい！」

スピードならフライゴンとリーフィアに分がある。直線的軌道の攻撃ならば回避の指示も出しやすい。2人のコンビネーションなら容易だ。

「かかったな」

その連携が仇となった。

雑に放たれた『ロックブラスト』はトレーナーとポケモンを分断するための罠だった。もはやサイドンはフライゴンもリーフィアも歯牙にかけていない。

「ポケモンを相手にしなきゃいけない道理は俺たちにはない。『つのドリル』！」
なんとトレーナーを直接狙う暴挙に出た。

屈強なポケモンでさえ一撃で倒れ伏すような技を人間が食らえばそのダメージは計り知れない。

サイドンがじりじりと迫る。ツキミもフランシスカもボールを手にしつつ後退せざるをえない。

冷や汗を垂らすフランシスカの脳内に転職の文字がネオンの点滅に照らされた。

「ツキミ警部補、こういうのって公務災害に入るんでしょうか」

「冗談きついよー!」

しかし転職よりも天職の女神が微笑んだ。

2人にとって幸運なことに本当に冗談になったのだ。

「ナットレイ、『パワーウィップ』」

嫌というほど聞き覚えのある声があった。

ロープのように太いつたに打たれたサイドンの巨体がぐらりと傾き、そして仰向けに倒れた。

その声の主はナットレイの陰から現れた。

「おや、これは悪いことをしたな。バルル団かと思つたらとんだ小物だったようだ」

パンツスタイルの黒いスーツに、似つかわしくない継ぎ接ぎだらけのコートを纏った長身の女性がそこに立っていた。

その姿を見てツキミが目を輝かせた。

「フィール警視！（珍しく本当に来てほしい時に）来てくれたんですね！」

上司に対する部下のような対応だが、実際フィールはツキミとフランシスカの上司にあたる。

喜ぶツキミに対してフランシスカは嫌な予感に冷や汗を垂らしていた。

「あのフィール警視。ハロルド氏の警護は……？」

今回の彼女の本来の任務は要人警護。つまりこの場に現れたということとはあまり喜ばしい事態ではない。

フィールはカラカラと笑った。

「ああ、あの成金ダルマのことなら問題ない。無駄に高そうなジャケットなんか着て、いけ好かない輩とは思ってはいたがこの騒ぎに乗じて私のありがたい脚を触ろうとしてきたからスタジアムの外に放り出してやった」

さながらドラッグストアで台所洗剤が安かったから買ってきたと語る主婦。フランシスカは口角泡を飛ばす。

「いや問題しかありませんが！ どうしてくれるんですか、書き終わってない警視の始末書がまだたくさんあるんですよ！ 代筆はもう勘弁ですって！」

「そこは逆に考えろ、フランシスカ」

「ストレートに考えてください警視！」

このフィール、優秀な人物なのだがとにかく出世欲がない。表彰よりその強引な実績の積み上げによる始末書の枚数が多いのはそのせいである。

「数が集まってきたか。仕方がない」

男はサイドンの背に股がった。サイドンは自慢のドリルを今度は地面に向けた。その巨体が地中に消えるのに数秒もかからない。

「おっ逃げたか」

「逃げたか、じゃないですよー」

フィールは誤魔化すように咳払いした。

「安心しろ。さつき観客席に乗り込んできた奴はちょうど手元に無駄に高そうなジャケットがあつたからそれで捕縛してやった」

「それハロルド氏のやつ！」

「……とにかく私が来るまでよく堪えた。とりあえずこの辺の連中は粗方片付いたようだな。ツキミ、他に手応えのありそうな奴はいるか？」

過激なまでの現場主義であるフィールはとにかく好戦的だ。もしもPGではなく暴獣に所属していたらと考えるとツキミは恐ろしくなった。

ワルビアル使いの一際人相の悪い男が頭をよぎった。何事においても面倒なものに

は面倒なものをぶつけるに限る。

「あつちに頭領格がいます。本部のデータにあつた暴獣頭領のアバリスと思われませう」
フィールが分かりやすく喜んだ。

「でかしたフラン。暴獣からは聞き出したことが山ほどある。この際だ、頭領もフルコースで締め上げて吐かせてやるとするか」

『じしん』

そのアバリスが今まさに周囲のPGを一掃した。

(だいぶ数が減ったな。まあ関係のないことだ)

三下たちには自分の判断で逃げるよう伝えてあつた。いたところで大きな戦力にはならないし、自分だけで済む作戦だとすら考えていた。

遠くで炎が巻き上がるのが見えた。シンジョウだ。

(雑魚どもを相手にせず、俺を狙ってくればいいものを。秩序に縛られる奴らが気の毒でならねえ)

加勢に来たPGたちも返り討ちにし、吼えた。

「歯応えがないぞ。大方モンスターボール級とスーパーボール級下位の寄せ集めつてとこか。こんなんじや暴れがいがねえなあ！」

彼の読み通り、役職の高いPGたちは主に来賓や客席の警護についている。人命を最優先にするという運営サイドの意向が反映されているということなのだが、配備が極端だったのかもしれない。

次の獲物を探そうとフィールドに目をやったアバリスは、トレーナーズサークルに棒立ちしているパンデュールに気がついた。

奇妙。

こういった場面なら逃げるのが普通だし、そうでないならシンジヨウらのような使命感をもって自分たちに立ち向かうのがこれまで彼が経験したお約束だった。

にやりと笑った。

「どうした。ビビって動けないか？」

パンデュールはアバリスを見ていない。その視線は彼の向かいの選手入場口に向けられていた。

「僕が今戦いたいのは一人だけだ」

暴力の矛先を向けるにはあまりにも拍子抜けする態度に、アバリスは逆に興味をもった。

殴れば一発で沈みそうな体格。ポケモンを繰り出しての勝負でも負ける気がしなかった。だからこそその余裕が彼を饒舌にした。

「対戦相手か。たしかヤシオとかいったか？ 残念だがそいつは来ないぞ。なにせ俺が埋めてやったからな。多少抵抗はしたが大したことない奴だった」

アバリスはスタジアム外での一件について語った。何を思ったかパンデュールはそれを黙って聞いていた。

「よかつたじゃないか。お前の不戦勝だ」

「僕はあいつを振り伏せる」

パンデュールは入場口から目をそらさない。

それをアバリスは蛮勇と結論付けた。

「話の通じねえ奴だな。お前、この状況が分かっているのか？」

ここで初めてパンデュールがアバリスを見つめた。

「分かっているのはどっちだ？」

その黒々とした瞳はアバリスを貫通してどこか遠くを見ているかのようだった。

そしてこの場でのそれは宣戦布告と受け取られた。

「はあ？ 度胸に免じて見逃してやってもいいと思つてたのにやっぱり俺とやろうつてか。いいぜ、結局予定通りだ」

抑えられていた嗜虐の匂いが漂い始めた。アバリスの横に控えていたワルビアルが前に進み出て、その牙と爪をアピールした。

そこへフィールら3人が救援に駆けつけた。

「貴様、暴獣頭領のアバリスだな！ その人に手を出してみろ、臭い飯すら食えない体にしてやる！」

「警視煽らないで……」

ツキミがパンデュールを背中で庇い、フィールとフランシスカがアバリスと対峙する形となった。

「お前ら、少しは遊べそうだな」

その瞬間、その場にいた全員の耳朵を爆音が叩いた。

「なんだ!？」

スタジアムの上空に複数の飛行物体が現れた。飛行機でもヘリコプターでもない。昨今では珍しくなりつつある飛行船だ。

そしてそれらに護衛されるかのように一際大きい飛行船が人々を見下ろしていた。

2つのガス袋と4つのプロペラで浮かぶその姿は飛行船というより巨大な建造物があるまま浮遊しているかのようだ。そしてその側面には特徴的な“B”の文字。

「あれは……：バラル団の飛行船か！」

説明されるまでもない。フィールにとっては忌々しきの象徴ともいえる存在だった。驚きをストレートに表現していたアバリスだったが、何かに気がつき、笑いだした。

「ははははは！　なるほどまんまと一杯食わされたというわけか！　やつぱりあいつが、いやそれどころか——おいお前ら！　退くぞ！」

暴獣からしても目的を果たすことができていたようだ。それにあれだけの上空に構えられたのでは打つ手はない。

ワルビアルの背中に掴まりアバリスは地中に姿を消した。そしてそれに追従するかのように残っていた暴獣構成員たちもその場から逃亡した。

「パンデュールさん、逃げたほうがいいですよ。バラル団まで出てきたんじゃ保護にも限界がありますし」

「別にいい。僕はヤシオを待つ」

「いやそんなこと言わずに」

「ここを動くつもりはない」

ツキミとパンデュールが押し問答を繰り返す。

腕組みしながらそれを眺めていたフィールだったが、パンデュールの腕を掴んで引つ張ろうとする部下を止めた。

「ツキミ、その手合いに余計な体力を使うな。よし、パンデュールといったな。今この瞬間から特・特・特別にPG見習いに任ずる。リーグに出るくらいだし自分の身だけなら

守れるだろう。ここにいて構わないが、自分の言葉には責任を持って」

「分かった」

「始末書チキンレースやめてください！ パンデュールさんも、ひとつしかない命を大切にしてください！」

ヒトは自らを突き動かすものについて考えずにはいられない生物だとフィールは思っていた。

自分であれば悪を排除する不屈の精神。ツキミには悪を憎む心。フランシスカには秩序を保とうとする想いがあるというのが彼女の見立てだ。

ではパンデュールは？

考えがまとまらないうちに飛行船に動きがあった。

「フィール監視、何かきます！」

ゴンドラから青い鳥ポケモンが大きく羽ばたきながら舞い降りてきた。その翼をはためかせるたび、ひんやりとした冷気が降り注いでくる。

ツキミもフランシスカもその姿を直接目にするのは今日が初めてだった。

「フラン、あのポケモンって」

「はい。小さい頃デコキャラシールで出たことがあります」

「今その情報いるかな!？」

「フリーザーか。イズロードめ、ノコノコ出てきたな」

フリーールの推察通り、目を凝らして見るとフリーザーの脚に掴まれて誰かが地上を見下ろしている。

「お集まりいただき恐縮だ。ポケモンリーグなどよりも心踊る催しをご覧にいれよう」
特殊な音声機器を仕込んでいるのか、その声は遥か下へと響く。そしてその声にも聞き覚えがあった。

「私はイズロード。バラル団の幹部を代表してご挨拶申し上げます。PG諸君、その節は世話になった」

地上から顔は見えないが、その表情には察しがつく。

今度は飛行船の底面が開き、さらに何か飛び出してくる。

「さて、ご覧いただく演目は豊穰の神による人間への戒めだ。これは天の配剤ともいえるだろう」

『何か』が地上でも視認できるほどになった。

地震雷火事親父という言葉がある。

恐ろしいものを七五調で列挙したものだ、ここでいう親父は^{おおやまじ}大山風が転じた説と文字通り頑固親父をユーモアを交えて並べたという説がある。

どちらの説が正しいかはどうでもいい。問題は大山風を司る親父然としたポケモン

が存在することだ。

さらに都合がいいことに、ご丁寧に地震や雷を担当する親父もいる。

「あれは、また伝説のポケモン!？」

「フリーザーだけでも相当なのにこれは……」

慌てる部下たちを尻目にフィールが無線機を手にした。そして腹式呼吸で全PGにむけてがなりたてる。

「聞こえるか。バルル団は戦力としてポルトロス・トルネロス・ランドロスを加えている！　しかし怯むな！　イズロード含め逮捕の好機だ！　フィール班4人、連中の無力化を目的とし行動開始する！」

「ナチュラルにパンデニールさんを数にいれないで！」

凍てつく熱気、燃える凍気

暴風雨がスタジアムを覆うなか、ボルトロスの『かみなり』が地上を襲った。

「来るぞ！ 『つららばり』！」

『ラスターカノン』！」

『タネばくだん』！」

オトギリのツンベアー、ジュリオのドータクンに加えてテスケーノのキノガッサがなにか攻撃を凌いだ。

「嫌な雨だ」

降り注ぐ雨は雷を導く羅針盤となる。このフィールドで放たれる『かみなり』は必中で敵を捉えるのだ。

オトギリは袖で額の汗を乱暴に拭った。

「さすがに伝説のポケモンは手強いな。三人がかりでも軌道を逸らすのがギリギリつてところか。二人とも、恩に着る」

ジュリオはカラカラと笑い、テスケーノは膝が笑っていた。

「お互い様さ。それよりもこの暴れ雷をどうするかだ」

「それぞれその通り。こういう場に暴力を持ち込むのは許せないしな」

バラル団を見て真つ先に突っ込んでいったオトギリだったが、さすがにイツシユの神話に語られるボルトロスと相手取るのは苦しかった。

そこへヤシオ戦の反省会を通して意気投合したジュリオとテスケーノが助けに入る形となったのだ。

決勝トーナメント出場トレーナーたちと肩を並べて戦っていることに感激の涙が溢れそうになったが、テスケーノは年長者らしく胸を張った。

「ここはキャリアの長い俺が突破口をひらいてやる。キノガッサ、もっかい『タネばくだん』だ！」

命中したがボルトロスは怯みすらしなかった。

「現実見せるのやめろよな！」

周囲を見渡すとトルネロスとランドロスの他に飛行船から降下してきたバラル団のしたつぱたちがPGと交戦している。

本来であれば難なく撃退できるはずなのだが、彼らは暴獣の攻撃から民間人を守るためかなり消耗してしまっている。伝説のポケモンにまで構っている余裕がないのだ。

空気そのものが凍る音がした。

ポケモンの技『ぜったいれいど』の恐ろしさについてはもはや語るまでもない。

いわゆる一撃必殺として知られる技で、冷気によってエントロピーとエンタルピーを最低値に調整し絶対温度の下限を擬似的に再現するというものだ。

範囲が限られるため狙って当てるのは難しいが、対象が密集した場所であればその限りではない。

特にこの通路なら。

「他愛もない」

大会委員長特別室前のフリックの護衛とそのポケモンたちが折り重なるようにして倒れた。

彼らは突然乗り込んできたイズロードに対して勇敢に立ち向かったが、それすら敵の思惑通りだった。

自分に向かって倒れかかってきた護衛を突き飛ばし、イズロードは扉を蹴破った。

「失礼する」

部屋の中央でフリックは動じるでもなくかといって抵抗するでもなく賊を見つめていた。

「こちらの自己紹介は不要だろう。さて、フリック市長。我々のボスが貴方との会談を求めている。これからのラフェルの話を御所望だそうだ。付き合ってはもらえないだ

ろうか」

「断るといつたら？」

イズロードは大げさに肩をすくめた。

「手荒な真似は私の好むところではないが、人体の氷像をご覧にいれようか。今なら製作サイドにフリーザーもいるのでな」

外に倒れている者たちに目をやる。

命は何事にも代えがたいというのがフリックの持論だった。彼は彼を守ろうとした者たちを逆守ることでその地位を築いてきた。

「分かった。抵抗はしない。連れていきなさい」

「そうこなくては」

投降の意思を示し、フリックはイズロードに促され部屋を出た。

裏手の非常口からスタジアム外に出たフリックとイズロードに待ったをかける者があつた。

「そう易々とはいかんぞ！」

カネミツだ。その右手にはいつでも相棒を呼び出せるようボールが握られている。

「フリック市長。申し訳ないがあと少し堪えてください。ここは私がなんとかします」

存在を忘れかけていた最後の砦の登場にフリックの表情も和らいだ。

「カネミツ室長。警備の方も護衛の方も皆やられています。周囲にこの男のポケモンが潜んでいるようです。気をつけてください」

言うまでもないが裏口の警備にあたっていた者たちもフリックの護衛と同様にイズロードがこの裏口から侵入する際に軽く捻られており、今もカネミツとイズロードたちの間に倒れている。

「これはこれは室長殿。PG以外にも我々の熱烈なファンがいるとは聞いていたがこんなところで会えるとは」

「暴獣を利用して警備の混乱と消耗を誘うとはよく考えたものだ。しかしそれももう終わりだ。お前もそろそろネイヴュに帰りたいだろう？ 私を送ってやる」

「面白い。やってみろ」

マニニューラがカネミツの目前に現れ、その鋭い爪を突き立てんとする。

それを良しとするカネミツではない。即座にノクタスを繰り出し『ニードルガード』で防御した。

「不意討ちか。悪党らしい手だな」

「それがこちらのやり方なのでね」

イズロードにはボールを手取る動作がなかった。つまりフリーザーを含む彼のポ

ケモンたちはボールを介して彼と繋がっていないということになる。

ポケモンを悪事に利用するイズロードがなぜそのように信賴されているのかカネミツには理解ができなかった。

ノクタスの『ニードルアーム』をマニニューラは後方への宙返りで回避する。そして返しの爪の一振りでもノクタスを弾き飛ばした。

この間イズロードは一切発声していない。

「ペガスの遊園地でお前と交戦した少年の記録があった。直接の指示以外にもポケモンとスムーズに意思を共有する手段を持っている、と」

「研究熱心なことだ」

「だが悪党との読み合いならこちらに分がある。ノクタス！」

いくらカネミツに鍛えられているとはいえノクタスとマニニューラでスピードを競えばどうしてもマニニューラのほうが速い。

足運びにも無駄がない。マニニューラにとってノクタスは止まっている的に等しい。

「『ニードルガード』！」

『れいとうパンチ』がノクタスを打ち抜く直前、ノクタスは再び『ニードルガード』の展開を試みたが技を発動することができなかった。

『ちようはつ』。相手に補助技を出せなくする技だ。これによりノクタスは防衛の術

を欠いたまま戦わなければならなくなる。

「堅実な戦いもできるといっわけか」

「敵のやりたいことを封じるのは定石だろうか？」

連続で攻撃を受けたことでダメージが蓄積し、ノクタスの重心が安定しなくなってきた。好機とみたマニユーラがさらに『れいとうパンチ』を見舞う。

「今だ。『ふいうち』！」

予想外の攻撃にマニユーラも対応が遅れた。殴り付けられ、尻餅をついた。

イズロードが嗤う。

「思わぬところに悪党がいたな。だがそう何度も使える手でもあるまい」

「なんとでも言え。これが悪タイプの戦い方だ」

体勢を立て直し、マニユーラが再びノクタスに迫る。先ほどの場面の再現に思えたが

「ノクタス、『きあいパンチ』！」

ノクタスが集中力を高める。一方のマニユーラは攻撃と見せかけて『かげぶんしん』を使った。

高まった集中力が拳に収束し、ノクタスは超威力のパンチを繰り出した。これは効いた。

「なっ!?!」

効果は抜群だ。さすがにマニニューラの戦闘継続は困難だろう。

『『ふううち』を嫌うことくらい読める。『きあいパンチ』は攻撃を食らうと失敗する技だ。どうする? まだ続けるか?』

「そうか。ならプランBだ」

フリーザーが一声鳴くと、倒れた警備員たちの真上に巨大な氷塊が生成された。

「何だと!?!」

カネミツは自身の吐く息が白くなっていることに気がついた。

マニニューラの放つ氷タイプの技によって周囲が冷えていたのだろうと考えていたが、実際はそうではなかった。

「マニニューラしか姿が見えないとは思っていたが、そうか。他のポケモンたちがじわじわとこの場を冷やしていたんだな」

「その通りだ。だが気がつくのが遅かったな。ではさらばだ」

フリーザーはフリックとイズロードを掴み、そのまま飛行船へ飛び去っていった。

「待て!」

創造主を失った氷塊は重力に従うほかない。

カネミツは追跡を諦め、対処にあたった。

「サザンドラ『だいもんじ』！ ドンカラスは『ねつぷう』！」

晩酌のロックアイスとは比べ物にならないほど質の高い不純物の少ない氷だ。炎タ
イプの技を浴びせてもなかなか溶けない。それでもそこで防ぎきらなければ人命に関
わる。

「ゾロアーク、『かえんほうしゃ』」

いずれもタイプ一致ではない。それでもこの場では有効であることに代わりはない。

3体の投入をもつて氷塊がようやく溶けていく。

最後の一欠片まで溶けきつたのを確認して、カネミツは空を見上げた。フリーザーは
とうに豆粒ほどの大きさになっている。

「読まれていたのはこちらだったか……」

サザンドラもドンカラスも、そしてゾロアークも継続して技を出し続けていたことも
あり、一時的なスタミナ切れを起こしてしまっている。

炎技を扱える手持ち3体を費やしてなんとか氷塊を溶かしきつたが、それは同時に空
を飛んでフリーザーを追うことができるポケモンたちを地上に留まらせ逃げる時間を
献上することを意味していた。

無線を会場スピーカーに接続し、スタジアム全体の音響を使って訴えかける。彼には
それしかなかった。

「こちらカネミツ！ フリック市長がイズロードに拐われた！ フリーザーで空に逃げ
るつもりだ！ 誰か動ける者はいないか！ 誰か！」

スタジアムでカネミツの声を聞いた者たちはそれぞれが思う行動をとった。

「フシギバナ、『つるのムチ』！」

「ピジヨット、『ぼうふう』！」

コウヨウとミントの猛攻がランドロスとトルネロスを押し戻した。

「シンジヨウくん、ここは私たちに任せてフリーザーを追って！」

「トルネロスごとき次期チャンピオンの私だけで十分。とっとと市長を取り返してきな
さい」

伝えたい内容は同じなのにこうも受ける印象が違うものか。シンジヨウは何か言お
うとして、やめた。

「分かった。二人ともくれぐれも無理はしないでくれ」

リザードンに飛び乗りフリーザーを追う。

人間二人を抱えて飛んでいることにくわえて、リザードンも飛行能力にかけては相当
の自信がある。ぐんぐんと距離を詰めてついに近くまで迫った。

「イズロード、待て！」

返事よりも先に『れいとうビーム』が飛んできた。フリーザーの背に乗ったオニゴリーの仕業だ。

新たな挑戦者をイズロードはどこか面白がっているように見えた。

「つくづく人気者だな。ただ今はタクシー役に徹せねばならんなのだな。ここらでお帰りをただこうか」

フリーザーは振り向くことなく強烈な冷気を尾羽から放った。技というほどではないが生身のシンジヨウには相当堪えた。

「くっっ！」

手足の関節が凝り固まり、リザードンの背中から振り落とされてしまった。

主人おやを助けようとしたリザードンだが『れいとうビーム』の軌道に邪魔をされてしま
う。

リザードンの助けが間に合わない以上、別の手持ちを繰り出して地上に技を放つこと
で着地の衝撃を和らげるという方法がシンジヨウの脳裏をよぎった。

しかしそれは無理な相談だった。この暴風雨は炎技のクッションをかき消してしま
う。

「そのまま落ちろ。跳ねっ返りが」

しかし道理に背かない者が見捨てられることはない。

シンジヨウの自由落下は何かを受け止められることで終わった。

「おー間に合った！」

その声には聞き覚えがあった。赤いサンバイザーにも見覚えがあった。

「アルナ！」

アルナがニツと笑った。

「今度はあたしが助ける番ってね。あつ、リザードン！ こつちこつちー！」

「すまないな」

「いいんだよ！ ジム戦を観戦した仲でしょ！」

もちろん空中に突然アルナが現れたわけではない。

「すごいでしょ。この子、私がプレゼントした化石から復元したプテラ。ホヅミさんの知り合いでそういうのをやってる人がいてね」

「ホヅミさん？」

「あー、紹介はあとで」

前回アルナの手持ちにはいなかったポケモンだ。ここに至るまでには語るべきことが大いにあったことが予想される。色々と聞いてみたいことはあったがそれはこの状況を打開してからだ。シンジヨウはそう脳内を切り替え、迎えにきたリザードンに再び飛び移った。

「よし、プテラとの実戦だ！」

「悪いが別に頼みたいことがあるんだ」

張り切るアルナだったが一瞬で肩を落とした。

「そうだよ。あたしが行っても戦力にはなれないよね……」

「そういう意味じゃない。アルナにしかできないことなんだ」

シンジヨウはアルナに非常にシンプルな注文をした。何を言われるか身構えていたアルナだったが、逆に拍子抜けした様子で地上へ降りていく。

「任せて！ そうだ、助っ人も来てるからこっちは大丈夫だよ！」

ドツプラー効果とともに声が離れていく。

またしてもクエスチョンが沸き上がったがそれはそれ。シンジヨウはもう一度イズロードを追った。

「しつこいぞ————だがいいことを教えてやろう。君にも熱烈なファンがいるようだ。ここはそちらに譲ろう」

フリーザーは飛行船の収容口から中へ飛び込んでいった。

リザードンもそこから中へ侵入しようとして試みたが、『りゅうせいぐん』に阻まれた。

「御挨拶だな」

「あら。ジム戦を観戦した仲でしょうに」

サザンドラに乗ったハリアリー破滅の令嬢がにんまりと笑みを浮かべた。

パンデュールにとって暴獣もフリックも豊穡の神もどうでもいいことだった。つい今しがたプテラに乗って降りてきた少女も大した問題ではなかった。

「よーし！ みんな出ておいで！」

アルナが6つのボールを放り投げると彼女の手持ちが勢揃いする。

「じゃあいくよ。最大パワーで『すなあらし』！ あつ、マラカッチは『おさきにどうぞ』ね」

パンデュールには彼女が砂のエキスパートであることなど知る由もない。

突如巻き起こった砂嵐がスタジアム規模で暴風雨を吹き飛ばしたことも、飛び交う砂が若干不快に感じたくらいで気にならなかった。

しかし砂嵐と暴風雨が晴れたあと反対側の入場口から駆け込んできた者には目を剥いた。

そこにはパンデュールが待ち続けた男がいた。

「あれ？ オレもう不戦負け？ やーこれはいかんね。いちちち……くつそあのハゲ茶

瓶……」

「赤帽子！」

恐縮していそうでもなさそうに男は頭をかいた。

泥だらけなうえに包帯と絆創膏でやや分かりにくいのが紛れもなくそこに立っているのはヤシオだった。

「待たしちまって悪いんね。パンデュールくん。いや、バラル団幹部のクロツクくん」

ラフエリリーグ準々決勝最終試合 ヤシオ対クロツク

パンデュールは顔に薄く張っていたマスクを剥がし、丁寧に畳んでケースにしまった。

そしてそこに立っていたのはもはやパンデュールではなかった。

「よう、久しぶり」

予想通りと言わんばかりにヤシオが笑った。そしてまるで仲の良い友人にするようにひらひらと手を振った。

「ちよつと君を勘違いしていたみたいだ。思ったよりよく見ているんだね」

クロツクは大仰なジェスチャーでヤシオへの賛辞を露にした。

「それにしてもよく分かったね。どこで気がついた？」

「試合を見た時。そりゃ分かるって。あんた、変装はしてつけどパンデュールというまっさらのトレーナーを演じる気がなかったべ？ ガワだけ誤魔化してそれだけって感じ」

ヤシオにとってはたいした問題ではなかった。猜疑もペテンも彼の世界にはさほど必要のないものだったから。

「ならPGにでも通報すればよかった」

反射的に何かを言おうとして、ヤシオの唇は動いて、別の言葉を紡いだ。それは彼が口にしてはいけないことだった。

「怪しい動きをしたらすぐにでもそうしたらうね。でもパンデュールはただのリーグ挑戦者でオレの対戦相手だ。リベンジの機会は逃したくないしな」

クロックはリーグに挑戦に来たトレーナーという役を演じている。ヤシオも同じだ。そしてそれはあてがわれた役ではない。だからこそ裏切ることとはできないのだ。

何処かで何かが弾けるような音がした。

ヤシオはリーグ会場のあちこちで戦っているバルル団とPGたちに目をやる。

「部下を手伝わなくていいんか？ いや、オレが言うのも変な話だけど」

その瞳は真っ直ぐにヤシオを見据える。

「いい。僕の目的は君だ。他の団員にも手を出さないように言っているから安心してほし」

「いやオレそういう趣味はねえんで」

気まずい沈黙が流れた。

「ここに来たということはやることはひとつだろうか？」

「そうだいね」

互いの視線が交差した。

人間をコンピュータで例えるなら目はマウスでありキーボードだ。自身を構築するものに直接働きかける。

お互いの肩書きも演じる役も今は関係ない。クロックもヤシオもボールを手を取った。

「オレは勝つ。そのために来た」

「奇遇だね。僕も君を全力で叩き潰すために来たんだ」

正面の相手を全力で倒すべき存在と認めた者同士が周囲にまで作用する。身体中の血がピリピリと泡立つような感覚にヤシオもクロックも高揚した。

しかし見ている側はたまったものではない。物陰から眺めていたバラル団たちは思わず姿勢を正した。

2つのモンスターボールが投げられた。

「いけ——ジャローダ！」

「アーボック、いってみんなべ！」

ホヅミが暴獣によるリーグ急襲の一報を受けたのはアルナと合流してすぐのことだった。すぐにでも会場に向かおうとしたが残念ながら彼女には高速で移動する手段

がなかった。

唇を噛み締めていたところ、思わぬ助け船がアルナからもたらされた。彼女は峡谷で発掘した『ひみつのコハク』を持っていたのだ。プテラの力を借りるためガラルで化石の復元に関する研究を行っている知り合いに連絡をとったというわけだ。

生まれたてのプテラによるしばしのフライトの後、会場の外でヤシオを探しているプリスカに遭遇したのも幸運だった。

地中にいたとしてもアルナのポケモンたちなら容易にヤシオを発見することができる。簡単な治療を施し、壊れたボール開閉スイッチを直してやるところまでできたのだ。

運にも助けられて珍しくキレのある動きを見せたホツミだが、今は頭を抱えていた。

(やられたー)

イズロードの手際が良すぎたのだ。会場内でも警備が薄い場所をピンポイントで狙い、そしてまんまとフリックを誘拐せしめた。

カネミツから断片的に得た情報も頭痛の種となった。

アルナによってリーグ会場を覆っていた暴風雨は払われた。これで豊穰を司るポケモンたちともなんとか戦えるだろう。PGの援軍も向かっていると報告があった。そうなれば会場内のバラル団も片付く。

しかしそれだけでは根本的な解決にならない。敵の飛行船に乗り込んでフリックを救出する必要があるうえに、存在が確認されているバルル団幹部を可能な限り撃退・捕縛しなくてはならないのだ。

つまり敵は逃げを打っただけで勝ち。こちらはそれを阻みつつVIPを取り返さなくてはならない。状況は依然不利に違いなかった。

フリックの救出はリザードンに乗って飛んでいったトレーナーとPGの空挺部隊に頼るほかない。

だからこそホツミの願いは今まさにクロックと戦おうとするヤシオにあった。

「相手は幹部。勝てるの……？」

「勝つよー！」

アルナだ。会場全体に吹き荒らした『すなあらし』を終えて肩で息をするポケモンたちを連れてホツミのところへ引き返してきた。

口の横に両手をあて、力いっぱい叫んだ。

「ヤシオーっ！ リーグで優勝するんでしょ？ 絶対に勝つてー！」

その声は戦闘に脳が切り替わったヤシオに届かない。

「『リーフストーム』！」

『ダストシュート』！』

いきなり大技の撃ち合いとなった。尖った葉と毒の塊が互いに相殺し合う。クロックは何が面白いのか笑っていた。

「前に見た時よりも技が磨かれているようだね」

「そいつはありがサンキューだ。モツさんとの試合でもよく頑張ってくれたし——」

『リーフストーム』だ』

「こんにやる人がいい気になっているのに、『ダストシュート』！』

相性でいえばアーボックに分があるが、『リーフストーム』の威力が上がっており今回は圧されてしまった。

『あまのじやく』け。そんならフストムは撃ち得ってわけだ』

「フストム？」

元よりスピードでアーボックを上回るうえに、今のジャローダは特攻が4段階上昇した状態ということになる。もはや相性の不利など問題にならないだろう。

「そんなら。『ほのおのキバ』！』

普段はあまり使わないが、アバリスがワルビアルに指示するのを見てこの技のイメージは掴んでいた。

燃える牙がジャローダの胸を狙ったが、そうやすやすと捕まる相手ではない。ひよい

と飛び上がり決死の一撃を難なくかわしてしまった。

「ジャローダ『へびにらみ』!」

アーボックもジャローダも視線だけで相手を麻痺させてしまうこの技を持ち合わせているのだが、先にカードを切ったのはクロックだった。

目が外界との窓口なのはポケモンも同じだ。そこを支配されてしまえば生物など脆い。

かわす余裕はなかった。アーボックの体が麻痺し強張ってしまった。

「かあーっ。そうきたか」

悔しがると同時にヤシオはどこか嬉しそうだった。

「交代したらどうかな。そっちにはハッサムもいるだろうに」

「オレもそのジャローダと同じくあまのじやくなんですね。言われたら逆のことがしたくなるのよ」

鼻息荒く強がるが、タイプ相性を加味してもクロックの言うとおりではあった。

「それならいいさ。ジャローダ、『みがわり』」

ジャローダは体力を削って分身を作り出した。こうなると麻痺も相まって本体に攻撃を通すのは難しくなる。

「代理を立てるなら専用番号にコールして担当者を引っ張り出すまでだべ。なあアー

ボック?」

再び『ダストシユート』を放とうとするアーボックだが技が途中で止まってしまった。麻痺、ではなく体力の消耗によるものだった。

一方のジャローダは『みがわり』で体力を削ったはずなのにあまりそれを感じさせない。

「どつたの、急にバテちまって……いや違え。『やどりぎのタネ』か!」

アーボックの胸の模様に重なるようにやどりぎが展開していた。これではトレーナーが気がつくのが遅れるのも無理はない。

「君にしては気がつくのが遅かったね。僕たちは最初の撃ち合いから『タネ』を仕込んでいたんだよ」

『リーフストーム』のゴリ押しが主戦と見せかけたクロックの巧さ。

ヤシオは乱暴に頭をかいた。

「始末が悪いべ……」

「なんとというか疲れる戦い」

ホヅミはあくまで犯罪者の確保のためにポケモンを鍛えている。公式戦については一般的な知識がある程度だった。

「特性を利用して技の威力を上げる作戦と見せかけてスリップダメージを稼ぎながら体力を回復する作戦だったんだね。『へびにらみ』もアーボックに対抗するためではなく効果のカモフラージュのため。実況も審判もないからこそとれる認知のズレを利用したってこと」

指をピンと立ててアルナが語った。

「アルナさん詳しいのね」

「まあこないだはあたしが解説してもらおう側だったし」

ヤシオは交代をしない。あくまでもアーボックでジャローダを相手取るつもりのみだ。

痺れて動きが鈍くなったアーボックの体力がじわじわと削られていく。

「痺れてるとこすまん！ アーボック、『ほのおのキバ』！」

苦し紛れの攻撃だが『みがわり』を破壊するには十分だった。分身は掻き消え、やつと本体に攻撃が通る状態にもってこれたが麻痺かつ体力が削られ続けるアーボックに対してジャローダはほぼ全快にまでできていた。

クロツクは一瞬で思考を巡らせる。

（『みがわり』でもいいがあまり長引かせてハッサムやトゲキッスが出てきてもつまらない）

「ガーン突っ込め！」

指示に愚直に従い、アーボックが突っ込んでくる。平常時の半分のスピードしか出ていないが毒タイプの技が驚異なのは間違いない。直線的に向かってくるのであれば狙うのは容易だ。

「自棄になったか。『リーフストーム』」

しかし技が出ない。

（まさかジャローダも麻痺、いやそれはない。連発していないから『いちやもん』でもない）

「『ダストシユート』！」

（そうか、これは）

クロックの第六感が悲鳴をあげた。

「ジャローダ、『みがわり』で立て直すんだ！」

しかし距離が詰まっていた分、『みがわり』の生成が間に合わなかった。渾身の『ダストシユート』が決まった。効果は抜群だ。

「ジャローダ！」

どさり、とジャローダが崩れ落ちた。誰の目にも戦闘の継続は不可能だった。

クロックはジャローダをボールに戻した。そしてそのボールに語りかける。

「ごめん。一番手を買って出てくれたのに」

アーボックを、そしてヤシオを順番に見つめた。

「まさか『かなしばり』を仕込んでいたとはね」

「そういうこと。アーボック、ナイスファイトな。休憩してくれ」

アーボックはボールに戻っていく。

「多分タイミングは2回目の『リーフストーム』の時かな。『やどりぎのタネ』を受けたけど、アーボックは『かなしばり』で『リーフストーム』を使えなくしていたということか」

ヤシオは小さく頷いた。

「相性にあぐらかいてちやあ無理な相手だつてのは分かつてつからね。ちーつとコスい気もすつけど峡谷でもずいぶん手酷くやられてつからこれでトントンだべ」

一瞬目を丸くしたクロックだが、くつくつと笑みを漏らした。

「そうか。じゃあもつと楽しませてもらおうかな」

「そうこなくつちやー！」

またそれぞれボールを手に取った。

「チャーレム！」

「いぐべ！ バシヤーマー！」

蛇対決から格闘対決となり、第2ラウンドのゴングが鳴った。

『フレアドライブ』！』

先手を譲る道理はない。

バシャーモの体が高熱に包まれ、一気に燃え上がる。トオルのブースターには及ばないが着火の瞬発力は相当のものだった。

地面を蹴つてチャーレムに迫るまでわずか一拍。技が決まったかに見えた。

「これもいい技だね。当たっていたらチャーレムでも危なかった」

チャーレムは寸前で信じられないような柔軟さで仰け反り、攻撃を回避した。

「えっそれ避けちゃだめだがね」

バシャーモは慌てて飛び退くほかない。

「そこだ、『バレットパンチ』！」

今度はチャーレムが動いた。残心を超える速さと精度で一撃を見舞ったのだ。

「受け止めろ！」

ブロックしようとしたバシャーモだが、そのまま地面に叩きつけられた。

「チャーレム深追いはするな！」

クロックはこれを好機とみなさない。

腕の炎を地面に噴射することでバシャーモは崩れた体勢を立て直した。

『ブレイブバード』！』

スピードは互角。今度はバシャーモがチャーレムを弾き飛ばした。

「前の試合では出していたのに。峡谷では戦わなかったポケモンだ。あの時は温存していたのかな？」

「出す前にオレはドンブラザーズしちまったんだよ！」

納得したかどうか。

『とびひざげり』！』

「シンプルに殴りに来たか。『フレアドライブ』！』

互いに全力をかけてぶつかり合った。威力は互角、もしくはバシャーモに分があった。

「えっ!？」

大ダメージを受け、バシャーモはフィールド反対側の壁に叩きつけられた。

ホヅミは拳を握り締める。

「全然歯が立たないじゃない。あのバシャーモ、相当鍛えられてるのに」

「チャーレムは第六感がとても発達してるから、オーラを察知して攻撃を読めるんだ」

ただぶつかっているように見えて、実は敵の攻撃の威力を逃がすことができる角度か

ら膝をいれている。だから打ち負けることがない。

バシャーモ決死の反撃もチャーレムはその全てをひよいひよいとかわしていく。

「じゃああんなにパワーが出るのは？」

ホヅミはプライドを捨て、教えてアルナ先生モードを展開した。

「チャーレムの『ヨガパワー』は物理攻撃の威力を倍にする特性。相手の攻撃を先読みでかわしつつどえらい高威力の技を刺していけば自然と勝てちゃうってわけ」

ホヅミは目を覆った。

「そんなの無理じゃない。攻撃が当たらないうえに大ダメージを受けちゃうなら打つ手なしでしょ!？」

ダメージを受けてふらつくバシャーモをクロックはもう驚異と捉えていなかった。

「前の試合では大活躍だっただけに実に惜しいね。僕のチャーレムは特別なことはしない。ただ、元々できることを極限まで磨いた」

チャーレムが尻餅をついたバシャーモの額を指で押さえた。体格では勝っているはずなのに立ち上がることができない。

「重心をとられればそんなもんだよ。チャーレム『サイコカッター』」

「っ! バシャーモ戻れ!」

ジャローダを倒したことで勢いに乗れるかと思ったがそうはいかなかった。

ヤシオのアドバンテージは崩れ、焦りが見え始める。

「マツギョー！ いぐべー！」

戦いは続く。続いてマツギョを繰り出した。

「『ほうでん』！」

ここは攻めるしかない。

アルナはうんうんと頷いた。

「これはいい判断だね。平べったいマツギョなら攻撃をもらいにくいし、遠距離からバチバチできるよ。なんせ、コスモスのサザンドラとも渡り合ったんだから」

「なんだか海外のラジオを聴いてる気分ね」

「『あくび』！」

「『サイコカッター』」

掬め手すら捌く。ヤシオはため息を漏らした。

「『あくび』ってなんかのんきな技ね」

「あつそれにはちよつと同意かも」

ギヤラリーがのんきなやりとりをしている間にもクロックとチャーレムは敵の先を読む。

「マツギョから離れるんだ！」

「逃がすかよ。『ねっとう』！」

水流を逆方向に放つことで得難い推進力を生む。ぐんぐんと距離を詰めて本来埋められない速さの壁を超える。

「『バレットパンチ』！」

追いつかれるのは計算のうちだった。振り向き様の拳がマツギヨを狙う。

「『どろばくだん』！」

泥の塊で即席のクッションを用意した。

「甘いなあ」

チャールレムのヨガパワーが『どろばくだん』ごとマツギヨを打ち抜いた。泥が弾け飛ぶ。

「馬鹿力すぎんだろ!? 嘘べ!?!」

「ならもつと見せようか。『とびひざげり』！」

「真下に『ねっとう』！」

今度はマツギヨが完全に攻撃をかわした。

勢いあまつてチャールレムは地面に激突し、膝を押さえて苦しんでいる。

「うまい! 『とびひざげり』は外したら自分が大ダメージを受ける。チャンスだよ」

アルナの声は聞こえていないはずだが、ヤシオも当然同じことを考えていた。

「今だ！ 『ほうでん』！」

電気を体一杯に溜め、マツギョのフルパワーがチャーレムを倒さんと収束していく。

「撃てー！」

ヤシオも、アルナたちも勝利を確信した。

ところがそうでない者もいた。クロックがほくそ笑む。

「『とびひざげり』！」

無事なほうの脚で地面を蹴ったチャーレムがそのまま膝を叩き込んだ。

強力な一撃はマツギョの体力を天蓋へと運び去った。もう跳ねる力すら残っていない。

「マツギョをワンパン。いやこの場合ワンキックか。今のは逆の膝で打ったんだべ？」

「そう。僕のチャーレムは両脚で『とびひざげり』を出せる。もちろん同じパワーでね」

人間と同じようにポケモンにも利き手・利き脚がある。つまりこれほとんどないことなのだ。

「峡谷でやんなかったことすんなよなあ」

ぼやきながらもヤシオはマツギョを優しく撫で、ボールに戻した。

「仇はとつてやるから。ゆっくり休んでくれな」

「これで互いに1体ずつ倒した形になる。」

「チャーレム。いったん休もうか」

クロックは続投を避け、次のポケモンを繰り出すようだ。

「ええ。チャーレム対策考えてたのに」

「そうはいかないよ」

観念してヤシオも次のボールを手に取った。

「トゲキッス！　いってみんなべ！」

「ムクホーク」

飛行タイプのマツチアップになった。

「こつちからいくよ。『すてみタックル』！」

ムクホークは翼をすぼめてトゲキッスに向かって飛び込んでいく。

「もらうな！　上昇！」

回避に専念することでトゲキッスはなんとか攻撃をかわした。

「『エアスラッシュ』！」

空気の刃がムクホークを突き刺していく。

「『ブレイブバード』」

灰翼の猛禽の全身全霊がくる。トゲキッスは攻撃の直後でかわす余裕がない。

しかし手がないわけでもない。

「受け止めろ！」

「くっ」

『ブレイブバード』を受けたトゲキツスだが、そのままムクホークを両翼で捕まえた。それを見たアルナが手を叩いて喜んだ。

「このパターン見たことがある！」

「えっ」

『マジカルシャイン』！』

強い光がムクホークを包む。

『インファイト』

技を食らう寸前で翼と爪の連打を浴びせ、ムクホークは拘束から脱出した。

『とんぼがえり』

そのままトゲキツスを蹴飛ばしクロックのもとへ帰っていく。

「あつ！ ずりいぞー！」

「ズルなもんか。ジバコイル！」

ジバコイルが登場し、挨拶代わりの『10まんボルト』を放った。

「距離はある。よく見てかわせ！」

さほど難しいことではなかった。トゲキツスは旋回し苦手な電気技から逃れた。

『ラスターカノン!』

今度は鋼タイプの技だ。フェアリータイプを併せ持つトゲキツスにはこちらも痛手となる。

再び回避に集中するしなくなってしまう。

「トゲキツス『はどうだん』」

「よっしや! 『はどうだん』なら必中! 体勢が整わなくても当てられる!」

テレビで相撲を観ている時の祖父に似ていると思っただがホヅミは言葉にしなかった。

相性をついた攻撃だったがジバコイルは冷静に『10まんボルト』で『はどうだん』をかき消した。

『アナライズ』け! デタラメな火力してら!」

「ジバコイルはあえてスピードを伸ばさない育成をしているんだ。速いポケモンを全部まとめてカモにするためにね」

それを聞いたヤシオが手を腰にやったのをクロックは見逃さなかった。

「トゲキツス、戻っ——」

『ボルトチェンジ』だ」

トゲキツスに代わり現れたバシャーモに一撃を与え、ジバコイルは引っ込んでいった。

「読まれたか」

「交代先に圧をかけるのは定石だよ」

再び現れたムクホークがバシャーモを睨み付けている。

「さつき見た顔だな」

「そつくりそのままお返しするよ『ブレイブバード』」

「つと、『フレアドライブ』！」

複数回の激突はいずれも互角。反動を嫌わず持てる火力をぶつけ合った。

「『すてみタックル』！」

「『ブレイブバード』！」

飛んでいる相手には飛行タイプの技のほうが都合がよいこともある。スピードでは遅れをとっているがなんとか対応していく。

「このムクホークは『すてみ』だ。反動の分攻撃力が上乘せされる」

「だろうな。『いかく』じゃなくてよかったべ」

バシャーモがムクホークを蹴りあげた。

「まずい、『ブレイブバード』！」

「飛びものなら用意がある。『オーバーヒート』！」

地上より空中を攻めるのに適した技だ。

凄まじい勢いの火炎が空に逃れたムクホークを焼き、バシャーモにKO勝ちをもたらした。

「ムクホークもやられたか」

「いよいよ本気ってか？」

「僕はもとから本気だよ。そっちも同じはずだ」

「まあな」

再び勢いに乗りたいたいところだが無理はしない。

「バシャーモ、もっかい休憩な。シフトまでどうぞごゆるりと」

「アーボック！ もっかい頼むぞ！」

「ジバコイル。ここからだよ」

最初のジャローダもそうだが、特殊攻撃で攻めてくる相手に対してとくせい『いかく』のアーボックはどうしても苦しくなる。そのうえジャローダ戦の傷も癒えていない。

「押せ押せだべ、『ほのおのキバ』！」

「なんとまあ……」

ホヅミは驚嘆を過ぎてもはや呆れの境地にいた。

（相手は幹部。技の出し惜しみなんかせず使えるものは片っ端から出せばいいのに）

「地面に『めざめるパワー』」

ジバコイルから放たれたエネルギーがフィールドを凍結させた。

「うええ。そっちのめるパは氷け」

「めるパ？」

這って移動するアーボックにとってフィールドのコンディションはかなり大きい。ただでさえ麻痺している。ジバコイルに近づいたところで滑ってしまった。

『『10まんボルト』』

かわす余裕はない。まともに食らってしまった。黒焦げになったアーボックがぼたりと倒れる。

「油断ならないね。ここまで食い下がるとは」

「じゃあそれこそ油断だつぺよ」

アーボックがジバコイルに巻き付いた。

「どういうことだ!？」

黒く焦げた方のアーボックの体がパリパリと崩れていく。

『『みがわり』でも『かげぶんしん』でもない。これは脱皮だ。ジャローダの時に始まるかと思っただけどちよつと後ろにずれちまったな』

「だから交代しなかったのか」

「こそ」

「つ、『10まんボルト』！」

ジバコイルの高圧電流にもかまわず『ほのおのキバ』がクリーンヒットした。さらに地面に突き落として『じしん』。攻撃の手を緩めない。

「『ボルトチェ』」

「させつかい。『ほのおのキバ』！」

アーボックの牙が炎を纏う。

「いげー！」

しかし『ほのおのキバ』が炸裂することではなく、アーボックはそのままのびてしまった。

「アーボックごめん。お前に甘えちゃった。でも活躍は無駄にしないからな」

ヤシオはアーボックを戻し次のボールを手を取った。

「いやあ、危なかったよ。ダメージの蓄積がなかったらかき乱されていたのは間違いない。とはいえジバコイルに無理はさせたくない。こっちも交代としよう」

「スターミー！ 巻き返すべー！」

「叩き潰せ、シザリガー！」

水タイプながら対極に位置する2体の対決となった。

「『アクアジェット』！」

鈍重そうな見た目に反してシザリガーは出の早い技を備えていた。

『ちいさくなる』

今一つとはいえわざわざ当たりたくはない。スターミーは文字通り体を小さくして攻撃をかいুকった。

「あれ。フルアタでこないんだね」

「オレはニシキノ先輩をリスペクトしてんだ。完全には真似できんからオレなりのアレンジをくわえてだな——」

『りゅうのまい』

「ここにきて積むか！ 『10まんボルト』！」

ジバコイルほどの威力はないがそれでもシザリガーにとって苦しい攻撃であることには間違いない。

「嘘べ!？」

シザリガーは『りゅうのまい』を止めない。その表情は苦しげだが技を止める素振りがない。

「荒々しい気合い注入をどうも。シザリガー、『はたきおとす』だ」

「やべえ、『ちいさくなる』！」

攻撃力とともに素早さも上昇していたシザリガーの動きにスターミーはついていけ

なかった。

「水タイプなのに！」

『てきおうりよく』だよ。シザリガーの水と悪の技は威力が跳ね上がるんだ」

このヤマが終わったらバトルの勉強をしようと思つた。ホヅミはひそかに決意した。

スターミーはなんとかこらえたがコアにヒビが入り、体に力が入らなくなっている。次にかすりでもしたら一巻の終わりだろう。

「スターミー戻れ！」

交代の判断をし、ヤシオはトゲキツスを繰り出した。

『マジカルシヤイン』！」

「いけ——ジバコイル！」

まさかの交代合戦となった。クロックはシザリガーを下げた。ジバコイルを送った。

「なんで!? 能力を上昇させたんだからそのまま戦ったほうがいいのに」

「多分ヤシオもそう考えると読んだからだよ」

「えっ」

「ジバコイルの電気技のほうがかこは攻めやすいんだよ。マツギヨはやられちゃったから全員に効くしね」

シザリガーを狙った『マジカルシャイン』がジバコイルに命中したが、ほとんどダメー
ジはない。

「『はどうだん』！」

「それしかないんだな！ 『ラスターカノン』！」

有効打も相殺されてしまったら意味がない。

「めげるな！ 撃ちまくれ！」

トゲキツスは『はどうだん』を連射ししつこくジバコイルを狙う。

「『10まんボルト』」

そしてその悉くが打ち消され、煙となって消えていく。

「まだまだ！ おかわりをくれてやれ！」

「ここにきてワンパターンだね」

しかしクロックもそこまで能天気な性格ではない。

（ジバコイルのスタミナ切れを狙っている？ いや、それならタイプ一致でない技を連
発しているトゲキツスのほうが先にバテるはず。ということは適当なタイミン
グで交代するつもりか。ならばそこを狙って『ボルトチェンジ』を入れれば……）

「トゲキツス、正面に回り込め！」

「10ま、いや『ボルトチェンジ』！」

トゲキツスは攻撃をギリギリでかわし、ジバコイルの視界から消えた。しかしジバコイルが対象を見失うことは絶対がない。

『はどうだん』は目眩ましか。でもジバコイルにはレーダーが備わっている。どこに隠れようがこつちが先に見つけられる！』

「別にジバコイルとかくれんぼしようってんじゃねえよ。でも、トレーナーにはレーダーなんて搭載されてないべ？」

ジバコイルはトゲキツスを補足しているようだがクロックは肉眼で追いきれない。

「灯台もと暗しつてな。トゲキツス、ぶちかませ！」

トゲキツスは相手の底面に潜んでいた。強力な一撃でジバコイルの巨体が真上に吹っ飛んでいく。

「ジバコイル！」

墜落したジバコイルはそのまま倒れ付した。

『はどうだん』じゃああはいかない。今の技は『きあいパンチ』か。ポケモンとトレーナーの認知のズレを利用されるとはね」

「オレだつてライブキャスターは7年前のモデルを使つてる。便利すぎるとそれはそれで合わないもんだべ」

「それとこれとは別の話だけどね」

クロックはチャーレムを繰り出した。

「そうだまだチャーレム残ってんじゃん。終わしといた妄想をしたのに」

「じゃあ現実を見てもらわないと。チャーレム『サイコカッター』」

「かわして『エアスラッシュ』！」

トゲキッスが放つ技はチャーレムに届かず、距離を取れば『じこさいせい』で回復してしまう。

「『きあいパンチ』！」

回復している隙を狙ったが、チャーレムの動きのほうが速かった。

「『バレットパンチ』！」

猛スピードの一撃がトゲキッスを地面に叩きつけた。

なんとか起き上がろうとしたトゲキッスだが、ついに力尽きてしまった。

「トゲキッスお疲れさん。ゆっくり休んでくれな。スターミー、仇を討つべ！」

バシャーモを読んでいたクロックには少々意外な選出だった。

「『じこさいせい』」

「『サイコカッター』」

コアを修復しようとするところを『サイコカッター』が襲うが、ここはスターミーの回復のスピードが上回った。

『10まんボルト』！

『バレットパンチ』

このスピードの厄介さについて痛感していたヤシオだがそれでもここは退けなかった。

『れいとうビーム』！

「やけになったか。かわせ！」

直線的な攻撃であれば難なく回避できる。チャーレムの背後に氷の塊が精製された。

『バレットパンチ』！

やはりスターミーはかわすことができない。威力こそ抑えられたがバウンドしながら転がっていく。

『れいとうビーム』！

それでもスピードなら上だ。チャーレムの背後に回り込んで放ったがこれも空振り終わった。新しい氷塊をこしらえただけ。

『サイコカッター』！

これもまともに受けてしまった。

「スターミー、いったん氷の陰に隠れて回復すんべ！」

「させないよ。』とびびりげり』」

よろよろと氷の陰に逃れようとするスターミーをチャールムの膝が粉々に打ち砕いた。

「粉々!? チャールム、そっちは氷に映った偽物だ!」

チャールムがまた膝を押さえて苦しんでいる。

「受けてみる。担当者本人の『れいとうビーム』だ!」

チャールム自身も氷像となってその場に倒れた。ダメージも相当で戦闘は不可能だろう。

「あとはなんとかする。よく頑張ったよ」

クロックはチャールムにラムの実を与え、ボールに戻した。

「シザリガー、いけ」

登場するなり鋏を大きく振り上げて力をアピールした。トレーナー同様昂っている。

「『10まんボルト』」

相性を突くセオリー通りの攻撃だがシザリガーは避けようとすらしらない。

「『クラブハンマー』」

大きな鋏が電気を振り払った。

「そんなんありけ!」

「もちろん。『アクアジェット』」

『ちいさくなる』！」

一瞬で体を極小まで縮めた。

「それを待ってたよ。『りゅうのまい』」

「えっ」

シザリガーの舞が渦を巻き、小さくなっていたスターミーを掬い上げた。

『りゅうのまい』は攻撃技じゃない。でも体が小さくなったポケモンが巻き込まれれば……」

「さらに能力上昇もある。どえらい作戦だね」

『クラブハンマー』が今度こそスターミーのコアを砕いた。こうなってはもう戦えない。

「くーっ。なんとも憎たらしい鋏だ」

「そりやどうも」

「まあ赤い鋏対決ってんならあえて乗ってやる。ハッサムいつてみんなべー」

最後の1体を投入した。

これでヤシオの手持ちはフルオープンとなった。

ハッサムとシザリガーが睨み合う。

「予想はついてたけどあの時と同じ面子なんだね」

「同じってことはねえな。オレたちはあん時より強くなってる」
「そうか。『クラブハンマー』」

素早さが上昇している。大振りな攻撃が最短距離で飛んできた。ハッサムはなんとか両腕で受け止めた。

「避けないとは舐められたね。シザリガー、そのまま潰せ！」

「投げ飛ばせ！」

シザリガーの体が持ち上がり、浮き上がった。そして反対側の壁まで放り出された。

「馬力は認めよう。シザリガー、『アクアジェット』！」

「ハッサム、『バレットパンチ』！」

先制技どうしの勝負は一瞬でついた。

赤い鉄を大きく掲げたのはハッサムだった。

喜ぶ間などない。

「ハッサム、交代な。バシャーモ頼んだ」

現れたバシャーモは見るからに様子が違った。

体の炎が青白く燃え盛っており、離れているクロックにもその熱気が伝わるほどだ。

「なるほど。バシャーモは『もうか』が発動している。いよいよ追い詰められてしまった

わけだ」

「そんな気なんかなくせによく言うべ！」

ヤシオは目を二等辺三角形にして捲し立てる。

「疑り深いね。僕は悪人にはなれない質みたいなんだ。嘘はつけないんだけどな」
クロックが握る最後のボールから何が飛び出すのか、ヤシオはもう考えることすらしなかつた。

「どっちでもいい。オレはあんたに勝つ！」

その目には確固たる意志の姿があつた。

まごうことなき、それは勝利への渴望に満ちた表情だつた。

自分も同じ表情をしているのか気になつたクロックは頬に手を当てた。

結論は出ない。しかし意味がないわけでもない。

「こんなに楽しい勝負、終わらせたくないんだけど。まあしょうがないよね」

クロックがボールを放つた。

「いけ——ガブリアス！」

ラフエルリーグ準々決勝最終試合　クロック対ヤシオ

「それにしても解せんない」

イズロードの視線はここしばらくスタジアムの様子を捉えたモニターから動いていない。

「どうしたよう？」

記者の変装を解いたワースはそれがどうにも面白いようだ。

ワースは幹部ではあるが事務方を自称していた。積極的に表に出ることを良しとせず現場で他の幹部とやりとりすることは珍しい。

だからこそイズロードも彼に応じた。

「クロックの奴だ。どうにもあれからはバラル団幹部としての矜持を感じない。正直したつば以下だろう。交渉要員としてもせいぜい班長がいいところだ。ボスに意見するつもりは毛頭ないが、なぜ幹部が務まるのか皆目見当もつかん」

やむをえないことだ、と一定の理解はある。

投獄期間があったことからイズロードは他の幹部と比べてクロックとの接点が薄い。

「それなら簡単だ。あいつの価値は『強いこと』だ」

「確かに腕はある。それでも強さだけで幹部というのは……」

「あんた、俺が思っていたより真面目なんだな」

モニターの中でガブリアスがバシヤーマの攻撃をかわし、手痛い反撃を食らわせた。「俺達は全能でも万能でもない。ガキの頃言われただろ？ 助け合い補い合いましようつてな」

イズロードがフンと鼻をならした。

「もし旦那がクロックと戦ったとして勝てると思うか？」

「無論だ。トレーナーとしての実力が高くとも、いなすのは容易い」

イズロードの脳裏に先程のカネミツとの小競り合いがよぎっていたのは想像に難くない。

「俺も同意見だ。ハリアーもグライドもそうだろうな」

「それなら」

「じゃあここでもうひとつクエスチョンだ。今奴がプライベートで楽しんでやがるラフェルリーグのルールでと戦ったらどうだ？」

「それは無意味な質問だ。我々が行儀よく戦ってやる道理などない」

今度はバシヤーマがガブリアスを撥ね飛ばした。

「ちつちつち。それは答えになってないぜ旦那。ちなみに俺はノーだ。申し訳ないがあ

んたを含め他の幹部連中もそれに近いだろうな」

「何を根拠に」

「執念だ。それも超弩級のな」

「まさかここまで追い詰められるとはね」

クロックは両手を広げた。

「見事なものだよ。ジャローダも、チャーレムも、ムクホークも、ジバコイルも、シザリガーも。みんな君との再戦を見越して鍛えていたのに」

クロックの言葉に呼応するかのようにはガブリアスが吼えた。一本一本の毛先がびりびり震え上がる咆哮を受け、バシヤーマも静かに全身を纏った炎を揺らめかせる。

「褒めるのはオレが勝つてからにしてももらいたいね。バシヤーマ！ 『フレアドライブ』！」

「寄せ付けるな！ 『いわなだれ』！」

タイプ相性の有利こそあれ『もうか』が発動した状態で技を受ければ危ない。ガブリアスは岩をぶつけてバシヤーマの進路を妨害する。

「モツさんのガブもそうだったけど岩ぶつけ作戦には参っちゃまうね」

このような場合において進路を塞ぐというのは最もシンプルかつ有効な手段だ。コスモスもクロックも近しい見解に至ったのだろう。

『じしん！』

「まじい、こつちも『じしん！』」

バシャーモも強く地面を揺らす、ガブリアスのそれをなんとか防ぐのが精一杯だった。

「どうした？ 守りに入っている余裕はないんじゃないのかな」

「だったら素直にやられてくれよな」

今度は『ブレイブバード』で重い一撃を狙う。しかしそもそもそのスピードに差があった。

ガブリアスは攻撃を紙一重でかわすとその両腕をバシャーモの背中に突き立てた。

『どくづき』だ?!』

回避と攻撃、その両方が組み合わさった無駄のない動きだった。ヒトがその動作を再現しようとすれば体が千切れてしまうだろう。

「フェアリー対策もあるけどこういう使い方もあるんだよ。特性が発動したバシャーモは厄介だけど逆に考えれば体力はもうない。交代するかな？」

相性を突かれたわけではないが苦しみ具合から毒をもらったことは疑いようがない。

「今だ、『フレアドライブ』！」

「そうくるか」

さすがのガブリアスも触れた状態からの攻撃には対応できない。至近距離からの技が決まった。

「フィールドごとくぞぞ！ もつかい『フレアドライブ』」

しかし流れがヤシオに傾くことはなかった。スピードに勝るガブリアスはすぐさまバシャーモから距離をとる。毒状態になった今、同じ速さで追う体力はもうない。

「さっきの反動も相当なはずだよ。そのバシャーモ、まだ立っているのが信じられないくらいだ」

「そこはワカチコンだべな。ガブには申し訳ないけど相討ち上等で詰めさせてもらうか
んね」

互いに互いが戦況をどのように認識しているのか探りあっている。ヤシオにも、ク
ロツクにもある結論が出たようで。

「それは違うな」

クロツクの左腕のブレスレットが激しく輝きだした。そしてそれはヤシオには馴染
み深い光景だった。

「メガシンカか。まあ切るならここだんべな」

正午の鐘を聞くかのようなテンションで呟いた。

バシャーモは立ち上がりとうとするが足腰に力が入らないとみえ、もがき続けている。それはクロックにとってヤシオの作戦に思われた。

「どれほどの策を講じてこようが、その悉くを挫くのがこのガブリアスだ——」

「そっけ。そんなら是が非でも倒さなきやな」

「言っている。君の熱意、夢、誇り……すぐにその全てが僕にとっての冗談となる」

ブレスレットから溢れた光がエネルギーとなってガブリアスと共鳴する。それは何色でもあり同時に何色でもない。

虹を一色で表現したような光の膜がドーム状になってガブリアスを包む。トレー

ナーとポケモンとがシンクロする瞬間だ。

クロックが左腕を突き上げる。

「我が呼び声に応え撃ち均せ、ガブリアス——！」

ガブリアスが今日一番の雄叫びをあげた。

「今こそ叶え！ ムメガシンカ——！」

光が弾けて消えた。そしてそこに立っていたのは先ほどまでのガブリアスではなかった。

「ほー。大迫力だべな」

これはシンカであって進化ではない。種族として最終形態となったガブリアスのリミッターを外なる力によって解放した生命エネルギーの極致だ。さらにトレーナーと感覚をリンクすることで両者の結びつきが最大となる。

元々頑強だった全身の筋肉がさらに滾り、体を覆う鎧となつている。両腕の爪は翼と一体化してさらに巨大化しその姿はまるで――

「死神の大鎌」

陰から見つめるホツミの呟きはアルナにしか響かなかつた。

ヤシオは頬を掻いた。

「とんでもねえのが出てきちゃったな。シンカ取消を要求したいんだけど」

「それはできない相談だよ。『じしん』!」

「『オーバーヒート』!」

炎ポケモンが使う炎技は体内のエネルギーを直接熱に変換して放つものだが、『オーバーヒート』はそのなかでも異色な技だ。それはどういふことかというところ、技を放つ過程で多量のエネルギーを急激に変換するため体に負担がかかり、特攻が大きく下がってしまうのだ。

凄まじい炎がフィールドを捲り上げながら唸りをあげる。ここは『オーバーヒート』がわずかに上回り、ガブリアスにしつぺ返しを食らわせた。

一撃ノックアウトすら狙える技だが、ガブリアスは倒れてすぐに起き上がった。

「いい技だ。それを連発されたら正直しんどいかもしれない」

「それができないのを分かってるくせによく言うぜ」

特攻ダウンの都合上あの威力で『オーバーヒート』が撃てるのは1度きりだ。

能力の低下を戻すには交代するしかないが、バシャーモの体力を考えると悠長な手はもうとれない。

「こんままだ！ 『フレアドライブ』！」

『ドラゴンクロウ』！」

空気が裂けるほどの衝撃と熱が技の威力を物語る。ここまで火力では押されつつあったガブリアスが逆に押し返す展開となった。

「やっべえパワーだ。もうかすら押し返されちまうか」

幾度の激突のあと、再び『フレアドライブ』を撃とうとしているのかバシャーモは炎を起こそうとするが、その体からは白煙が激しく噴き出すだけだった。

「それにしても残念だよ。今回こそは君の本気が見られると思ったのに」

「や、オレ超本気なんだけど！ 本気と書いてホンキと読むくらいにはマジなんだけど！」

ホンキなのかマジなのか統一することから始めたほうがよいだろう。当然クロック

は無視。

「その首のチョーカー。僕には分かるよ。そこに仕込んでいるのはキーストーンだ。君も使い手なんだろう?」

ヤシオは口を尖らせた。そして悪戯がバレた子どものような顔をした。

「よく見てんな。バレてるなら仕方ないか。やつてくる相手にだけ使うと決めてんだけど、そっちがやるなら伏せとく理由もねえべ」

首に手をやった。さつき見たことを自分でもやろうという腹積もりのようだ。

「こうしてやるのは照れちまうけどこっちも切り札を出すぜ。使える手は全部使う主義なんでね」

クロックの左腕と同じようにヤシオのチョーカーが輝きだした。光が渦を巻いて煙の中へと流れていく。

「メガシンカ!? ヤシオも継承者だったの?」

だったら砂漠で使っておけよという言葉外のニュアンスを滲ませつつアルナが驚嘆を漏らす。

(メガバシヤーマならガブリアスのスピードを素で超えられる。体力がもうないのがネックだけ……)

ホヅミは黙って見守ることしかできなかつた。

フィールドは一瞬の逡巡。過去には黙々とメガシンカを行っていたが、男子のロマンを心から愛するヤシオとしてはクロックに対抗する意味も込めてメガシンカの口上にはこだわりたいところだった。

脳内に広げたくしやくしやの原稿用紙に文字が浮かんだ。

「我が剛き理想、冴ゆる真紅の闘魂よ！」

少々置きにいった感は否めない。

「いってみんべ！　メガシンカ！」

ガブリアスに起こったのと同じ現象が発生したことが煙の中でも気配で分かった。しかし、メガシンカを果たしたバシヤーマが飛び出してくる様子がない。

「あり？　不発？」

アルナはコガネで人気の新喜劇もかくやというポーズですつこけた。

クロックが嗤う。

「バシヤーマはメガシンカしたものの、ダメージの蓄積で動くことができないか。せめてもの情けだ、ガブリアス、楽にしてやるんだ」

『ドラゴンクロー』を展開したガブリアスが煙の中へ飛び込んでいく。

もはや攻撃が当たらなくとも戦闘不能になるくらいの状態だ。それでもクロックは手を抜かない。

「これで勝負はこちらに」

「……決めつけるのはいぐねえべ」

ガブリアスが煙の中から弾き飛ばされてきた。

「ツ?! 煙の中に何が」

「だから、思い込みはダメってこと」

晴れた煙の中に立っていたのはバシャーモではなかった。たしかに体は紅いが――

「そいつは……」

「宣言通りメガシンカしてやったぜ。なあハツサム?」

メガハツサムが銃を振り上げていた。

「なるほど」

クロックはこのカラクリを理解した。

「今手に持っているのはバシャーモ入りのボール。そしてそれは能力ダウンを補う交換ではなく、戦闘継続不可能による選手交代というわけか。戦闘不能のバシャーモを目標し役にするとはなかなか悪いことを考えるね」

「ずっと前からこの作戦については手持ちのみんなと話し合ってたさ。それにバシャーモはあくまでレンタル移籍だし無理はさせらんねえ。メガストーンも持ってねえんだもん」

種明かしをするヤシオは心底楽しそうだ。

「だから君はバシャーモのポテンシャルをうまく引き出しきれなかった、と」

「そんなに褒めんなんて。『バレットパンチ』！」

鍔が最短距離で虹の軌道を描く。そのまま弾丸のような速さで鍔がガブリアスの顎を打った。

『ドラゴンクロー』

ただでやられるガブリアスではない。今度は大鎌が連撃でハッサムの胴を据えた。

「砂嵐はもう止んでる。『すなのちから』は発動させねえぞ」

「分かっているけどね。メガガブリアスの強さを」

『いわなだれ』がハッサムを襲う。『いわくだき』でもギリギリ防ぐのがやっとだ。次の弾丸を放つ余裕はない。

「メガガブリアスにとつてとくせいはおまけだよ。スピードを削つてまで実現したこの破壊力こそ真骨頂なんだ」

たしかにバシャーモとぶつかり合っていた時よりもいくらか動きは見えるようになってる。しかし、技の威力は桁違いになっておりヤシオたちにとつてむしろ対処が難しくなっているのだ。

『バレットパンチ』！

『ドラゴンクロー』！

力と力がぶつかり合い、生まれたインパクトが離れたスタジアムの壁面をも凹ませた。

そしてその余波は離れた場所にいるホヅミとアルナにも及んだ。

『リフレクター』！

『ニードルガード』！

ゴチルゼルとマラカツチの力を借りてそれぞれ飛散する瓦礫を防ぐ。

「監視、どうするんですか。パンデュールの正体はバラル団幹部のクロックですよ！」

飛んできたパイプ椅子で頭にたんこぶをこしらえたツキミが喚く。

「もちろん最優先で確保しなくてはならんが……」

戦いが激しすぎて近づけない。さらに飛行船から送られてくる敵の新手にも対応しなければならぬ。

「フラン。とりあえず奴らに戦いを止めるよう言ってこい。お前なら『ドラゴンクロー』は乱数2発ってところだろ」

「戦いより先に私の心臓が先に止まってしまっていますが」

豊稜を司る3体との戦いは熾烈を極めていた。その中でもミントはフィールドでの戦いが気になるようだ。

ピジョットが、フシギバナが、ドータクンが、ツンベアーが、キノガツサが絶え間なく技を放ちフィールドのほうへ敵を通さないよう抑えている。

「ヤシオ、思ったよりやるわね」

「そりやまあ俺に勝ったトレーナーだしな」

ジュリオが胸を張る。

「パンデュールくんもイイ感じ。若いトレーナーが躍動するっていいわねえ」

「若いつてあんたいくつだヒイツ!？」

コウヨウに睨まれるテスケーノをオトギリは黙ってやり過ごした。

ヤシオの額の包帯に血が滲んでいる。アバリスにやられた傷が開きつつあるようだ。それすら意に介さずクロックはたたみかける。

「この状態のガブリアスに加減なんてものはない。『じしん』!」

「やべえ、飛ぶんだ!」

飛行タイプでないハッサムは羽ばたいて空中に逃れるしかないがそうになると当然無防備になる。

「逃げ切るのは無理だべ。『いわくだき』！」

とくせいが『さめはだ』でなくなったのは物理的 direct 攻撃を得意とするハッサムにとつては追い風かもしれない。

威力こそ『バレットパンチ』に劣るがこちらには防御力を下げる追加効果が見込める。ガブリアスは迎撃態勢を整えていたが、それでもまともに食らってしまった。

きりもみしながら後方へすっ飛んでいく最中に『いわなだれ』で牽制する。追撃を狙うハッサムは体よりも大きな岩をぶつけられ、後退を余儀なくされた。

『ドラゴンクロー』

踏み込みや腕の付け根の筋の動きから大鎌の動きを読み、ギリギリのところかわしていく。

ルシエジムでコスモスのジャラランガがやってのけた絶技の一部をハッサムが再現していた。

「いいぞハッサム！ 経験が活きてるべ！」

「本当にそうかな？」

ガブリアスの膝がハッサムの重心を僅かにずらした。そしてそれだけで十分だった。

『ドラゴンクロー』がハッサムを袈裟斬りにした。

少し気を抜けば意識が飛びそうになるほどの痛みが駆け抜ける。

「はーっ！ そうこなくっちゃ！」

目が充血しているのか額の血が垂れてきているのかもはやシオ自身にも判別が突いていない。

「痛すぎて気持ちのいい一撃だ。覚めた目がまた覚めちゃった」

続く『ドラゴンクロー』をガブリアスの股下をくぐって回避し、その背後に回り込む。

『じしん』！

「そうくると思ったぜ！ 『ダブルウイング』！」

重い羽根の連撃が炸裂した。

『バレットパンチ』！

ガブリアスは大鎌をスキーのストックのように使いあり得ない姿勢から回避した。

「あと一歩だったんになあ！」

「それなら歩んで見せろ。そのあと一歩とやらを」

ガブリアスがハッサムの脚を踏みつけた。

『ドラゴンクロー』！

『バレットパンチ』！

片足を封じられては力も半減してしまう。大鎌がハッサムをズタズタに切り裂いていく。鉄でガードしているがそれでも攻撃の全てを防ぎきれていない。

「君は十分強かった。僕にメガシンカを使わせ、あまつさえ制御すら危うくなるほどの全力を引き出したんだ」

大健闘だよ、と呟いた。語気が強いあたりクロックも昂っているようだ。

大鎌を力任せに振るいつづけるガブリアスと攻撃を受け続けるハッサム。それがそのままクロックとヤシオに重なる。

「でも、君がどれほどの高みを目指そうと絶対に超えられないものがある。君だけじゃない、誰だってそうだ。大きくても、強くても、抗えない凄まじい力というものが確かに存在する。真にどうにもならないことは、立ち向かおうとする気すら起きないものだよ」

「だから——勝利を前提として」

「やつかましいわ」

「ペラッペラペラッペラと。よくもまあそんなしやべれるもんだ。あんちよこでも用意してんのか」

「こんなに楽しい勝負、しよつべえ終わらせ方はさせねえぞ！」

ヤシオの瞳が何かを捉えた。そしてそれはここまでクロックが何度か味わった彼が

何かを仕掛ける時の目だった。

「まずい！ ガブリアス、一旦距離をとれ！」

「逃がすかい。ハッサム、『ものまね』！」

飛び退いたガブリアスを追いかける。そして鋏を振りかぶった。

「いつてみんべー！」

鋏のスイングから繰り出されたのは『バレットパンチ』でも『いわくだき』でもない。

「散々味わって体で覚えた成果を見せてやれ！ ハッサム、『ドラゴンクロウ』！」

「何ッ!？」

ガブリアスにとって予想外の方向から弱点を突かれる形となった。フィールドを見渡す高さから一瞬で地面に叩き落とされた。

「『いわなだれ』！」

「もつかい『ドラゴンクロウ』だ！」

完全に読みきっていたハッサムはガブリアスの胴体をボールのように掴んで攻撃をかわし、『ドラゴンクロウ』のダメージを倍加した。

さらにおかわりを狙ったが今度はガブリアスが大きく跳躍してかわした。

「いやいや、今のは効いた……いや、本当に」

「こいつは芸達者だかんテクニシャンな」

「たしかに『ものまね』は誤算だったよ。でもかくし球つてのはそうそう使える手じゃない」

ハッサムが顔をしかめた。鍔から熱した金属を急激に冷やしたようなピシピシと音がする。

「本来覚えることのできない技は使うだけで大きな負担となる。決着を早めたい時や格下の相手を千切る時に使うのが定石だろうね」

「あなたには隠せないか。オレのハッサムには氷技とフェアリー技の持ち合わせがねえんだもん、これしかなかったんだ」

『いわなだれ』を牽制に放たれた『じしん』をかわすことができず今度はハッサムが地を這う。

「そこまでして勝とうとは恐れ入るよ」

「どの口が言ってるんだい。だいたい、オレたちにとつても苦渋の選択だったってことは分かってもらいてえとこだな。これくらいししないとダメージレースでの不利はひっくり返せないがね」

『じしん』！

『ダブルウイング』！

素早い動きでハッサムがガブリアスを叩き伏せた。しかし『いわなだれ』による反撃

を受けた。

「食い下がるか。君にはまだ分からないのかな。絶対的に至れないと確信する瞬間が、弱さを自覚する瞬間が、自分を蝕んでいくことを」

「うつせえ！ ダメな部分があるならそれは伸び代だ！ 若いくせにじじむさい感傷に浸ってんじやねえぞ！」

『じしん』を食らったハッサムが『いわくだき』で反撃した。

そしてトレーナーたちも覚悟が決まったようだ。それはこのやりとりののちに立っていたほうが勝者となることを意味していた。

「決着が近いようだ、赤帽子^{ヤシオ}！」

「ずりいぞ、それこつちが言おうと思つてたのに！」

両者地面を抉れるほど強く蹴り一直線に相手を目指す。今回は回避や防御など一切考慮していない。

「これで終わらせる！ 『ドラゴンクロウ』！」

「決めるぞ！ 『バレットパンチ』！」

鉄と大鎌が相手を刈り取らんと最後の唸りをあげた。一番シンプルな攻撃こそ最強の必殺技となりえる。

トレーナーたちの視覚がポケモンと結び付く。

ガブリアスは見た。ハツサムの動きが徐々にゆっくりになるのを。ハツサムは見た。ガブリアスの動きが徐々にゆっくりになるのを。

どちらもトレーナーとの勝利のため最後の一步を今まさに踏み出そうとしていた。そして思考を巡らせる。

遅い。目の前の相手よりも加速しろ。なんでもいい。体の中に残っている力を一滴残さずまだ動く腕に集中しろ。力だけでは足りない。関節の捻りだ。相手を貫く為の理想的な力の流れだ。加速だ。回転だ。

これは勝利のための一撃だ。

——叩き込めッ！

爆発のような衝撃がフィールドを根こそぎ吹き飛ばした。砂埃の陰でガブリアスとハツサムの体が力なく宙を舞う。

アルナがホヅミの体を揺する。

「ハツサムは!?! ヤシオは勝ったの!?!」

「分からない。でも最後のは……」

「ハツサム!」

「ガブリアス！」

ヤシオもクロックも結論を見届けるためにそれぞれのポケモンのもとへ駆け寄った。ガブリアスとハッサムが倒れている。

しかし相討ちではない。

「ハッサム！」

ハッサムはメガシンカが解けている。つまり完全な戦闘不能だ。

メガガブリアスがゆっくりと起き上がった。そしてスタジアムが震えるほどの咆哮で勝ちどきをあげた。

これが初めての敗北ではない。しかし受け入れるには多少の時間を要した。トレーナーの性だ。

「ごめんな。ぜんぶオレのせいだ。みんなあんなに頑張ってくれたんに……」

ヤシオは6つのボールを抱き抱え、がっくりとうなだれた。

ガブリアスのメガシンカが解けた。

「まさかここまでとはね。君のことは嫌いだけど僕に倒されたトレーナーの中では最上位かもしれないな」

「そんな嬉しくねえよ。あーあ、まともにやって負けちまった。やっぱりあんたは強くてすげえよ。悪者なんかしなくても十分やっていけるだろうに」

「君こそバラル団に入ればそれなりの待遇で迎え入れられる。僕だけじゃない。永遠に望む強敵と戦い続けられるよ」

「オレはそっち側にはいかねえよ。やるようにやって強くなるのが清く正しいトレーナーだ」

「なあ、あんたはなんでそんなに強くなりたいんだ？」

「変なことを聞くね。世界最強、誰もが憧れる響きだと思っただけだな」

「そりやそうだ」

「……昔カントーを旅していた時に赤い帽子のトレーナーにそれはもう酷くやられたことがあってね」

「なんだ帽子にこだわるのはそのせいか。フラれた女の子の特徴だとばかり。そんなじゃあオレに何かあったとかいうわけじゃねえんだな」

「いや君のことは大ッ嫌いだ」

「あんれま」

吐き出すだけ吐き出してクロックはヤシオに背を向けた。

「——僕はもう行く」

「そっけ。とつとつと行っちゃまえい」

「認めたくはないがいい勝負だった」

「ああ、そうだな。対戦ありがとうございました」

会釈するヤシオに領き、クロックがガブリアスに掴まった。そのまま上空の飛行船へ飛ぶつもりなのは明らかだった。

「バラル団は次の段階に入る。まあ、君にとっては関係のないことかもしれない」

「ここでやつとフィールとホヅミがクロックを確保するために動いたが、その顛末はやはりヤシオにとつてもはやどうでもよいことだった。」

「ただいま戻りました」

そろばん教室から帰ってきた子どものような気楽さでクロックが帰還した。

待機していた幹部たちは思い思いに過ぎ去っている。

「戻りました、じゃねえよまったく。こつちが超過勤務してるつてのに趣味を満喫しやがって。どんだけあの赤帽子と遊びたかつたんだよ」

「まあまあ。それで、みなさんの首尾はどうです?」

「これ以上は無駄と察したワースが状況を伝える。」

「フリック市長は例のリザードン使いに奪還された。あいつ、相当派手に暴れたぞ。高え機材もいくつかやられた」

「それなら作戦は成功じゃないですか」

「そりやそうだが……つーかあいつ準決でお前と対戦するんじゃないか?」

「次の試合にノコノコ出ていったらお縄ですよ」

「気楽なものですな。まあ私も束の間の逢瀬を楽しめたので良しとしますが。ああ、今度は私が焼いて差し上げたいもの」

「わぁついていけない世界」

ハリアアの嘆息は先が焦げた髪の毛のせいだろうか。

「私も姫を拐う大魔王の役ができたのはよかったな」

「オツサンがオツサンさだっただけじゃないかな」

イズロードもどこか楽しげだ。

「おいおい! お二人さんも思わぬストレス発散かよ。バラル団幹部の福利厚生の実態具合たるや」

最後の一人が指令室にやって来た。

「そういうお前が一番楽しんでいたのではないか?」

グラライドの一言に何やらモゴモゴと眩き、ワースは静かになった。

「いよいよ俗世の愚かな者共も我々の崇高な志を理解することとなるだろう」

こうしてラフェルリーグは準決勝を残して大会継続が不可能になったため終了した。ベスト4にはミント・コウヨウ・シンジョウが確定することとなったが、準々決勝最終試合に関しては正体が露呈したクロックが失格扱となりヤシオが準決勝進出を決めた。

しかしヤシオから運営へ自身の敗北とパンデュールの勝利の申告があつた。緊急事態で審判すらその場にはいない状況ではあつたがホヅミが残っていた映像記録が彼の申告を裏付けた。

優勝者のない大会は前代未聞のことであるが世論はそれどころではなかつた。

飛行船から戻ってきたフリックは暴獣とバルル団の脅威から自身の危険を顧みずに一般人を守りきつたことで評価をさらに高めた。

政府は彼にバルル団対策における非常時大権を認める法案を可決し、フリックの権勢は市制の域にとどまらないものとなった。

逆にPGとバルル団対策特別室はみすみす計画の実行を許したことで厳しい視線に晒されることとなる。

自由の翼、その羽ばたき

人が求める自由は空にある。少なくともランタナはそう考えていた。翼はなくともポケモンの力を借りれば空へ繰り出すことができる。本来空路に頼った旅を良しとしない彼にとつても、それは生への彩りそのものだった。

(今日はいい風が吹いてる。どこまでも飛べそうだ)

彼の価値観は故郷アローラの風土と島めぐりによつて形作られた。ジムリーダーをしながら旅人としてラフェル各地を巡っているのもその価値観に突き動かされているということなのだろう。

いつもそうするように、手のひらを空へと伸ばす。そして高く、遠くへ飛ぶ自分たちの姿をイメージする。そしてその隣ではムクホークがランタナおの真似をして翼を伸ばす。これが彼らのルーティンだった。

すう、とひとつ深呼吸をした。

「そんじゃ行くか」

今この瞬間だけは彼の目は蒼穹のその先を見据えるためにある。脚は羽ばたきに振りほどかれないために、腕は風を感じるために。

ランタナを背に乗せたムクホークが強く地面を蹴り、一瞬で空へと舞い上がった。そして矢のように彼方へとすっ飛んでいく。

名誉のために補足する必要があるだろう。

自由人と呼ばれるランタナではあるがなにも無責任な人間というわけでない（ジム不在に関するリーグからの叱責にはこの際目をつぶる）。本人なりにジムリーダーの責務には真摯に向き合っていたしそのために行けることは全てやる気概もあつた。皮肉なことには今はそんな彼の熱意が試される情勢になりつつある。

先日のラフェルリーグでの一件からこの地方は少々物騒になってきたようにランタナは感じていた。

懸念されたようにバラル団がリーグを襲い、救出こそされたがフリック市長が敵の手落ちかけける事態となつてしまった。PG含む警備体制の脆弱性が連日報道され、開催を強行したリーグへも批判が集まることとなつた。

悩みの種は他にもあつた。バラル団を筆頭によからぬ者達がその活動を少しずつ強めていくのだ。そしてそれらは社会に暗い影を落としていく。

しかしそんな時でもポケモントレーナーの熱が冷めることはない。リーグでの名勝負の数々は彼らを熱狂させこんな時勢にあつてもバッジを求めて打倒ジムリーダーへと駆り立てる。

「なあ、今週の俺らってけっこうよく働いたよな?」

問い掛けられたムクホークが一声鳴いた。ランタナが育てたポケモンたちは例外なく上空での相槌に慣れている。

育成の成果を感じてかランタナは満足げだ。

「そうだよな。ここ最近強いチャレンジヤーが増えた気がしてさ。どいつもこいつもこっちの弱点を的確に突いてくるし」

それでも今週のランタナは負けなしである。自慢の飛行ポケモンたちと並み居る挑戦者を押し返してきた。

「そろそろテルス山か。ムクホーク、高度上げてくれ」

ラフェル地方は、東西をテルス山で分断されている。

——言葉で何度伝えられようがそれはランタナたちにとって大した問題ではない。天下の険すら見下ろして彼らは飛び続ける。

「天候よーし。ハルビスにもすぐ着けそうだ」

今度はムクホークが太く声をあげた。

「ふう。上々のフライトだったな」

その言葉に偽りなく本当にすぐ着いてしまった。

今回の目的地ハルビスタウンはラフェル地方のなかでも緑豊かな景勝地として知ら

れている。そして先人たちが築いたポケモンたちとの共存を未来に繋ぐ場所でもあるのだ。

「ランタナさんこつちです」

ムクホークから降り立ったランタナに声をかける者があった。

「サリーナ。遠いところ悪いな」

遅刻しないように到着したが、それでもサリーナのほうが先に着いていたようだ。

彼女は民間協力型武装組織VANGUARDのランタナ班ことTeam Freedomの副リーダーを務めている。

登用試験を突破する実力もそうだが、ランタナ不在時のジムの番人を全うしていることもリーグから高く評価されている。

「相変わらずのどかなところですね」

「そうだな」

見渡す限りの緑が目眩しい。そして点在する池は大昔に人間とポケモンの共存の象徴として作られたものという。人口が多いわけでも目立った歴史上の遺物があるわけでもないが、ある意味この地方の過去と未来を繋ぐ場所といえるだろう。

来るのが久しぶりでも町の様子が変わることはない。今日も穏やかな時が流れている。

「へいワタ公たち集合すつべ！ オレが見本を見せつからよく見とくんだぞ」
否、流れていかなかった。

「ヘソの上らへんを意識して……そうそう、分かってきたがね！」

あまり聞きたくはないが聞き覚えのある声が出た。

見ると、草原の中央で赤い帽子の男がワタツコたちを集めて何かを指示している。

「そうそう。そこで腕を振って脚を曲げ伸ばす運動な。これやつとくと肩凝りの防止になつからな」

男のクニヤンクニヤンとした奇怪な動きをワタツコたちが真似している。

「みんな飲み込みはええな。よし、ご褒美にマトマの実を応募者全員サービスだ。順番に配るからみんな一列に並んでな」

差し出された見るからに辛そうな木の実を見た途端にワタツコたちはいつせいに逃げ出した。どうやら野生の群れだったようだ。

さすがにスルーの限界だった。

「なんでここにいるかはいったんおいとくとして、何やってんだお前」

「ヤシオ」と呼ぶくらいには顔馴染みだ。

「いんやあ、ひさひさ、ランタナさんにサリーナさん。オレはワタ公たちにラジオ体操を指南してやってたんです」

「なぜに!？」

相変わらずのヤシユウ節の青年にしてラフェルの旅人なのだがさらに肩書きが加わった。先日のラフェルリーグの本戦にも出場したトレーナーということになる。

「あつそうだ。オレのリーグ戦見てくれましたか？」

「ああ、みんなで応援してたぜ」

ヤシオの顔が少し曇った。

「ありがたいこつて。……どうせならもつといいところを見てもらいたかつたんだけどな」

リーグでの戦いについて労おうとしたが言葉が出なかった。あれだけ目標としていた大会での敗北だ。触れられるほど傷口が乾いていない可能性に思い至らないランタナではない。

「まあその、なんだ。お前には実力があるんだ。笑って戦え。それで負けたら、思いっきり悔しがれ。次があるつて、相当幸せな悩みだぜ」

「はいー!」

そんなランタナの顔を覗き込んだヤシオが目丸くした。

「ん? しばらく見ない間に背え伸びましたか?」

「伸びるかよ! 法事の時だけ会う親戚のガキか俺は。とにかくなんでお前がここにい

るんだよ」

「結局聞いてんじやんか。なんでとはご挨拶なこつて。ほら」

おもむろに左肘を突き出して見せた。

その上腕部に補助員と書かれた腕章をつけている。ランタナには馴染み深いものだった。

「バイトか。お前も色々やってんだな」

「んだべ。ラフェルリーググッズを買い漁ってたらまあ金が飛ぶ飛ぶ。Moneyって飛行タイプですがね」

「それを飛行タイプのジムリーダーに言うかい」

リーグ終了後それなりの入院をした後に再び特訓に励もうとしていたヤシオだが、うっかり高い個室に入ってしまったことでその請求額にクロック戦を超える緊急事態を迎えることとなった。

「それで大会で知り合ったミントさんに相談したらライバルの知り合いの親戚の職場の上司の弟の友達がリーグ関係者らしくてこのバイトを紹介してもらったんです」

「もはや他人じゃねえか」

「今は物騒なもんで、募集かけても補助員の集まりがよくないとかであつさり決まりましたよ」

「ええ……そりやそうだけど」

「ここでランタナは驚いているのが自分だけであることに気がついた。

「あれ、ヤシオさんが補助員に来る旨はメールしておきましたか」

「やっべ見てなかった——その目で俺を見るな！」

サリーナの視線が痛い。

そして何を隠そうランタナがハルビスタウンにやって来たのもこのためである。

リーグが定期的開催するタイプ別強化講習はそのタイプのエキスパートであるジムリーダーが講師を務め、トレーナーたちのレベルアップを図る催しだ。

さらに、あえてジムのある町から遠い場所で行うことで交通面で不利な部分のあるラフェルのトレーナーたちに満遍なくステップアップの機会を与えることに加え、その町にトレーナーたちを誘致することで新たな消費を促すという涙ぐましい狙いもある。

「補助員を引き受けたはいいけど、早く来すぎちゃったからワタパチ軍団に教えを授けてたってわけだえ」

「なるほど、わからん」

からからと笑うヤシオ。悩みとは無縁な存在に思えて羨ましくさえ映った。

そしてイツシユ地方にはこのような理解不能な連中がウヨウヨしているのかと思うと頭が痛くなったのでランタナは深く考えるのをやめた。

「それにしてもよくハルビスまで来れましたね。金欠じゃポケット・スカイカーゴにも乗るわけにもいかないでしょうに」

「たしかに俺もそれは気になってた。方向音痴だし」

「2人とも辛辣だべな!？」

ヤシオの方向音痴っぷりを熟知しているランタナにはトゲキツスに乗って飛んできたという発想がない。

「このバイトが決まってすぐにおシズにマインしたんです。そしたらテルス山が見えたらお茶碗を持つ方へ進めって」

ライブキャスターのマイントーク履歴を見せる。そこには今日の留守を任せられたシャルムジムのシズノの名前があった。

「もうツツコまねえぞ」

様々な理由から飛行タイプポケモンを手持ちに入れるトレーナーは非常に多い。

もちろん空中からの攻撃が有効な場面が多いこともあるが、遠くのものを探したり何より掴まって『そらをとぶ』移動方法をとることもできる。交通網が発達しているとは言い難いこのラファエル地方では特に有用だ。

しかし空中にいるポケモンに指示を出すのは難しい。基本的な目線が異なるうえに

人間には空を飛ぶ感覚がないためポケモンの動きをイメージすることができないのだ。だからこそタイプのエキスパートの指南による伸び代は大きいともいえる。

時間になり、受講生となるトレーナーたちが集まってきた。

「大盛況ですね」

「いやどこがだよ。教えるにはちようどいいけどな」

ランタナは紙一枚で済んでしまった名簿を眺めた。

(バシアラ、キスイ、フリユウか。この時期にこれだけ集まりや上出来だな)

社会情勢もあり参加者は3人と想定よりも少ないがそれでもこうして参加した者たちを無下にはできない。ランタナは密かに気合いをいれた。

隣にサリーナとヤシオを控えさせ特別講義が始まった。

「そんなじゃ始めるからなく。他のジムリーダー連中がどんな形式でやってるかは知らんが、俺は体で覚えさせるスタイルなので覚悟するように」

さらさらとペンが走る音がした。見ると隣でヤシオが直立したまま分厚いノートに何事か熱心にメモをとっている。

(こいつは何気にこういうタイプなんだよな)

「まずみんなに聞きたいんだけどさ。飛行タイプってどうよ?」

あまりにも抽象的な問いにトレーナーたちはざわめく。ヤシオが垂直に挙手したが、

今回彼はあくまでも補助員なので無視された。

「オーケー。こういうのは考えるよりも感じてみるのが一番だ。よし、誰か模擬戦に協力してくれ」

再びヤシオが挙手したが趣旨に反するのでスルー。

「そうだな。じゃあその帽子の君、頼めるか？」

「帽子？ オレの出番だべ？」

「サリーナ、そいつ縛つといてくれ」

参加者が1人前に出る。カンカン帽にアロハシャツ姿の少年だ。今日の参加者のなかでは最年少だろう。

「オレントから参加のバシアラクくんですね。紺のインナーに発色のいい単色のアロハがいいアクセントになってます。少し背伸びしつつも健康的な少年らしさを損なわない絶妙な併せといえるでしょう」

「オレの地元の服屋の店員さんみたいだ」
サリーナのまだ見ぬ一面が垣間見えた。

ランタナはムクホークを繰り出した。

「俺はこいつでいく。そっちは？」

「それならぼくは……」

少し迷ったのちバシアアラが繰り出したのはオオスバメだった。

「オオスバメか。相手にとって不足なした。それじゃあサリーナ、審判よろしく！」

「うえ」

審判をやるつもりでいたヤシオがずっこけた。

「両者準備はよろしいですか？ それでは、はじめ」

『め』の音が消える前に動いたのはオオスバメだった。一呼吸の間にムクホークの眼前に迫り、そのまま『つばめがえし』を見舞った。

「よしっ！」

ジムリーダーのポケモンに先手を浴びせたのだ。当然ガッツポーズも出る。

ランタナは拍手しオオスバメとそのトレーナーを称えた。

「みんな見てたか？ 今みたいなスピードを活かした奇襲も有効だな。飛行タイプならどの角度からでも相手に迫ることができるといっなのはアドバンテージだ」

しかしムクホークには堪えた様子がない。そのままオオスバメとムクホークの応酬が始まり、ランタナは指示を出しつつ動きのひとつひとつを解説していった。

『つばめがえし』、いい技だったように見えたけど。やっぱりランタナさんは鍛え方が違うのか」

頷きつつ感心するサリーナにヤシオが語る。

「それもあるけども。あれはオオスバメにパワーを出させないようにしてるんだべ。特性の『いかく』に加えて攻撃を当てられる前に速業の『フェザーダンス』でオオスバメの翼のキレを削いでたんだ。やることえげつねえべ」

小声で話しながらも彼のペンはノートの上で走り続けている。サリーナは彼が一応フリーダムバッジを持っていることを思い出した。

戦いはさらに激しくなり、ムクホークが『どくどく』で反撃に出ようとしたオオスバメを苦しめている。

シンプルな作戦に終始しがちな空中戦においてランタナのような搦め手を使いこなせるトレーナーは珍しい。

「さあ、猛毒状態になったぞ。どうする?」

「オオスバメ! 『からげんき』!」

今度はムクホークを怯ませるほどの威力があった。

「いいぞ! ノーマルタイプを持つ物理型飛行ポケモンなら覚えておいて損はない技だ。相手に状態異常技を使わせるのを躊躇させることもできるな」

ムクホークはそのまま『そらをとぶ』で上空へと羽ばたいていく。一方のオオスバメの体力は限界に近く、空中戦を対等に仕掛ける余裕はないことが見てとれた。

「決めるぞムクホーク！」

「オオスバメ！ 『ぼくおんば』！」

矢のような勢いでオオスバメに突撃するムクホーク。隠し球の『ぼくおんば』を難なくかわしてこの模擬戦は決着となった。

「くーっ。やつぱジムリーダーは強いなあ」

悔しそうだがどこことなく満足げにバシアラはオオスバメをボールに戻した。

「飛行タイプのいいところが出た試合だったろ？ 見学のみんなもぜひ参考にしてくれ。補助員1号、どうだった？」

1号もなにも補助員はヤシオしかない。

「オオスバメの動きがとにかくよかった。同じ飛行タイプのムクホークが相手だからこそ適切な間合いを維持しつつ攻撃のチャンスを探うというベースがきちつとしてたな。技だと『つばめがえし』。ありや凄かったなあ。『いかく』と『フェザーダンス』がなけりやムクホークにも相当のダメージだったんじやねえかな。状態異常もらつてからの『からげんき』もだ。これも本来のパワーが出ないなかであそこまでの威力を出せたのは日頃からカンカンボーイとオオスバメがよくやつてるんだべな。あとびつくりしたのは『ぼくおんば』だ。あれつて攻撃力が下がったから特殊技でつていうのもあると思うんだけど、本当の狙いは『がむしやら』の目眩ましだんべ？ 出す前にオオスバメが

ダウンしちまったけど決まったら勝負自体がひっくり返っていた可能性すらあるべ
あとは」

「ストップ！」

放っておくと何時間でも話し続けそうなのでサリーナに合図し口を塞がせた。

「いい試合だった。また特訓してぜひシャルムジムに挑戦に来てくれ。そんな時は本気の勝負をしようぜ」

「でもランタナさんが旅行に出て留守の可能性も？」

「うるせえぞ補助員！」

「次は飛行訓練だ。実際にポケモンに乗って飛んでもらうぞ」

待っていました、とヤシオが拍手した。

「ちなみに今日ここまでポケモンに乗って来たやつ？」

「はい！ はいはい！」

「やかましいぞ補助員！」

ヤシオ以外に先ほどの少年の手も拳がった。残りの2人は陸路でハルビスに来てい
るようだ。

「なるほど。じゃあ今回は2人に頼むか」

ランタナはグライオンを繰り出した。

「応用編だ。実際に飛びながらポケモンに指示を出してみよう。今回は教材としてこれを使う」

両腕を通して余裕がありそうなほどのリングを見せた。

「ラフエルじや流行ってないんだが、ポケリングがついていう競技があるんだな。それをやってみようじゃないかって話だ。ルールは簡単でポケモンに指示を出しながら先にリングをゴールに通したほうが勝ち。要するに空中輪投げだな」

すかさずサリーナがタブレットで実際のプレイ映像を見せる。実によりアシストだった。

「面白そうだべ。それでランタナさん。ゴールは？」

輪投げには棒がつきものだ。しかもポケリングともなればそれなりの高さが必要となる。

「これだ」

ヘルメットをヤシオに手渡した。

「唐突にオレの頭部の心配をしてくれるのはハートフルゆえ？」

「補助員だしな」

「ルールを説明するぞ。ここにいるヤシオの体に先にリングを通せば勝ちだ。初心者ルールということでポケモンに『わざ』を指示するのはなし。純粋な飛行の指示のみで

勝負してもらおう。トレーナー自身の飛行はグライオンとムクホークに掴まってもらうものとする。2匹ともその辺はプロだから安心してくれ」

「ちよつ、オレがゴール？」

「そうだ。リーグ出てんだからいけるだろ。トゲキッスに乗って飛ぶのも問題ないだろうしな」

「いやそれとこれとは……」

「あとちよつとした私怨だな。ステラの件、忘れてないからな」

「ちつちえ大人だなおい！」

「けたたましいぞ補助員！」

ヤシオはさりげなく風景に溶け込もうとしたが、通用するはずもなくサリーナに捕まった。観念したようでトゲキッスを繰り出した。

残り2人は顔を見合わせたのち、先に白と黒で身を固めた女性が進み出た。

サリーナとヤシオがまた小声でやりとりする。

「彼女はクシエルから参加のクスイさんです。あのワンピ、相当高いやつですよ。ゴスロリは敷居が高いけどよく着こなしてますね。パニエは控えめだけどデザインは大胆だなあ。アシンメトリーなもの凝ってる」

「あーたファッションセンターのまわしもんすか？」

グライオンに抱えられてキスイはふわりと地上から浮き上がった。

そしてもう片方の男性もムクホークに乗る。

「あつちはペガスから参加のフリユウさんですね。とにかく派手ですね。黒ベースに赤とシルバーのV系がとにかく目立ってます。身長もありますし、タイトになりがちな服装も難なく着こなせてますね。ファンデーションにアイラインとメイクにもこだわりを感じます。レザーのスキニーもらしさを演出していますしバラがあしらわれたネットワークレスもトップスに合ってますね」

「サリーナさんもうそれで食っていけるんじゃないですか？」

キスイはメガヤンマを、フリユウはオンバーンを繰り出した。

位置に着いた両者を見てランタナは頷いた。

「よし」

「よしじゃねえがね!？」

「というわけで頼んだぞ。人間ゴール」

「この恨み晴らさしておくべきか」

捨て台詞を遺してヤシオがトゲキッスに飛び乗った。そして地上を離れていく。

「それじゃ、はじめ」

リングの奪い合いが始まった。

容易に予想できたことではあるがほどなくしてヤシオの悲鳴が遠くから響き渡った。

休憩を挟んで講習が再開された。

「なんとなくイメージが掴めてきたんじゃないかと思う。立体的な視野を持つことは何事においても役に立つからな。少しでもその感覚を掴んでいってもらえれば万々歳だ」

その後対戦カードを変えつつ行われたポケリングは大いに盛り上がった。

しかしその代償は大きい。先ほどからヤシオは体育座りで虚空を見つめており、いたたまれなくなったのかトゲキツスは木の実を採りに森の方へ飛んでいった。

ここまでのタイムテーブルがイメージ通りに進み気分がよくなったのか、ランタナが受講生たちに語りかけた。

「今日来てくれたみんなはトレーナーとしてさらなる高みを目指しているんだと思うんだ。つつても俺に言わせりゃ天才なんてこの世にそうはいない」

いつか、どこかで聞いた話だ。

「だからその方法を手にするには、まずは自分の『色』を知ることから始めるといい。それが第一歩だ」

「受け売り臭がしますがね」

「騒がしいぞ補助員！」

「ここまでのカリキュラムをこなしてきたうえで何か質問はあるか？」

「地方営業の芸人みたいなことやってんな」

「シヤラツプ補助員！」

フリユウの手が拳がった。

「それじゃあ俺から」

「おつその積極性は素晴らしいな。何でも聞いてくれ」

その手がランタナの腕を指す。

「そのZリングを俺に出来ないか？　ぶっちゃけ今日来たのはそのためなんだが」

「正直な奴だな。価値があるもんだから欲しい気持ちには分からんでもないが……こればかりは無理だ。島の守り神に認められたトレーナーだけがZリングとクリスタルを扱えることになってる」

「分かってる。だから欲しいんだ」

「マラサダひと口くれみたいに気楽に言うなよな。どうしても欲しいならアローラで島巡りに挑戦すりゃいいだろ」

「どうしても？」

「悪いな。代わりといっちゃなんだがミックスオレくらいなら奢るぜ」

この場にもう少しだけ敏感な者がいればフリユウの目が赤く濁ったことに気がつい

たかもしれない。

「それならしょうがないな」

フリユウの隣に立っていたキシイの首にオンバーンの尻尾が巻き付いた。一瞬のことに身動きはおろか声を発することさえできず、キシイは自由を失った。

「おい何の冗談だ」

「冗談とは失敬だな。俺はZリングとクリスタルを必要としている。だから奪う」

目の前の相手には言葉こそ通じるが話を通じない。

「くうくつ！ チョロネコ被ってやがったか！」

ヤシオが苛立ちを露にするが状況に対してそもそもワンテンポ遅い。

「渡さないならこいつを締め上げるだけだ」

首を締め上げられたキシイが小さく呻き声をあげた。

「その人を離せ！」

若さゆえに、バシアラが動いた。オオスバメの『ねつぶう』が人質を避け、敵をピンポイントで狙った。

危機的状况にも関わらずフリユウの態度は変わらない。

「分かるか？ これからは力がモノをいう時代だ。こいつもそう言ってる」

理由は明らかだった。突如フリユウの前に現れた氷塊が攻撃を防いだのだ。

2メートルを優に超える巨体に大きく発達した背鰭。そして何より――

「いつきしー」

ヤシオが大きなくしやみをした。

それもそのはず。あたりが急激な冷気に包まれたのだ。

「ひょうりゆうポケモンのセグレイブ。主な分布は、パルデアだつたはず。ラフェルじゃ珍しいつげえな」

棲息地という意味でもそうだが、そもそも氷とドラゴンというタイプの組み合わせが珍しい。

「おい。本当に冗談じゃすまなくなるぞ」

「だから冗談じゃないって言ってるだろ」

その言葉に応えるようにセグレイブが口から強烈な冷気を放った。

ランタナとサリーナは咄嗟に回避しバシアラもオオスバメを戻して物陰に隠れたが、その場で最も鈍臭いトレーナーが氷像と化した。

「ヤシオー」

驚愕の表情を浮かべたまま、ヤシオが凍りついた。

セグレイブは『ねっこうかん』の特性を持つ。炎タイプの技を受けることでパワーアップしてしまう。

フリユウが嗤った。

「聞いたところじゃそいつはラフエルリーグに出てたらしいな。厄介な奴は早々に排除するに限る。ジムリーダー、交渉に応じないならここいらを氷河期にしてやってもいいんだぞ?」

セグレイブならそれも不可能ではないだろう。助けを呼ぼうにもあまりの冷気に電子機器のリチウム電池の電圧が低下してしまっている。

締め上げられているキスイも凍結したヤシオもこのままでは非常に危険だ。状況は非常に厳しいと言わざるをえない。

ここは決断するしかなかった。

「……持っていけ」

Zリングとクリスタルを投げて寄越した。

「最初からこうしていればよかったものを。これさえあればお前らは用済みだ」

「待て! キスイと交換のはずだ!」

「何の話だ?」

フリユウが新手を繰り出した。

平べったい頭部に戦闘機を思わせるフォルム。こちらもラフエルでは珍しいポケモンに該当する。

「ドラパルトか」

器用万能型で、ポケモンどうしの比較でも屈指のスピードを誇る。今この場で見たくない相手だった。

「俺は次に行く」

フリーウがドラパルトの背中に掴まった。そしてオンバーンはキスイを抱えた。逃げて打つ流れは明らかだ。

あつ、という間もなくドラパルトとオンバーンが飛び去っていく。

「逃がすか！ ムクホー……」

ムクホークがゼエゼエと肩で息をしている。よく見ると翼の付け根に何かがかくついていた。

サリーナがそれを取り、投げ捨てた。

『くつつきバリ』。さっきのポケリングの時に仕掛けていたようです」

身につけていると時間差でじわじわとダメージが入る道具だ。この状態で人間を乗せて飛ぶことはできないだろう。ランタナはムクホークをボールに戻した。

そしてグライオンもダメージこそないが地面と飛行の複合タイプのため、この冷気の中では力を十分に発揮することができない。

それならばできることを任せるしかない。グライオンは短距離の飛行であれば問題

ないとランタナは判断した。

「サリーナ今すぐここを離れろ」

「しかし！」

「いいか、無理はするな。迷わず逃げろ。奴を倒そうなんて思うな」

敵を倒すのと同じくらい味方を守ることは大切だ。

「グライオン、ヤシオたちを連れて距離をとってくれ！ バシアラ！ さっきの『ねつぷう』でヤシオの氷を溶かしてくれ。サリーナはみんなの手当てを頼む！」

その言いつけ通り、グライオンがヤシオ・サリーナ・バシアラを掴んで離脱していく。

ヤシオに関してはずぐに氷を溶かして応急処置を施さなければ命に関わる。サリーナならその分野にも強い。戦力を失うのは辛い、ここは人命を優先しなければならぬ。

なんとかかフリユウの追跡に移りたいがセグレイブがそれを許さない。

（まずはこいつをなんとかしないとダメだ。しかしその間に奴に逃げられちゃう）

続いてセグレイブが放った『つららばり』をファイアローがなんとか弾いた。続けて

繰り出したヤミカラスも『ふいうち』で攻撃しているがあまり効いていない。

(こんなに鍛えられているなら逃げ出す必要もなかったんじゃないやねえのか?)

指示を出すトレーナーがいけないのは好都合だがその分逃走のための時間を与えることにもなる。

『つららばり』がランタナの体を掠めた。

「つ！ 考えてる余裕はないか！」

ファイアローの『はがねのつばさ』が命中するが、これもセグレイブを止めるには至らない。

(どうする……? 相性のいい鋼タイプの技も効果が薄い。炎が効かないから火傷にもならないし搦め手も通用しない)

ただでさえ周囲は超低温の環境下にある。ランタナですら歯の根が合わないほどだ。

セグレイブの尾がファイアローを打ち据えた。このままではじり貧だ。

ふと、こんな時ヤシオならどうするかという考えが頭をよぎった。

「ヤミカラス、『ちようはつ』だ！」

ここまでセグレイブは攻撃技しか使用していない。一見意味のない指示に思えた。

「ファイアロー『ブレイブバード』！」

スピードで上回るファイアローが攻め立てる。

これだけやれば言葉を発することがなくとも、セグレイブの苛立ちが募る。そして苛立ちは目の前の敵をまとめて蹴散らす大技の使用に踏み切らせる。

セグレイブが飛び上がり、頭から落下していく。

「来るぞー！」

もちろん混乱による自傷などではない。セグレイブが吐き出す冷気がジェット噴射となり、背鰭からこちらに突っ込んで来た。

「ファイアローー！ 『はがねのつばさ』！ ヤミカラス！ 『ナイトヘッド』」

相性を優先して技を放ち、少しでも衝撃を吸収しようとしたがセグレイブのパワーに弾かれてしまった。ダメージの蓄積は大きい。ファイアローの戦闘の続行は不可能だろう。

「無理させてごめんな。この埋め合わせは必ずする」

ランタナはファイアローをボールに戻した。

まだ気が立っているのかセグレイブがヤミカラスに向かって吼えた。ヤミカラスもそろそろ限界が近い。

ヤミカラスが仲間をやられた怒りを瞳に携えてランタナを見つめた。

「キレてるのは俺も同じだ！ ヤミカラス、『オウムがえし』！」

さっきの技の再現となる。ヤミカラスが上下逆さまの状態でセグレイブの腹に一撃をかました。

再び『つららばり』を放とうとしたセグレイブだったが、ついに力尽きその場に倒れ付した。

「ふう。『きよけんとつげき』は威力こそ高いが、次に自分が受けるダメージが倍になるリスクがある。的確に指示を出すトレーナーがいてこそその技なのにな」

ヤミカラスもボールに戻し、ランタナは手持ちの最後の1匹に飛び乗った。

「まだ遠くには行っていないはずだ。奴を追うぞ！ ドデカバシー！」

肉眼では見えないほどの距離だが、鳥ポケモンなら僅かな音と空気の揺らぎを翼で感じて追跡することができる。ランタナにとっては動ける最後のポケモンだ。

ドデカバシーは一声鳴くと、猛スピードでフリユウを追った。

ほどなくしてオンバーンとドラパルトが待ち構える空域に辿り着いた。

「セグレイブを倒したか」

「もう気は済んだだろ。キスイとズリングを返せ」

返事は言葉ではなくドラメシヤとなって飛んできた。

「『ドラゴンアロー』。受けといて損はないだろ？」

「お断りだ！」

この高度での被弾は騎乗するトレーナーにとって命取りになりかねない。

「『ロックブラスト』！」

ドデカバシが発射した岩の弾丸をドラパルトがかわしていく。

「『10まんボルト』！」

強力な電撃が襲った。ドデカバシはなんとか回避したがドラパルトとオンバーンの面倒を同時に見るのは苦しい。

オンバーンの『ばくおんば』を『タネマシンガン』で相殺し再び距離をとる。

「いい加減諦めろ。まあ、この高さまで助けに来たのは評価に値するが」

「じゃあ講習の成果が活きてるってことだべな！」

この場にはいない筈の者の声があった。

ランタナもフリユウも声があったヤシオを探す。

「こつちだ！　こんのでれすけが！」

アーボックにしがみついたままヤシオが落下してきた。

「お前、いつの間に!?!」

「うっせえ！　オレは凍るのには慣れてんだ！」

慣れちゃダメだろという感想を抱いたのはランタナだけではあるまい。

「ヤシオ！ どうして！」

「こういうこつた。補助員舐めてつと舌溶けッぞ！」

スターミーがドラパルトに迫った。『ほごしよく』でギリギリまで姿を隠していたようだ。

「舐めてるのはどつちだ！ ドラパルト、『10まんボルト』！ オンバーン、『ばくおんば』！」

「おわわっ！」

アーボックとスターミーがあつさりと退けられた。ヤシオは彼らをボールに戻し、今度はトゲキツスに飛び乗った。

「口ほどにもない奴が」

「おいおい。口が閉じなくなるのはそつちだべ」

オンバーンが戸惑ったような鳴き声をあげた。それもそのはず、捕まっていたキスイがいなくなっている。

「なんだと!？」

「1名様お帰りです」

眼下にハツサムに掴まれて地上へ降りていくキスイが見えた。

「アーボックの『すりかえ』。プレゼント交換だべ」

オンバーンの動きが急に鈍くなった。その背中に何かが乗っている。

『くろいてつきゆう』だど!?』

「ランタナさん、今です!」

「おうよ!」

ヤシオがフリユウとやりとりしている間にドデカバシは嘴を加熱していた。

『くちばしキャノン!』

もうかわすことはできなかつた。ノックアウトされたオンバーンはフリユウのボールに戻っていった。

「あと、これも返してもらっからな」

ヤシオの手にはZリングとクリスタルがあつた。

「ほら、これはあーたが持つててください」

そのままランタナにZリングとZクリスタルを手渡した。

「サンキュー。でもどうやったんだ?」

「白黒ねーちゃんを取り返したのと一緒ですよ。さつきスターミーを突撃させた時に

『トリック』を指示したんです」

「だからアーボックとスターミーだったのか……」

何はともあれ闖入者によって人質と物質が同時に片付いてしまった。

「形勢逆転だな。観念しろ！ 講師のランタナさんと補助員のオレの c o m b i n a t i o n は破れねえぞ！ 名付けてスペシャルトルネード——」

「まだだ！」

今度はドラパルトがフリユウごと透明になった。

「まるでステルス戦闘機だ」

「野郎、逃げる気か！」

「なぜ逃げる必要がある！」

はるか上空からフリユウの声がした。

「ブツを奪えなかったのは痛いがただでは帰らない。ここがお前らの最後だ」

「ヤケでも起こしたか！」

「言ってる」

フリユウが握ったボールが鉱石のように輝きだす。新手を繰り出すかと思いきやそのボールをドラパルトの体に当てた。

一瞬辺りが眩い光に包まれた。

再び視界が明瞭になった時、ドラパルトに変化が顕れていた。

「頭部にイナズママークの宝石。テラスタルか」

「はえ〜っ、ラフェルでも使えたんですね」

テラスタルはパルデア地方で観測される現象だ。ポケモンのタイプが変わると言うバトル好きが泣いて喜ぶ神秘である。

「これでこいつは電気タイプだ！ 翼に頼るお前らには堪えるだろうー！」

再び『I Oまんボルト』が飛んでくる。先程のものとは比べ物にならない威力だ。

「気をつけろヤシオ！ あんなの食らったら真つ逆さまだぞー！」

トゲキッスとドデカバシが降り注ぐ攻撃の雨を紙一重で回避していく。

「ヤシオ！ イケるクチだなー！」

「そいつはどうもー！」

旋回、宙返り、ローリングと空中で自在の動きを見せるドデカバシにトゲキッスもなんとかついていく。

『『シャドーボール』！』

『『エアスラッシュ』！』

技がぶつかり合い爆発した。煙が立ち込める。

「ナイスヤシオー！」

煙に紛れてドデカバシがトゲキッスに寄る。

「ランタナさん、どうするんですか？ ぶっちゃけこつからの策はないですよ」

「心配には及ばねえよ。ここはアレを使う」

「アレ？」

ランタナは腕のZリングを見せた。

「ああ、トルネードスピンジヤイロですか」

「そんな技ねえよ!!? どんだけ回しや気が済むんだよ」

とはいえランタナの意図はヤシオに伝わったようだ。

「それなら勝てるべ。よし、風呂入ってきます」

「待て待て」

ランタナはさらに続けた。

「たしかに撃てさえすりゃなんとかなるだろうが……問題が2つある」

「じゃあ2人で分けっこしましょ」

指を2本立てた。

「まずは高さだ。アレは相手より高い所からじゃやないとうまく決まらない。そしてそれは奴も承知の上だろう。意地でも俺らを抑え込もうとするに決まってる」

「そこは頑張つて飛んでもらうしかないですね」

「もちろんそこは俺がなんとかするんだが、あとは時間だな。アレをやるにはどうしても俺が完全に無防備になる瞬間ができちまう。そこをなんとかしてほしい」

「モツさんがやった時は興味本位でつい眺めちゃったけどたしかに隙だべな。時間はど
んくらい稼げばよろしい?」

「そうさなあ、奴なら……5秒だ。5秒でケリをつけてやる」

「責任重大ですね。頑張ってみます」

「前から思ってたけどお前、普通に喋れるだろ」

「ノーコメント、だべ」

煙が晴れた。再びドラパルトが2匹を撃ち落とそうと技を連発してきた。

「飛べー! ドデカバシー!」

もつと高く。もつと遠くへ。

視界の端で空と陸と海が地平線で溶け合って、青と緑のパノラマが構成されていく。
太陽の光が大气で屈折しその色合いを変えていく。

「!」

コンマ数秒前まで自分達がいた場所を『10まんボルト』が貫いていく。

フリユウにとつても急上昇するランタナが何を考えているかは手に取るように理解
できた。

「『マジカルシャイン』!」

ヤシオのトゲキツスからの攻撃をかわし、さらに上空のランタナに狙いを定める。

ランタナがドデカバシの背の上で立ち上がった。そしてたおやかで、それでいて力強い舞を天に奉納し始めた。

「墜ちろランタナ！ 『テラバースト』！」

さらに威力の高い電撃が無防備なランタナを襲う。

「させねえべー！」

そこへトゲキツスに乗ったヤシオが回り込んだ。そして自らの体で技をまともに受けた。マツギョがヤシオを守っているため直撃こそしていないが、受けきれなかった電圧によってトゲキツスはふらふらと墜落していく。

「ヤシオー！」

思わず助けようと動作に移った。

「オレに構うな！ 今やれるのはあんただけなんだぞ！」

トゲキツスとともに落下しながらヤシオが叫ぶ。その目には確固たる意思が宿っていた。それは自己犠牲などという安い言葉では片付けられない。

準備はできていた。

「悪いなヤシオ。今だけジムリーダーじゃなくてただのトレーナーをやらせてくれ」

小さく呟いてフリユウを見下ろす。

その技は、Zクリスタル『ヒコウZ』とランタナとZリングの共鳴によって放つこと

ができる。

「くらいやがれ! 『ファイナルダイブ——!!』

「てっ、『テラバースト』だ!」

その技は、自由を求め風に乗る全ての者の渴望を秘めた御業だ。

「『クラアア————————————————————ツシユ』!!!」

遠かった大地が眼前で大きくなっていく。この広いラフエルで自分達がいかにちっぽけな存在であるか改めて思い知らされる瞬間だが、今のランタナにとつてそんなことはたいした問題ではない。

その技は、放たれば最後。いかなる手段を用いても防ぐことは叶わない。

『テラバースト』の電撃を引き裂きながら、ランタナとドデカバシが全力の突撃の形を成す。

「あれは……?」

地上で見守るサリーナとバシアラの目に、青空を線で分かつ一条の光が映る。そして光が弾けていく。

「サンキュ、ドデカバシ。気持ちのいい一撃だったぜ」

勝負の最後はいつも一瞬だ。力尽きたドラパルトとフリユウを捕らえ、ランタナは皆が待つ地上へと降りていく。

「やっべ。ヤシオ放つたらかしだった」

本気で心配しかけたが地上を見下ろして胸を撫で下ろした。

「俺らもトレーニングに取り入れてみるか？ ラジオ体操」

ワタツコの群れがクツションとなってヤシオとトゲキツスを受け止めていた。

「ランタナさん！」

「凄かったです！」

降り立ったランタナをサリーナとバシアラ、さらに通報によって駆けつけたPGたちが迎える。

「おふたりさん、オレもけっこう頑張ってた」

「ランタナさん！ 最後の技かっこよかったです！」

バシアラが目を輝かせる。

「これでまたジムにも講習にもさらに人が集まるようになりますね！」

「サリーナ、盛り上がっていると悪いがあまり忙しくなると旅行がだな」

「なりますね！」

「はいすみません」

「あれ？　そういうキスイは？」

「念のため病院に行くそうですよ」

「そうか。まああれだけのことがありやそうなるよな」

ランタナは風と自由を抱いて飛ぶ伊達男だ。

誰もがその認識を新たにしたことだろう。

「あのうランタナさん。バイト代のほうは」

「こまけえこたあ気にすんな。この後暇だろ？　飲みに行こうぜ」

いっそのことステラも呼ぶか。と笑うとヤシオがひつ、と声を漏らした。

ラフェルに来てからヤシオにも長電話の習慣が馴染みつつあった。

【ヤシオ君も災難だったね】

「いやあホントですよ。あんな奴が紛れ込むなんて」

【それで、フリーユウの件なんだけど。あれから容疑を否認しているらしいの】

「はあ？　あんだけやつといてあいつ何言ってるんだ」

あれだけ暴れておいて知らぬ存ぜぬが司法に響くはずがない。ヤシオのしよぼくれ

た正義感ですら怒りを覚えた。

「自分は指示を受けたただけだって。話も要領を得ないし、当時マインドコントロールのような状態にあったんじゃないかとされているのよね」

「オレはあいつのセグレイブにカチンコチンにされたんですよ!?! 次あったらケツバツトの刑だべ」

「そのセグレイブなんだけど。例の指示を出してきた相手から譲り受けたって言うてる。なんでも作戦のための個体の余りだとか」

「作戦? それってまさか」

「フリーユウの証言を総合するとバルル団とみて間違いないでしょうね。セグレイブは氷とドラゴンという珍しい複合タイプ。彼らがそこに目をつける何らかの理由があると私達はみている。PGたちはあまり重要視してないみたいだけど」

逃走のためとはいえ、あれだけの強さのポケモンに指示を出さなかったのはその場いた全員が不自然に感じていた。

それが人のポケモンで自分の指示を聞かないからと仮説を立てればあり得る話ではある。バルル団の動向についてはこの地方にいる以上もはや無視できない。

「それより気になるのはもう1人の講習参加者ね」

「ゴスロリのキスイ氏のことけ?」

【そう。彼女、クシエルに実家があるみたいだけど】

「そう聞きましたけど」

【でも彼女の戸籍データに最近書き換えられた形跡があるの。本当にあの場にいたのはキスイだったのか？ そそもそもキスイという人物は存在するのかな？】

なぜクシエルの行政システムについてそこまで知っているのか。あえてヤシオは追及しなかった。

「そりや住所変更とか登録の印鑑が変わったりとかあるでしょうよ」

【そうじゃなくてね。明らかに行政のシステムの外から手が加えられているのよ】

「……なんとも穏やかじゃねえべな」

【そういうこと。巻き込んでしまって申し訳無いけど引き続き協力をお願いしてもいい？】

「もちろんです。ホヅミさん」